



3
「聖人の凱旋」
東出祐一郎
イラスト 近衛乙嗣

フェイト／アポクリファ

3

「聖人の凱旋」

東出祐一郎



定価：本体1300円(税込)

“赤”のバーサーカーが引き起こした混乱に乗じて、まんまと大聖杯を強奪したシロウ・コトミネ。“黒”のランサーとマスターであるダーニクを返り討ちにしたシロウは、執拗に彼を追跡していたルーラー、ジャンヌ・ダルクと遂に相対する。

第三次聖杯戦争において召喚されたサーヴァント、ルーラー。それゆえシロウ神父の正体だった。大聖杯による世界の救済を願うシロウは、聖杯大戦の調和を願うジャンヌ・ダルクと真向から対立する。

かつて奇跡の象徴として人々から敬愛された少年と少女は、ここに新たな聖杯大戦を勃発させる。

一方、戦場となることを免れたトゥリファスにも不穏な空気が漂っていた。
“黒”のアサシンが魔術師たちを殺害し、聖杯を奪るべくマスター暗殺に動き出したのだ。

かつて名も無きホームンクルスであった少年、ジーク。“電殺し”に変身する度に己の生命が削られていくのを知りながら、彼もまたサーヴァントとして聖杯を巡る苛烈な争いに身を投じることを決意する。

第三次聖杯戦争より「Fate/stay night」「Fate/Zero」から分かたれた外典の聖杯戦争は、新たな展開を迎える――！

東出 祐一郎

YUCHIROU HAGAREIDE

代表作

あやかしばと

ケモノガリ

近衛 乙嗣

OTOTSUGU KONOE

代表作

RIGHT×LIGHT(ツカサ著／ガガガ文庫)

フェイト／アポクリファ

3

「聖人の凱旋」

東出祐一郎

フェイト／アポクリファ

3

「聖人の凱旋」

東出祐一郎



TYPE-MOON BOOKS
EA-03

Fate/Docrypha

フェイス / アニメタレント

Keywords: Change, Change of Values, Role of and Justice of Government

3

Figure 1

東出祐一郎

イブスト 近衛乙博

CLASS

セイバー

マスター ゴルド・ムジート、ユダ・マ・ニエル

真名 ジークフリート

性別 男性

身長・体重 190cm 80kg

属性 混沌・善



クラス別能力

対魔力：－ 「悪魔の血筋」を得た代償によって失われている

騎乗：B 騎乗の才能。
大抵の乗り物なら人並み以上に乗りこなせるが、
魔獣・聖獣ランクの獣は乗りこなせない。

保有スキル

黄金律：C－

人生において金銭がどれほどついて回るかの宿命。
ニーベルングの財宝によって金銭には困らぬ人生を
約束されているが、幸運がランクダウンしている。



宝具

アーク・オブ・エヴァンゲリオン

悪竜の血鎧

ランク：B+ 種別：対人宝具

レンジ：- 防御対象：1人

——悪竜の血を浴びた逸話を具現化した宝具。

Bランク相当の物理攻撃及び魔術を無効化する。

Aランク以上の攻撃も、Bランク分の防御数値を差し引いたダメージとして計上する。

正当な英雄から宝具を使用された場合は、B+相当の防御数値を得る。
ただし血を浴びていない背中では防御数値が得られず、隠すこともできない。

アーク・オブ・エヴァンゲリオン

幻想大剣・天魔失墜

ランク：A+ 種別：対軍宝具

レンジ：1～50 最大捕捉：500人

竜殺しを達成した呪いの聖剣。

原典である魔剣「グラム」としての属性も併せ持っており、

手にした者によって聖剣、魔剣の属性が変化する。

柄の青い宝玉には神代の魔力（真エーテル）が

貯蔵・保管されており、これを解放すると黄昏色の剣気を放つ。

竜種の血を引く者に追加ダメージを負わせる。

CLASS

アーチャー

マスター フォレ・フォレ・エグ・エグ・エグ

真名 ケイローン

性別 男性

身長・体重 179cm 81kg

属性 秩序・善

魔力

B

素速

B

耐久

B

す通

C

敏捷

A+

宝具

A

クラス別能力

対魔力：B

魔術発動における詠唱が三節以下のものを無効化する。
大魔術、儀礼呪法等を以ってしても、傷つけるのは難しい。

単独行動：A

マスター不在でも行動できる。
ただし宝具の使用などの膨大な魔力を必要とする場合は
マスターのバックアップが必要。

保有スキル

千里眼：B+

視力の良さ。遠方の標的の捕捉。動体視力の向上。
心眼（真）との兼ね合いによっては限定的な未来視も可能とする。



心眼（真）：A

修行・鍛錬によって培った洞察力。
弱地において自身の状況と敵の能力を冷静に把握し、
その場で残された活路を導き出す“戦闘論理”。

神性：C

大地の神と妖精との間に生まれた存在であるが、死ぬ直前にその身を
人間へと認めているため、大幅にランクダウンしている。

神授の智慧：A+

ギリシャ神話の神から与えられた賢者としての様々な智慧。
英雄独自のものを除く、ほぼ全てのスキルに
B〜Aランクの習熟度を発揮できる。また、マスターの同意があれば
他サーヴァントにスキルを授けることも可能。

宝具

宝具一括

宝具名：遠望・遠見（遠望）
宝具名：遠望・遠見（遠望）

世界を遠くから眺める能力。遠くから眺める能力。遠くから眺める能力。
遠くから眺める能力。遠くから眺める能力。遠くから眺める能力。
遠くから眺める能力。遠くから眺める能力。遠くから眺める能力。
遠くから眺める能力。遠くから眺める能力。遠くから眺める能力。

CLASS

ランサー


マスター ドーニカ・ブルホーン・ユグドニア

真名 ヴラド三世

性別 男性


身長・体重 191cm 86kg


属性 秩序・中庸

筋力  B

魔力  A

耐久  B

幸運  D

敏捷  A

宝具  A

クラス別能力

対魔力：B 魔術発動における詠唱が三節以下のものを無効化する。大魔術、儀礼呪法等を以ってしても、傷つけるのは難しい。

固有スキル

護国の鬼将：EX

あらかじめ地脈を確保しておくことにより、特定の範囲を“自らの領土”とする。この領土内の戦闘において、王であるヴラド三世はパーサーカーのAランク「狂化」に匹敵するほどの高い戦闘力ボーナスを獲得できる。「極刑王」はこのスキルで形成した領土内においてのみ、行使可能な宝具である。



宝具

宝具名：枢刑王

ランク：B 種別：対軍宝具
レンジ：1～99 最大捕捉：666人

空間から大量の杭を出現させ、敵を串刺しにする。
攻撃範囲は半径1km、杭の数は最大二万本に及ぶ。
また、手にした槍が敵に一撃を与えるたびに串刺しにした概念が生まれ、
心臓を起点として外側へ向けて、杭が出現する。
加えて、無数の杭を目視した敵には精神的な圧迫感も与える。

宝具名：鮮血の伝承

ランク：A+ 種別：対人（自身）宝具
レンジ：∞ 最大捕捉：1人

後の口伝によるドラキュラ像を具現化させ、吸血鬼へ変貌する。
ドラキュラ伯となったヴラド三世は通常のスキル・宝具を封印される
代わりに、身体能力の大幅増幅、動物や霧への形態変化、
治癒能力、魅了の魔眼といった特殊能力と、陽光や聖印に弱い
という弱点を獲得する。

CLASS

ライダー

マスター セリナ・アストル・フォレスト

真名 アストル フォ

性別

身長・体重 164cm 56kg

属性 混沌・善

魔力

D

魔力

C

耐久

D

敏捷

A+

敏捷

B

宝具

C

triste.....^{^^}

クラス別能力

対魔力：A

A以下の魔術は全てキャンセル。
事実上、現代の魔術師ではアストルフォに傷をつけられない。
宝具である「本」によって、ランクが大きく向上しており、
通常はDランクである。

騎乗：A+

騎乗の才能。獣であるのならば幻獣・神獣のものまで
乗りこなせる。ただし、竜種は該当しない。

保有スキル



理性が蒸発しており、あらゆる秘密を探ることができ、味方側の真名や弱点をうっかや嗅る、大切な物を忘れるなど最早呪いの類い。このスキルは「直感」も兼ねており、戦闘時は自身にとって最適な展開をある程度感じ取ることが可能。



怪力：C-



筋力を1ランクアップさせることが可能。

ただし、このスキルが発動している場合は1ターンごとにダメージを負う。

単独行動：B



マスターからの魔力供給を断ってもしばらくは自立できる能力。

ランクBならば、マスターを失っても2日間現界可能。

宝具

巻戻呼び起こせし魔笛

ランク：C 種別：対軍宝具
レンジ：1～50 最大捕捉：100人

竜の咆吼や神馬の嘶きにも似た魔音を発する角笛。
レンジ内に存在するものに、爆音の衝撃を叩きつける。
対象のHPがダメージ以下だった場合、應になって四散する。
善の魔女・ログステイラがアストルフォに与え、ハルビュイアの大群を
追い払うのに使用された。
通常時は腰に下げられるサイズだが、使用時はアストルフォを
囲うほどの大きさになる。

魔術万能攻略書

ランク：C 種別：対人（自身）宝具
レンジ：- 最大捕捉：1人

さる魔女から譲り受けた、全ての魔術を打ち破る手段が
記載されている書物。所有しているだけで、自動的にAランク以下の
魔術をキャンセルすることが可能。固有結界か、それに極めて近い
大魔術となるとその限りではないが、その場合も真名を解放して、
書を読み解くことで打破する可能性を掴める。

……が、アストルフォはその真名を完璧に忘却している。
魔術万能攻略書も、適当につけた名である。

Pardon





タッチ・キック・でもギリギリ

触れれば転倒!

ランク:D 種別:対人宝具
レンジ:2~4 最大補捉:1人

騎士アルゴリアの馬上槍。金の穂先を持つ。
殺傷能力こそ低いものの、傷をつけただけで相手の足を霊体化、
または転倒させることが可能。
この転倒から復帰するためにはLUC判定が必要なため、失敗すれば
バッドステータス「転倒」が残り続ける。
ただし1ターンごとにLUCの上方修正があるため、成功はしやすくなる。

この世ならざる幻馬

ランク:B+ 種別:対軍宝具
レンジ:2~50 最大補捉:100人

上半身がグリフォン、下半身が馬という本来「有り得ない」存在の幻獣。
神代の獣であるグリフォンよりランクは劣るものの、その変遷による
粉砕攻撃はAランクの物理攻撃に匹敵する。



CLASS

キャスター

マスター ロシュ・アレイク・エグザルツ

真名 アヴィケブロン

性別 男性

身長・体重 161cm 52kg

属性 秩序・中庸



クラス別能力

陣地作成 :B 魔術師として、自らに有利な陣地を作り上げる。ゴーレムの創造に一点特化した“工場”の形成が可能。

道具作成 :B+ 魔力を基にした器具を作成できる。キャスターのスキルはゴーレムに特化しており、それ以外は何も作ることができない。

固有スキル

数秘術 :B

魔術系統の一つ、カバラ。
ノタリコンによる短縮詠唱と組み合わせることにより、複数のゴーレムに複数のコマンドを一瞬で打ち込むことを可能とする。



宝具

ゴースト・オブ・ザ・フューチャー
王冠：叡智の光

ランク：A+ 種別：対軍宝具
レンジ：1～10 最大捕捉：100人

キャスターが生前に作ること叶わなかった未完成の宝具。

CLASS

アサシン

マスター 六導玲霞

真名 ジャック・ザ・リッパー

性別 女性

身長・体重 150cm 45kg

属性 混沌・悪

筋力

C

魔力

C

耐久

C

幸運

E

敏捷

A

宝具

C

クラス別能力

気配遮断：A+

サーヴァントとしての気配を断つ、隠密行動に適したスキル。完全に気配を断てば発見することは不可能に近い。攻撃態勢に移ると気配遮断のランクが大きく落ちてしまうが、この欠点は「夜の殺人」によって補われ、完璧な奇襲が可能となる。

保有スキル

夜の殺人：A

暗殺意ではなく殺人鬼という性格上、加害者の彼女や被害者の格下に対して常に先手を襲われる。ただし、発生受取れるのは夜のみ。

精神汚染 :C

精神干渉系の魔術を中確率で遮断する。

情報抹消 :B

対戦が終了した瞬間に攻撃者と対戦相手の記憶から彼女の能力・真名・外見特徴などの情報が消失する。

外科手術 :E

血まみれのメスを使用してマスター及び自己の治療が可能。
見た目は保証されないが、とりあえずなんとかなる。

宝具

ジャック・ザ・リッパー 解体聖母

ランク:D~B 種別:対人宝具
レンジ:1~10 最大捕捉:1人

ジャック・ザ・リッパーの殺人を再現する宝具。
「時間帯が夜である」「相手が女性(または雌)である」「霧が出ている」
すべての条件が整っているときに宝具を使用すると、対象の身体の中身を問答無用で外に弾きだし、解体された死体にする。
条件が整ってない場合は単純なダメージを与えるに留まるが、その際も条件が一つ整うたびに威力が跳ね上がる。この宝具はナイフによる攻撃ではなく一種の呪いであるため、遠距離でも使用可能。
宝具を防ぐには物理的な防御力ではなく、呪いへの耐性が必要となる。

サーヴァント 暗黒霧都

ランク :C 種別 :結界宝具
レンジ :1~10 最大捕捉 :50人

霧の結界を張る結界宝具。魔力で発生させた硫酸の霧そのものが宝具である。サーヴァントならばダメージは受けないが、敏捷が1ランクダウンする。霧の中にいる誰に効果を与え、誰に効果を与えないのかは宝具の使用者が選択可能。霧によって方向感覚が失われるため、脱出するにはランクB以上のスキル「直感」、もしくは何らかの魔術行使が必要になる。

CLASS

バーサーカー

マスター けいす・アム・グエグ・エグ

真名 フランケンシュタイン

性別 女性

身長・体重 172cm 48kg

属性 混沌・中庸

筋力 

C

D

耐久 

B

幸運

B

敏捷 

D

宝具

C

クラス別能力

狂化：D

筋力と耐久のパラメータをアップさせるが、言語能力が単純になり、複雑な思考を長時間続けることが困難になる。

保有スキル

塵ろなる生者の嘆き：D

狂化時に高まる、いつ果てるともしれない甲高い絶叫。
敵味方を問わず思考力を奪い、抵抗力のない者は恐慌をきたして呼吸不能になる。



宝具

乙女の貞節

ランク：C 種別：対人宝具
レンジ：1 最大捕捉：1人

樹の枝状の放電流を纏う戦術。
先端の球体は彼女の心臓そのものであり、戦闘時以外も肌身離さず所持している。 尾部のフィンと、本体側頭部のフィンによって電力の供給が行われる仕組み。 自分や周囲から漏れる魔力を効率よく回収し蓄積するため、 周囲に余剰の魔力が豊富に発生し続ける戦闘時は、 ガルパニズムと合わせて疑似的に「第二種永久機関」の動作をすることになる。

森刑の雷樹

ランク：D～B 種別：対軍宝具
レンジ：1～10 最大捕捉：30人

「乙女の貞節」を地面に突き立て、全リミッターを解除して行う全力放電。 聳え立つ大樹のシルエットで降り注ぐ、拡散ホーミングサンダーである。 敵が単体かつ近距離であれば「乙女の貞節」がなくとも発動可能。 リミッターによって制御されているが、解除した場合の威力は絶大。 ただしその場合、使用者は完全に活動を停止する。つまり「死」である。 この雷撃は、低い確率で第二のアランケンシュタインの怪物を生む可能性がある。もともと、死亡する彼女はその結果を見ることができない。

それは竜殺しと英雄殺しという二人の異なる剣士が手にした
全てを討つ寂滅の光——！





じゃあ、一人目から行こう。ここから一番近い魔術師さんのお家へヨー！





……はくじょうする？

フェイト／アポクリファ

3

「聖人の凱旋」

東出祐一郎



TYPE-MOON BOOKS

FA-03

フェイト／アポクリファ Vol.3 「聖人の凱旋」

目次
CONTENTS

解説	456
第四章	367
第三章	215
第二章	129
第一章	15
プロローグ	5

イラスト／近衛ノ嗣
表紙／WINFANWORKS

プロローグ

プロローグ

——では、第三次聖杯戦争の話をしよう。

第二次聖杯戦争において、序盤で敗えなく敗れ去ったアインツベルン。大聖杯を創り上げた御三家でありながら、戦闘面での力量が低いために遅れを取った錬金術の大家。

アインツベルンは第二次聖杯戦争における敗北の恥辱を雪ぐため、此度こそ必勝を狙う腹積もりだった。六十年の歳月を活かしてあらゆる可能性を比較検討し、結果——二つの英霊まで候補を絞った。

道の一つ。大聖杯のシステムを改変して復讐者なる特殊クラスを召喚すること。召喚するサーヴァントは、世界六十億の呪いを背負った反英雄アンリマユ。

悪魔の王の名を冠する無名の英雄。召喚すれば、他のマスターとサーヴァントを皆殺しにして大聖杯を起動させるに至るであろう、殺戮に特化した災厄。

道の二つ。大聖杯に備わっていたシステムの悪用——本来は聖杯戦争の調律を行うため

呼び出される公平無比にして最強の力を持つクラス、裁定者裁定者のサーヴァントを召喚すること。

これによってルーラーが持つ「サーヴァントへの令呪」という大特権を活用しようという企てだ。

力を取るか、智を取るか。思い悩んだ挙げ句、アインツベルンは智を選んだ。安全策を取った、と言い換えてもいいだろう。先の敗北のせいか、神に近い力を御する自信をどうしても彼らは持てなかった。

召喚するルーラーに選ばれしサーヴァントは、舞台である極東において聖人にもっとも近い存在でありながら、聖人として認められなかった悲運の少年——天草四郎時貞あまぐさしろうときさだという。

アインツベルンとしては東洋の無名の英霊などではなく、本来のルーラーに近いサーヴァントの召喚を切望していたが、そもそも通常の聖杯戦争の形式でルーラーを召喚するということ自体、システムへの強烈な干渉である。

彼らは妥協した——とはいえ、やはりサーヴァントへの令呪があるというアドバンテージは圧倒的だった。召喚された天草四郎は戦闘力において目立つものではなく、魔術マジックにしても魔術師に及ぶ訳ではなかったが、第三次聖杯戦争を勝ち続け、生き残り続けた。

無謀な賭けに出ることなく、徹底して防備を固めたのも功を奏したのだろう。第三次聖杯戦争も終盤となった頃、大聖杯にもっとも近い位置にアインツベルンは確かに立ってい

たのだ。

だが、ここで想定外の出来事が起こった。第三次聖杯戦争に参戦したユグドミレニアの長——ダーニツク・プレストーン・ユグドミレニアが偶然大聖杯を発見し、軍の力を借りての強奪計画に着手したのだ。

ここに、第三次聖杯戦争は崩壊した。

生き残っていたサーヴァントたちは大聖杯を求めて相打ちとなり、アインツベルンのマスターもまた、その凄絶な魔術戦に巻き込まれて死亡した。

アインツベルンは死に、遠坂とマキリは撤退——かくして、戦場に残ったのはただ二人。

生き残った内、一人の名は言峰璃正。思いも寄らぬ形で英雄たちの壮絶な戦いを目撃した彼は、第三次聖杯戦争の監督官として派遣された聖堂教会の神父だ。

恐らくまだ二十に手が届くかどうかの歳だろうに、あらゆる苦行に耐えてきた風貌は、岩壁に彫られた人面を連想させる。筋骨の逞しさといったら、さながら城塞だ。

眼光は剃刀のように細く鋭く、ざらりと光っている。神父、というよりは武を極めた格闘家や歴戦の傭兵のそれに近い。

「——これから、貴方はどうなさるおつもりですか？」

そんな言峰璃正が、隣に佇む少年にやや緊張した面持ちで問い掛けている。それは一種喜劇のような状況だ。年齢も、体格も上回っているはずの男が、少年に向かってへりく

だっている。

「……もつとも、少年の素性を知っている聖職者であれば誰でもそうするはずだ。

彼が問い掛けた相手は、江戸の時代に生まれた聖人にもっとも近い奇跡の少年。たとえば見た目が二十にも満たない若僧であったとしても、それ相応の言葉で語りかけるが当然といえよう。

「大聖杯は奪われた。さすがに徒手空拳で奪回するのは不可能でしょうね」

少年は虚空になった洞窟を見ながら呟いた。大聖杯が奪われ、マスターが死亡したにも拘わらず――少年は消滅しない。アインツベルンとの因果線は断たれている、だが少年に危機感は見えない。

少年の肉体は、確かな存在となって大地に根を下ろしていた。大聖杯に触れた彼は、かろうじて「受肉」を果たしていたのだ。その意味で、第三次聖杯戦争は彼の勝利に終わつたと考えても良い。

「そもそもマスターが死亡した以上、今の私はごく普通の人間程度の力しか持っていない。ですから、聖杯の追跡は諦めます」

「ほう……で、あれば」

「真正殿。貴方はいつか私に言いましたね、苦行によって悟りを得るために旅をしたと。ならば、私も旅でもしましょうか」

「それはよろしい。及ばずながら、私も力になりましょう」

旅をするには、必要なものがある。それは身分であり、資金だ。言峰璃正に、財を惜しむなどという考えがあるはずもない。ましてその一生を神に捧げ——悲劇的な結末を迎えた天草四郎時貞が、新しい何かを得るというのであれば、全てを喜捨しても良いとすら考えていた。

名前が変わり、身分を得た。璃正の養子となった彼は、宣言通りに世界中を旅して回った。だが、一つだけ義父に伝えなかったことがある。

——天草四郎は、大聖杯を諦めた訳ではない。

いやそれどころか、幸運にも得た第二の生を全て捧げる覚悟で——次の聖杯戦争に挑もうと決意していた。

あの大聖杯の光を浴びたとき、天草四郎は確信したのだ。この力さえあれば、この奇跡さえ手に入れば、必ずや万民を幸福にすることができると。

……あの大聖杯の力は生半可なものではない。奪われた以上、必ずや何処かで誰かが起動させるはず。恐らくは再び魔力が溜まる六十年後——。

義父の伝手を頼って第八秘蹟会に所属すると、彼はただ、その刻を待つことにした。

暗闇の中で蹲うつすまって獲物を狙う肉食獣や、網を張り巡らせて罠に掛かるのを待つ蜘蛛と同じだ。

どんな聖杯戦争にも、通過するべき点がある。それが聖堂教会、聖遺物の回収や探索を目的とする第八秘蹟会だ。聖杯を巡る争いである以上、聖堂教会が絡むべき事象であることは自明の理であり――魔術師側にとっても、下手に隠すよりは開示した方が動きやすい。

第三次聖杯戦争についての情報が拡散し、亜種聖杯戦争が世界中で執り行われるようになった現在、第八秘蹟会には「聖杯」に関する噂が流れ込み続けている。

だが、それらはいずれも贗物だ。「冬木」の聖杯戦争における大聖杯も、厳密に言えば贗物なのだが、天草四郎にとって求めるべきものは自身を喚んだあの「大聖杯」ただ一つ。だから、ただ待った。

――六十年、ひたすら待ち続けた。大聖杯と接続し、受肉した軀からだは天草四郎が持つ宝具の力によって老いることもなく、ただただ一つの奇跡であり続けた。

風に流れる雲のように、様々な出来事が通り過ぎていく。養父が死に、義弟も養父や自分と同じように何かを求めて旅立った。

考える時間は無限に等しいくらいに存在して。だから彼はあらゆる策を練り上げた。どうやってマスターたちに食い込むか、大聖杯を強奪する為に必要なサーヴァントは誰か、

どこで戦い、どうやって手に入れて、どうやって願望を叶え続けるのか。

願うは万人の幸福、万人の善性。この世全ての悪の討滅。そこに至るまでに果たしてどれほどの障害を潜り抜けねばならないのか。常人ならば諦め、天才ならば破綻する。

だが、奇跡の子である天草四郎は挫けない、挫けるはずがない。彼の背には三万七千人の無念がある。鉄の心は何物にも揺り動かされない。

そして、遂に待ち望んだ戦いがやってきた。七騎対七騎、冬木の大聖杯による聖杯大戦。規模やシステムの違いなど、些細なことだ。何しろシロウ・コトミネは六十年を生きて、あらゆる可能性を考え続けたのだから――。

かくして。天草四郎は此度の聖杯大戦における真のルーラー――ジャンヌ・ダルクの眼前で不敵に笑う。

ここから先こそが真の戦争。魔術師の宿願、魔術協会の名誉のようならつづけられないものを求めての戦いではなく、人類の行く末を左右する戦いだ。

第一章

第一章

滴る血を呑み込むと、甘ったるい鉄の味が口の中に広がった。損傷は深刻という程ではない。ただし、治療が必要なのは間違いない。自然治癒でどうにかなるレベルはどうに超えている。

かつて魔力供給槽で浮かぶだけの人生だったホムンクルスは、今やジークという固有名を持つ人間、英霊、ホムンクルスのいずれでもない奇妙な存在と変わった。

ふと、左手の甲に目をやる。本来、令呪は消費すれば微かな痣（しず）となって消失する。だが、ジークのそれは輪郭が曖昧になった程度で、残り続けている。それどころか、消えた令呪を中心に少し手が黒ずんでいた。痛みはない、恐らく令呪の消費による反動だろう——と、ジークはひとまず結論付けた。

妙に軀が重い、と思ったら自分の首に両腕を回したライダーが険しい表情を浮かべて睨（にら）み据えていた。

「……キミ、何かボクに言うべきコトがあるんじゃないか」

考えるまでもなく、何を言うべきかは分かっていた。

「悪い、とは思っている」

「そうだね。悪い、実に悪い。ボクの頑張りが台無しじゃないか！」

両手を襟首に回し、ぐいぐいとジークを揺さぶるライダーは、そをかいていた。

「ボクのセイバーに突貫して死ぬわ！ その後すぐに生き返るわ！ 挙げ句にサーヴァントになつてゐるわ今は元に戻つてゐるわ！ 一体何が起つたのさ!? ねえ、ねえ、ねえ！」

「……それなのだが、実は俺にもあまりよく分かつていない。何で生き返つたんだろうな」

「あのなあ、バカなボクに聞いたつてしょうがないんだろそんなの！ もう、バカ！ バ

カ！ バ——カ！」

叫ぶだけ叫んだ後、不意にライダーはジークの胸元へ頭突きを叩き込んだ。顔を地へ向けたまま、ぼつりと呟いた。

「——生きててくれて、良かった。本当に良かった。でもいいか。二度と、二度とするんじゃないぞ。分かった？ 分かったよね？」

ジークは目を潤ませて自分を見つめるライダーに、さらりと告げた。

「いや、その保証はできない」

「……ほえ」

目を二度、三度と瞬いたライダーは、たちまち頬を膨らませた。

「どーゆーことなのさ！ 普通ここは保証するもんだろ！ 無茶をやつてごめんない、もう二度としませんって涙を流して反省して、ボクが許して頭をがしと撫でてやるどころだろ！」

「無茶をするために戻ってきた。……ライダー、俺はやはり仲間を助けたい。あのとき、俺に慈悲を与えてくれた、彼らに報いたい」

「……それは、」

「分かっている。無理な願いということは、本当に分かっている。キミの言う通り、俺は振り返らずに生きていく方が正しかったのだろう。幸せだったのかもしれない」

それでも、それでも——彼らをなかつたことにして、生きていくことはできなかった。

ライダーはジークの訴えを聞いて、大仰に嘆息した。

「本当に、本当に、本当に、キミって奴は、奴は、奴は……あー、もー！」

がしがしと頭を掻き廻り、ライダーは飛び跳ねた。怒り出すか、と覚悟したジークだったが、跳躍を止めたライダーはばあつと表情を輝かせて叫んだ。

「最高だー うん、やつぱりキミはそういう奴なんだ！ 見捨てたって誰一人責めはしないのに、キミ自身がそれを責めるなんて！ ボクもキミのお陰で覚悟を決めた！ やつぱり、あれは絶対に間違ってる！ 絶望的に、どうしようもなく間違ってる！ よし、救おう！ 救っちゃおう！」

「……いいのか？」

「へ、何が？」

「いや。……どう考えても他のサーヴァントが許すような状況ではないと思うのだが」

「何だ、そんなことか。そんなのそうなるから考えればいいだろ！　さ、行こう！」

ぐいぐいとライダーは強引にジークの腕を引っ張り、崩落しかけたミレニア城塞へと向かう——が、すぐに足を止めた。理由は明白、一人の魔術師が二人の前に立ちはだかっているからだ。

「ありや、見つかった。そりやそうか、あの城塞に居て見てたんだもんなあ」

ライダーは申し訳なさそうに頭を掻いた。二人の前に佇むのは、攻撃的な雰囲気強調させる鋭角なフレームの眼鏡をかけた水の美女。黒^{ブラック}のライダーのマスター——セレニケ・アイスコル・ユグドミレニアである。

激怒している、とジークは思っていた。彼はライダーから、マスターであるセレニケが自分にあからさまな妄念を抱いている、と愚痴られたことがある。

その予想を裏切るようにセレニケは微笑んでいた。陶然とした顔つきで、腕を絡ませる二人を眺めている。

「うわあ。怒ってくれてた方がまだマシだな、こりや」

ライダーの呟きに、ジークは同感だとばかりに頷いた。

セレニケは怒ってなどいない。より正確には激昂を既に通り越した段階だ。彼女の憤怒は、ある段階を通り越すと、凍結する。

感情は分解され、思考は極めて合理的なものへと変化する。ただし、ベクトルそのものは変わらない。恥辱には千倍の憎悪を、侮辱には万倍の残忍さで返礼する。

そこに至る経路に、一切の迷いや逡巡が消える。そこには利害すらも含まれる。そう、ライダーが撤退を命じられても動かず、ホムンクルスを守ろうとしたとき、彼女は既に聖杯大戦の勝敗すらも視野から消し去っていた。

合理的に、ライダーがもつとも苦しむ結末を用意する。この状況において、ライダーは自分の死すらも考慮に入れている。令呪で自死に追い込んだところで、この楽天的な騎士は決して絶望はすまい。

あるいは、犯したところで同じだ。全身を一寸刻みに切り刻んだところで、苦痛に悶える程度だろう。だが——一つだけ、たった一つだけアストルフオという英霊を絶望させるに足る手段がある。

「ねえ、ライダー。貴方の真名を言っちゃおうだい」
甘く、囁くようにセレニケが言った。唐突で、そして脈絡のない質問に首を傾げつつも

ライダーは答えた。

「アストルフォ。シャルルマーニュ十二勇士の一人だけど？」

「違うわ、ライダー。いい？ 貴方は英霊という大本から分離したサーヴァントに過ぎない。言うなれば、劣化したコピー商品でしかないのよ。どれほど生前の記憶があり、生前の力を行使したとしても、アストルフォという存在はどの昔に消え失せている」

「……へえ」

なるほど確かに一理はある、とライダーは頷いた。侮辱ではあるが、元々ライダーは他者からの侮辱など、最初から気にも留めない性質だ。

「で、まあボクがコピー商品だったらどうだって言うのさ？」

「つまり。英霊アストルフォには敬意を払ってもいいわ。仮にもシャルルマーニュ十二勇士の一人。歴史にその名を刻んだ英雄だもの。でもね、ライダー。模造品である貴方に私が敬意を払うと思う？」

「いやあ、断言してもいいけど。マスター、ボクが英霊だろうが怨霊だろうが敬意を払うとは思えないな」

「かもしれないわね。でもまあ、これで分かったでしょう？ 私は、貴方をアストルフォだとは思っていないの。私が召喚した、とっておきの玩具に過ぎないわ」

「……」

その酷薄な薄笑いに、ライダーは素早く槍を構えた。飯にも己のマスターに対しての行為ではないが、ライダーの脳内で何かが警告を発していた。

「ジーク、キミ、ここから逃げて」

「何……？」

「いいから早く！」

怒鳴りつけるライダーに面喰らいながらも、ジークはその場から離れようと後退する。

だが、セレニケは即座に左腕の令呪を突きつけた。

「第四の『黒』が令呪を以て命じる。そのホムンクルスを殺しなさい」

莫迦な、とジークは暗然とした。まさか、まさかこんな下らないことで令呪を使うとは予想外だった。

ライダーもまた同じ。無論、この状況になって思い返してみれば、己のマスターは、一度たりとも聖杯への願いが何なのか語ったことはなかった。戦争に対しても、やや消極的——無論、勝とうとはしている。だが、他のマスターと比較するとどうにもその執着が薄いことが気になった。カウレスは分かるのだ、実姉であるフィオレと相争うということに拒否感を抱いても無理はない。

だが、このもっとも魔術師らしい魔術師がどうして聖杯に拘らなかつたのか。

決まっている——勝利すること、を諦めていたからだ。何故、勝利することを諦めていた

のか？

それもまた、決まっている——自分を隣辱するためだ。

「に、げろ……！」

黄金の槍が、ジークに向かって突きつけられている。震え、歯を食い縛り、苦悶しながら槍を押し留めている。

令呪——それはマスターの切り札。英霊としての誇りや矜持、信念などあらゆる束縛を引き千切る命令執行権だ。

どれほど拒絶しようとも、本来サーヴァントはこの令呪に逆らうことなどできない。だが、極めて高い対魔力を持つなら話は別だ。

「あら。頑張るわね」

「……マスター。頼むから、キャンセルして欲しい」

「嫌、絶対に嫌よー ああ、それよそれ！ それが見たかったの！ ねえ、ライダー。絶望してるでしょう？ そして分かってるわよね？ 今は宝具の対魔力でギリギリの線を聞ぎ合っているけど——」

もう一度、セレニケが令呪が刻まれた左腕を掲げた。今度こそ、ライダーの表情が絶望的なものへと切り替わる。

ジークも啞然とする。まさか、ただ自分を殺すただけに令呪を二回消費するのか？

そんな、有り得ない……………いや、違う。有り得るのだ。自分を殺すというのは、ただホムンクルスを殺すというだけではない。

ライダーの心を折り、絶望させる。その為ならば、このマスターはどんな行為でも躊躇なく行うだろう。

「さあ、二画目の令呪を消費するわ」

「やめ、て……………お願い、何でもするから。それだけはやめてくれ……………」

掠れた声、絞り出すような懇願はセレニケの嗜虐心を更に煽る結果となった。小動物のように震え、涙を流すライダーの姿は、ただひたすらに美しく、可憐で、懺悔的だった。

「ああ、その顔よ！ その顔！ イイ、最高！ 私は、その顔を見たかったの！ いいえ、その顔だけが欲しかったの！」

圧倒的な、悪意だった。セレニケは恐らく、己が二画消費した後のことなど何も考えていない。聖杯戦争も、己の死すらも考慮の外だろう。彼女はただ、ひたすらに——自分のサーヴァントが絶望し、苦悶するという快感を食うだけ。

ジークは動けない。自分が逃げようと動けば、セレニケは即座に二画目の令呪を発動させるだろう。宝具が機能している今は、ライダーはどうにか耐えている。絶望的な表情を堪えたいセレニケは、まだ二画目を脅すだけに留まっている。

無論、彼女が情けをかける可能性は皆無だ。だが、踏み留まっている間は少なくとも、

即座に令呪を発動させるようなことはない。

……だが、これは破滅を先延ばしにしているだけだ。十秒先、あるいは二十秒かもしれないが、いずれセレニケは令呪を発動させる。

そうなれば、ジークはライダーの手に掛かって死ぬ。ジークの『デッド・マン・ワン・モア・ライフ警告令呪』は、まだ二画目を発動させる準備が整っていない。

仮に発動させたとしても、持ちこたえられるのは三分だ。二画の令呪で殺害を強制した場合、有効時間が果たしてどこまで続くのか、ジークには分からないし……恐らく、ライダーやセレニケにも不明だろう。

手詰まりであることに、今更ながら気付く。進めば、わずか三分の猶予は生まれるが、それだけだ。では、セレニケを殺害すればどうだろうか？

これなら、令呪の命令は自動的にキャンセルされるはずだ。もちろん、ライダーが現世に繋がるための因果線^{カウzal}を消すことにもなるが……。それには一つ、対抗策がある。

重要なのはタイミング。一挙手一投足を滑らかに、自然に動かなければ。

セレニケが自分に注意を払っていないのを見て、そつと腰に吊した細身の剣を手にする。迷う余裕は既がない。

動け、動け、動け……………よし！

その一步を勢いよく踏み出した瞬間、くるりとセレニケがジークに顔を向けた。勝利へ

の確信に満ちた、残忍な表情。

失敗した、という感覚に縦毛立った。目眩と吐き気が同時に起こり、立っていられずに倒れた。

「あら。効きが悪いわね」

ジークは踏み出した足を見る。地面を凝視すると、黒いシミのようなものが微かに視認できた。どうやら、黒魔術で眼を張られていたらしい。

「舐められたものね。ホムンクルス風情が、この私を出し抜けると思ったの？ 敵意や悪意に黒魔術師は鋭敏なのよ。お前が剣を握った瞬間、私には何をしようとしているのか手に取るように分かってたわ」

苦痛に酔るジークの後頭部を握むと、セレニケは地面に顔面を叩きつけた。

「やめ……ろ……」

「ライダー、ちょっと黙ってなさいな。トドメは貴方に刺させてあげるからね？」

もう一度、顔面を叩きつける。魔道具らしき古釘を手にする時、それをジークの右手に打ち込んだ。尋常ではない苦痛に、ジークが掠れた声で絶叫した。

「痛いでしょ？ でもね、私はもつと痛かったのよ？ 私のサーヴァントがね、お前みたいな雑りカスのせいで、苦しんだんですからね！」

ただ、釘が突き刺さったという痛みではない。刺き出しになった神経を鉗で引き裂かれ

ているような激痛は、頑強になった肉体でも耐え難い代物だった。

「黒魔術はね、陰湿で陰險で不快で無惨なものよ。対象にただ苦痛を与える術式だけでも、ざっと百を超えるわ。本当なら一つ一つ丁寧に試したいところだけど。残念ながらそんな時間もないから、これで勘弁してあげ——」

ジークは腰の左側に、ライダーから貸与された細身の剣を吊していた。よって、本来ならば右手で柄を握り、鞘から引き抜かねばならない。

だが、今は右手が釘で貫かれている。よって、左手で左側にある剣を抜かなければならなかった。おまけに跳き、無理のある体勢だ。それでも——それでも、この千載一遇の機会を見逃すほど、ジークは愚かでもない。

左手が動き、腰の剣を探り当てた。相手が察知するより先に、問答無用の抜剣。狙うは無論彼女の首——！

セレニケにとって、こちらの一撃は完全に予想外の出来事だったのだろう。反射的に仰け反って、剣を撃そうとした。

だが、これなら斬ることができる。一撃だ、一撃で首を刎ねる——だが、左手で左側にある剣を手にした場合、逆手で剣を抜かねばならない。

つまり。右手で剣を手にした場合よりも、幾分軌道が浅くなる。

「く……!!」

会心の斬撃は、まさに皮一枚斬っただけに留まった。セレニケは慌てたように後方へと飛び退き、恐怖を押し隠すように叫んだ。

「この、ホムンクルス風情が……私に……私に何をしたアツ!!」

「ジーク、逃げろ……早く!」

だが、右手の古釘が離れない。ジークは手の甲に穴が開いても構わないと、手首を鍛えて引き抜こうとしたが、全身を痙攣させるほどの痛みが襲い掛かり、どうしても脱出できない。

「――第四の。黒が令呪を以て命する!」

セレニケの顔は、喜びに歪んでいる。残忍な光を帯びた瞳は爛々として、まるで獣のようでもあった。黒魔術師であるセレニケが、普段は隠す本性。ただ純粹に、趣味として人を醜く殺しにするときにしか見せない顔だ。

「やめろおおおおおおおっ!」

ライダーが泣きながら叫ぶ。無論、セレニケにここで止まるような慈悲は持ち合わせていない。ホムンクルスを殺せ、という命令を下そうと息を吸い口を開いた瞬間――。

「うるせえよ」

そんな雑な一言と共に。セレニケの頭部が消失した。意識はまさに瞬間的に断絶し、セレニケは自分に何が起こったかすらも分からなかったに違いない。歓喜を味わいながら死ねた、という点においては幸福とすら言えるだろう。

彼女の首を刎ねたのは、細身の少女だった。やや短めの金髪を後ろで軽く編み上げ、スポーティなチューブトップと赤いレーザージャケット、足を露わにしたカットジーンズを身につけている。そして、その手にはあまりに不釣り合いな大剣。すぐにライダーは、彼女が何者か気付いた。

「赤のセイバー……！」

その言葉に、赤のセイバーは「名答」と呟いて不敵な笑みを浮かべた。黒のライダーは槍を構えたまま、姿勢を崩さない。その視線には、強烈な殺意と敵意が溢れている。

だが、仮にも英雄と謳われた黒のライダーの視線を浴びても、赤のセイバーは薄笑いを止めない。

「よせよせ、黒のライダー。令呪の縛りはまだ有効だ、魔力が完全に掻き消えるまでは大人しくしておかないと、テメエの軀は大事なコイツの命を奪いにかかるぞ？」

「……ッ!!」

その言葉は紛れもなく真実だ。令呪の命令はマスターによってキャンセルされるか、令

呪に籠められた魔力が尽きぬ限り、実行され続ける。一度目の令呪は既に行使されており、セレニケが死んだ今はキャンセルもできない。

ただし、令呪は基本的に使い捨てだ。そして、セレニケは次の令呪を行使できる立場ではない。よって、令呪の魔力はライダーが抵抗し続ける限り無為に消費され——それが尽されば解放される。

だが、逆に言えば、それまでは、たとえ敵と相対してもろくに動くこともできないという訳だ。

「——フン。生憎だが、お前に構ってる暇はないんだ。オレたちは、あの空中庭園に向かうんでな。お前はそこで、雑魚らしく蹲っている」

「え……？」

意外な言葉に、ライダーとジークは揃って目を丸くした。『赤』のセイバーがジークに目線に移す——当然、先ほど殺し合ったジークは警戒した。セレニケの死によって、呪いの釘は消失している。

だが、少女の瞳には戦意らしきものは浮かび上がらない。……そこにはむしろ、幾許かの同情すら垣間見えた。

「やれやれ、調子狂うな。……オレは行く、聖杯を獲りにな。邪魔立てするつもりなら斬るし、次に再会すればやはり殺す。聖杯は諦めるんだな、あれはテメェらには相応しから

ぬ代物だ」

頭を掻いてそう言った「赤」のセイバーは、それきり二人に何の関心も見せずに姿を消した。行きがけの駄賃ついでに、マスターを殺害した——ということらしい。

「ライダー！」

「わ、わ、わー 来るなバカ！ 殺しちゃったらすんだ！」

珍しいくらいに焦ったライダーの声に、接近しかけたジークも慌てて足を止めた。ライダーの額からは汗が流れ、その表情は憔悴しきっている。令呪に抵抗し続けるのは、それほどに辛いのだろうか——いや、そればかりじゃない。

「ライダー。……魔力は大丈夫か？」

「辛い、ボクは『単独行動』が許されているからね。す、少しくらいなら大丈夫だけ、ど……う……う」

苦悶の声は、とても大丈夫とは思えない。確かに『単独行動』があれば、数時間から一日、マスターから送られる魔力を完全にカットされても行動可能だ。

けれど、今のライダーは「令呪の命令に耐える」という通常時でも耐えられるかどうか分からぬような行動に及んでいる。

それはつまり——宝具である書物を使い続けているということだ。このままでは、一日どころか数分も保たない……！

「ライダー！」

「い、嫌だぞ。嫌だぞ、ボクは……！ 絶対に、絶対にキミを殺したりしない。ここまで来て……負けてたまるか……！ それくらいなら消滅したって……構わない！」

汗を滂ませ、全身を震えさせながらもライダーは軽く笑って、死の恐怖をあっさり乗り越える。だが、ジークはライダーを死なせる気は毛頭ない。

「ライダー——俺と契約しろ——」

「は!? ……とどとど、うわ危ない危ない危ない！ よーけーてー！」

突拍子もないジークの提案に、一瞬気が振けたのかライダーの槍が危うく彼の心臓を狙いかけた。慌てて避けたジークと、すんでの所で踏ん張りを見せたライダーのお陰で、どうにか掠めるだけに留まった。

「い、いきなり驚かせないでよ！ っていうか、契約!? サーヴァントがサーヴァントと契約するなんてルール違反だろ!? いや、そもそも無理だろ！」

「……俺はサーヴァントではあるが、同時にサーヴァントではない」

「へ？」

戸惑うライダーに、ジークは令呪が刻まれた腕を掲げた。

「分からないか、ライダー。令呪がある以上、俺にもマスターたる資格はあるんだ」

「い、いや。でも——でも、キミを戦いに巻き込むなんて」

「ライダー。俺は生まれて一年にも満たぬ子供かもしれない。知識はあっても、それを活用する術（じゆつ）を知らぬ小僧かもしれない。それでも今、ここでやるべきことくらいは分かる。俺は君と契約する」

ライダーは自分を殺そうとしている——それは分かる。だが、ここで逃げれば取り返しのつかないことになることも分かる。最早一分一秒の余裕すらないことも。

「……この状態で、契約しろと？ さっきみたいに、ボクがうっかり気を抜いたら殺しちゃうこの状況で？」

「俺が死ねば、君も死ぬ。心中みたいなものだ、償う必要はない。……キミを見殺しにするくらいなら、死んだ方がいい」

「わ、分かった！ もう、分かったよ！ こうなったら自棄（や）だ！ キミと契約する！ するから！」

その言葉にジークは頷き、右手を差し出した。歯を食い縛りつつ、ライダーはその手を掴む。令呪の殺害命令が、ライダーをひっきりなしに責め立てる。令呪への抵抗と、膨大なまでの魔力消費。

一刻の猶予もない。ジークは声高らかに契約を謳う。

「告げる。」

汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。

聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ。

我に従い、我が言葉に応えよ。その命運、我に預けるか否か！

「ライダーの名に懸けて、その誓いを受けよう！」

我が主は貴方であり、ボクは貴方の——サーヴァントだ！」

瞬間、互いに握った手に閃光が疾走した。経路が強制的に開放され、因果線が結ばれる。

「風」のライダーは新たな主を得て、この大地にしばしの逗留を許される。ここに契約は締結された。サーヴァントでありながらマスターでもあるジークと、彼と共にあることを誓ったサーヴァント、ライダー。

「……け、契約は……成立、したよね？」

「ああ」

「だ、だったら——離れてー」

その言葉に泡を食ってジークは飛び退いた。途端、槍がジークの目の前で薙ぎ払われる。

どうやら、マスターになったといっても前マスターであるセレニケの命令は未だ有効らしい。肩で息をしつつ、ライダーは安堵の表情を浮かべた。

「あ、危なかったあ……契約即殺害とか、駄目サーヴァントにも程がある……」

「記録に残るな」

「残りたくない！ それより、契約は済んだから早くボクの前から居なくなつた方がありがたいんだけど。あ、いや。この令呪の命令が消えるまでね？ 消えたら、すぐに追いつくから！」

「分かった。では、俺は城塞に行く。今は魔術師たちも、ホムンクルスたちに構っている状況ではないはずだ。彼らにもう一度、意思を確認しておく」

「了解。……ただ、キャスターには気をつけてね。君に一番執心していたのは、間違いない彼なんだから。今は、多分あの空中要塞に行っているみたいだけど——」

分かつている、とジークは頷いた。危険であることは間違いない、今のジークはユグドミレニアにとつて敵とも味方ともつかぬ曖昧な立ち位置だ。ジーク自身も、率直に言つて迷っている。

果たして自分は、ユグドミレニア一族と敵対すべきなのか。あるいは、融和を求めるべきなのか。それすらも迷っている。

迷っていると言えば、ホムンクルスの前途もまた悩みの一つだ。聖杯大戦から降ろしたとして、彼ら是一体どうすべきなのか。殺されるために生まれ、搾り出されるために生まれた彼らは、これから何を選び、どうやって生きていくべきか。

こればかりは、ジークにも助けることはできないし、助けてはいけな思考えている。それでは、結局のところ誰かに付き従って思考停止していることに変わりはない。

彼らは己の道、己の意志を選ばべきだ。仮令、蜂蟻の如き命であっても、否、だからこそ——思考停止して良いとは、ジークには思えない。

空を見れば、月を隠すほどの巨大な要塞。聖杯そのものに、ジークは何の関心もない。叶えるべき願いは、ただ己の力で叶えなければならぬものだからだ。

けれど、あの場では今、サーヴァントが死闘を繰り広げているのだらう。果たして誰が、どのような願いを叶えるのか。ジャンヌ・ダルク——ルーラーは、彼らの戦いをどう裁くのか。

この聖杯大戦に加わったことを、ルーラーは悲しむだらうか、あるいは憤るだらうか。それとも……これもまた既知の運命として、彼女は受け止めているのかもしれない。いずれにせよ、何となくの手感ではあるが——。

「怒られそうだな」

そう呟き、ジークは静かに息を一つ吐き出した。

「赤」のアサシンが作り出した、空前絶後の大寶貝『虚栄の空中庭園』。大聖杯を強奪、収納したこの浮遊要塞は今、凍るような沈黙に包まれていた。

睨み合うは少年と少女。褐色の肌と銀の髪、穏やかな笑みを湛えながらもどこか妖しく、禍々しさを感じさせる視線で、少年は少女を見ていた。

一方の少女は雪のように白い肌と金の髪、こちらは唇を強く結び――焼きつくような光を帯びた目で、少年を睨み据えていた。

確実なことはただ一つ。この二人は互いを不倶戴天の存在と認識している。二人はサーヴァント、クラスは共にルーラー。

本来、聖杯戦争を管理する裁定者であるはずのルーラーが二人。この時点で、聖杯戦争としては異常な状態である。

しかも、ルーラーが「赤」のマスターとして聖杯戦争に参画している。

「何を考えているのです、天草四郎。それほどまでに、聖杯が欲しかったのですか？」

「それはもう、同じ神を信じる貴女なら分かるでしょう？」

「ふざけないでください。……冬木の大聖杯が、信徒たちが知る聖杯でないことは貴方もよく分かっているはずです」

嘘は許さぬ、とばかりにルーラーはシロウに詰め寄る。そこに哄笑と共に実体化したのは、シロウのサーヴァント——赤のアサシン、セミラミスだ。

「——は。ならば、その聖杯を後生大事に守る必要もあるまいて」

「赤のアサシン。……これは貴女の企みですか？」

真っ直ぐなルーラーの問い掛けに、くつくつと愉しそうに赤のアサシンは笑う。

「なるほど。我が純情なマスターを誑かし、唆し、悪の道へと引き込んだのかもしれない。だが生憎と、我はサーヴァントだ。サーヴァントはマスターに従うものだろうか？」

「アサシン。我々のマスターはどうした」

翠緑の衣服を纏う赤のアーチャー、アタランテが詰め寄った。眼光は獣のように鋭く、喉笛を食いちぎらなばかりの勢いだ。

「元マスターだろうか？」

赤のアサシンは平然とそう応じる。アーチャーが飛び出しかけたのを、赤のライダーが素早く押さえ込んだ。とはいえ赤のライダーの表情もぞっとするほどの敵意に満ちている。

「心配しなくとも、生きていますよ。言っただでしょうか？ 彼らには平和的にマスターとしての権利を譲って貰った。夢うつつのまま、聖杯大戦に勝利したと信じているのです。可哀想ですから起こさないで下さい」

シロウの言葉に、赤のアーチャーとライダーはほぼ同時に動いた。弓に矢を番えて放ち、槍が真っ直ぐシロウの喉元を狙う。

だが、それを赤のランサーとアサシンが同時に防いだ。ランサーは放たれた矢を掴み、アサシンは左手で槍を防ぐ。無論、ただ腕を差し出した訳ではない。黒い魚鱗のような装甲が、彼女の腕に展開していた。

ライダーの槍はその装甲を木っ端の如く砕いたものの、そこで押し留まった。

「ふむ。神魚の鱗を至極当然のように貫くか。さすがはアキレウス、つくづく神の子よな、お主は」

赤のアサシンは顔を輝め、血が滴る腕を摩った。

「フン。本気だったら、鱗も腕も顔面も貫いてるぜ」

「でしょうね。ですがライダー、今のは自殺行為ですよ。今のマスターは、私ですから」シロウの言葉に、ライダーは肩を疎める。

「マスター替えに賛成した覚えはない。仮令一度たりとも顔を合わせたことがないにしても、主君を裏切るなんぞ願ひ下げよ」

「そこは見解の相違ですかね。貴方は裏切ってはいませんよ」

舌打ちして、ライダーが引き下がる。一方、アーチャーは自身が放った矢を掴み取ったランサーに詰め寄った。

「ランサー、何故邪魔をした。まさか汝、こいつをマスターと認めるというのではあるまいな！」

「——秘密に言えば、確かに彼はマスターだが。オレとて、マスター替えを認めた訳ではない。だが貴様もあまりに早計だろう。矢を放つ前に、問い質すべき真実があるのではないか？」

その言葉に、赤のアーチャーも不承不承引き下がる。

「ありがとうございます、ランサー」

シロウの感謝に、ランサーは振り向きもせず告げる。

「礼など不要だ。元よりお前の為にした事でもない。そも、お前の力量であれば今しがたの矢を躲するも自在だろうよ。いちいちオレを当てにするな」

「……まあ、それはそうですが」

苦笑して、シロウは肩を練めた。そして、改めてルーラーに向き直る。

「——我々からの要望です。この聖杯大戦、既に決したのも同然です。黒のサーヴァントはアサシンを除いて残り三騎」

「四騎です。セイバー、アーチャー、ライダー、キャスター——」

ルーラーの指摘に、シロウはわずかに表情を陰らせた。

「セイバーを数に入れるのは烏合がましいでしょう。私の見立てでは、彼が戦えるのはせ

いぜい數分が限度だ」

「……それでも。セイバーは確かに存在します」

シロウは微笑に笑ったきり、それ以上の反論は行わなかった。発言した本人であるルーラーの表情もまた、苦悶に満ちていたからだ。

「黒」のセイバー——真名はジークフリート、マスターはホムンクルス。しかし、厳密に言えば完全なサーヴァントではない。ホムンクルスに「連依」することで、現界するという極めて稀な状態だ。

その期間もわずか百八十秒。故に、シロウはジークという存在に重きを置かず——。逆に、ルーラーはその存在に重きを置いていた。

「まあ、いいでしょう。黒」のアサシンは——未だ行方知れずですが、例の連続猟奇殺人事件、あれですよ？ どう考えても真つ当なマスターとサーヴァントではない。共闘という訳にはいかないでしょうから、これも除く。さて、この状況貴方ならどうします？ 「黒」のアーチャー」

「……どう、ということもありませんね。状況的に考えて、ルーラーはこちら側と見なし
ていいでしょう。更に、赤」のサーヴァントも一枚岩という訳ではないようだ。となれば、
然程不利なように思えませんが」

アーチャーの発言は、決して強がりという訳ではない。彼なりの根拠が存在する。少な

くとも、現状『赤』のサーヴァントが総出でこちらに襲い掛かってくるとは思えない。今は、マスターであるシロウへの不信の方が遥かに強いからだ。

「——なるほど。では、『黒』のキャスター。貴方はどうですか？」

「……さてね。僕からすれば、何故君たちが一斉に襲い掛かって、『黒』の側を殲滅しないのか、理解できないといったところか。ルーラーの切り札たる令呪は君には通じないし、アーチャーとルーラーはともかくとして、僕は君たちの手に掛ければ簡単に討ち滅ぼされるだろう。となれば、何か……こちらに提示したいものがあるんじゃないか、と思ったんだが」

聞き逃せない言葉に、ルーラーと『黒』のアーチャーが身構えた。

「キャスター……!?」

だが、仮面をつけて全身を青い装束で覆う『黒』のキャスターは微動だにしない。ただ、シロウの方向へ真っ直ぐ顔を向けている。

「——そうですね、アヴィケブロン。私としては、貴方に降伏を提示したい」

シロウはさらにと、『黒』のキャスターの真名を告げた。だが、それは最早驚くに当たらない。ルーラーとしての特権、聖杯戦争に参加したサーヴァントへの令呪はないものの、もう一つの『真名看破』がある以上、彼はこの場集った全サーヴァントの真名を既に識っている。

「だが、その場合僕は殺されなくとも聖杯は起動しないんじゃないか？ 討ち滅ぼすべきサーヴァントの数は足りるのか？」

「問題ありませんよ。私はこの大聖杯を、誰よりも理解しています。心配せずとも、私の望みと貴方の望みは、決して重なり合うことはなく達成されるはずです。もつとも、貴方の望みが私の推測通りならば——ですが」

「条件が一つある」

「どうぞ、出来るだけ配慮しましょう」

「君をマスターにする分には問題ないが、私の元マスターとなるロシエ・フレイン・ユグドミレニアは僕に一任してくれないだろうか」

「つまり？」

「彼に危害を加えることは止める、ということだ」

なるほど、とシロウは頷いた。^赤の^{アサシン}が^愉し^{そう}に笑う。

「ほうほう、なかなか天晴れなサーヴァントだな。己の身と引き換えに、主の安全を保障させるとは——」

「キャスター、君はまさか——」

^黒の^{アーチャー}の^声は凍るように冷たい。^赤の^{ライダー}は知っている。これは彼が激怒している証拠だ。その呼び掛けを黙殺し、キャスターはシロウの前へと進み出た。

「では、どうぞ手を」

「手袋越しで失礼」

「黒」のキャスターは遠うことなく、己が右腕を差し出した。その手を握り、シロウは再契約のために詠唱を開始する。

「止める、キャスター……」

「黒」のアーチャーが制止しようと矢を射った。それを「赤」のランサーが迎え撃つ。取り出した神槍で、矢を弾き飛ばした。屋根に突き刺さった矢は、轟音と共に爆発した。

「赤」のランサーは「黒」のアーチャーを見据えて言った。

「聖杯戦争において、マスターは魔力供給と令呪を以て英霊を使役する。だが、我々にもマスターを選ぶ権利はある。彼のマスターが如何なる存在であつたかは知らないが……その選択は尊重されて然るべきだろう、大賢者よ」

「赤」のアサシンは顔を顰めて愚痴った。

「庭園に傷をつけてくれるな、黒」のアーチャー。お前の力では破壊すること能わず、徒労に終わるだけだ」

「黒」のアーチャーは溜息をついた。やはり止められない。思えば、その兆候は確かにあった。「黒」のキャスターは己の役割——ゴレムの製造には忠実に携わっていた。だが逆に言えば、それ以外のことについては何ら関心を払っていなかった。

戦争の行く末も、聖杯を手に入れるかどうか。……だから、この展開も予想しうることだったのかもしれない。

「貴方を我がマスターとして認めよう、天草四郎時貞殿」

ロシェ・フレイン・ユグドミレニアとの契約をあっさりと破棄し、黒のキャスターはシロウ・コトミネ——天草四郎時貞のサーヴァントとなった。

「早速ですが、命令です。包圍して下さい」

「了解した、我が主」

黒のキャスターはあくまで泰然とした態度のまま、右手の指を微かに動かす。

途端、礼拝堂の扉を破壊って数体のゴーレムが乱入した。黒のキャスターがその力を結集させた通りすぐりのゴーレムだ。青銅と鉄、土塊で造られたそれはまるで生物のような躍動感に溢れている。

そして、ゴーレムたちは実に機敏な動きで二人の上方と左右、背後を包圍した。前方に赤のサーヴァントたちが揃っている以上、黒のアーチャーとルーラーは今や鳥籠の中も同然だった。

「正直に申し上げますと、卑怯極まりないので些か不本意ですが——ルーラー、貴女は邪魔です。黒のアーチャー諸共、に滅んで戴きます」

シロウの冷徹な宣告と共に、黒のキャスターが指を鳴らし、ゴーレムたちが猛然と襲い掛かった。

「——ッリ」

黒のアーチャーが弓に矢を番え、ルーラーが聖旗でゴーレムを迎え撃つ。共にゴーレム程度に遅れは取らないが、黒のキャスターが直で操作するゴーレムは一級のサーヴァントと比肩し得るほど、機敏で精密な動きを見せていた。

「アーチャー、ランサー、ライダー。よければ、貴方たちも戦って欲しいのですが——二人は英霊としての誇りが許しませんか。ランサー、貴方はどうです？」

「……卑怯者の誇りなどに興味はない。ここで討つべきならば、討つだけだ。だが神父、その願いは叶うまい」

赤のランサーは槍を構えたものの、その視線は黒のアーチャーやルーラーには向いていない。先ほどゴーレムが打ち壊した礼拝堂の扉を注視している。

ゴーレムの喉を突き、ルーラーが素早く体勢を入れ替える。

「アーチャー——」

黒のアーチャーに呼び掛ける。当然のように彼も頷き、素早く後方へと跳躍。そこへ赤のアサシンが右手を振り上げた。

「——」

詠唱は一節にも満たない短いものながら、ここは『虚栄の空中庭園』の内部だ。構築された魔術は、これ全て大魔術。光の刃は、当然ルーラーではなく、黒のアーチャーに集中する。

そこへ、赤の稲妻が飛び込んだ。

「何?」

突然の伏兵に、ランサーを除いた赤のサーヴァントたちは驚きを隠せない。疾風の如く飛び込んだそれは、赤雷を撒き散らしながら手にした大剣でゴーレム二体を、ただの一振りで両断する――！

「……来たか」

赤のランサーが、素早く踏み込んで槍での刺突を放った。だがセイバーはその刺突を巧みな剣技で捌くと、自分に反応したゴーレムにより登って頭蓋にあたる部分に大剣を打ち込んだ。

「黒のアーチャー。先ほどの矢はその為か……!」

赤のアサシンが穴を穿たれた屋根を睨む。黒のアーチャーが先ほど黒のキヤスター目掛けて放った矢は、何も彼らの契約を防ごうとしたのではない。

あの矢は、派手な音と魔力を以てこちらの居場所を知らしめるためのもの。迷うことなく、彼女が辿り着くために必要だったのだ。

「……なるほど」

シロウは納得して、薄い笑いを浮かべて、闖入者を出迎える。

最初に出会ったときに覆われていた兜は、どうに外されている。煌めく金髪、野性味溢れる瞳、そして――不敵な笑い。

「赤のセイバーは貴女でしたか。栄光に輝くアーサー王伝説を終わらせる者――叛逆の騎士、モードレッド」

「ハッ！ 気安くオレの名を呼ぶんじゃないよ！」

呵々大笑しながら、赤のセイバーは大剣を手に思う存分暴れ回る。赤のアサシンが舌打ちして叫んだ。

「セイバー！ 貴様、裏切る気か!?」

「莫迦か手前エ！ 裏切ったのはそっちだ！ お前たちは奸計を弄してオレのマスターを殺そうとしただろうが！ その時点で、問答無用にオレの敵だ！」

朝氣を纏った言葉と共に、弧を描いた斬撃が礼拝堂に疾走した。まるで境界線を引くような一撃は、シロウとルーラーを完全に分かつものだった。床が破壊され、木屑と石片が

周囲に舞う。

次いで、礼拝堂の遙か遠くから何かが投擲された。反射的に生き残りのゴーレムが拳を振るって迎撃したが、どうやら仕掛けが施してあったらしく、たちまち白煙が噴出して礼拝堂に充満した。

「ええい、鬱陶しい……」

赤のアサシンが微屈する。

「アーチャー、セイバー、撤退します！ 急いで、早く！」

二騎は無言のまま同意、黒のアーチャーと赤のセイバーは破壊された礼拝堂から脱兎の如く飛び出した。

「シロウ、追うぞ」

「いや。ここは僕に任せて欲しい」

黒のキャスターが進み出た。戸惑う彼らを他所に、彼は一体のゴーレムに自身を担ぎ上げさせると、あっという間に礼拝堂から姿を消した。

「では、後は彼に任せますか」

「大丈夫かよ……アイツ、キャスターだぞ？」

「いくら何でもルーラーとセイバー、そしてアーチャーまで向こうに居るとなっては返り討ちが妥当だろうて」

「……証明したいのでしょうかね」

シロウの呟きに、アサシンが首をひねる。

「何を証明すると言うのだ？ 我らの陣営に加わったことで、一つ力を見せつけようとも？」

「違いますよ、アサシン。……彼はただ、己の造るゴーレムが至高の存在であると証明したいだけです。そこに我輩は存在しない。あるのは、ただただ純粹な信仰心です」

職人とは決定的に違う。職人は創造するモノに己を注ぎ込む。それは魂であり、信念であり、誇りであり、技である。

「黒」のキャスター、アヴィケブロンは異なるものを捧げる。それは信仰心、人が信じて仰ぎ見るもの。故に、魂も信念もない。彼はひたすら朴訥にゴーレムを造り続けるだけだ。

「黒」のキャスターが、「赤」の陣営に加わるのはただただ「最上」を求めるが故である。

そして、そんな彼が産み出そうとしている宝具こそが——ある意味で反則と言っても差し支えない対軍宝具『王冠・睿智の光』だ。

乗用したゴーレムを加速させる。自らの足で追いかければ、百年経っても追いつくことは叶わないが、これなら疲労も焦りも一切なく、追跡を続けることができる。

さて、まずは混乱しているであろう元マスターへの連絡だ。念話を飛ばし、ロシエに繋

ぐ。マスターとサーヴァントとしての関係性は切れたものの、魔道具を用いることで、遠距離の会話は容易い。

「ロシエ。聞こえるかい、ロシエ？」

「せ——先生!? 良かった、良かった！ 生きてたなんて——」

念話越しでもありありと分かるほどにロシエは動揺し、涙ぐんでいた。それもそうだろう、彼にしてみれば突然サーヴァントとの契約が切られたのだ。動揺するのも無理はない。

「一体何が——」

「詳しい事情は話れないが、安心して欲しい。今でも君は僕にとって大切な存在だ。これからの作戦だが、君に重要な任務を一つ任せたい。」

「は、はい先生！ 何でしょうか。」

「一体のゴーレムに軀を預け、空中庭園を滑走しながら、『黒』のキャスターは元マスターであるロシエに念話で呼び掛ける。」

「すまないが僕の工房から『炉心』を運んで欲しい。どうとう宝具を起動させるときが来たようだ。」

「……分かりました！」

慌てたような声と共に、ロシエは念話を絶った。さて、『黒』のアーチャーが城塞に着すれば、ロシエはキャスターが裏切ったことを知ってしまうかもしれない。

——恐らく、それでもロシエは自分の下へと来るだろう。

キャスターはそう確信している。仮令裏切ったことを信じたとしても、自分に憧憬を抱いた少年は、必ずや馳せ参じるだろう。

そう思う自分にキャスターは苦笑する。人嫌い、子供嫌いである自分が最後の最後に、誰かを信頼しなければならないとは。

人生とは皮肉と裏切りの連続であり、夢の実現には大きな障害が常に立ちはだかるものである——だが、アヴィケブロンは悲観しつつも前に進むことを止めはしない。

サーヴァントとして召喚されたことによって、現在の彼は限りなく夢に近い領域にいるのだ。全てのカバリストが夢見、ゴーレムを造り続けた者たちが望んだ場所。

「黒」のキャスターにとって、敵も味方も、そして己自身すらも、最早顧みるに当たらない存在だ。

§§§§

「赤」のセイバーは、いつのまにか二人の前から姿を消していた。ルーラーと「黒」の

アーチャーは、共に城塞に向けてひた走る。

「黒のアーチャー。既に黒のランサーと、マスターであるダーニックは滅びました。現時点で黒と赤の対立構造は完全に崩壊したと考えていいでしょう。黒の側に肩入れする訳ではありませんが、協力を申し出たいと思います」

疾走するルーラーの言葉に、黒のアーチャーも同意した。彼女の言う通り、最早状況はどちらの陣営が聖杯を獲るか、という状況を通り越している。

「問題ありません。ダーニックがああいう形で滅んだ以上、次の指導者は私のマスターになります。彼女も、現状を理解すれば承知するでしょう。とはいえ、貴女を加えたとしても我々の不利は明らかですわね」

「今は何としてでも赤の陣営……いえ、天草四郎時貞の行動を止めなくてはならない」聖杯が憑依という形を取ってでも、強引に私を召喚しなければならなかったのは、その為だろう。

彼はただ、我欲を満たすために大聖杯を強奪した訳ではない。あの聖杯を使い、もっと恐ろしいことを企んでいる。

。知れたこと。全人類の救済だよ、ジャンヌ・ダルク。

少年の全く迷いのない眼差し。

世迷い言、であればまだ良かった。夢を見るように陶然とした状態で言葉を吐いてくれれば、まだ良かったのだ。

だが、あれは純粹にただ真実を吐露したとは思えない。計画があり、それを練り上げていて、幾度も幾度も考えに考えて……辿り着いた末の言葉。

聖杯戦争によって英霊たちの魂を集め、起動させるという役割を持つ冬木の大聖杯——それを、恐らくは創造したアインツベルン・遠坂・マキリの御三家にすら想像もつかない手段で成し遂げようとしている。

「全人類の救済……」

「ルーラー、彼——シロウという少年の言葉は、真実だと思っていますか？」

「ええ、思っています。その手段として必要なのが、あの聖杯ということも分かります。ただ、結果どうなるかだけは分かりません」

全人類の救済とは、言葉だけの遊びだ。どんな聖人も、どんな王も、どんな国家も、かつてそれを成し得たことはない。幸福と不幸は定量で天秤に乗せられている。誰かが幸福を獲得すれば、その分だけ誰かが不幸になる。

無論、ミニマムな状況下では誰もが幸福になるということもあるかもしれない。物語の中のように小さな世界、あるいはただ一つの家族、一つの集団、一つの国家ならば。

だが、その世界が巨大化すればするほどに——確実に不幸な存在が増殖する。

「それでも、彼は断言しました。全人類を救済する、と。恐らく、我々には想像もつかない方法で」

「……問題はそれが真の救済であるか、です」

無論、その答えは決まっている。……そんな救済、あるはずがない。否、あつてはいない。ただ一人の思考、ただ一人の行動が全人類を救済してはならないのだ。

「^グ赤^クのセイバーはどうします？」

「あそこで私と貴方^{あなた}が討たれれば完全にシロウの思い通りになっていた。恐らくはそれを嫌うの行動だと思いますが——果たして、私たちと手を組むかどうか」

あのセイバーは、かなりの自信家でしたからね……と、ルーラーは独りごちる。それもそうだろう。アーサー王の伝説を終わらせた叛逆の騎士モードレッド。

「他のサーヴァントたちは、向こうについたと考えるべきでしょうか」

「……分かりません。^グ赤^クのライダーも、アーチャーも誇り高き英雄。ですが、今のマスターはあのシロウ。令呪がある以上、彼らとてどうにもならないでしょう」

^グ赤^クのランサー、インドの大英雄カルナ。^グ赤^クのアーチャー、ギリシャ神話における最高の女狩人アタランテ。そして^グ赤^クのライダー、歴史にその名を刻んだ英雄アキレウス。^グ赤^クのアサシン、アッシリアの女帝セミラミス。

そしてもう一人のルーラー、奇跡の子と謳われた天草四郎時貞。あのとき姿を見せなかった。赤のキャスターもまた、比類無き力を持っていることは間違いないだろう。

これに加えて、黒のキャスターが向こう側についた。伝説のカバリスト、世界最高のゴーレム使いアヴィケブロン。

さらに大聖杯すらも奪われた。圧倒的窮地であり、焦燥は時を追うごとに高まっていく。だが、それでもやるべきことの順番を違えてはならない。まずは、現状を、黒の側にも認識して貰うことが先決だった。

§§§

不味い、不味い、あれは絶対に不味い。獅子劫界離は見た目とは裏腹の機敏かつ迅速な走りで、赤のセイバー共々に空中庭園からの脱出を試みていた。

「ああクソ。やつぱり上手くいかねえよなあ……」

「うん？ マスター、何を嘆く必要があるー」

「嘆くに決まってるんだろ！ くそ、サーヴァントがマスターとか反則もいいところだ。お

まけにルーラー？ 六十年前の第三次聖杯戦争の生き残り？ ああ、最悪だ！」

併走する『赤』のセイバーが声高らかに笑う。

「ハハハハハ。分かりやすくなって良かったじゃねえか、とりあえず全員敵って認識でいいんだよな！」

「良くないーひとまず、『黒』の連中と手を組む必要はあるな。それから、あの旗を持った女騎士、どうやらあれが本当のルーラーらしいが……」

こちらが敵ではない、という認識は当然向こうも持っているだろう。その為に、『赤』のセイバーをあの混沌とした状況に乱入させたのだから。

床が揺れ動く。どうやら空中庭園が上昇を開始したらしい。

「よし、マスター。脱出するぞ！」

「おい、ちょっと待——」

返事待たずにセイバーは獅子劫の軀を担ぎ上げた。制止する暇も与えず、『赤』のセイバーは上昇する空中庭園から、『魔力放出』による跳躍で一気に脱出した。

それは、パラシュートでの下降のような生易しいものではない。どちらかというと、カタパルトによる射出に近いものがあった。音速で飛行する戦闘機の外側にしがみついているようなものだ。

「お、前、これ、威茶、苦茶、だ——!!」

「ハハハハハハ　なあに、大丈夫だ。オレを信じろ！」

「現在進行形で、お前の信用度が下落していつてるんだよ！」

キーン、と耳鳴りが響く。咄嗟の判断で、獅子劫は肉体を一時的に頑強にするための丸薬を飲み込み、パニックを抑え込んだ。もつとも、気休め程度でしかない。セイバーが調整を間違えると、凄惨な事故になることは確実だ。

亜音速から時速二百キロ前後に速度を落としての着陸——その際の衝撃は、セイバーが大地を滑ることで大部分を殺したが、それでもヘビー級ボクサーにブン殴られたように獅子劫の腹部に響いた。

たん、たん、たん、とステップするようにセイバーが地面を踏んでいく。やがて速度が落ちていき、セイバーと彼女が抱えた獅子劫は無事に着陸した。少なくとも、肉体的には無事であった。精神的には滅多打ちだったが。

——死ぬかと思った。

端的な感想を述べれば、そのようなものだ。次に空中庭園に侵入する際は、必ず人が空を飛ぶための道具を持って行こう、と獅子劫は心に誓った。

「赤」のパーサーカー、スバルタクスの手によってかなりの樹木がなぎ倒されたイデア

ル森林。その最北端に広がる湖が約束の場所だった。

ロシエ・フレイン・ユグドミレニアは走行用のゴーレムを全速力で走らせながら、その身を歡喜に震わせていた。手にしているのは、円筒状の巨大な鍵。これが『妒心』であり、遂に使う刻が来たという訳だ。

Aランク対軍宝具、至高のゴーレム——『ゴーレム・グランドマウス王冠・睿智の光』。今まで、オニスター先生が片手間に製造したゴーレムですら、自分たちの想像を凌駕する技と術式、素材が使用されていたのだ。

その先生が、「絶対」とまで言い切るゴーレム。ロシエは一介の魔術師でありながら、その拝謁を賜るという栄光を受けるのだ。

これを歡喜と言わずして、何と言おうか。少年は無邪気に、命じられた通りにただただ走る。既に、少年は聖杯戦争など眼中にない。自身のサーヴァントが宝具を起動させれば、その時点で彼にとっては勝利だ。

「——先生ッ!!」

清らかな水を湛える湖の前で、黒のキャスターはいつもと変わらぬ態度で軽く頷くと、駆け寄ってきたロシエを出迎える。

「これが『妒心』です。問題ない………ですよわっ」

「大変結構」

「良かった。でも、先生。この『炬心』はかなり前に造ったものですよね？ 今日まで動しなかったのには、理由があるんですか？」

ロシエの問い掛けを、黒のキャスターは黙殺した。渡された『炬心』を、無造作に大地に突き刺し、しやがみ込むと湖にその手を浸した。

「……先生？」

黒のキャスターは人差し指を口元に当てて「静かに」というジェスチャーをした。ロシエは慌てて両手で口を押さえる。

そうして、しんと静まり返る湖の前で、黒のキャスターは明々と詠唱を開始した。

地に生まれ、風を呑み、水を充たす。

それは、土塊に生命を吹き込むための天への祝詞である。

火を振るえば、病は去れり。不仁は己が頭蓋を砕き、義は己が血を清浄へと導かん。

この土は、この樹木は、この軀は、これ全て主への捧げ物。名声も力も何も求めない男のみの創り出せる神秘の極地。

雲峰の如き巨擘は、巖の如く堅牢で。万民を守護し、万民を統治し、万民を支配する貌を持つ。

それは最早宝具という領域に留まらぬ奇跡の結晶。

汝は土塊にして土塊にあらず。汝は人間にして人間にあらず。汝は樂園に佇む者、樂園を統治する者、樂園に導く者。汝は我らが夢、我らが希望、我らが愛。

受難の民族、その信仰を具現化するもの。

主の奇跡の再現——世界を塗り潰す役割を背負った人形である。

聖霊を抱く汝の名は——『最初の人間』なり。

穏やかな湖にこぼりと、泡が浮かび上がった。黒のキャスターとロシエは、兵士としてのゴーレムを鑄造する合同に、密かにこれを造り続けていた。

鑄造の当初はただ、大型のゴーレムだとロシエは思った。体長はおおよそ十五メートル。

図抜けて高いが、驚異的という程ではない。ロシエの腕でも、この程度の大きさならば五年の月日を費やせば鑄造可能だ。無論、彼が再現可能なのは大きさだけ。質という点では比較にならないが。

それでも——やはり珍しくはない。直接目にしたことはないが、とある魔女が保有するというゴーレムはこれに比肩しうるか上回る巨体だと噂に聞いている。

恐らく、神秘の古きを考慮すればあちらのゴーレムの方が上回るのではないが、とロシエは推察する。使用した材料は、確かに高額であったがどれもこれもありきたりだった。

強いて言うのであれば、どれも生き続けている自然の材料が多かった、くらいか。

なのに、ロシエはこのゴーレムに驚嘆を禁じ得ない。

このゴーレムはそのコンセプトからそもそも異常なのだ。いや、彼（オオスガ）からすればまさしくこれこそが正常な出発点なのだが……。

「これが、もつとも原典に忠実なゴーレム……」

そも、ゴーレムとは何か。何らかの魔術的手段によって構築された人造の生命体というのが通常の認識であり、それは半分正しく、半分誤っている。

ゴーレムとは「胎児」あるいは「形作られざるもの」を意味している。それは即ち、主が人間を作った際の秘術だ。

土を捏ねて外見を造り、息を吹き込むことで生命と成す。だが、数多の魔術師はここで

立ち止まる。それもそうだろう、ここより先の領域はカバリストにとつての悲願。生平可な覚悟で立ち入って良い場所ではない。加えて、ゴーレムは領域に踏み込めば踏み込むほど、魔術師たちが望むゴーレムとはまるで異なる存在に成り果てる。

至高のゴーレムとは即ち、**アダムの再臨**。

受難の時代を堪え忍んだ民たちを楽園に導くべき王であり、守護者である。

湖から、巨大な腕が伸びた。原材料は石と土と木、全てが相当の歴史を経たものであり、城壁や木材として活用されることのなかった自然物だ。ダーニックはこれを集めるために、資産の三割を費やした。

やがて古城の如き風格を持つ上半身が完全に姿を現した。そこで、彼の動作は停止する。そう、彼が動けるのはここまでだ。この湖に身を浸していない限り、このゴーレムは動くこともできない。……今までは。

「それでは、『炬心』を装着します。マスター、準備はいいですね？」

「はい！」

ジークは半壊した城塞を見やり、暗澹とした気分になる。瓦礫から垣間見える細い腕は、ホムンクルスのようだ——それが、ぴくりと動いた気がして慌てて駆け寄る。

「おい！」

その声に、また手が反応した。何かを求めるように、手の平が上に向けられる。助けを求められている。そう確信したジークは、ホムンクルスに覆い被さる瓦礫に手を当てた。彼の使う魔術は、あくまで対象の破壊を目的とする。従って、下にいる誰かにこれ以上の衝撃が加わる可能性はない。

魔術回路が加速し、瓦礫の組成を完全に理解したジークは速やかに瓦礫を打ち砕いた。魔術はこれ以上ないくらいに上手くいった。ホムンクルスを覆っていた重量物は残らず塵と化した。……だが、遅かった。

「あ——」

全力で走ってきたら助けられたか、そんな訳はない。

彼女が瓦礫に押し潰される前に庇えば助けられたか、馬鹿馬鹿しい仮定だ。

真に彼女を助けたければ、彼女自身が選択せねばならなかった。戦わないという選択を。

「助かりました、ありがとうございます。戦闘は終了しましたか？」

恐らく瓦礫が頭に直撃した際に振力の大半を奪われたのか。白濁しかかった目で、彼女はあらゆる方向へと手を差し伸べる。

「瓦礫は砕いた。だが不幸にも廊下にあった燭台が彼女の腹部を刺し貫いたらしい。さらに、赤のバーサーカーの斬撃、その余波が直撃したらしく、両足は消失していた。

痛覚は元々機能していないか、意図的に遮断しているのだろう。彼女は淡々と、ジークに己の使命が終わったのかどうかを尋ね続ける。

「……ああ、終わったよ」

ジークの言葉に、彼女はほっと安堵の息をついた。その動作は、あまりに人間らしい。

「——では、掃除に戻らなくては。ああ、でも。この様では、床が汚れてしまう。何て無様。早く、新しい服に着替えて、戦斧の代わりに箒を持って、でもその前に、血を止めなくては」

ジークは淡々と、感情を押し殺しながら——調えることもなく、少女の手を握り締めた。

「いや、いい。掃除は俺がやっておこう、こんなことの後だ。君はゆっくり眠れ」

「そう、ですか？」

少女の声には、安堵が滲み出ている。

「——正直、少し疲れているのもまた事実です。貴方をお願いできるなら、それに越したことはない。申し訳ありませんが、しばしの間休息します。五時間後に起こして下さい」

「……もう少し眠っておけ」

「ホムンクルスの睡眠は、五時間あれば充分なはず。しかし、どうやら私の軀は相当に疲労したらしく、こんな、微睡みの感覚は、初めて、で——」

眠るように、臉を閉じる。ジークの手を握り返すその力が、次第に弱まっていく。その間、ジークは何かできることはないか、と必死になって考えた。

だが、そんなことがあるはずもない。やがて、その力が完全に失われた。ジークが少し握りを緩めただけで、彼女の手は滑り落ちた。

ジークが立ち上がり、背を向ける。最早、ここに居ても仕方がない。己にはまだ使命がある。それを果たすことこそが、きつと彼女の鎖魂に——。

「わざわざ私たちのために戻ってくるなんて。悲しい律儀さですね。でも、ありがとう。」

貴方のお陰で、私は救われる」

愕然として振り向いた。もう一度横たえて彼女の手を握り、脈を測る。だが、今度という今度は完全に、少女の命は途絶えていた。

どうやら途中で、あるいは最初からかもしれないが……自分の、下手な三文芝居に気付いたらしい。少女を慰め、幻想のままに連れて行くことすらできなかった。

……我ながら、呆れ返る無能さだ。

それでも、最後の最後に、彼女は礼を告げた。その律儀さを悲しみながらも、救われたと言ってくれたのだ。

胸が潰れるほどの悲しみも、怒りも堪えて。ただ、救うことを頭に置く。ホムンクルスたちを解放するために必要なものは力ではない。力は抑止効果をもたらすに過ぎず、真に必要なのは言葉だけだ。

戦争の状況は混沌としていて、サーヴァントたちは皆出払っている。少なくとも、この城塞に居たらアサシンでない限りは知覚できるはずだ。

破壊された壁から、城塞内部へと侵入する。廊下の照明はわざわざ魔術を付与させた蠟燭^{ろうそく}という凝ったものだったが、例の一撃でほとんどが消えてしまったらしい。

暗い廊下を、ジークはひたすらに歩き続ける。仲間たち——ホムンクルスの気配はほとんど無い。胸が締め付けられる。先ほど看取った彼女が、まさか最後の一人なのだろうか。

「誰か——」

静寂。……ユグドミレニアの魔術師たちがまだ此処^{ここ}に居ることは分かっている、その沈黙がたまらなく恐ろしくなって、もう一度呼び掛ける。

「誰か、いないのか！」

……微かな音に耳を澄ます。魔術師かもしれないが、今の自分はマスターであり対等の

権限を持つ。彼らは認めたくないかもしれないが、力関係という点で対等であることは認めざるを得まい。更に、己には「黒」のセイバーとしての力もある。

恐れず、歩を進める。それでも、胸の内にある言いような不快感。何故だろう、と己に問い掛けてからすぐに気付いた。

「……ここは、俺の出発点だ」

廊下を歩いている内に、思い出した。そう、この廊下を自分は逆方向に歩いていた。何も身につけぬまま、とぼとぼと——怯えながら、前へ前へと進み続けた。

あの恐ろしさは未だこの胸に焼きついている。命以外には何もなかった癖に、その命すら奪われることを惜しんで、ただただ進んだ。

今は……今は、大丈夫だ。不快感はある、だがそれは過去の辛い思い出を反芻するからであって、恐怖がある訳ではない。

「音は——あの部屋からか」

かつての自分が生まれた場所、魔力供給槽がある地下室だ。魔力を供給するために製造され、本来ならばそのまま死に行くはずだった自分は、偶然にも意思を獲得した。

あるいは運命だったのか。

どこか遠く離れた想いを抱きながら、ジークは地下室の扉を開いた。

「——何だ、侵入者はお前か」

ホムンクルスが、自分に向けて戦斧を突きつけていた。その声に微かな既視感を抱く。

「……君は」

確か一番最初に話しかけ、一番最初に戦場から逃げたホムンクルスだ。

「お前の助言を受けて、戦場から撤退した。……幸運だった、と言うしかないな。最後の撃は、私たちではもうどうしようもなかった」

構えていた戦斧を戻す。周囲の供給槽には、まだホムンクルスたちがゆらゆらと浮かんでいる。薄ぼんやりと開いた目には、一欠片の生気も見受けられない。心臓は脈打っている、だが思考回路は存在しない。生きているのではなく、存在しているだけだ。……だが、彼らもかつてのジークと同じだ。助けを求めている——切っ掛けがあれば、必ず蘇る。

「早く彼らを——」

解放してやってくれ、と言おうとしたジークをそのホムンクルスは制止した。

「落ち着け。今、道具を用意させている」

すぐに二人のホムンクルスがカーテンを利用して作ったと思しき、即席の拒架を幾つか担いで来た。加えて軀を拭くためのシートと衣服。

「具体的な人数の指示がなかったので、できるだけ用意しました」

やってきたホムンクルスの少女はここまで全力疾走したらしく、微かに息を切らせていた。そしてジークを見ると、彼女は目を見開き、眉を吊り上げて睨み付けた——何やら、

怒っている。少女は指を突きつけ、ジークに言った。

「生きていたなら、ちゃんとそう言ってください。この馬鹿」

「ああ」「全くだ」

少女と共に来たホムンクルスの少年と、元からいた少女が揃って同意する。ジークは唐突な弾劾に呆気を取られたものの、しばしの思考を経てはたと思い至った。

「もしかして。俺が死んだことを知覚してしまったのか……全員？」

三人が頷く。苦い思いがジークの胸にこみ上げる。ユグドミレニアが鍛造したホムンクルスたちは、微弱ながらマスターとサーヴァントの因果線に似たもので繋がっている。大量生産故に獲得した能力の一つだろうか。個性に酷く乏しい分、念話などの意識をせずとも。死のような重要情報ならば、どこに居ても伝わってくる。

もっとも個性に乏しい彼らにとって、この能力は不要だった。自分以外の誰が死のうが、それは所詮統計上の数字に過ぎない。ただ一人、この城塞から脱出した唯一のホムンクルス——つまり、ジークを除いては。

彼らは個性に乏しく、感情も極めて鈍いレベルでしかない。それでも、逃げようとした彼を擁護するくらいの情は持ち合わせている。

無事に逃げたとき、彼らが心に秘めた喜びは如何ほどだったか。そして、戦場に舞い戻ってきて死んだときの失望は。

「……すまない」

「まあいい、手伝え。今から、彼らを解放する。サーヴァントが全て出払っている今こそ好機だ。我らの主が来た場合は——」

ホムンクルスたちが一斉にジークに視線を集中させる。分かっている、とジークは頷いた。恐らく、魔術師たちに対抗できるのは自分だけだ。

「分かった。いざというときは俺が盾になる。……皆を、解放しよう」

——取り掛かってしまえば、作業は意外に楽だった。供給槽を鞭^{むち}で叩き割って、魔力を吸引するための機器を取り外す。シートで軀を拭いてから、服を着せて担架に乗せる。焦らず落ち着いてやる、という点において最上の資質を持つホムンクルスたちは完璧に仕事をこなしていた。

「どこに運べばいい？」

「ひとまず、私たちの部屋に運べばいい。大部屋だから、全員を見て回りやすい。医療班の生き残りが居たはずだから診てやるように伝える。戦^{いくさ}闘用や雑用^{ざつよう}の我々^{われわれ}が診るよりはマシだろう」

「分かった。では、運ぶ」

二人のホムンクルスが担架を担ぎ上げた。

「あ……」

ばくばくと、空気を求めるように、患者が口を開いた。だが声にはならない。使用されなかった声帯はすっかり錆び付いている。ジークはそつと手を震ると、聞こえることを祈って囁いた。

「安心しろ。……もう大丈夫だ」

こくりと、担架に寝かされたホムンクルスが頷いた。強張^{こわば}っていた顔が、わずかに緩む。彼にしてみれば、訳も分からぬ内に供給槽から放り出されたのだ。どれほど「助けて」とメツセージを繰り返しても、混乱して当然だろう。

「……そうだな、悪いが運ぶ間は呼び掛けてやってくれ。少しは気も紛れるだろう」

二人が了解し、彼に呼び掛けながら運び出す。やがて生き残った戦闘用、城塞に待機していた雑用のホムンクルスたちが次々と顔を出し、手伝い始めた。

最初にこの地下室にいたホムンクルスが戦斧を掲げ、テキパキと指示を出していく。ジークは解放されたホムンクルスたちの手を握り、呼び掛けて安堵させる役割を負った。

「もう大丈夫だ」「安心しろ」「心配するな」

誰も声を発することができなかったが、顔を見れば何を訴えたのかは——その場で黙々と救出作業に従事するホムンクルスたちへ如実に伝わった。

供給槽から出てくるのは生存者ばかりではない、搾られるだけ搾られて打ち棄てられる

はずだった犠牲者たちも次々と現れた。恐らく、今回の大規模な戦争で『消費』されたの
だろう。

彼らには担架ではなく、軀を拭くはずのシートで全身を包むことにした。後で弔うこと
ができればいいのだが——と、ジークは目尻に浮かび上がりかけたものを堪えようとし
て、堪えられなかった。

他のホムンクルスたちは感情が薄い。だから、ある程度は堪えられる。けれどジークは
与えられた英雄の心臓と、一度死んで蘇ったことも影響しているのか、心を強く揺さぶる
ような悲しみに、涙腺が耐え切れなくなつたらしい。

（泣く）
戦斧を持ったホムンクルスが、とんとんと肩を指で突つついた。

「まあ、泣くのは構わないが今は堪えてくれ。……来るぞ、イレギュラー」

それで、ジークも気付いた。暴風の気配が、座下を突き進んでくる。サーヴァント……
ではない。恐らく魔術師だろう、敵対関係は明瞭だ。

「戦闘用以外は退がれ！」

先のホムンクルスの指示に従い、戦斧や鉄製の燭台を握り締めたホムンクルスたちが前
に踏み出し、代わりに雑用のホムンクルスたちは作業を続けながらも部屋奥へ移動した。

乱暴に扉が開かれる。臨戦態勢の魔術師たちと向かい合う。数は三人、かつて自分を殺
害したゴールドが先頭に、背後の二人はフィオレとカウレス、フォルゲニツジ姉弟だ。意外

に少ないな、とジークは考える。先ほど、赤のセイバーに殺されたセレンケはともかく、ダーニックとロシエが居ないとは。

だが、いずれにせよ難敵であることには違いない。気を引き締め、ゴールドを睨む。彼は小刻みに震えている。恐怖ではなく、怒りであることは表情からも明らかだ。

「……お前たち、何をしている」

「見て分かるだろう。……彼らを解放している」

ジークの淡々とした返答に、ゴールドが低く唸る。ちちが明かないと見て取ったのか、フイオレが車椅子でゴールドの前へ割り込んだ。……魔術の実力などを考慮すると、彼女がこの三人の指導者格だろうか。

「——何故そのようなことをするのです、ホムンクルス」

冷然とした声、魔術師然とする態度。そこに怒りのようなものはない。淡々と事実を鼻先に掛かっている。

ジークが答えた。

「魔力を搾り取られて死ぬのは、あまりに無惨だ」

「それが創造された彼らに与えられた役割では？」

「押しつけられた役割を、いつまでも果たす義理はない」

「……待て、待て、待て！」

ゴルドが再び割り込む。敵意も露わに、彼はジークに詰め寄った。

「お前は……お前は、ライダーが庇ったあのホムンクルスだな!? 何故だ、何故我々の邪魔をする! ホムンクルスを救うためだつて? ふざけるな! お前たちを鑄造したのはこの私だ! お前たちの役割は私が決める! お前は魔力供給! お前は雑用! お前は戦闘用! 決まっている! 決定したのだ!」

「そう怒鳴るな。……俺たちを鑄造したことには感謝している。だが、もう終わってもいいだろう。彼らがやるべきことなど、あまり残ってはいないはずだ」

ゴルドが怯み、再びフィオレが口を開く。

「それでは、これからどうするのでしょうか? 率直に言いましょう、貴方たち——特に戦闘用ホムンクルスは余命もわずか。何か成す時間など残されていない」

「……」

戦斧を持ったホムンクルスたちが頭垂れる。……当然、彼らもそのことは自覚しているだろう。雑用、魔力供給用のホムンクルスと異なり、彼らは戦闘用に調整された分、戦闘力——筋力や魔力などは極めて優れているが、短命という代償を背負うことになった。生を圧縮し、戦場を走り抜ける為だけの生物だ。

「……まあ、確かに。今更、こいつらに何をさせるって訳でもないだろうけどさ」

「カウレス」

弟の叫びを、姉が制止する。たとえ真実であつたとしても、認めるべきでないものがある。肩を揉めて、彼はそっぽを向いた。

「戦いはまだ終わつた訳ではありません。そのホムンクルス。貴方は先の戦いで、セイバーに変化していたはず。つまり、貴方は——」

「アンタたちの味方という訳じゃない。俺は彼らを救いに來た、それだけだ」

「違う！ お前が『黒』のセイバーだというなら、私がお前のマスターだ！」

ゴルドが詰め寄る。困惑するジークの服を纏んで、揺さぶつた。

「何故だ、セイバー！ 何故自決など！ それもたかだかホムンクルスのために！ 戦いが嫌だというなら、お前は最早英雄ではない！ 私のサーヴァントだつたことが、それほど不満だつたのか？ 答えろ、ジークフリート！」

押し立てるだけ押し立てると、ゴルドは力なく床に崩れ落ちた。

「……残念だが、俺がセイバーなのは外見だけだ。彼が何を考えて俺に心臓を託したのかも分からないし、彼に何の不満があつたのかも俺には分からない」

「私が悪かつたのか？ だが混乱していたのだ、混沌とした状況だつたのだ！ しかし、悪いなら悪いと言ってくれば、私だって譲歩した！ わた、私は——」

「何言ってるのさ。黙れって言っちゃったんでしょ？ だったら仕方ないじゃん」

ホームンクルスたちが身構える——サーヴァント、黒^{ブラック}のライダーだ。血族故か、三人の魔術師は、セレニケが殺されたことに気付いている。

「ライダー、貴方マスターは……」

「え？ 今のマスターなら、ジークだけど」

平然と爆弾を投げつけたライダーは、すたすたとジークの傍らへと歩み寄る。フィオレたちの顔が引き攀ったのも、無理はあるまい。何しろライダーの対魔力は宝具である書物によって最高値のAランク。現代の魔術師では、ライダーに傷一つつけられない。

「でさ、もういいんじゃないの？ 少なくともホームンクルスの皆は、戦う意思がない。それならそれで、仕方ないだろう」

「……そうはいきません」

フィオレが車椅子の手すりを強く握りながら、ライダーを冷えた目で睨んだ。彼女からすれば、ライダーは裏切り者の疑惑がある。セレニケを殺害したのは、それこそこのサーヴァントではないか——？

「だって城塞での攻防戦ならともかくさ。聖杯、奪われちゃったじゃない。こう、すばらんってさあ」

ライダーはそれを知ってか知らずか、肩を練めてそう応じる。

「……それは……」

魔術師たちは沈痛な面持ちで俯いた。そう、果たしてこの状況を逆転する一手はあるのか。ユグドミレニアの象徴たる聖杯が奪われ、しかも奪った側は空中を浮遊する要塞だ。

ミレニア要塞など比較にならぬ、神代の奇跡——間違いない、宝具。

「でさ、えーとゴルドさん？ だっけ。確か君がアイツに言ったんだよ。『口を聞くな』って。そりゃまあ、ジークフリートは真名バレたら致命的かもだけどさ。この場合、口を開くって言うのは、『君が素人で作戦が間違っていようが指示に従え』ってことだからね。そりゃあ、悪かろうが何も言えないさ！」

ううう、と低く呻いてゴルドは肩を落とした。要かった、とすれば最初の指示から全てが間違っていた。いや、マスターとサーヴァントの関係を通常の主と使い魔のそれと誤認していたことから、既にして間違っている。

「私は——私は、ジークフリートの弱点があまりに有名だったことを恐れすぎていた。あれほどの英雄を、どうしても信じ切れなかった。生前と同じく、背中を刺されることで無様を晒してしまうのではないか、と」

絞り出すような溜息は、彼がようやく己の失策を認めた瞬間だった。

「……ゴルドおじ様」

「もういい、フィオレ。ホムンクルスを解放してやろう。我々は敗北した。こちらの陣営

で残っているのはアーチャーとキャスターだけだ。アサシンはお前の言う通りであれば望み薄だ。狂った殺人鬼を当てにはできん」

ゴルドは疲れきった声でそう言った。フィオレはしばしの間、ジークを睨み——次に、彼の周囲で戦斧を握るホムンクルスを睨み、最後に部屋奥で弱々しく蹲るホムンクルスたちを見て、痛々しそうに目を逸らした。

「……分かりました。ホムンクルスは暇を与えます、好きになさい」

その言葉に、戦斧を握っていたホムンクルスたちがほっと安堵して、慌てて奥のホムンクルスたちの看護に向かった。

「で、姉さん。どうすんだ？ 魔術協会に降伏の使者でも出しておく？」

「まさか。ホムンクルスたちは解放しましたが、聖杯大戦そのものに敗北した訳ではありません」

フィオレは決然とした表情でまだ完全な敗北を喫した訳ではない、と訴える。

「キャスターの宝具は、Aランクの対軍宝具とダーニツクおじ様から聞いています。それならまだいくらかでも戦いようがあるでしょう」

「だけど、それだけじゃ——」

「お黙りなさいな」

人差し指を突きつけて、弟を黙らせたフィオレはジークに近寄ると、微笑みながら手を

差し出した。

「——ライダーのマスターにして、セイバーを擬似的に召喚できるホムンクルスよ。私たちに手を貸す気はありませんか？」

「ず、図々しい！ 図々しいと思うよそれ！」

ライダーの指摘に、フィオレは肩を竦めて飄々とした表情で抗議に応じる。

「あら、とんでもない。我々はホムンクルスたちを解放する、という譲歩を行いました。従って、その代償に何か求めるのは当然でしょう。それがライダーのマスターであり、尚且つセイバーに選依可能なホムンクルスとなれば尚更です」

「だ、駄目駄目駄目！ ジークはこれからのんびり和やかに暮らしていくんだ！ 誰の指図も受けず、誰の咎めも受けないで平和に——」

ボン、とライダーの肩にジークが手を置いた。

「……ライダー、俺は別に構わない。マスターとなった以上、聖杯を巡る争いに身を投じるのは覚悟の上だ」

「でも——」

「それに、少し気になっている。この聖杯大戦は、単純に『黒』と『赤』の対立だけ——という訳でもないようだ」

「へ？」

「ルーラーだ。彼女が召喚されたということ自体、何かおかしい事態が起きている可能性もあるらしい」

「この聖杯戦争が大戦——七騎と七騎の対立という、本来有り得ない規模だからでは？」
フィオレの指摘に、ジークは頷いた。

「ああ、確かに。だがルーラーはもう一つ、その聖杯戦争によって世界が崩壊しかねない事象が可能性として存在する場合にも、召喚されることがある。彼女から直接聞いた」

フィオレの言う通り、七騎と七騎の対立故に召喚されたならば話は簡単だ。聖杯大戦は「黒」と「赤」の二陣営で戦われ、それをルーラーが裁定する。

「ん？ ジーク、サーヴァントがこっちに來てるみたいだよ。数は二騎」

「……ああ、俺も何となくだが知覚できる」

「アーチャーとキャスターでしょうか」

フィオレはすぐに念話を飛ばした。サーヴァントが知覚できるほど接近していたならば、念話も可能なはずだ。推測通り、即座にアーチャーからの応答があった。

「無事ですか、アーチャー？」

「はい。ランサーはマスターであるダーニツク殿と共に討たれました」

『靈器盤』で知っていたとはいえ、改めて言葉で伝えられると、どうしようもない絶望感に、心を締め付けられる。

おしなべて

わずかに唇を噛み締める。リーダーであつた彼が死んだ以上、今は自分が指導者だ。己を奮い立たせなくてはならない。このたまらない心細さは、アーチャーが戻ってくれば解消できるだろう。

それから、キヤスターが寝返りました。

「アヴィケブロン。彼は赤の側へ寝返りました。今は宝具を解放しようとしています。そちらにキャストのマスター、ロシエ殿はいらっしゃいますか？」

「カウレス！ ロシエを捜してきなさい、すぐ！」

1
 2
 3
 4
 5
 6
 7
 8
 9
 10
 11
 12
 13
 14
 15
 16
 17
 18
 19
 20
 21
 22
 23
 24
 25
 26
 27
 28
 29
 30
 31
 32
 33
 34
 35
 36
 37
 38
 39
 40
 41
 42
 43
 44
 45
 46
 47
 48
 49
 50
 51
 52
 53
 54
 55
 56
 57
 58
 59
 60
 61
 62
 63
 64
 65
 66
 67
 68
 69
 70
 71
 72
 73
 74
 75
 76
 77
 78
 79
 80
 81
 82
 83
 84
 85
 86
 87
 88
 89
 90
 91
 92
 93
 94
 95
 96
 97
 98
 99
 100
 101
 102
 103
 104
 105
 106
 107
 108
 109
 110
 111
 112
 113
 114
 115
 116
 117
 118
 119
 120
 121
 122
 123
 124
 125
 126
 127
 128
 129
 130
 131
 132
 133
 134
 135
 136
 137
 138
 139
 140
 141
 142
 143
 144
 145
 146
 147
 148
 149
 150
 151
 152
 153
 154
 155
 156
 157
 158
 159
 160
 161
 162
 163
 164
 165
 166
 167
 168
 169
 170
 171
 172
 173
 174
 175
 176
 177
 178
 179
 180
 181
 182
 183
 184
 185
 186
 187
 188
 189
 190
 191
 192
 193
 194
 195
 196
 197
 198
 199
 200
 201
 202
 203
 204
 205
 206
 207
 208
 209
 210
 211
 212
 213
 214
 215
 216
 217
 218
 219
 220
 221
 222
 223
 224
 225
 226
 227
 228
 229
 230
 231
 232
 233
 234
 235
 236
 237
 238
 239
 240
 241
 242
 243
 244
 245
 246
 247
 248
 249
 250
 251
 252
 253
 254
 255
 256
 257
 258
 259
 260
 261
 262
 263
 264
 265
 266
 267
 268
 269
 270
 271
 272
 273
 274
 275
 276
 277
 278
 279
 280
 281
 282
 283
 284
 285
 286
 287
 288
 289
 290
 291
 292
 293
 294
 295
 296
 297
 298
 299
 300
 301
 302
 303
 304
 305
 306
 307
 308
 309
 310
 311
 312
 313
 314
 315
 316
 317
 318
 319
 320
 321
 322
 323
 324
 325
 326
 327
 328
 329
 330
 331
 332
 333
 334
 335
 336
 337
 338
 339
 340
 341
 342
 343
 344
 345
 346
 347
 348
 349
 350
 351
 352
 353
 354
 355
 356
 357
 358
 359
 360
 361
 362
 363
 364
 365
 366
 367
 368
 369
 370
 371
 372
 373
 374
 375
 376
 377
 378
 379
 380
 381
 382
 383
 384
 385
 386
 387
 388
 389
 390
 391
 392
 393
 394
 395
 396
 397
 398
 399
 400
 401
 402
 403
 404
 405
 406
 407
 408
 409
 410
 411
 412
 413
 414
 415
 416
 417
 418
 419
 420
 421
 422
 423
 424
 425
 426
 427
 428
 429
 430
 431
 432
 433
 434
 435
 436
 437
 438
 439
 440
 441
 442
 443
 444
 445
 446
 447
 448
 449
 450
 451
 452
 453
 454
 455
 456
 457
 458
 459
 460
 461
 462
 463
 464
 465
 466
 467
 468
 469
 470
 471
 472
 473
 474
 475
 476
 477
 478
 479
 480
 481
 482
 483
 484
 485
 486
 487
 488
 489
 490
 491
 492
 493
 494
 495
 496
 497
 498
 499
 500
 501
 502
 503
 504
 505
 506
 507
 508
 509
 510
 511
 512
 513
 514
 515
 516
 517
 518
 519
 520
 521
 522
 523
 524
 525

姉弟故の通じやすさが、カウレスは疑問符を浮かべることすらもなく、捜索を開始した

「ホームンクルス。暇を出して早々に申し訳ないですが、貴方たちにもお願いします。キヤスターのマスターであるロシエを捜索して下さい。城内をくまなく捜して！」

フィオレの尋常ならざる雰囲気が伝わったのが、ホムンクルスたちも頷き合うとカウレスの後に続いた。

「此処には居ません。搜索を開始していますか……」

マスター、貴女はダーニツタ殿からキャスターの対軍宝具『王冠・睿智の光』ゴレイム・サビツツの光の詳細を

知らされていますか？

「巨大なゴーレムであり、起動させるには『炉心』が必要だと聞いています。それ以外は何も――」

「『炉心』となるのは魔術師です」

フィオレは絶句した。アーチャーは淡々と言葉を紡ぐ。

「当初、キャスターはゴールド殿を『炉心』にする予定でした。これは、ダーニク殿から聞いているから確かです」

「ゴールドおじ様は……ここにいます」

「なら、キャスターが『炉心』として選ぶのは、自身のマスターであるロシエ殿でしょう」

「『炉心』となる魔術師は誰でもいい、という訳ではない。魔術回路の質、魔術刻印の質、

『炉心』となる術者の精神、単純な相性――恐らく、最適だったのはロシエ殿だった」

「だけど……本来ならば、ロシエはマスターだから不可能。それで、ゴールドおじ様を代理にしようとした？」

フィオレは知らないが、ジークと名乗るホムンクルスもまたその『炉心』候補の一人であった。キャスターの執心から察するに、恐らくロシエと同等かそれ以上の素質を見出していたのだろう。

「でも、ロシエはキャスターと――」

そう。マスターであるロシエはキャスターを心から尊敬し、崇拝していた。それもそうだろう。ゴーレム造りの天才と謳われた少年を超えて、頂点に立つ存在なのだ。ロシエはマスターでありながらキャスターを「先生」と呼び、心から慕っていた……。

けれど。

果たしてキャスターは、ロシエというマスターにどのような想いを抱いていたのか。

好感を抱いていた？ 尊敬されることを心地よいと思っていた？ 自分の子供のように、考えていた？

「假令その全てが肯定されたとしても。それは『黒』のキャスター、アヴィケブロンが抱いた生涯の夢を捨て去るほどのものだったのか——？

『もうすぐ城塞に』」

アーチャーとの会話が突然不可能になった。まるで、繋がっていたケーブルを両断されたような唐突さ。ライダーがはっと顔色を変えて叫ぶ。

「……もう一騎、サーヴフロントが来る！」

巨大な『何か』が地下室を殴りつけた。どん、と床が震える。天井は醜く凹み、ばらばらと石片が落ちてきた。太鼓の内部に居るようなものだ。床も、天井も、壁も、全てに轟

音が響き、震える。太鼓と違う点は、地下室は殴りつけられることなど、設計段階で考慮に入っていないため——叩かれれば、壊れていく。

「逃げて、全員！」

ライダーが咄嗟に、蹲っていた供給用のホムンクルスたちを纏めて担いだ。ジークたちもまた、残りのホムンクルスを担いでライダーに続く。

フィオレは車椅子を蹴って跳躍——同時に、背中の接続強化型魔術礼装（アドバンスドリンクドマジックレイド）を起動させた。展開した四本の腕を使い、異常な速度で地下から脱出する。

一階の廊下、その窓から飛び出し——そこで、見た。驚愕も露わに叫ぶ。

「まさか宝具……『王冠・睿智の光』……？」

一目で理解できる。あれは、あのゴーレムは自分がこれまで見てきた全てのゴーレムとは全くの別物だ。ロシェのゴーレムとも、黒のキャスターが製造していた兵士のゴーレムとも、格が違いすぎる……！

ロシエは、訳が分からなかった。

「せん、せい……？」

本当に分からない、何もかも理解らない——理解したくない。キャスターに首を振られた、無造作に投げ捨てられた、投げ捨てられた先はゴーレムの胸部、自分が触れた途端に溶けた石と土がロシエの動きを封じ込めた、ざしざしと着実に自分がゴーレムの内部に取り込まれていくのが分かる——理解らない！

「あの、せんせい、これ、これは——」

「……分からないのか、マスター。君が『妒心』だということくらい、この時点で理解してくれても良さそうだが」

自分が心から敬愛するキャスターは、何でもないことのように言う。……何でもないことのように言ったから、何でもないのだろう。

何でもない、何でもない、大したことのない、些末な——遑う！

「どうして、先生—— どうして、どうして先生？ ろ、ろ、ろ、『妒心』!? どうして、僕がそんなモノに——！」

「それは無論、君が『妒心』に相応しい魔術師だからだ。ダーニツクにはゴールドで我慢しておけ、と言われたがこの状況下ならば、君を使っても問題ない」

「何言ってるんですか!? だ、だって！ だって！ 僕！ マスターだ！ 貴方の、先生

のマスターだ！」

「その通り。本来、僕は君を『妬心』にできない。だが、先ほど『赤』のマスターから提案があつてね。だからほら、もう君のサーヴァントではないだろう？……僕はね、『黒』が勝とうが、『赤』が勝とうが、然程勝敗そのものに興味はないんだよ」

「な、あ……!?」

『赤』のマスターの提案——乗ることにした——裏切り——勝敗に興味などない——興味があるのは——ゴーレムだけ——。

「聖杯にも興味がない、と言えば嘘になるが。僕にとって最重要なのは、この宝具を起動させることだ。果たしてこれが、カバリストたちの悲願——原初の人間の模倣と成り得るか。僕はこの為に召喚に応じ、この為に生きてきた。幸いにも、『赤』の側がマスターを引き受けてくれたことだし、それなら君を『妬心』にした方がいい」

ロシエ・フレイン・ユグドミレニアは近代の魔術師の中でも、トップクラスにゴーレムと相性が良い魔術師だ。だからアヴィケブロンを召喚できたのだし、だから——『妬心』としても最適だ。

「い、い、嫌だ！ 嫌ですー そんな、やだ！ 嫌だ！ やめて！ やめてー やめて！ あ、く、あ……あああああ!?」

溶けている。ロシエ・フレイン・ユグドミレニアを構成する肉体が、どろどろと溶かさ

れている。ただ溶けているだけじゃなく、細胞レベルで融合している。薄汚い木や石が、どろどろと、溶けて、溶けて、溶けて――。

その恐怖にロシエは絶叫し、手足をばたつかせた。いや、ばたつかせようとしたのだ。だが、最早四肢の先の感覚がない。既に下半身及び両腕肘関節まで、完全にゴーレムの内部に取り込まれていた。

「どうして先生!? どうして、どうして!? 僕は先生を尊敬しています―― 崇拝しています――なのに、どうして……!」

何か黙々と作業していた。黒のキャスターが、突然振り向いた。

「――君は僕のことを、よく知っていたはずだと思ふが」

「え?」

「……アヴィケブロン。またの名をソロモン・イブン・ガビーロール。哲学者、詩人、カバリスト。観世的、人間嫌い、病弱で皮膚を患っている――こんなところか」

沈黙したまま、ロシエはその先を聞こうとする。何か重要な秘密を、彼は隠し持っているのだろうか――。

「期待しているところ悪いが、そうではない。私は孤独で、人間嫌いで、だからこそゴーレムを手慰みに創造した。最終的には、それによって主の模倣を目指すまでに至ったが、道半ばにして夢は潰えた」

何てありきたりな人生。

何てありきたりな存在。

夢を持った人間がいて、その夢が叶えられることはなかった。突き詰めていえば、ただそれだけの人生、だけだ――。

「やはり、他人にとればど妄想と思われようとも、これは叶えるべき願いだ。その為に犠牲を支払ってでもね」

「犠牲……」

「……僕を弾劾し、僕を非難するがいい。確かに君は僕を尊敬し、崇拝してくれていた。君が僕に向けてくれた感情は実に心地よかった。それは決して嘘ではない」

――けれど、考えてみるがいい。

「僕は人間嫌いであり、厭世的だ。人と目を合わすことすら億劫だからこの仮面を被り、皮膚が弱いから全身を覆い隠している。そんな僕が君を切り捨てる算段を、整えないと何故信じられたのだ――？」

「あ――」

それで、ロシニは悟った。自分と彼は、どうしようもなく理解し合えていなかった。サ

「ヴァントである彼が、自分を理解していないのは仕方ない。けれど、自分もまた彼の一切を理解していなかった。」

ロシェが知っていたのは、彼がゴーレムを鑄造する天才だということだけ。

それ以外のことはどうでも良いと、切り捨て続けていた。彼の人間嫌いの、彼の病も、彼のゴーレムに対する想いも、民族としての悲願も。何一つとして、見向きもしなかった。だから、これは極々当たり前の結末なのだ。相互理解できなかったマスターとサーヴァントが敗北するという、ただそれだけの――。

「い……嫌、だ……！！ 嫌だ！ 嫌だ、嫌だよう！ 助けて！ 助けて……助けて、誰か、誰か、誰かアアアアアッ！！」

誰でもいい！ 誰でもいいから、煩むから助けてくれ、ください！ 貴沢は言いません、反省した、ごめんなさい、許して下さい、でも誰に許しを貰えばいいのだろう？ 僕は何をしたんだろう。ああ、待って。お願い。お願いだから、待って下さい。怖いんです、怖い、やだ、ゴーレムなんかに為りたくない、為りたくない、僕はゴーレムを造りたいけど、ゴーレムになりたくないか――。

心は、不要だから白に塗り潰された。

ロシェが持つ魔術回路も、魔術刻印も、令呪も。全ては『ゴーレム・グッド・マムダット王冠・睿智の光』を動かすための資源となる。

最後にただ一つ。ロシエはふと——この状況で、皮肉な考えが頭を掠めた。

それはキャスター、アヴィケブロンが「最初の人間」を創るという皮肉について。

「先生は人間嫌いなのに。僕と同じで、煩わしい人の世界が厭でたまらないはずなのに。どうして、この人は——人間を創造ろうとしているのだらう、ヘンなの。」

ロシエは未だその命を現世に留めている。しかし、もう生きてはいない。彼の心は墜り潰された。彼の脳と肉体はゴーレムの内部に溶けた。

同時に、『妒心』を与えられたゴーレムの目に光が満ちる。湖から引き上げられた足が、大地を力強く踏み締める。美しい、どキャスターは感嘆した。

木と石と土。そして人体で創造した人工物にも拘わらず、自然の雄大さをそのまま取り込んだような風貌は、ただただ美しいと賞賛するに足るものだった。

そして、最初の『奇跡』が起きた。踏み締めた大地が巨人を讃えるように歌を唄い、草木を茂らせる。触れた樹木にはたちまち実が生い茂り、熟しては大地に落ちてまた木々を増やしていく。

それだけではない。

ユグドミレニアが結界で払っていたはずの鳥や獣がどこからともなく現れた。光に誘わ

れる虫のようにふらふらと巨人に引き寄せられ、躊躇いなく縋り付く。

血の一滴すら零さず分解——獣たちは純粹なエネルギーとなって巨人に吸収された。それは、彼らが望んで行つたことだ。知性無き獣たちは皆、彼に縋り付きたくて仕方ない。更に、大地を含めて周囲が活性化し始めた。空気には甘い蜜のような香りが仄かに漂い始め、ただ呼吸で肺に取り込むだけで圧倒的な幸福に満ちた。

「ああ——これが、樂園だ」

そう。数多のカバリストが追い求めた、至高のゴーレム——その副極形態。ただ存在するだけで、世界を樂園へと塗り替える力を持つ者。

即ち、自律式固有結界。それが、「王冠・睿智の光」の正体だ。

この巨人は存在し続ける限り世界を塗り替え続けるだろう。塗り替えられた後の世界の名は「樂園」。かつて神から与えられ、原初の人間たちが暮らしていた土地である。

「さあ——世界の救済を始めようじゃないか、僕のゴーレム。戦い、殺し、殲滅させ、世界の樂園を築こう。それで下らない戦いも終わる。下らない社会も終わる」

アヴィケブロンはゴーレムの肩に乗り、ミレニア城塞へ向けて進軍を開始。切り立った崖をあつさりに登りきって、半壊した城壁の上に立つと魔術師とサーヴァントたちを睥睨した。

そして『黒』のマスターとサーヴァントたちは、巨人と出会った。巨人の肩に乗るは、先ほどあつさりと『赤』の側についた『黒』のマスター——アヴィケブロンである。

「——ふむ。誰も死ななかったか」

「マスター……！」

フィオレの呼び掛けに、ゴーレムの肩に立つマスターは軽く首肯して手を振った。

「ライダー、それにセイバーに為った新参のサーヴァントか。元氣そうで何よりだ」

「ふざけんな、馬鹿野郎——マスター、いきなり何すんだ！」

「……裏切った、ということだろうな」

ゴルドの呟きに、ジークとライダーが愕然とした表情でマスターを見る。当然ながら、まず最初に憤然と彼を怒鳴りつけるのは、ライダーである。

「マスター——裏切ったのか……？ ポクらを！ 自分のマスターを裏切ったって言うのか？」

マスターは平然とした様子で頷いた。

「裏切る、裏切らないで言えば——少なくとも、僕は期待を裏切ったと言えるのだろう」

「言葉遊びで誤魔化すな！」

「誤魔化したつもりはないのだが……いや、そうだな。ここは一つ、惡のままに行かせて貰おう。確かに僕は君たちを裏切り、敵に回った。そして僕は君たちを滅ぼし、この至高の宝具『王冠・睿智の光』で世界を救済する」

キャスターの宣言に、ライダーは更に唾みついた。

「馬鹿か、君は！ そんな木偶の坊で世界が救済できてたまるもんか！」

……ライダーの言葉は、まさに神をも恐れぬという表現が正しかった。ジークはキャスターを肩に乗せるゴレムを、極力視界から外している。ジークだけではなく、フィオレやゴルドもそうだ。

「何だ。あの神々しさは」

恐ろしい、ではない。強そう、でもない。美しい、が表現としては近い。それもただの美しさではない。神が創り出した珠玉の存在、生まれながらにして栄光を定められた唯一の生物。

……ひれ伏したくなる、というのは過言ではない。見ただけで、明瞭に敗北のイメージが浮かび上がる。

「——不遜だな、君は。やはり理性が蒸発している、と言われるだけのことはある」

ただ一人、ライダーだけが傲然と立ち向かう。ゴーレムを恐れもせず、それを続けるキヤスターを睨み据える。

そして、ライダーは胸を張り自信満々に告げる。

「その通り！ だからボクは全然怖くない！ 君が何を造ってどうアピールしようが、所詮はただの宝具じゃないか！」

その言葉に、ジークの緊張が解けた。確かにライダーの言う通り、あれは宝具に過ぎない。どれほど神々しくとも、所詮はキヤスターが造ったものだ。

「——全くその通り。故に、私がこの矢を躊躇う道理はない」

空から響いた言葉に、キヤスターが振り返る——だが、遅い。音速で飛ぶ矢を防ぐ術理など、このキヤスターには存在しない。

叫聲に構築した薄い防壁は、あっさりと打ち碎かれた。わずかに軌道がズレたものの、肩口はしっかりと貫いた。

「ぐ……」

苦痛の呻きと共に、矢を引き抜いた。放った相手は言うまでもなく、フィオレのサーヴァントにしてユグドミレニア最後の希望——黒のアーチャーだ。

「アーチャー……！」

フィオレの歓喜の声。近くに来ていながら、気配を悟らせなかったのはこの一撃のためだろ。

「かろうじて生を拾ったか、キヤスター。だが、次の矢で必ずや仕留めてみせよう」

「ふん、アーチャー。僕を狙うか、それもいいだろう。だが——」

肩を押さえながら、キヤスターがアーチャーに顔を向ける。ダメージは大きい。所詮、キヤスターは近接戦闘に不向きだ。ましてアヴィケブロンは、元より病弱の軀なのだから。

「そうだな。恐らく、君を仕留めても——その宝具は止まるまい」

アーチャーの指摘に、キヤスターが首を傾げる。

「ならば、何故僕を狙う」

「決まっているだろう。裏切り者は、速やかに処置した方が良い」

「……非合理的だな。君が怒りの感情で動くとは思わなかった」

嘆息——射。二の矢と三の矢はほぼ同時。

魔術による防壁を作ることもなく、キヤスターは脳天と胸板を貫かれた。よろめき、巨人の肩から滑り落ちかけたものの、どうにか堪える。だが、アーチャーにも感覚で理解できた。今のは致命傷だった。

「残念だったな、アーチャー。僕の役割は全て終わっている。この宝具が起動した今、心

残りは何もない」

キャスターは嘘をついた。できればこの宝具がもたらす楽園を見てみたい、と願った。未練がある、ありすぎる。だが——致命傷を受けたのだから仕方ない。

それに、まあ。アーチャーの言う通りだ。

どう言い訳しようとも、自分は己の願望のためにマスターを裏切ったのだから。その事実が変わらず、何とも言えない後味の悪さが残り続けている。

だから、アヴィケブロンは決めた。

裏切りという罪の応報を、深く受け入れよう。死は己に残された唯一の償いであり、これ以上は差し出すものがない。あるとすれば、彼^{アヴィケブロン}、くらいのものだが、さすがに差し出す訳にはいかない。

彼を生誕させるために、何もかもを犠牲にした。自分のマスターですらも。

だからこそ——ここで終わらせることだけは、できない。

「任せたぞ、『睿智の光』^{アヴィケブロン}！ お前ならば、この大地に……必ず、必ずや楽園を創造できる！ 世界を、人を、我らが民を、救い給え！」

最後の最後まで、仮面を脱ぐことはなく。肉を喰すこともなく。黒^{アヴィケブロン}のキャスター、アヴィケブロンはゴーレムに溶け込んだ。それは、先ほどの鳥獣たちと同じだ。彼は、己の宝具であり『最初の人間』の義分となることを志願した。

「な、に……!?」

「馬鹿な、有り得ん!」

周囲の魔術師、サーヴァントたちが愕然とする。

……サーヴァント、という巨大な魔力を持つ存在故か。ゴーレムはたちまちの内に、その力を膨れ上がらせた。ゴーレムが周囲に居る魔術師やサーヴァントを見回し、フィオレに目を留めた。右手を振る——武器が実体化する。それは、黒い艶やかな色をした剣だ。

「……ッ!!」

フィオレが硬直する。今しがた、この巨人から叩きつけられたのは明白な殺意。どうやらこのゴーレムは、アーチャーのマスターが彼女だということを理解している……!

「ヤバッ、逃げるんだ!」

ライダーがフィオレの肩を掴み、崩落した城壁を足場にして迷わず飛び降りた。

ミレニア城塞東部は切り立った崖だ。城壁から飛び降りれば、百メートル余りを落下することになる。

「飛び降りへの対策はあるんですか!」

フィオレの猛抗議に、ライダーは自信ありげな笑みを浮かべた。

「当たり前さ! さあ、来い——ヒポグリフ!」

空を裂いて飛来したヒポグリフが、フィオレとライダーをその背に乗せた。甲高い声が、

空に朗々と響き渡る……だが。

「……あれ？　調子悪いやコイツ。おーい、がんばれー！」

ばんぼんと首筋を叩くも、ヒポグリフはやや恨めしそうな表情でライダーを見るだけだ。ライダーは忘れていた。先ほど空中庭園への突撃を敢行した際、赤のアサシンの魔術による猛撃を喰らい——やむなく、ヒポグリフを撤退させたことを。

息を切らせながらも、主のためにヒポグリフは再び舞い上がった。間一髪、彼らの背後を黒の剣が通過した。

「わっはー！　こりゃ速いやー　マスター、目をつけられないように気をつけてね！」

尚も追撃を仕掛けようとした巨人の動きが止まり、背後に向かって剣を振るう——衝突、轟音、空気が震え、魔力の残滓が周囲に飛び交う。

巨大な石剣——黒曜石の剣は、少女の兜寸前で押し留められていた。城壁の上に立つはルーラー。彼女の両足が踏み締めている石床は今しがたの一撃で半壊していた。

「……『原初の人間』とは……。『黒のキャスター』も、厄介なものを遺してくれますね」
驚くべきはその剛力か。剣をまともに受けてもなお、折れることのない旗か。ルーラー、ジャンヌの旗は何秒、何分、何時間経とうともこれ以上兜に近付くことはあるまい。

「ルーラー、そのまま！」

当然、その隙をアーチャーは見逃さない。引き絞られた弦から、渾身の一射が放たれた。

眼球に突き刺さった矢に、巨人が怯む。

大喝一声——黒曜石の剣を突き、ルーラーが疾走——跳躍。全身を回転させ、螺旋を描いて聖旗を膝に叩き込んだ。関節が砕かれ、たまたま巨人が後方へと逃れた。崖から飛び降り、地面へ着地。これで、ひとまずゴールドやカウレス、ホムンクルスたちの安全は確保された。

だがこれによって、ルーラーは単騎で巨人と向かい合うことになる。

アーチャーが続けざまに、もう一射を放つべく矢を番える。流れるように自然で迅速。

戦闘に関する限り、アーチャーの頭に備けの二文字はない。狙ったのは立て続けに眼球と思しき部品。視界を奪い、安全な場所からひたすら矢を放ち続けるという、単純に効果的で悪辣な戦術を採用している。

けれど、黒のキヤスターがその希望を託した巨人は、ただのゴーレムではない。

「何………!?」

膝を突きながらも、巨人は矢を打ち払った。まず、それが驚嘆すべき事実だ。いくら巨軀を誇ると言っても、音速を超えて気配すらも消すアーチャーの矢を打ち払うことなど、サーヴァントでも困難な所業だ。赤のライダーであるアキレウスですら、初戦では動きを完璧なまでに悟られた。

それをただの一射で把握し、矢を打ち捌いた。更に、巨人は驚くべき行動に出た。跳躍

した巨人は彼らから距離を取り——眼球に突き刺さった矢を抜いた。途端、見る見る内に傷が塞がっていく。

「治療……魔術……!?」

唖然とした誰かの言葉を、ルーラーは沈痛の面持ちで否定する。

「いいえ、違います。あれは……恐らく、大地からの祝福です」

自律した固有結界である『原初の人間』は、ただ存在するだけで周囲を異界へと変貌させていく。

楽園で、血を流す者など存在しない。即ち、矢傷など最初から無かったことになる。

「急いで倒さないと！ このまま周囲が楽園となってしまうえば、彼は不死身になります！」

そう、『原初の人間』にとって絶望たるこの大地は、未だ完全な楽園には至っていない。だからこそ、矢で傷がついた。しかしそれもわずかな間だ。楽園としての力が増せば増すほどに——つまりこの世界に巨人が存在し続ける限り、その還元速度は跳ね上がっていく。

『黒』のキャスターが、後を託すのも無理はない。絶対的な不老不死、難攻不落の巨人に、人間たちが勝利する術など存在しないだろう。

いや、もしかすると——サーヴァントですら。

巨人の振り下ろしの一撃を躲しざま、ルーラーは聖旗を突き出す。胸に届くはずもなく、

その伸びた腕を狙う。

だが、素早く戻された大剣が旗を受け止めた。ともすれば、その神々しさのあまり緩みがちな己の精神に叱咤を続け、ルーラーは「時間稼ぎ」という名の戦いを挑む。

そう。これはあくまで時間稼ぎにしかない。ルーラーには彼を討つ決め手がない。

……一つだけ存在するが、それは禁忌の一手。少なくとも、この場で使つて良いものではない。

焦燥が加速する。それを必死になつて押え込みながら、ルーラーは旗を振るつて剣を捌いていく。

その光景を眼下に捉えて、フィオレが叫んだ。

「くっ……ライダー！ 貴方の持つ宝具で仕留められるものはありますか!?」

「ゴメン、無い！ 角笛と本は効果ないだろうし、槍も大してダメージを与えられない。

頼りはヒボグリフだけと——負傷しているから、全力で攻撃できない！ できたとしても、勝てる保証は全くない！ っていうかムリ！」

フィオレが齒噛みする。となれば、最早アーチャーの宝具を解禁するしかない。アーチャーの宝具は、いわゆる対人宝具だが威力は先の矢とは比較にならない。文字通り、一撃必殺だ。だが、それで仕留められなければ——。

いや、迷うな。フィオレは自分を戒める。合理的に考えて、今はこれしか手段がない。
「マスター、指示を。」

アーチャーの念話は、決断を促すためのものだ。

「……ええ、アーチャー。貴方の宝具を解禁します。ただ、確実に仕留められるかどうかをあど一分でもいい、検討してからにしましょう。」

下った指示を了承し、アーチャーは数多の英雄、奸雄、魔物たちを見定めた目で冷徹に、巨人を見据えた。

「巨人の原材料は木、石、土、そして『妒心』である魔術師。当然、欠点は『妒心』にある心臓部分。そこを一撃で貫くだけの力があれば、打ち倒せるか？ ……………いや、違うな。」

アーチャーの森羅万象を見通す目は、巨人の内部構造すらも解析、把握していた。心臓部分が重要な器官であることは確かだ。魔力の流れから考えても、それは間違いない。

だが、更に問題なのは脳と足だ。あの巨人は人間やゴーレムというよりもサーヴァントに近い。頭部にも霊核が存在しており、心臓だけを射貫いても頭部の方にある霊核のせいで、即死に迫り込むことは不可能だ。

加えて。更に問題なのは、大地を踏み締める足。あのゴーレムは、大地から流れ込む膨大な魔力を、足の裏から獲得している。

よって、あの『王冠・睿智の光』を完全に粉碎する為には三つの力が必要になる。

一つ、脳天の霊核を確実に破壊する一撃。二つ、心臓の『炉心』を完全に破壊する一撃。三つ、足の裏を大地から引き剥がす一撃。

不可能だ。

一撃ならば、どうにかしてみせよう。今はホムンクルスに戻っているあの少年の力を借りれば、もう一撃は加えられよう。だが、三撃は不可能だ。

ルーラーは——いや、ルーラーには黒曜石の剣による連撃を抑えて貰わなければならない。彼女が防戦に徹していることで、巨人の隙が生まれるのだ。彼女が攻撃に転ずると、三撃の内、どれかが防御される恐れがある。

あと一人、欲しい。必殺の一撃を誇る英雄が、あと一人——いや、居る！

「ルーラー！ サーヴァントがあと一騎欲しい！ この周囲に、我々以外のサーヴァントが居るはずだ！」

巨人の振り下ろす黒曜石の剣を巧みに捌きつつ、ルーラーは彼の提案を承諾した。どうやら、黒のアーチャーには策があるらしい。そして、周囲に居るサーヴァントが誰かは、アーチャーにも読めているはずだ。

ルーラーは聖旗を掲げ、声高らかに告げた。

「**赤**のセイバー！ 我が真名ジャンヌ・ダルクの名に於て、参陣を要求します！ 声が聞こえぬ場所に居る訳でもないでしょう、来なさい！」

沈黙は一瞬。

膨大な魔力の渦を、その場にいた魔術師とサーヴァントは観測した。簀ぎ倒された木々の陰から、鋼鉄の騎士が進み出る。ジークは硬直した。あれは先ほど、自分を一度殺したサーヴァント……**赤**のセイバーだ。

巨人とルーラーの戦闘区域からは外れているものの、既に兇は外しており、ふてぶてしい笑みを浮かべている。

「参上してやったぞ、ルーラー。で、オレに何をして欲しいんだ？」

「アーチャーに聞いて——下さい——」

旗と剣がぶつかり、耐久力に劣る黒曜石の剣が砕けた。だが、剣も『**最初**の**人間**』の有物という認識からか、直ちに再生が開始される。無尽蔵の耐久力、無尽蔵の治療能力。しかも、刻一刻と時間が経つごとに——傷すらつけられなくなる。

「……フン、お前か」

「過去の遺恨は水に流せ——とまではいきませんが、少し忘れましょう。今は、あれを討ち滅ぼすのが先決です」

「分かってるよ、仲良く仲良くな。そのホムンクルス！ お前もそれで構わないか？」
『赤』のセイバーが、ジークに呼び掛ける。自分をからかうような笑み——深呼吸して、忍耐を選択する。

「構わない！」

「ジーク！ 貴方も手伝って欲しいのですが、もう一度現界し、宝具を解放することは可能ですか？」

アーチャーの言葉に、ジークは左手の甲を見た。二回目の令呪使用……あれからそれなりの時間が経った。変身直後に抱いた、あの致命的な感覚は薄れている。

「問題ない。宝具も使用できる」

「ちよ、マスター！ アーチャー！ ボクのマスターに、何をやらせる気なのさ！」

ヒボグリフで空を飛び回り、巨人に嫌がらせを仕掛ける『黒』のライダーが抗議するが、ジークは首を横に振った。何も言うな、というメッセージだ。

アーチャーが急話で二人に語りかける。

「一撃で仕留めるため、宝具の解放をお願いします。『赤』のセイバー、貴女は頭蓋を狙って下さい。ジーク、貴方は心臓を。私があの巨人の足の腱を射貫き、足の裏が大地から離れた瞬間を狙って下さい」

「ちなみに失敗したらどうなる？」

二度と倒せぬ不死の存在となり、世界はこのゴレムの意のままでしょうね。少なくとも、このルーマニアは異界化します」

さらに、^グ黒のアーチャーは深刻な状況を吐露した。一撃で仕留めなければ、しかも三人のタイミングが完璧に合致しない限り、蘇る可能性があるという絶体絶命の境地だ。

失敗は許されず、好機を待つことすらもできない。まず、好機を己たちの手で作り出すところから始めなければならないのだ。

「クソ。それなら本気でいくしかねえか」

了解した。変身のタイミングはこちらで判断する。

「ルーラー、最初は貴女です。貴女が道を拓き、私がそれを確立させ——そして、この二人が粉砕する」

「分かりました！ では——」

「おっと。ちょっと待った、ルーラー！」

ルーラーといえども、さすがに巨人との剣戟^{けんぎ}は生半可なものではないのだろう。常に全力で動き続けているせいか、額から疲労の汗が滴り落ちていた。

巨人の猛攻は止まらない。踏み込んでの袈裟懸け——旗の尖端で弾いて、軌道を強制的に変更。彼の斬撃は大地を割るだけに留まった。

「今、忙しいのです、が……！」

けられらと、状況を理解しながらも余裕の笑いを見せて、赤のセイバーは話を切り出した。

「確か、ルーラーは各サーヴァントに対する令呪を保有してるんだよね？」

「そ、そうです、けど……！」

「なら——それ、くれ。二画な」

ルーラーは赤のセイバーがいけしゃあしやあと言つてのけた要望に、さすがに絶句した。アーチャーとジークも、図々しい要望に啞然とした。

「だ、だ、駄目です！ この令呪を委譲させることは——」

「可能だろ？ ルーラーが持つ令呪も、マスターのそれと変わらないはずだから」

「ですが、二画は駄目です！ せめて一画……」

「いいぜ、乗った！ じゃあ一画だ、一画よこせ！」

「なっ……ぐっ……！」

……言うまでもなく、最初に過大な要求を提示し、それが断られると本命の要求を押し通すのは交渉の基本だ。ルーラーは見事にそれに釣られ、あまつさえ自分から好条件を提示してしまった。

「わ、分かりました！ 分かりましたから！ 後で差し上げますので、今は……！」

「赤」のセイバーはその言葉を聞いて、大剣を天に掲げた。威風堂々とした態度で、声高らかに宣言する。

「よし！ アーチャー、タイミングを計れ！ ホムンクルス、とっとと変身しろ！ この巨人と、三分以内に決着をつけるぞ！」

「何でお前が仕切ってんだよ！」

「黒」のライダーの至極もつともな指摘ではあるが、それに追隨している暇は「黒」のアーチャーにも、ジークにもない。

「赤」のセイバーが、宝具の解放準備に入っただからだ。

「――赤雷よ！」

ガリガリと、電子的な雑音と共に『燦然と輝く王剣』が可変する。憎悪によって歪み、邪剣と化していく。

それを見ながら、ジークも左手を掲げて告げる。

「――令呪を以て、我が肉体に命ずる！」

肉体が変貌する。限定された世界が捲り上がる。法則は黙殺され、三分間のみ――その奇跡がジークというホムンクルスの軀に降臨する。

それを間近で見たゴールドやカウレスは絶句した。

「黒の——セイバー」

百八十秒の結晶時間を得るため、竜告令呪はまた一面を消費した。

竜殺しを成した聖剣「幻想大剣」を苦も無く構え、宝具解放を即座に準備する。

それを見計らって、ルーラーとアーチャーが視線を交わす。ここから先は、一秒単位の時間が重要になるだろう。

ルーラーは巨人の正面で聖旗をかざし、斬撃を捌きながら少しずつアーチャーの有効射程範囲に近付かせる。だが巨人——「原初の人間」は、決して暗愚ではない。戦闘の経験が皆無であることは確かだが、それも打ち合いながら補強されていった。

凄まじい加速度で、巨人は一級の戦士を超えた英雄へと近付いていく。剣戟の趨勢も、次第に移り変わり出す。

ルーラーが——圧され始めた。

「ぐっ……！」

その猛攻は、まさに雪崩や津波といった自然災害を思わせる。あるいは、暴風か。それも調律された自然災害だ。的確にして正確無比な連撃の数々——しかも、その威力ときたらたった一度失敗を犯しただけで、ルーラーの軀が半分引き千切られるような代物だ。

その様は、傍らで見ているサーヴァントや魔術師ですら心胆を凍り付かせるような情景

だった。巨人の体格に見合った臂力と、体格に見合わぬ技巧。臂力だけならば、英雄は捌くこともできよう。技巧だけならば、英雄は堪えることができよう。

その二つが合わさった『原初の人間』の斬撃は、生半可な英雄では確実に押し負ける。

しかし、ルーラーは粘る。捌くだけでも、全精力が枯渇するような斬撃を受け続けながらも尚、その腕が震えることはない。

恐ろしい、とその場に居る誰もが思う。巨人ではない、巨人は驚異的であるが恐れる対象ではない。真に恐るべきはルーラーだと、全員が悟っていた。巨人を圧倒する英雄ならば、話は分かる。例えば、赤のライダーや赤のランサーといった大英雄ならば巨人を相手に真つ向勝負するなど、余裕の行為だろう。

ルーラーは決して『原初の人間』を圧倒できている訳ではない。巨人より力は劣り、技量すらも一步譲る。今の彼女は、暴風雨の只中に存在する一本の細木ではない。

だが、それでも尚。それでも尚ルーラーは決して諦めず。暗闇の中の綱渡り、しかも一歩でも背後を振り返れば即死、バランスを崩せば即死、前に進むタイミングがズレただけでも即死のそれをどうにか渡り続ける。

しかし——隙を作れない。アーチャーが彼の足を同時に撃ち抜くためには、巨人がアーチャーの存在を一瞬でもいい、忘却するほどの状況に陥ることが必要だった。

「ジータ、赤のセイバー。……割って入れますか？」

ならば三人で隙を作って貰うしかない。タイミングを計ることが数段困難になるが、今は隙を作る。ことこそが最優先だ。

「……いいぜ、やってやらあ」

赤のセイバーはそう告げると魔力を放出させ、その勢いを活かして襲い掛かった。

ジークは無言で頷き、黒のセイバーとして幻想大剣を構えて走り出す。

「木個人形如きが、デケェツラ晒してんじゃねエツ!!」

流星のような速度で突貫した赤のセイバーの一撃を、巨人は驚くべき方法で躲す。

「な——に——」

巨人は恐ろしい速度で跳躍した。赤のセイバーの通か上に位置すると、黒曜石の剣を振るう。舌打ちしつつ、赤のセイバーは己が剣で、斬撃を防いだ。だが、刃を防いだところで、空中では斬撃そのものの威力は殺せない。

地面に叩きつけられるような落下。咄囁に足から着地したもの、損傷は酷い。鎧のあちこちにヒビが入る。即座にマスターである獅子劫が治療を開始したが、再び大地を踏み締めた巨人は、更なる追撃を加えようとする——

「退がれー」

赤のセイバーを庇うように、ジークが躍り出た。互いの猛々しい咆吼と共に幻想大剣と黒曜石の剣が激突する。

「ぐ、っ……!!」

その恐るべき脅力に、ジークの顔が歪む。このゴーレムを鍛造したキャスターが抱いた信念の重さまでもが伝わってくるようだった。

それに耐える。

この信念に耐える資格があるのだろうか、という疑問が脳裏を掠めてもただ耐える。

ルーラーが素早く駆け寄ると、巨人の手首を強かに打ち据えた。手首が砕け散り、力が弱まったところをジークは渾身の力で弾き飛ばす。

手首の再生は一瞬で終わり、巨人は即座に立ち直った。その再生力には驚嘆するより他ない。

救世主であり、受難の民を導く役割を背負った巨人。ただ存在するだけで世界を塗り替える至高の巨人。禁断の果実を齧り、叡智の光を手に入れた者――。

巨人の勝利条件はあまりに容易い。ただ存在し続けるだけでいい。そうするだけで、一刻と手が付けられない領域に踏み込んでいく。

対するこちらは目に見えて劣勢だ。直接戦う四人は、是全て英雄。だが、彼らが手に入れた攻撃の機会(きかい)はただ一度。

それを逃せば、勝利はない。特にジークは致命的だった、変身に許されるのはわずか三分間だけ。巨人はその三分を待てばいい、焦ってアーチャーが攻撃を仕掛けるのを待てば

いい。

「黒」のキャスターは、恐らくジークの変身とそのメカニズムについても理解しているだろう。彼の知識はそのまま、巨人が引き継いでいる。

「黒」のセイバーが召喚されるといふ奇跡は、ほんのわずかな時間だけだ。

だからこそ、巨人は慎重な攻撃に徹底している。それは消極的ではなく、純然たる戦術だ。

蘇る焦り——それを不死身の心臓が論ずる。

お前は間違えてなどいない。お前の選択は決して誤りではないと。何故なら、指示を下しているのは数多の英雄を育てた大賢者。その賢者が、ただ沈黙している。

ならば、この戦い方で間違っているなどない。ジークは、あのアーチャーにこれ以上ないほどの信を置いている。

迷っている暇も余裕も権利も、己にあるはずもない。今のアーチャーがジークに望んでいるのは、ただ息せき切って走ること——ただそれだけ。

剣を構えて、真っ正面から立ち向かう。相手の巨大さなど、恐るるに足りぬ。ジークの傍には自分より矮小な肉体で、こちらを問答無用に叩き伏せた赤き騎士がいる。

それに比べれば、たかが固有結界の巨人など如何ほどのものか……！

ジークによる嵐のような斬撃は巨人を斬り裂き、引き千切り、叩き潰す。全く臆するこ

どなく、前へ前へと踏み込んでいく。

巨人がその猛攻に耐えきれず、一步退いた。その行動に、ルーラーは遂にその好機を捕捉した。

「……！！」

絶妙な瞬間が、そのとき訪れた。力強く足を踏み込み、聖女は雄叫びと共に聖旗を振り上げる——まさに渾身の一撃が、黒曜石の剣に直撃した。

ぐらりと、巨人がバランスを崩した。

黒のアーチャーは、二本の矢を番えている。弓の弦は引き絞られ、矢にはありったけの魔力を叩き込んでいる。二本の矢を同時に放ち、二本の矢で同時に巨人の足を射貫く。生きた宝具である巨人も、既にその狙いについては理解している。

今、この瞬間こそが生と死の境界線上に位置することも理解している。

アーチャーの矢を防ぎさえすれば、勝利を掴めることも。

巨人は死を恐れることはない。だが、与えられた役割を全うできなくなることは、断固として拒絶する。

規格外の難易度を誇る狙撃を——。黒のアーチャー、ケイローンは全く気負うこともなく、軽く頷いてから射ち放った。

至高にして原初の巨人は叫ぶ。両足いずれかを失うことは自明の理、だが両方を失う

ことだけは避ける。修復は数秒で完了する、そうすれば最早彼らに為す術はない——！

膨大な魔力を秘めた二本の矢が、闇夜を切り裂いて疾走する。

一本は確かに巨人の足首を貫き、破壊した。けれど、巨人は最初から一本だけに集中している。音速を凌駕する勢いの矢は、最早ミサイルに等しい破壊力を以て巨人に迫る。

巨人は剣を振るって矢を撃ち落とすことは不可能だと悟った——剣の軌道では、矢に間に合わない。

だが、巨人の思考はひどく合理的だ。そこには覚悟すらもない、ただ必要ならばそうするまでだ。

「馬鹿な……！」

驚愕は一体誰のものか。アーチャーの放ったもう一方の矢は、巨人の左腕に直撃した。

木っ端のように千切れ飛ぶ腕は、その代償に見合うだけの働きをした。二本の矢で同時に足首を砕くという勝利条件を、アーチャーは満たせなかった。

しかし巨人が彼方にいるアーチャーを視覚で捉えていれば、恐らく彼の狙いに気付いただろう。

「キャスター。貴方の巨人は確かに、世界を塗り替えることができただろう。受難の民を救い、楽園に導くこともできただろう」

アーチャーは淡々と、己の矢が届かなかったことなど意に介さないように呟く。

巨人の修復は開始していた。片足が地面に届いていれば、この世界は『原初の人間』を祝福する。

「しかし叡智を手に入れた貴方ですら、読み間違えたことが一つだけあったな。理性が蒸発したあの英雄は、本当の神でも恐れない」

巨人の膝裏に衝撃が走った。生き延びたはずの足がふわりと浮き上がる。巨人に芽生えつつあった思考が、驚愕という新たな感情を呼び起こす。

アーサー王伝説の終焉を担った叛逆の騎士。

優れた英雄を育てた古今無双の弓使い。

故国を救うべく旗を振るって戦場を駆け抜けた聖女。

幾多の冒険を経て竜殺しを成し遂げた最強の剣士。

いずれ劣らぬ大英雄——だが、この場にはもう一人英雄がいたことを忘れてはならない。

「さあ……後は任せたま、マスター！」

弱小にして気高き最良の騎士、蒸発した理性により天魔一切を恐れることなき英雄。

幻馬で天を翔り、黄金の馬上槍で敵を打ち倒す騎乗兵——その真名をアストルフオ。

ヒボグリフを駆っての「触れれば転倒！」の突撃は、巨人の膝裏に直撃した。巨人にと

ってはまさに蚊に刺された程度でしかない一撃はしかし——嘘のような不自然さで、その

巨体をふわりと空中に転ばせた。



いや、正しくはまるで果物の皮を踏んで滑ったように、無様に彼を転倒させた。

元より触れた者を全て転倒させる滑稽で致命的な概念武装。

それはサーヴアントであろうと、宝具でありながら自立した「原初の人間」であろうと、一切の例外は無い。

浮遊した瞬間、大地の祝福は途絶える。数秒にも満たぬその時間を作り上げるため、大賢者は徹底した策を練り上げた。

策は単純かつ驚異的でなければならない。複雑巧緻な策は、愚直さの壁に潰える。

己がマスターであるフィオレをライダーが救い出した瞬間から、既に策は始まっていたと言える。その場にいた全員が、この戦場から離脱したものと考えて動いたのだ。

この時点で、巨人の脳裏からも彼らは消えただろう。相手取るべき四人を考えれば、あのライダーに思考を分割する余裕などない。

黒のキャスターが中途半端にライダーを理解していたことが仇となった。

ライダーは弱い。一撃で巨人を砕く武器を持っている訳ではない。けれど、無遠慮に足を掬うこと程度は、容易くやってのけるのだ。何しろライダーは、怖すら恐れないのだから――

そして、後は二人の英雄の出番だ。

黒のセイバーは、神猛な獣のように軀を丸めて一気に跳躍した。

赤のセイバーは、魔力を一気に噴出させ、さながら銃弾のように襲い掛かった。

赤色の稲妻が疾走する。

この機を逃してはならないという直感に従い、『魔力放出』の全力解放を行う。マスタ―が焦れるかもしれないが、勝てば忘れるだろう。

先の屈辱に対する万倍返しだ。狙うは隔天、『原初の人間』への恐れ多さなど既に憎悪が吹き飛ばしている。

人造生命——与えられた命令しか行使し得ない木偶人形が、自分の前に立つなどあつてはならない。

だから、赤のセイバーは巨人を憎む。憎み、憎悪を抱き——やはり憎む。

「王剣よ！」

赤のセイバーの憎悪に呼応して、王に与えられる剣、王の権威を示す名剣が憎悪に染まり、歪んでいく。

「——なるほど。所詮、貴様は人造生命だ」

ジークは思う。なるほどこの『原初^{アウフヘーゲン}の人間』は宝具だけあって、世界を変える素晴らしい力を持っている。

けれど、その目的は己の意志で育んだ物ではない。

選んだ物でもなく、借り物ですらもない。

彼の目的は、ただ『黒^{ブラック}』のキャスター^{マスター}に与えられただけのもの。それをどうこうする思考までは、未だ持ち合わせていないのだ。

ああ——ならば、自分^{自分}は勝たねばならぬ。

己はこの巨人より、わずかに先を行っている。与えられた目的で動くのではなく、ようやく創った希望^{希望}を大事に持っている。命を擲^{投げ}つてもいいと、誇れる願いを抱いている。

仲間を救いたい——呆れるほどに単純で、明快で、広がりつつある願い。

拘^{とど}めても拘^{とど}めても救えるはずのなかった彼らを、あの人たちは救えるだけの力を与えてくれたのだから。

だから、負けない。

だから、勝つ。

それは、奇しくも聖杯大戦におけるセイバー同士の激突と同じ情景だ。ただし、あの時と異なる点が一つ。

双剣が狙うは同じ標的。「黒」のキャスターが己の人生全てを擲って創造した至高の宝具、「王冠・睿智の光」だ。

呼吸を合わせるまでもない。既に一度、合致させている以上、その際の感覚を思い出せば良いだけ――。

「幻想大剣――」

「黒」のセイバーが呟える。

「我が麗しき――」

「赤」のセイバーが猛る。

黄昏の光と紅の極光が重なり、複雑な光彩を編み上げていく。周囲の者たちは、その圧倒的な美しさに息を呑む他ない。

それは、もしかすると「最初の人間」も同じだったのか。

石と木と土でできた人形は、その美しい光に手を伸ばしすらした。

されど、それは龍殺しと英雄殺しという二人の異なる剣士が手にした、全てを討つ寂滅の光――

「天魔失墜ッ!!」

「父への叛逆ッ!!」

放たれた赤は、ゴーレムの頭部を貫き。

膨れ上がった黄昏は、ゴーレムの「妒心」を完全に破壊した。

ルーラーが旗を振り上げ、アーチャーが矢を射ち、ライダーが足を揃ってからわずか三秒にも充たぬ時間。その刹那で、あらゆる全てが完結した。

「ヘッドショットだ、木偶の坊。楽園は他所で探してろ」

赤のセイバーは中指を立てて哄笑する。

ゴーレムが崩壊するより早く、周囲の木々が枯れていく。地上は最早楽園とは成り得ず。そして不死であるはずの「原初の人間」もまた、滅び朽ちていく。

「やっらいー」

黒のライダーが拳を空に突き上げ、魔術師たちも安堵の息を零す。

ジークはそれらを見て、ひとまず己の役割を果たせたことに——願いを叶え続けられることに、胸を撫で下ろした。

鎧装が解れていく。脱力も、痛みも、まるで気にならない。

「ジーク君——」

ルーラーが駆け寄ってくる。大丈夫だ、と伝えるために右手を掲げた。ただ、その掲げ方があまりに弱々しかったせいとか、かえって不安に思ったらしい。ルーラーはジークに掴みかかるように軀を探った。

「……怪我は、ないですね？」

念を押すように、ルーラーが問い掛ける。つくづく心配性だな——と思いつつ、ジークは答えた。

「鈍痛が残っているが、その程度だ。……俺は、大丈夫だよ」

「男の子の大丈夫は、あまり信用できませんから」

ジークには返す言葉もなかった。

ともあれ無事なことを納得したのでろう。ルーラーは両膝を突き、既に消え去りつつある巨人へ両手を組んで折り出した。それが、黒のキャスターへの鎮魂か、『炉心』となった魔術師への鎮魂か、あるいは生まれ落ちながら、その意味を持つことを許されなかった胎児への祈りなのか、ジークには分からなかった。

ただ——折りを捧げるルーラーを美しいと、彼は思った。

美しいと感じると同時に、どこか痛ましい。ジークは知っている。祈りはどこにも届かない、神に縋^{かか}っても良いことなど一つもないのだと。

それを誰より、彼女自身も知っているはずだ。祈ることで、救われる物など存在しない。

なのにルーラーは祈る。ジャンヌ・ダルクという名の聖女は祈る。

いつの日か、それを問い掛けたいとジークは思った。貴女の祈りは、果たしてどこへ向かうのかと。

——戦いは決した。ひとまず、黒のキャスターは宝具諸共に討ち滅ぼすことができた。だが、現状が好転したとはまるで言い難い状態であることもまた確かだ。

「ルーラー、我がマスターが貴女とお話ししたいことがある、と」
祈るルーラーに、黒のアーチャーが声を掛けた。

「それから、赤のセイバー。貴女にもです」

「話すだけならな。協力はお断りだ」

「それでも構いません。ただ、情報の共有だけは行っていた方がいいでしょう。貴女と貴女のマスターも、あの空中庭園での出来事を全て把握している訳ではないはずだ」

露骨に舌打ちして、赤のセイバーは背後を振り向き、自身のマスターである獅子劫と会話で軽いやりとりを済ませた。

「オーケーだ。そうそう……報酬の支払いは忘れず今日中に、だつてさ」

「報酬……ああ。こちらからの令呪ですか」

その言葉を聞いて、ルーラーの顔が否応なく愁色を帯びた。とはいえ、約束した以上は

仕方ない。少なくとも、一画残つていれば最悪の事態は防げるだろう——と肩を落としてつ、約束の履行を請け合つた。

獅子劫界離は意外なほど近くで観察していたらしく、五分もしない内にやってきた。彼を出迎えたのは、サーヴァントである「赤」のセイバーとルーラー。そして、「黒」のアーチャーと彼のマスターであるフィオレだ。

「お、フィオレ・フォルヴェッジ・ユグドミレニアか。昨日ぶりだな」
手を挙げて笑う獅子劫に、少女は澄まし顔で応じようとする……が、表情は些か堅苦し
い。その辺は、傭兵である獅子劫ほどに割り切りができない。

「……ええ。意外に早く、意外な状況での再会に驚いていますわ」

「まあそう言いなさんな。この聖杯大戦は大聖杯を強奪された時点で、第二ステージに切り替わった。俺とアンタらは、敵じゃない」

「今のところ、ですわ」

「ああ、今のところ——な」

ふふふふ、と互いに笑い合う。フィオレはサングラス越しに確信していた。この男、間違いない目が笑っていない、と。

もっともそれは、獅子劫の方も思っている事柄だったが。

第二章

第二章

空中庭園は、既に動き出していた。大聖杯をその腹部に取り込み、黎明の空を飛び続けている。シロウはルーラーとしての知覚能力で、黒のキャスターが滅んだことを悟った。彼の望みは、叶わなかったらしい。

ともあれ、これで向こうも陣容を整える余裕ができる。

「情報整理と追跡準備、追跡時間を考えると——三日というところでしょうか」

「三日で追いつくぞ？」

「ええ。もちろん、ルーラーがユグドミレニアの魔術師を説得し、生き残ったサーヴァントたちを纏め上げることができれば——ですが」

もしかすると、ユグドミレニアの側は、弱腰になって魔術協会に訴え出るかもしれない。魔術協会にしても、まさかの状況だろう。彼らもあの大聖杯を欲していたはずなのだから。

「——さて。それなら、そろそろ聞かせて貰おうか。返答次第では、その首を戴く」

槍の石突を床に叩きつけ、赤のライダーが険しい表情で問い掛ける。首を戴く、は

冗談でも何でもない。シロウが不満足な答えを出した場合、彼は成功するしなかに拘わらず、少年に襲い掛かるだろう。困ったことに、この距離では令呪を行使しても間に合うまい。いや、距離など関係ないか。視界に入っているならそれが間合いだ。恐らくこの「赤」のライダーは一瞬で間合いに到達し、一瞬でこちらの首を刎ねる。

そしてもう一人。天穹の弓に矢を番えかけている「赤」のアーチャー、アタランテ。彼女もまた、シロウの返答次第で遠慮なく脳天に矢を射ち込んでくるだろう。

壁から動かないのは「赤」のランサー、カルナだが……彼もまた、こちらに従っている訳ではないことは明々白々だ。

とはいえ、シロウとしては本心から語るしかない。最初から、虚偽によって彼らを——まして、カルナを欺き通せるとは思っていない。

「全て、真実をお答えしましょう」

「よし。何が目的だ？」

「それならあのルーラーにも答えた通り、全人類の救済です。私はその為にこの大聖杯を必要とした。必要としたから、手に入れた。貴方たちも同じ。この聖杯大戦を乗り切るために必要です」

ちなみに、「赤」のライダーとアーチャーが、ランサーに視線を移す。施しの英雄であるカルナには、言葉による弁明や欺瞞が一切通じない。その彼は、ライダーとアーチャー

に向けて微かに頷いた。

驚愕——困惑。どうやら本気で人類の救済を考えているらしい。狂人の戯れ言、と一笑に付すこともできず、彼らは別の問いを投げかけた。

「……マスターはどこにいて、どんな状態だ」

「知覚できませんか？ この庭園の一室に五人とも揃っています……一応、人の姿は保っているはずです。そういう『毒』を使いましたから」

「——手前」

サーヴァントたちの視線が、一斉にアサシンへと向いた。彼女は変わらず、静然とした笑みを浮かべ、その視線に真っ向から応じる。

「それはそうだ。マスターたちに好き勝手動き回られては困る。如何に優秀といえども、所詮はただの魔術師。他者を出し抜くことしか考えていない連中は、邪魔だったからな」

「自分のことしか考えていない、という点ではそちらも同類だろう」

ランサーの呟きにアサシンは不愉快そうに顔を曇め、シロウは苦笑した。

「それで、俺たちを駒に使って、最後には切り捨てか？ お前一人がマスターになるってのは、そういうコトだろうよ」

「こんでもない。私の願いと真っ向から衝突しない限り、貴方がたの願望を極力叶えて貰って構いませんよ。——では、マスターとして逆に逆に質問です。皆さんが聖杯の奇跡に縋る

理由をお伺いしてもよろしいですか？」

その言葉に、しんと三人が沈黙した。微妙な表情を浮かべたまま目線が交錯し——嘆息して、ライダーが口を開いた。

「俺の願いは生前と変わらねえよ。英雄として振る舞う……それだけだ」

「第二の生に未練がある訳ではない、ど？」

「無い訳じゃねえよ。この世界に根を下ろすって案も、それなりに魅力的だね。ただ、それには——俺が英雄として振る舞うことが大前提だ」

母と誓った。

英雄として生き、そして死ぬと。第二の生を得られても、それは変わらない。変えてはならないと、アキレウスは考えている。

過去の己の爲した英雄的行爲も、悪行も、神に逆らったことも全て。まるきり後悔などない。……といって生に未練を持たず、聖人の如く振る舞うなど願ひ下げだ。身勝手なほどの欲が、彼にははち切れんばかりに存在する。

「……なるほどなるほど。しかし大英雄アキレウスにしては、なかなか平凡な願ひよな」
「口を開くな、女帝。なるほど確かに我が願いは平凡だ。だが、そちらがどれほど高貴な

願いだっただとしても、譲る気などさらさらないぜ？ 何しろ俺も、我欲まみれだからな」

「貴方のライダーと、アサシンが睨み合う。それを取りなすようにシロウが言った。

「願いに崇高も低俗ありませんよ。少なくとも、貴方の願いは他の誰かを打ち倒しても手に入れたものだ。そして、私の願いと行き違うこともない。貴方は英雄として振る舞い、私の敵を討ち果たしてくれればいい。私はその為に魔力を供給し、令呪を行使します」

「お前の敵と、俺の敵が重なり合うとは限らないぞ？」

詞を練め、シロウは言う。

「重なり合わないと言貴方が判断したのなら、どうぞ見逃すなり手伝うなりしても構いません。ただし、一つだけ。恐らく向こうには『黒』のアーチャーがいるでしょう」

「……チ」

舌打ち——だが、ライダーの殺意は薄れている。『黒』のアーチャーとの完全決着。それは、今回の戦争における、ライダーの目標だった。

「他に何か？」

「一つある。……が、それは全員が終わってからでいい」

そう告げて、ライダーは己の槍を足下に置いた。平伏することなく、そのまま立っているということはマスターとして認めた訳ではないが、ひとまず敵対はしないという意味を表すだろう。

「次は私か。我がマスターが毒を飲まされたというのはなかなか業腹だが……仕方あるまい。汝をマスターとして、認めよう」

「姐さん。仕方ない、で済ませていいことかあ？」

ライダーの呆れた問い掛けにも、平然とした調子でアーチャーは首肯する。

「それはそうだ。相手を出し抜くべき聖杯戦争において、毒を飲まされる方が悪い。私を召喚するまでは用心するべきだった。それすら怠るような情弱なマスターに、未練はない。死んでいないだけ、救いはある」

アーチャーの言葉は酷薄であり、正論でもあった。生後すぐに捨てられ、離乳に乳を与えられて、狩人たちに見出された少女は「生きる糧は奪う」という単純な世界に生きている。……そして、そんな少女にもたった一つだけ、慈愛を向ける存在がある。

「私の願いは、この世全ての子供らが、愛される世界」だ。父に、母に、人に愛された子供が育ち、また子供を愛するという循環だ。誰であろうと、この願いを妨げるなら容赦はせん」

「——なあ、アーチャー。気を悪くするなよう？ それは、不可能な世界ではないか？」

アサシンの問い掛けに、アーチャーはどこか怒りを感じさせる口調で告げた。

「その為の願望機、その為の聖杯ではないのか。この程度の願いを叶えずして何が聖杯か」

シロウは頷き、薄い笑みを浮かべて頷いた。

「そうですね。この程度の願い、叶えられないはずはない。如何なる形であれ、聖杯は貴女の願望を叶えるでしょう。そして、私の願いも貴女のそれに添うものです」

「……全人類の救済か」

「ええ。如何です？ 貴女が私の願いを否定し、弾劾するならそれでもいい。マスターとしての契約を絶ちますから、他の誰と契約するのも自由です。……黒の側についても構わない」

——嘘は、ついていなかった。

少なくとも、アーチャーの目からはそう判断できた。アーチャーも一つだけ、疑問が残っている。だが、それは恐らくライダーやランサーも同じだろう。最後に聞くべき問い掛けだから、最後に残している。アーチャーはひとまず、ランサーに話を振ることにした。

「ランサー。汝はどうする？」

壁に背を預けていたランサーは、その神の瞳でシロウを静かに見据えた。その英雄としての佇まいは、ひたすら圧倒的だ。シロウは、まさに丸裸にされたような感覚すら抱いた。

そして、静かにランサーは口を開いた。

「……確かにマスターは替わったが。オレを召喚しようと決意し、助力を乞おうとしたのは、他ならぬあのマスターたちの一人に違いない。そして、オレのマスターは滅びかけた

肉体でなお聖杯を望んでいる。ならば、オレはこの槍を振るうだけだ。それが願ひであり、召喚されたオレへの報酬だ」

「——それは、前のマスターにそのまま仕えるということか？ 呆れたな、施しの英雄。それは、愚かな選択だぞ」

彼の言葉を敵対と見て取ったのか。アサシンは躊躇なく殺しに掛かろうとする。だが、シロウがそれを目線で抑えた。

ランサーは全く怯むこともなく、ただ淡々と告げる。

「……どう呼ばれようと構うものでもないが。それは買ひ被りというものだ、アッシリアの女帝。オレはただの槍に過ぎない」

その場にいたシロウ以外の全員が、ただ唖然とした。聖杯から知識を得ている彼らは、この秘代の大英雄が、どれほどの存在かは理解している。

他の誰かが同じことを言えば、彼らは憤るか、嘲笑しただろう。度を過ぎた謙遜は卑屈や嫌味に過ぎる、と。

……今のは、心底からの言葉。本気でそう認識し、そう確信している言葉だった。

「——では、私が貴方の助力を乞うことはできますか？」

「位置関係こそ異なったものの、敵方が聖杯を獲りに来るといふ基本に変わりはない。ならば、オレの槍は敵を討つだけだ」

「どうやら敵に回る、という訳ではないようだ。アサシンは些か鼻白んで、魔術を編み上げかけていた手を下ろした。」

「……まあ、こちらに味方するのはオレ自身の願望もあって都合が良い。全霊を以て、聖杯を奪おうとする者たちを焼き払おう」

その言葉に、一同が微かに動揺した。

「赤」のランサー、カルナの願望。この、我欲の一切が存在しそうにない槍兵にも聖杯に託す望みがあるというのか。

「——それは、黒」のセイバーとの再戦ですか？」

「そうだ。初戦で、あの男と戦った際にそう言われたのでな」

それは、果てしのない剣劇。終わりのない剣戟だった。

神槍は不死身の竜鱗に幾度も幾度も傷をつくり、幻想大剣は、傷一つつけられぬはずの黄金の鎧を幾度も幾度も斬り続けた。

凄惨極まる殺し合いではなく、力を秘しての情弱な試し合いでもない。ただ互いが純粹に全力を使い、それが天秤を奇跡的に平衡状態にさせていた。

夜明けまでの数時間など、刹那に等しかった。

シロウはわずかに眉を蹙めたが、何も言わないことに決めた。そう、もし『黒』のセイバーとの再戦が彼の願望ならば、それは最早叶えられない状態だ。

既に彼は死亡している。今、『黒』のセイバーとして存在するのはあくまで、一介のホムンクルスでしかない。

だが、それをこのランサーに指摘して何になろう。あるいは、既に知っているのかもしれない。

「——もし。この空中庭園に、『黒』のセイバーがやってきたならば、必ず貴方の下へ来させる約束します」

シロウがそう言うのと、ランサーは微かに頷いて感謝の念を示した。虚偽、という訳ではない。あれはやはり、『黒』のセイバーでもあるからだ。……少なくとも外見は、だ。

わずかな罪悪感を抱いたが、それを告げてランサーが前言を翻しても困る。……無論、そのようなコトを、この慈悲深き大英雄が行うはずもないのだが。

「では、最後に、オレから三人を代表して質問しよう。シロウ・コトミネ。お前はこの聖杯を用いて、どうやって全人類を救済するのだ？」

そう、これこそが三人の疑問だった。何故なら、相手側にはルーラーがいる。少なくとも、中立的な立場であるはずのルーラーに攻撃を仕掛けたのは、彼女ではなくこちら側だ。

ルーラーは聖杯戦争のルールを遵守させる、あるいは聖杯戦争による世の破壊を防ぐた

めに召喚される存在だ。そして今回の場合、後者としか考えられない。

即ち、聖杯はシロウの願いを「危険だ」と判断しているのだ。

「……そうですね。これを伏せていれば、あらぬ誤解を招くとも限らない。例えば、私はそこでクスクスと笑うサーヴァントの傀儡であり、人類の救済など考えてもいない——と言うような、ね」

「赤」のアサシンはそれを聞くと、少しふて腐れたようにそっぽを向いた。

「では、この大聖杯で如何にして人類を救済するか。具体的な手段をお教えしましょう」
 そうして、天草四郎時貞は口を開く。狂ったように思考に思考を積み重ねた結果、遂に得た回答だ。どう捉えられ、どう弾劾されようともこの答えを変えるつもりはない。

§ 5.5.5

——以上が、私とアーチャーが遭遇した状況です。

ルーラーの説明に、重苦しい沈黙が流れた。そのシーンを目撃した「黒」のアーチャー以外の面々は、まさに愕然という言葉に相応しい表情だ。それが崩れるのには、かなりの

時間が掛かるだろう。

ミレニア城塞は半壊したものの、部屋にはまだ余裕がある。全員が集められたのは、血族用の会議室だ。衝撃で椅子が倒れ、シャンデリアが落下して砕け散っていたがフィオレが即座に修復した。

とはいえ、フィオレとゴルドの腕を以てしても半壊した城塞を修復するのは不可能だ。時間を掛けて、少しずつ直していく他ない。

ふと、カウレスはその場にいる者たちを眺めて思った。ダーニツク、セレニケ、ロシエ——まず生き残るだろうと思っていたマスターが死に、何故か自分が生きているのが不思議だった。もしマスターが死ぬなら、恐らく自分が真っ先に死ぬだろうと確信していたのだ。単純に、実力不足故に。

だからなのか妙に現実味が薄かった。圧倒的な力を見せられたせいだが、それとも『黒』のパーサーカー、自分のサーヴァントの死を未だに引き摺っているのか。

あるいは今聞いた話を、きちんと受け止められないのだろうか。そりゃそうだろう、とカウレスは思う。ルーラーが切り出したのはあまりにも馬鹿馬鹿しく、突拍子もなく、そして——恐ろしい、話だった。

『……もう一人の、ルーラー。天草四郎時貞、ですか』

ようやく、フィオレが振り絞るように声を出す。ただでさえか細い彼女の声は、それを

下回るほどの小ささだったが、部屋が完全に沈黙していたせいだろう。言葉は全員の耳に届くほど明瞭だった。

「しかも、赤の側の令呪を三画ずつ持ってるんだよね？ その……もう一人のルーラーって奴が」

カウレスの質問に、ルーラーが沈痛の面持ちで頷く。

「ええ。あの言葉は嘘ではないでしょう。彼が掲げた腕の輝きは、確かに令呪でした。共闘していた『赤』のライダー、ランサー、アーチャーの三騎は、不本意であろうとシロウに従わざるを得ない」

令呪を持ち、マスターとしての権利すら有している。つまり、彼が魔力を送らなければ実体化することも難しい。『単独行動』スキルを持っていればその限りではないだろうが、それでも限度がある。

「だが、三騎に加えて元々のサーヴァントで四騎だろ？ それに、さっきの話が確かならもう一騎も既に手中に収めているって話になる。有り得るのか、それは？」

カウレスが立ち上がって叫ぶ。サーヴァントとマスターはまさに一対、比翼の存在だ。

それを破り、しかも五騎との契約など正気の沙汰ではない。そもそもそれを実行しようとするれば、その前に全ての魔力が枯渇して滅ぶだけだ。

「確か、彼は大聖杯から魔力を得ていると言っていました。大聖杯へ接続すれば、溜め込

んだ魔力だけで充分に賄えるでしょう」

「つまり——我々がホムンクルスたちを魔力供給に使ったような、魔力経路の分割が」

ゴルドの言葉にルーラーは頷いた。大聖杯に全てを預けている訳ではないだろう。マスターとしての権利、つまり魔力を流すか流さないかの根元にあたる権利は、シロウが有しているに違いない。

「……天草四郎、というのは極東の聖人ですね。アーチャー、説明してくれますか？　さすがに私はそちらまで詳しくなくて」

フィオレの問い掛けに、アーチャーが口を開いた。

「分かりました、マスター。天草四郎時貞。今から五百年ほど前——極東日本、島原という名の地区において大規模な叛乱の首謀者となった少年です」

「少年？」

「ええ。何しろ享年は十七でしたから」

十七、という年齢にカウレスがぎょつとする。まさか、自分と同年代の英霊とは。

アーチャーは、天草四郎時貞という男の簡単な歴史を語った。

華々しい戦果を挙げた訳ではない。大規模な叛乱、といってもその少し前まで日本はいわゆる様々な国がひしめき合い、凌まじい戦いを繰り返している戦乱の時代だった。

天草四郎が生誕したのは、その戦いが終わってようやく日本が一つの国に統一した少し

後の話だ。

通常より遙かに重い年貢、天候不順による不作、日本で認められていない異教の信徒たちの弾圧——それらが重なり合い、実に最悪のタイミングで火がついた。

火薬庫と化していた島原の叛乱は、農民たちのものとしては史上最大の規模となった。数は三万七千人、その内二万人ほどが非戦闘員だったとも言われている。

「そして、彼らを統率していたのが、救世主と謳われた天草四郎時貞です」

十六歳の平凡だった少年は、生まれついて様々な奇跡を成し遂げたという。盲目の少女の目を癒やし、水面を歩き——そして神を信じ、教えを広めた。

あちこちで同時多発的に起こった叛乱が一つに纏まり始めたとき、天草四郎が指導者として擁立されたのも、無理はない。それほどまでに彼らは、神を——天草四郎を、信じていたのだ。

「ですが、彼らの快進撃はすぐに止まります」

原城に立て籠もった彼らは、当初こそ血気に沸く幕府軍を討ち取る戦果を挙げたものの、兵糧攻めによって陥落。三万七千人は、たった一人の内通者を残して全てが死した。

英雄ではなく、聖人でもない。奇跡を起こす力を持ちながら、結局誰一人救うこともできず、無念の内に死んだ少年だ。

「……お話を聞く限り、そう恐ろしいサーヴァントではないようですけれど」

「そうですね。純粋な力量という点では、英雄である我々に大きく劣るでしょう。……私は、だからこそ恐ろしい」

アーチャーは礼拝堂でサーヴァントたちを前に、何の躊躇もなく己の正体を告白したシロウを思い出す。ほんの一つ、何かが食い違えばほぼ全サーヴァントが敵に回るというあの状況下で、彼は全く何の動揺もなく――微笑みすら絶やさなかった。

あの場に居たのは、ルーラーであるジャンヌ・ダルクを始めとして、ケイローン、アヴィケブロン、アキレウス、アタランテ、カルナ。……彼のサーヴァントであり、共犯者である「赤」のアサシンは除いたとしても、彼に掛かっていた重圧は生半可なものではないはずだ。ケイローンがルーラーの言葉に同意する。

「そうですね。私も……あのルーラーが恐ろしい、と思いました。力や技ではない、ただただ純粋にあの信念が恐ろしい」

強固、どころではない。究極の密度と質量を持った黒洞天体。信念だけで全ての人間、全ての英霊たちを引き摺り込む怪物だ。

狂っている訳ではない。狂っているだけでは、あれほどの信念を持ち得ない。

自分を神の如く慕う三万七千人を虐殺された指導者、天草四郎時貞――彼は一体、その戦場で何を見て、何を感じて、何を誓ったのか。

戦乱の歴史をひた走ったジャンヌ・ダルクやアストルフォも、数多の英雄が集った神話

の時代を生きたケイローンも、それだけは分からなかった。

「……ひとまず、それは置いておきましょう。問題なのは彼が何を謀_はっているか、です」
ルーラーの言葉に、黒_{くろ}のアーチャーが同意するように頷いた。

「シロウは大聖杯を使い、何かを行おうとしています。復讐などといったものでないことは確かです。歴史の改変——死者の蘇生。そういうものでもない」

「あの。どうしてそれが分かるのです？」

フィオレの問い掛けにルーラーが答える。

「人類の救済、と彼は目的をハッキリと口に出していますから」

「救済だと？ よくもまあ馬鹿馬鹿しい——」

ゴルドが鼻で笑うのを見て、赤_{あか}のセイバーが嘆息する。

「バカはお前だ、太っちよ。その馬鹿馬鹿しい願いを簡単に叶えてしまうのが、あの聖杯だろうがよ」

「なっ……!!」

憤慨するゴルドを宥_{なだ}め、フィオレが反論する。

「でも……確かに、おじ様の言う通りだと思えます。あの大聖杯は、突き詰めれば単なる魔力の塊ではありません。確かに、大抵の願いを叶えることはできましょう。あらゆる

理論、あらゆる過程を省略してただ結果だけをもたらすことが可能です。逆に言えば、省略するべき過程が必要になるはずです」

ジークがふと、思いついたようにルーラーに尋ねた。

「……では、人類の救済を願ったところで意味はないのか？」

「そうですね。仮に、大聖杯にただ『人類を救済してくれ』と願った場合——願った者に具体的な手段が存在しない限り、そこで停止するでしょう。方向性が定まらない以上、願いはどこへも到達できない」

「なら、シロウという男が具体的な手段を識っていた場合は？　それが、本当に救済であらうとかならうとだ」

ジークの問い掛けに、ルーラーが虚を衝かれたように息を呑む。

「その場合は……実行される、と思いますが」

「でも、そんな手段はないんでしょう？」

フィオレの言葉に、カウレスが頭を振った。

「姉さん、問題じゃないと思うぞ。問題はさ、そのシロウってのが人類の救済に関する具体的な方法を識っていると思ひ込んでいる場合だろ」

「え——」

フィオレはカウレスの言葉の真意が分からず、きょとんと首を傾げている。

「よろしいですか、マスター。先の話によれば、あの聖杯は具体的な手段を願望者が識らない限りは願いを叶えられないのですね？ 逆に言えば、その手段さえ識っていれば聖杯は起動するということ。そして問題になるのは、シロウが具体的な手段を識っていて、尚且つその手段というのが人類にとっての厄災のようなものである場合です」

具体的な手段を識らないというのであれば、話はそれで終わる。

だが、その手段をシロウ・コトミネが認識していた場合——それが、大多数の人類にとって識った手段であっても、聖杯は起動してしまう可能性がある。

「……つまりこういうコトか？ 自分を世界一の魔術師にして欲しい、と願う男がいて。その男が考えたのが、自分より実力が上の魔術師を皆殺しにするみたいなしようなない手段だった場合、あの聖杯は叶えちまうってことか？」

獅子劫の言葉に、一同が沈黙する。「赤」のセイバーがやや引いた表情で尋ねた。

「マスター……もしかして、それが願いだったのか？」

「……違うぞ。そのドン引いた表情は止めれ。で、どうなんだよルーラーさん」

「理論的には、そうなります。もちろん、その場合はそれ以外に手段を識らないというのが前提になります」

そうして、ふとジークは悪い出した。

「ルーラー。貴女が召喚されたということは——」

そう。ルーラー召喚の条件は聖杯戦争によって世界への危機という可能性が発生したと
きだ。あのシロウという男が大型杯を奪い、人類への救済を願っていて——その救済手段
が、即ち世界への危機となるのではないか。

「……そう、でしょうね。いずれにせよ、そもそもルーラーがサーヴァントを使役し、聖
杯によって願望を叶えようということ自体、最早議論の余地なく道を外れた振る舞いです」

「では——」

「ここに集ったマスターとサーヴァントで、彼らを止める。……異論はありませんね？」
ユグドミレニアの魔術師たちは頷いたが、実際にマスターであるのはフィオレだけだ。
カウレス、ゴルドのサーヴァントは既に消滅している。手助けには成り得ない。

獅子劫界離は——。

「ま、シロウ・コトミネ……じゃなかった。天草四郎を止めるってのには俺も賛成だ。こ
ちらとしても、そうしなきゃどうしようもないからな。セイバー、異論はないだろ？」

「赤」のセイバーは少し、拗ねたような目で首肯した。

「ねーよ。そのセイバーと決着をつけたかったが、この状況じゃどうしようもねえだろ
うしな……それに、連中がムカつくのも確かだし。特にアサシン」

「では——」

フィオレの言葉に、獅子劫が頷いて同意を示した。

「少なくとも、連中を倒すまでの間は一時的共闘を結ぶということで構わないぜ。何だつたら、自己強制証文自己強制証文とは、魔術師の社会におけるもつとも強力な呪術契約だ。生前死後、契約内容によっては子々孫々に至るまで、互いの魂を縛り付けて執行することができる。を結んでも構わないが……無論、お互いにな」

自己強制証文とは、魔術師の社会におけるもつとも強力な呪術契約だ。生前死後、契約内容によっては子々孫々に至るまで、互いの魂を縛り付けて執行することができる。

獅子劫の提案にフィオレはしばし考え、首を横に振った。

「そこまでやらすとも良いでしょう、貴方を信頼します」

「黒グレイのライダーはジークの服の袖をくいくいと引つ張った。振り向いた少年に、ライダーは囁く。

「ね、ね。キミは……本当に戦うの？」

「ああ、戦う」

ジークはきつぱりと、強い口調で告げた。正直に言って、シロウという男が陥はかばからした課など、彼にとつてはどうでもいいコトだ。……その過程で、既に幾多もの命が失われた。

ホームンクルス、サーヴァント、マスター——誰もが散っていった。納得すくくの者もいただろうし、無念のままに朽ち果てた者もいるだろう。

その復讐、などと言うつもりはない。そんな資格は己にあるはずもないし、第一シロウは復讐すべき相手ではない。

だが、どうあれ自分は権利を得た。マスターとしての権利と、サーヴァントとして戦う権利をだ。ならば、この聖杯大戦に最後まで関わらなくてはならない。己の命を代償に支払うことになっても——それが、義務というものだろう。

「……キミは戦わない方がいいと思うけどなあ」

「黒」のライダーは、何故かふて腐れたように呟く。「赤」のセイバーが呆れた表情で呟いた。

「戦わなくてどーするんだよ、セイバーだろコイツ」

「セイバーじゃないの、彼はボクのマスターなんだよ。マスターはジークフリートという英雄じゃない。だから、あんな危険な目にはもう遭わせない。……ああいうのは、もう、ホント懲り懲りだ」

その言葉に、先ほどのように全員が沈黙した。ただし、今回の沈黙は先ほどのそれとは別物である。

やがて、おすおすと「赤」のセイバーが指摘した。

「あのさ、お前、今、真名、バラさなかった？」

その言葉に、「黒」のライダーは首を傾げて呟く。

「あれ？ 知らなかったっけ？」

「知らねえよ！ 言っちゃ悪いがバカだろ！ バカだろお前！」

「……今のはさすがに弁護の余地がありませんね」

「黒」のアーチャーが嘆息し、ゴールドが「……やはり私の作戦は間違ってたかもしれない」と嘆き、カウレスが頭を抱え、フィオレは遠い目をした。

「黒」のライダー。その、今のはさすがにヒドい」

ルーラーの指摘と一斉に向けられた非難の視線に、さすがの「黒」のライダーも萎縮した。両手の指を絡ませ、悄然とした態度で己のマスターに顔を向ける。

「あ、う、えと……こ、ゴメンね？」

「うん？ いや、別に構わないが。バラされたところで、どうとなるものでもない。というよりもだ。「赤」のセイバー、俺の宝具の名で分からなかったのか？」

あ、と「赤」のセイバーが口を押さえた。どうやら、忘れていたらしい。

「え？ あ、いや。……戦いの最中で気付かなかったんだ！ ああそうだな、こうして落ち着いて考えると確かに聖剣の名が出てた。クソ、オレの方がアホに思えてきた」

「ちなみにセイバー、俺は気付いていたぜ？」

「うっせえよマスター、殴るぞ」

得意満面の獅子劫を、「赤」のセイバーが睨み付けた。

「それよりもライダー。悪いが、俺は戦うぞ。マスターとして、君と共に戦うと決めている。それが君への恩であり、ルーラーへの恩を返すことになるからだ」

その言葉にルーラーが複雑そうな表情で俯き、ライダーは露骨に頬を膨らませて不満を表明する。

「……むー」

ただ——とジークは左手を見る。黒い、異質な令呪が甲に刻まれている。そして、肌の一部が浅黒く変色しつつある。先ほど確認したが、胸部と背中にもこの色が広がっているらしい。……問題なのは、残り一画を使用した後、何が起こるかだ。

令呪によって殻を纏う直前に感知した、恐ろしいもの。あれは、致命的な何かであることは間違いないだろう。そもそも、現状は令呪の援護（サポート）があるとはいえ、あまりにも奇跡的な状況なのだ。

令呪を使い果たせば、死ぬとなっても不思議ではない。だが……それでも、使うのだからなどジークは自分を分析する。使うことで、彼らの助力になるのであれば。喜んで、最後の一画を消費するだろう。

皮肉だな、とジークは思う。生きるためにあの供給槽から脱出した自分が、いつのまにか死ぬことを考え、受け入れようとしているとは——。

「……ジーク君、ヘンなこと考えていませんか？」

不意を衝くようなルーラーの言葉に、ジークは慌てて首を横に振った。ならいいですけど、と言いつつもルーラーは目を細めて少年を睨む。

自身のサーヴァントと為ったライダーはともかくとして、何故かルーラーもジークと出会ってからずっと、この聖杯大戦から自分を遠ざけたがっていた。

けれど、それでも自分は此処に居て、戦うことを決めてしまった。仕方のない運命であり、何より自分の意志なのだ。

ともあれ全員の意思確認が終わり、フィオレが次の問題を提示した。

「それでは、これからについてです。まず、彼らはどこへ向かおうとしているのか。ルーラー、貴女なら分かるのでしょうか？」

生憎と、どルーラーは首を横に振った。

「空中庭園の能力で大聖杯を剥ぎ取り、強奪するということがそもそも想像を超えています。人類の救済を行うために聖杯が必要、というのは分かりますが——どこへ向かうかは、私にも分かりません。ただ、追跡は可能です。私は召喚の関係上、聖杯と特別強く結びついていますから。大まかな場所が分かれば見逃すことはないでしょう」

そもそも空中庭園自体にも魔力があり、更に空中庭園に待機している「赤」のサーヴァントたちもいる。追跡する材料には事欠かないという訳だ。

「彼らは空中庭園で移動しています。さすがにあれだけの巨大さであれば、動きは鈍重。距離だけを考えるなら、追いつくのは容易ですが——」

そこで、ルーラーが口ごもる。それもそうだろう、追いつくことは彼女の言う通り簡単だ。だが問題は、追いついてからどうするかだ。空中庭園は文字通り、空の存在である。地上からは、いくら追いついても辿り着けない。跳躍——令呪を使えば問題はないだろうが、無駄な消費も良いところだ。

「ボクのヒポグリフだと、多分行けると思うけど？」

「サーヴァントを全員連れて乗り込めますか？」

「あ、それ無理。戦車までは引っ張ってきてないし。後ろに一人が限界かな。そしてボクはマスター以外とはタンデムしないと決めているし」

「キメ顔でバカなこと言ってるじゃねえぞ、駄目ライダー」

照れ笑いをする『黒』のライダーに、『赤』のセイバーが冷えた瞳で指摘した。

「どっちも、宝具で長時間の移動は難しいだろ。魔術にしても、それほどの大人数を移動させるには適してないっつーか費用が高むし、術者の負担が大きすぎる。普通に飛行機をチャーターすればいいんじゃないか？」

「んー……その弟クンの言うことも一理あるにはあるんだが」

「その言い方やめろ、オッサン。で、何が問題なんだ？」

オッサン、と言われた獅子劫は顔を曇めたものの、『赤』のセイバーが笑いを堪えているのを見て、黙殺を選択した。これ以上この話題に踏み込めば、自爆するだけだ。

「向こうには、アーチャーがいるんだよ」

「あー……そりゃそうか、そりゃそうだよな……」

その答えに、カウレスが頭をガリガリと掻いて呻いた。

「赤」のアーチャー、アタランテ。ギリシャ神話有数の女狩人である彼女が、飛来して接近するサーヴァントたちに気付けば、当然迎撃を行うだろう。

「……そりゃそうだな。クソ、百歩譲って近付くことはできてもそこから問題か」

アーチャーという名の砲台がある限り、空中庭園には飛行機ですら接近すれば危ういだろう。加えて、「赤」のライダーの持つ三頭立ての馬車も、空を自由自在に飛ぶことができる。

「飛行機でサーヴァントの攻撃に耐え得るものはまず無いわな」

「でも——それしか方法がありません。何か、余程の魔道具があれば別ですが、そのように大がかりな飛行用の道具など、天文学的な価格でしょう」

付け加えるに、魔術を使ってもアーチャーからの攻撃を防ぐことは難しい。魔術も科学も、サーヴァントの凶悪な力の前では同レベルの存在でしかない。

「安い分、飛行機の方がまだマシかな」

「……」赤のアーチャーへの対策は、考えておきます。まずは、飛行機ですね」

フィオレの言葉で、ひとまず次への行動は決まった。飛行機にせよ、それ以外にせよ、

空を飛ぶ手段を探し——空中庭園に追いつかなければならない。

「私たちは、これで休ませて戴きます。他の血族への連絡もありますので。皆さん、休みたい方は空いている部屋を好きに使って戴いて構いません。それでは、お休みなさい」

フィオレは「黒」のアーチャーと、カウレスを伴って会議室から退出した。崩れた城壁から、微かな橙色の光が滲み溢れている。

「……もう、朝ですね」

長い一日は、まもなく終わりを迎えるようにしていた。だがフィオレに休んでいる暇はない、世界各地に散っている血族に現状を知らせ、次代ユグドミレニアの長を早々に決めなければ。

本来ならばダーニツクの一声でどうとでも成っただろうが、彼は後継者を決めることもできぬままに死んだ。大聖杯まで後一步のところまで辿り着きながら、サーヴァント諸共に滅ぼされたらしい。

ユグドミレニアの歴史は、そのままダーニツク・プレストーンの歴史だった。良くも悪くも、彼は一族全てを引っ張るだけの能力とカリスマがあった。

それは無論、欲だったのかもしれない。根源に辿り着く、あるいは栄光、名譽、一度は地に堕ちたユグドミレニアの復讐。

果たして、自分にそれが可能だろうか？ いや、そんなことを考えても始まらない。ま

ず、やるべきことをやらなければ——しかし、最初は何から——。

「あー、姉さん。飛行機はどうすんだ？」

「購入するだけの資金はあるから、問題ないと思うけど——」

「そうじゃなくて、対策」

「あら、そっち？ そっね……アーチャー、貴方は何か策があるのかしら」

「アーチャーとライダー、どちらか一人なら対策は可能です。単純ですし、相手もこれは読んでいるでしょうが——」

そう前置きして、『黒』のアーチャーは考案した『対策』を披露した。それはもう、呆気にとられるほどに単純なものだったが、確かに効果的だ。

そして——それでは、絶対に一人しか捌けないという言葉も事実だった。残り一人。その対策さえ考えることができれば、あの空中庭園に追いつけるだろう。

問題はそこから先だ。

空中庭園に追いついて、果たして今のメンバーで立ち向かうことが可能かどうか——そこからは目を伏せる。『赤』のセイバー、という稀少な英雄はこちら側につけてくれた。だが、相手の陣営は最悪だ。

ギリシャ神話最高の女狩人、アタランテ——『赤』のアーチャー。

古代インドの大叙事詩にその名を刻んだ大英雄、カルナ——「赤」のランサー。

トロイア戦争最高にして最大の英雄、神と英雄の子アキレウス——「赤」のライダー。
未だ謎、空中庭園での戦いでも顔を出さなかった誰か——「赤」のキヤスター。

アッシリアの女帝。最古の毒殺者にして大魔術師、セミラミス——「赤」のアサシン。
そして——道を外れたルーラー、この聖杯大戦屈指の異端者、天草四郎時貞。

全員が全員、あまりに名の知れた英傑たちだ。それに加えて、フィオレにはもう一つ、
頭の痛い問題がある。

「マスター。今はただ、お休み下さい。血族への連絡は、明日以降でもよろしいかと」

「え？ でも……」

「アーチャーの言う通りだぞ、姉さん。血族への連絡なんぞ無駄だって。助力になる訳でもないし、せいぜい当てこすりだの何だので心が磨⁺り減るだけだ」

「……そうかしら」

そうだ、という二人の同意にフィオレはあやふやな思考のまま頷いた。アーチャーがそう言うのであれば、まず間違いはないと思う。

「では、私はこれで。ええと、おはようございます……じゃなくて、おやすみなさい」

フィオレは軽く頭を下げ、私室のドアを閉めた。見送ったカウレスは、「黒」のアーチャーに問う。

「アーチャー、部屋の中に入らないのか？」

「女性のマスターですから、プライバシーを尊重した方がいいかと思ひまして。基本的に、乞われない限りはここで霊体化しています」

さすがケイローン、とかウレスは内心で拍手を送る。野蛮なケンタウロス族の中で、ほぼ唯一の例外と言われていただけのことはある。

「ところでカウレス殿。一つお尋ねしたいことがあるのですが」

「俺に？ 別に構わないけど、何？」

正直、ケイローンの問いに応じる自信などない。哲学的な疑問を吹っ掛けてきたらどうしよう、などという些かズレた不安を他所に、ケイローンが静かに問うた。

「我がマスター、フィオレ様は貴方の目から見てユグドミレニアの長に相応しいですか？」

それは、静かな言葉で。

そして、どんなでもない爆弾だった。

「な……!?」

色々と有り得なさすぎて、カウレスは一気に混乱の渦へと叩き込まれる。嵐のアーチャー、賢者ケイローンが——よりによって、主の能力への疑念を抱くとは。

「ま、待て。待ってくれ、アーチャー。アンタ、今のは——」

慌ててカウレスは、フィオレが閉めたドアを見る。黒のアーチャーは落ち着かせるように、彼に告げた。

「心配なさらずとも、マスターは眠っています。……ですが、不安ならば場所を変えませんが」

「……あの、俺疲れてるんだけど」

カウレスもカウレスで自身のサーヴァントが減ばされ、赤のパーサーカーの強烈な一撃に巻き込まれ、と大変な一日だったのだ。

だが、アーチャーは微笑んで告げた。

「私の見立てでは、カウレス殿はまだまだ元気な様子。少し話したいだけなのです、お願いできますか？」

お願い、とはこの場合実質的な強制である。カウレスは頭を掻いて、嘆息した。実際の話、アーチャーの見立ては決して間違っていない。カウレスだけは、まだ体力が残っている。

「……くそ、分かったよ。行こう、アーチャー。とりあえず、見張り台なら落ち着いて話ができるだろ。もう明け方だしな」

疲れているのにまったく——と、愚痴を零しつつも疲れを見せない足取りで、カウレス

はアーチャーと共に歩き出した。

SSSS

乱雑に積み重ねられた本は、資料の山だ。ペンを走らせながら、彼は書斎から一步も出ずに作業を続けていた。英霊となって便利なのは、食事や排泄を必要としない点であると作家たちの間では一致している。

たまにこうして、現実には召喚されるという幸運もある。だが、これほど面白い事態に付き合うことになった作家は、中々に存在しない。

執筆を一旦中断し、立ち上がる。そろそろ、マスターの語りが終わった頃だろう。サーヴァントたちが反発し、叛乱を起こす可能性もあったが――恐らくそうはなるまい。

案の定、庭園に出てみれば三騎のサーヴァントは特に何をするでもなく、単調な流れる風景を見ていた。

「やあ、皆様！」

「赤」のキャスター、シェイクスピアが陽気に声を掛けるとライダーとアーチャーはし

かめ面で応じ、ランサーは表情一つ変えずに、ただ軽く首肯した。

「……お前、知ってたのか？」

ライダーがふて腐れた声で告げる。キャスターは大仰に両腕を広げ、声高らかに謳う。

「我らは夢と同じもので紡がれ、その儚き一生は眠りに始まり眠りに終わる………という訳でええ、もちろん知っております」

「あれは、イカれていいるのか？」

「さて、どうでしょう。正気が狂気か、そんなことは些細な問題では？ 我らのマスター

——天草四郎時貞は苦難と絶望の道のりを歩み、あの結論に至ったのです。ならば、吾輩は万難を排してそれを叶えるだけでして」

「キャスター。汝の頭がおかしいのは分かっているが、それでも敢えて問おう。何故、シロウに協力する？」

アーチャーの問い掛けに、キャスターは口角泡を飛ばすような勢いで叫んだ。

「それは無論、面白そうだからに決まっていますではありませんか！ 何しろ人類救済ですよ、誰かを救いたいなどという矮小なものではない。全人類、この世界に住む六十億の救済。しかも、彼はただの聖人などではない。善行を積み、祈るだけで救われようとした面白みのない連中とは訳が違う！ 彼は戦い、そして敗北し——無惨に全てを奪われた！

そう。彼は恨んでいるはずです！ 三万七千人を皆殺しにした統治者を！ それをただ見

過ごした人々も——だが彼は恨まない！ そればかりか、彼らすら救済の対象だ！ 全人類を救うということは、そういうことでしょう。それを彼も理解している！ その苦悩、その煩悶、何たる悲劇！——それ故に——彼はひどく面白い。ならば、退屈なマスターなど放逐して当然でしょう。吾輩はマスターに仕える者ではなく、物語に仕える者故に！」

ここまでか、とアーチャーとライダーは絶句する。キャスターの物語に対する入れ込みは、他者のそれを過かに凌駕している。

「赤」のキャスター、シェイクスピアのこれは粉れもない本心だ。つまり、ただ退屈だというだけでマスターを見限り、ただ面白という理由で仕えているということ。

許せない、と彼を弾劾するのは簡単だ。だが既にマスターを裏切っている、という点ではアーチャーもライダーも同じ。

そも、彼は英霊のカテゴリでも極めて異端——作家だ。机上で物語を紡ぐことで、その信仰を得たという「怪物」だ。ただ勇と力と智で、その名を轟かせた英雄たちとはあまりに隔たった存在だ。彼は弱い、キャスターとしての力も皆無に等しい。多少なりとも戦闘に心得のあるマスターならば、彼を上回る力を持つだろう。

にも拘わらず、彼は己が信念を貫こうとする。気高くもなく、立派な振る舞いであるとも言えない。どちらかと言えば、妄執に近いものだ。賞賛する訳ではないが——ここまで至ると、認めざるを得ない。

「ともあれ、これで我ら『赤』は再びの結束を取り戻した訳です。バーサーカーは討ち死にしましたが、まああれほどの活躍をしたならば、充分でしょう。問題はセイバーですが――」

『赤』のセイバー。突然乱入してルーラーたちの危機を救い、そのまま逃亡したサーヴァント。シロウのルーラーとしての特権（モブ）でようやく、彼女の真名が明らかになった。

円卓の騎士、アーサー王伝説に終わりをもたらす叛逆の英雄——モードレッド。

「あれは、恐らく、『黒』の側につくか、『黒』のアサシンは未だ姿を見せぬ以上、ひとまず省くとして——向こうはルーラー、『黒』のアーチャー、『黒』のライダー、それから、『黒』と『赤』のセイバー。五対五だな」

「アーチャー。吾輩を数えましたか？」

「数えておらん。数えて欲しいか？」

「いいえ。むしろ、吾輩を数えなくて良かったと。サーヴァントとしては、あまりに貧弱ですからな、吾輩！」

胸を張るキャスターに、アーチャーは「それは威張ることか」と呆れて溜息をつく。それを見て、沈黙を守っていたランサーが口を開いた。

「誇れるものは人それぞれだ。……このキャスターにとって、武器を持たず、力も持たぬことこそが誇りなのだろう。それらはこの良く回る口と疾走するペンが代行するという訳

だ」

「大英雄カルナに己が心を分析されるとは、光榮の至りですな」

キヤスターは慕しく、かつ仰々しく頭を下げた。しかし愉快そうな笑みを浮かべていたせいで、紳士的な挨拶も台無しだった。

SCENE

梯子を上ると、ミレニア城塞の見張り台に辿り着いた。周囲は石壁に囲まれ、矢を放つための鉄閘がどこどこに空いている。

普通の城攻めともなれば、ここから城門へ密集する敵兵たちを射貫くことができただろう。しかし、残念なことに相手はサーヴァント——歴史や神話に名を刻む英雄たちだった。

……それでも、赤のバーサーカーがまさかあれほどにひどいとは思わなかったが。

カウレスはやや敵意の籠もった視線で、黒のアーチャーを見た。少年の頭には今、疑念が渦巻いている。この城塞に逗留している全ての人間、サーヴァントが敬意を払う大賢者ケイローン、そんな彼がよりにもよってダーニックの後継者たるフィオレの力に異を

唱えたのだ。

——ユグドミレニアの長に相応しいですか？

当たり前だ、どカウレスは思う。彼女以外に、誰が相応しいと言うのか。反発を抑え込みつつ、冷静な声で彼は尋ねた。

「それで、アーチャー。姉さんが何だった？」

「……勘違いされていていらっしゃるようですが、私は、フィオレ様を自身のマスターとして認めております。彼女が死ぬと言ったならば、喜んでそれに従いましょう」

と、苦笑しつつアーチャーはそう告げた。いかに冷静であろう、と心がけていても滲み出る敵意は隠せなかったらしい。

ともあれ、アーチャーは己の姉をマスターとして認めているという言葉に少しか肩の力が抜けた。

「……なら、さっきの言葉の意味は何だよ。俺の考える限り、ダーニツクおじさんの跡を継げる実力を持っているのは、姉さんくらいしか居ないぞ」

意外、と言えば意外ではあるがフィオレ以外の有力候補はゴールドだ。セレニケ、ロシエあたりも候補としては一応挙がっていた。だが二人が学んだ魔術は、些か知名度が低いこ

ともあり、あくまで候補止まりだった。……まあ、今更言っても仕方のないことだ。二人共に、死んだのだから。

カウレスは論外だ。フィオレは姉であるということ抜きにしても、実力品位共に完璧だ。……少なくとも、ダーニツクを失ったからといってそうそうにユグドミレニアが傾くことはない。

「……確かに、実力という面では完璧です。ですが、精神面では？」

「姉さんが、魔術師を嫌がっているかもってこと？ それはない。……いや、面と向かって問いただした訳じゃないけどさ。魔術自体を嫌ってる訳じゃないし」

「そちらではなく、フィレオ様……私のマスターは、はたして人を殺す覚悟があるのかどうかという点です」

瞬間、カウレスは言葉を喉に詰まらせた。

アーチャーの顔に、わずかな陰り——憂いているらしい。

「な、何だよそれ。……あるに決まってる。実際、獅子劫界離と戦っただろ！」

「ええ。マスターの戦いはその全てを目撃できた訳ではありませんが、古強者の魔術師を相手に、しっかりと戦っていたと思います。ですが、私はこう思うのです。もしもあのとき、マスターが勝利したとして、果たして平気でいられたでしょうか」

「それ、は——」

言葉が出ない。上手く、口に出せない。もしあのとき、姉が人を殺していたとしたら。

仮令それが敵であったとしても。彼女は耐えることができただろうか。

「魔術師であろうという心と、マスター自身の心。それがどうにも剥離しているように思えるのです。カウレス殿、貴方ならばあのとき割り切ることができたでしょう。戦い、殺したことを魔術師としての宿命だと認識できたと思います。ですが——」

「姉さんは……それが、できないと？」

——薄々であるが、カウレスもそれには気付いていた。

甘い、あるいは優しい……そういうものとは少し違う。魔術師としての道を歩むことに固執するあまり、心のどこかが悲鳴を上げてでもそれを無視している。

何故なら、それは魔術師として相応しくない認識だからだ。フィオレは優秀な魔術師故に、そういうものを抑え込んで魔術師たることができる。

けれど、それは魔術師として論理で動いているだけ。頭に組み込まれたプログラムでそう判断しているだけだ。

「卓越した魔術師である故に、誰も気付かなかったのでしょうか。マスターは——おおよそ信じ難いほどに、人間らしい倫理観を持っています」

そう。人間らしい倫理観。傷害や殺人は許容すべき行為ではなく、他者を騙し、唆すことは許されざる行為。

無論、魔術師として必要に迫られない限りは殺人などしない。だがそれは、突き詰めれば必要に迫られたならば殺人も当然視野に入れるということだ。

どんな木っ端魔術師であれ、そういう状況に至れば人の法や倫理を外れるという覚悟を決めているものだ。カウレスですらそうだ。少なくとも聖杯大戦に加わった時点で、カウレスはあらゆる殺人や違法行為を許容している。

無論、殺されたくない。虫のいい話ではあるが、殺されたくないなどない。だが、それは生命体としては当然の心理であり、少なくとも非難される筋合いはない。

「私見ですが、マスターは幼い頃からかなりの文字が読めたのではないですか？」

「あー、一般に比較するとかかなり早かったって親から聞いたことはあるな」

「だからでしょう。マスターはどこか、物語を読むようにこの世界を生きている。卓越した魔術師。までならばそれでも良かった。けれど、長として振る舞い出せば——すぐに心が軋み、歪み出すのではないでしょうか」

ユグドミレニアの長として振る舞うという状況、それは時に非情な決断を強いることにもなるだろう。例えば、血族の誰かを切り捨てるとか。

最初は問題ないだろう。独り合点するような真似をフィオレはしない、長老たちの意見を聞いて考えを整理し、きちんとした思考で裁定することが出来るはずだ。

だが——その内に、軋み始めるだろう。何の罪もない赤子を殺害し、それを材料として

魔術理論を発展させた魔術師が賞賛され、魔術を目撃した人間を見逃しただけで罪としないければならない、魔術師と人間との矛盾に苦しむだろう。

けれど、と反論しようとしたとき。カウレスは不意に過去を思い出した。姉があまりにも痛ましいせいか、極力思い出すまいとしていた忌まわしいエピソードだ。

「……どうしました？」

アーチャーの問い掛けに、カウレスは少し迷ってから全てを打ち明けることに決めた。彼は導く者だ。姉のためにならないことは、決してしないだろう。

「昔さ、俺たちの家で犬を飼ってたんだ」

「犬、ですか？」

遠い遠い、遙か彼方での出来事。三代前ならメイドが掃除していた広い屋敷は、母が召喚した低級霊が掃除するようになっていた。だが、それでも屋敷そのものが朽ちていくのは防げない。

あちこちが綻び、零落した雰囲気を感じさせる屋敷で二人は生を受け、そして育った——その際の、些細な出来事だ。

「ああ。親父がどこから拾ってきた大人しい野良犬さ。親父はそいつを使って、降霊術を学ばせるつもりだったんだ。ところが、親父は急な用事ができて、出掛けちゃった。それで、仕方なく俺と姉さんが世話をすることになった」

何となく、エピソードの結末を理解したのか。アーチャーは一言も口を挟まず、無言で頷きを返した。

「鈍臭い、呑気な犬だった。姉さんは殊の外熱心に、そいつの世話をしていたよ。不自由な足のままで苦勞しながら全身を洗って、愛用の櫛で毛を梳かしてやっていた。自分が使っていた櫛だけ？　そして、鞍の本を買い、餌を吟味していた。何でそんなことをするのか、と俺が問い掛けたら姉さんは不思議そうな顔をして答えた」

「だって、ベットには愛情を持って接しなきゃならないでしょう？」

息を一つついて、カウレスは続けた。

「俺ですら分かっていることを、姉さんは分かっていた。だけど、俺には何も言えなかった。フン、事態を先送りにして悪化させただけだ。知っていたのに伝えなかったのは本当の本当に最悪だ」

「殺されたのですね。それも、恐らく魔術の実験台として——」

カウレスは頷き、苛立ち紛れか石壁を軽く蹴った。

「一週間は経って、すまんすまん」と笑いながら親父が帰ってきた。親父は犬を引っ張ると、俺と姉さんの前で降霊術による憑依が失敗した場合を見せてくれた。皮膚がめくれ上

がって絶叫する犬を見て、姉さんは凍り付いた顔のまま、車椅子の肘掛けを手が白くなるほど握り締めていた」

耳を塞げば、叱られることが分かっていた。泣き出せば、やはり叱られる。だから、ただ見つめていた。

「一分くらい経って、犬が死んだ。低級な悪霊を憑依させて、肉体を暴走させたんだ。気をつけなければお前たちもこういう目に遭うぞ、と親父が言った。で、姉さんは微笑んで『はい、分かりましたお父様』と答えた。姉さんは優秀だから、その状況での最適解を簡単にこなしてみせたんだ」

まったく忌々しい、と吐き捨てるようにカウレスは呟いた。

「その後、マスターはどうしたのですか？」

「姉さんは、魔術師としては優秀だったからな。その場では泣きもせず、吐くこともなかった。ただ、その後二人でそいつの為に墓を掘って、埋めてやったときにごめんさい、と言いながらわんわん泣いた」

フィオレはそれきり、犬については何も語らなくなった。犬に関わる物は全て捨てた。幸いと言うべきか、父親が目の前で何かを殺したのは後にも先にもその一度だけだ。

そして、両親のどちらも彼女の変化に気付かなかった。多分、フィオレの才能に目を奪われていたのだろう。

彼女がしばらくの間、肉を食べられなくて吐き続けていたことも。一人では眠れなくなり、カウレスが手を握り締めなければならなかったことも。そういうことには、何一つ気付くことなく、彼女が降霊術で失敗をしなくなったことを賞賛した。

彼女が失敗をしないのは、心の底から恐れたからだ。

失敗して犬のようになるのではなく、失敗して犬を思い出すことがただ恐ろしかったらしい。

多くの人間の多くの人生におけるトラウマと同様、これはフィオレの人生にさしたる影響を与えなかった出来事だ。

フィオレは狂気に走るでもなく、悩んで自傷するでもなく、ただ普通に魔術師として学び、生き続けた。肉を食べられるようになったし、一人で眠れるようになった。

カウレス自身もなるべく思い出さないようにしていたせいも、すっかりと忘れていた出来事だった。

けれど、もしも。もしも、フィオレがああの出来事を忘れられずに居たのなら。そして――未だフィオレが、あの出来事を胸に刻んでいたならば。

「……姉さんは、耐えられないかもしれない」

「私が不安なのもそれです。私の去った後の話ということもあり、迂闊に誰かに明かす訳

にはいきませんでした——現状、空中庭園への追跡が開始されれば、誰かにこれをお伝えする余裕がありませんから」

確かに彼の言う通り、フィオレがユグドミレニアの長になるかどうかは、この聖杯大戦以降の話だ。戦争が終われば、『座』に帰還するアーチャーには無関係の事柄ともいえる。

「何で、わざわざこんなコトを？」

「当然でしょう。迷う者を導くことが教師の務めです。英霊になったからといって、生前からの務めをおろそかにはしませんよ」

「——む、なるほど」

さすがに数多の英雄を教導した人間——ではなく、ケンタウロスは言うことが違う。そう言えば、ケイローンもまた野蛮なケンタウロス族の中では例外的に思慮深く、穏健な性格だったと聞く。

「……だから召喚されたのかね」

魔術師たちの中で生きてきた、人間のような温和な少女には。

暴力の中で、人を導くことを務めとしたケンタウロスが相応しいと判断されたのかもしれない。

「カウレス殿。私が居なくなれば、マスターにとっての頼りは貴方だけです」

「分かっている。……姉さんにはさちんど、その辺話をつけるよ。魔術師を辞めるんだっ

たらそれで構わないし。それでも魔術師としてユグドミレニアの長になるって言うんなら……俺が少しは手伝ってやるさ」

その言葉に、黒のアーチャーは安堵したように胸に手を当てた。

「ありがとうございます、カウレス殿。……無念なのは貴方を導く時間が足りなかったことです」

別にいいさ、とカウレスは肩を竦めた。元々、彼は自分のサーヴァントではない。そこまで望めばバチが当たるというものだ。

「弟は、姉ちゃんの後をついていく生き物だって昔から決まってるんだ」

「何と。そういうものですか」

目を丸くするアーチャーが何となく面白く、カウレスはくつくつと笑った。

「そういうものなんだよ」

アーチャーは感心したように、二度三度と頷いた。……彼に姉が居たという話は聞かないので、初耳だったのだろう。

「なるほど、良いことを聞きました。やはりこの世界は面白い、まだまだ学ぶべきことが残っている。……私はこれで失礼します。何かあれば、先ほどの場所に居ますので」

「ああ、お疲れさん」

カウレスが手を振った。彼はもう少し、ここに残る気になっていた。

「では最後に。私は、『黒』のパーサーカーのマスターが貴方で良かったと思います。恐らくは、彼女自身もそうでしょう」

カウレスは慌てて振り返る――が、アーチャーは既に霊体化して姿を消していた。

「……ちえっ。どこまでも教師なんだな、アイツは」

別にそんな言葉一つで救われる訳ではない。どこまでいっても、彼女を無駄死にさせてしまったという事実は、カウレスに重くのし掛かっている。そしてアーチャーの言葉は、単なる懐測に過ぎない。いくら大賢者どて、パーサーカーの本心が分かるはずもない。

それでも。アーチャーはそれでも、言わずには居られなかったのだろう。

「まあ、いいさ」

保証なき言葉はしかし、カウレスの心にわずかな慰めをもたらした。彼女の死からずっと張り続けていた虚勢が、脆くも崩れていく。

「……くそ、眠い」

石壁にもたれていた軀がずるずると、力なく頽れていく。

そうしてカウレスは、ようやく眠りにつくことができた。意識が消える瞬間、そう言え
ばここは見張り台だったな、と思ったが疲れ切った脳は軀を動かすことを拒絶した。

会議が終わり、フィオレたちは部屋を退出していった。獅子劫界離、赤のセイバーの二人は城ではなく、ねぐらに戻るそうだ。

「さて、それじゃまたな——と言いたいところだが。ルーラーさんよ、例の約束を果たして貰うぜ」

「……覚えていましたか」

ルーラーが囁息する。獅子劫と赤のセイバーは、揃ってにんまりとした笑みを浮かべた。何となく、ベツトと飼い主はよく似る、という格言をルーラーは思い出した。

「分かりました。では、一画の令呪を獅子劫界離に転写します。マスター、獅子劫界離。令呪の転写に同意しますか？」

「もちろん同意する。さ、さ、さ。どんとやってくれ」

そう言って、左手を突き出す。ルーラーはその手を軽く握ると、一言三言聖書の文句らしきものを呟いた。彼女の腕にあった令呪の内、一画が転写された。

「あれ、もう終わりか？ 何だ、つまらん」

興味津々に作業を覗き込んでいた、赤のセイバーが、落胆した表情を浮かべた。

「令呪の転写に、どんなスペクタクルを期待していたんですか」

「残り一画もその内くれよ。じゃあな」

そう告げて、赤のセイバーはマスターである獅子劫と共に立ち去った。まさに嵐の

如きサーヴァント。存在するだけでどこか異質なオーラがあったセイバーが去ってしまったせいか、会議室は奇妙な虚脱状態に陥った。

残ったのはルーラー、ジーク、そしてジークのサーヴァントである。黒のライダーだ。

「ふう。……あ、そうだ。ジーク君、ちよつといいですか？」

こくりと頷いて、ジークが近付くとルーラーはひょいと左腕を握って令呪を確認した。そして、わずかにその表情を曇らせる。原因は、言うまでもなく消えない令呪のことだろう。

「最初の一回と、あの巨人を倒す際の変身で一回。合計二回変身していますね、間違いないかもしれませんか？」

「ああ」

「……令呪はマキリによって編み出された魔力の結晶体。従って、一度力を失えば基本的に消えるはずです」

「完全に、消えてはいないな」

「ええ、確かに。……気になりますが、それよりも残り一面というのが問題です。なので、貴方にも私が持つ令呪を二面転写しておきます」

「黒のセイバーのものか？」

「はい。前も言った通り、私の持つ令呪はそれぞれのサーヴァントに二面ずつ適用されま

す。ジーク君はジークフリートというサーヴァントであると同時にマスターでもありますから、問題なく適合するでしょう」

そう言つて、ルーラーは再び先ほどの作業を繰り返した。なるほど彼女の言う通り、何事もなく左手の令呪が三画揃い、元の輝きを取り戻した。

だが、その肌の黒さは変わらない。二人に隠しているが、恐らくは胸と背中の色も黒いままだろう。

「……ねえ、ルーラー。これ、大丈夫なのかな？」

「正直に言つて、分かりません。百以上執り行われた聖杯戦争も含めた中で、ジーク君はこれまで一度も無かった形態のマスターであり、サーヴァントです。発現したこの黒い令呪も記憶にありません。ただ——」

そこから先の言葉を、ルーラーは意図的に濁した。ジークも薄々だが感づいている。この黒色の令呪が、正しいものであるはずがない。どこか歪み、どこか拗くれた存在だ。

だが——それでも、この令呪によってジークはジークフリートという外殻を纏い、戦うことができる。

「ありがとう。残り三度、精一杯活用させて貰う」

「……二度です、ジーク君。いいですか、最後の一面は絶対に使用しないで下さい」

ルーラーは常ならぬ険しい顔で、ジークに告げる。

「何故？」

「だって、どうしようもなく不吉じゃないですか！ 令呪が聖痕（ホライズン）のように残り続けるなんて、本当に有り得ないんです！ いいですが、ジーク君の状態は本当に奇跡的なのですよ？ しかも恐らくは有償の奇跡。その令呪は、何か大事なものをジーク君から奪い取ってます」

「……奪われるようなものなど、大して持っていない。この奇跡とは、釣り合わないさ」
「それでもですっ！ はあ……ライダー、貴女もきちんと監視して下さいね」

ルーラーの言葉に、先ほどから会話に入りたがっていたライダーが目を見やせて、こくこくと頷き、右手をピースさせて声高らかに宣言した。

「分かってる、任せてよ！ マスターはボクが目一杯介護するから！ ……あれ、介護じゃないか。何だっけ、ええと……監禁？」

「何で護衛という単語が真っ先に出てこないんですか、ライダー」

「前のマスターの影響かなあ」

「ジーク君、貴方もマスターなんですから。しっかりとライダーの手綱を握りなさい」

「分かってる。分かってるが……」

握ったところで、どうにかなるものなのだろうか——と、ジークは抗議しなかったが二人から責め立てられそうなので、堪えることにした。

「さて、ジーク君、貴方はどうします？ 私は一旦街に戻るつもりです、教会に不義理を
してしまっているの……」

そう言いながら、ルーラーは鎧を除装した。途端に勇ましさや、彼女から消える。高潔
さや清廉な雰囲気はそのままで、妙に気恥ずかしくなってジークは視線を逸らした。

「俺は——まあ、ここに留まるのが妥当だろう。適当な私室を借りるつもりだ」

正直、あまり良い思い出があるとは言いがたい場所であるが、それでもやはりここは己の
生誕した場所だ。半壊したとはいえ安全性は高く、奇襲の可能性も少ない。何より、街に
出たところで行くあてなどない。

「そうですか。では何かありましたら念話で呼び掛けるなりして下さい。特に、軀の異変
があったら必ず報告を。食事はまだですね？ でしたら、それを済ませてからにした方が
いいのでは。今はもう、貴方はごくごく一般的な生物なのです。お腹が減ったら辛いんで
すからね？ 実体験に即して言ってますから確かです。それから——」

「も・う・い・い・よ・ー！」

雪崩れ込むようなルーラーの言葉に、息継ぎをする暇もなかったジークだが、黒の
ライダーが両手でルーラーを押し退けた。

「待って下さいライダー。私にはまだ、ジーク君に言うべきことが……」

「明日でいいだろ!? ほらほら、早く帰った所ったー！ こっちは色々あって疲れてるんだ

から、もうー」

ぐいぐいと、持ち前の怪力でライダーはルーラーを押し続ける。

「ちょ、そんな押さないで……ジーク君、すっかり睡眠を取って下さいねー！ 起きる頃には、こちらに伺いますからー では、おやすみなさ」

最後の「い」を聞くより先に、ばたんと扉は閉じられた。

「まったくもう。あいつはキミのお母さんか何かか？」

「よりによって俺に訊かれても困る。……しかし、大丈夫だろうか」

ジークは立ち去るルーラーの姿を思い描きながら、わずかに胸中に不安を抱く。また空腹になっていて、途中で行き倒れたりしないだろうか、と。

「大丈夫って何が？」

「……何でもない」

冷静に考えると、ルーラーにとって致命的な情報のような気がする。ジークはその不安を胸の奥底に、仕舞い込むことにした。大丈夫、宿に到着するくらいまでなら保つだろう、多分。

「それよりもライダー。俺もそろそろ寝る」

「よし、じゃあ部屋に行こっか。ボクの部屋でいいよね？」

「……いや、違う部屋で問題ないのでは」

危険がない以上、同じ部屋で寝泊まりする必然性はない。ならば、互いに気を遣い合うよりも、違う部屋の方が伸び伸びできるのではないか。ましてライダーだし、と思ったが、黒のライダーは頑として同じ部屋だと言い張った。

「分かった。迷惑を掛ける」

「あはははは、いいのいいの。さ、ごーごーごー！」

先ほどのルーラーのように、ライダーは有無を言わずジークの背中を押していく。そのままセレニケに割り当てられた私室に突入すると、ライダーは鎧を霊体化させてジークを抱え、寝床へと飛び込んだ。

ベッドのスプリングが、二人を柔らかい感触で包み込む。途端、ジークの全身にどっと疲労が押し寄せた。ライダーは隣で、何がおかしいのかケラケラと笑い続けている。

「ああ——生きてる」

そう言つて、ライダーは自分の胸に手を当てて、それからジークの胸に手を移した。

「生きてる、生きてる、生きてる—— あははははは——」

その笑いは、心底愉快そうで、徐々にジークにもその実感が湧き始める。

ここから逃げて、戻って、戦って、そして今——此処に居る。重要なのは、何よりもまづ生きているということ。

と同時に、不意に軀が寒気に襲われ始めた。蛭螭（さとこ）のようなおぞましいものが、臓腑の中

を這いずり回るようで、吐き気がする。

分かる。これは恐怖だ。

戦場に居るときは、ただの一つも感じることのなかった恐怖が反動で襲い掛かっている。冷たい手が、べたべたと全身に纏わり付いている。

——何故、生きているのだろう。

哲学的なものではなく、純然たる疑問だった。死んでもおかしくなかった——否、死んでいなければならぬはずだ。

サーヴァントと殺し合い、巨人と戦った。たった一日で死線をどれほど潜り抜けてきたか、最早数える気にもならない。

震えが、止まらなくなった。

「……ッ!!」

「あ、来た来た。オッケー、大丈夫大丈夫！ いいかい、キミは生きている！ そして、ボクも生きている！ 今はただ、それだけでヨシでしょう！」

半身を起こしたライダーが、笑いながらそう叫んで手を握る。

その吐息が、どうにかジークの意識を繋ぎ止めた。ぬるぬるとした嫌な汗が、ベッドに吸収されていく。凍えそうな軀に熱が戻り始めた。

「……すまない、もう大丈夫だ」

「そう？ いやあ、ボクも生前そんな経験があつてさー！ 確かアレだ、理性を取り戻したときに戦争に行つてさ。普段なら全然何てことはない行動一つ一つが、自分の理性が吹っ飛んでゐるせいでできたんだつて自覺したときはね、本当に怖かった！ 天幕で毛布被つて、一人でガタガタ震えてたよ」

笑いながら、ライダーは過去の悪い出を許らかに語る。それは、決して雄壮とは言えぬ——むしろ、普通の騎士ならば恥とひた隠す歴史であるが、黒のライダーにそんな余分な矜持は存在しないらしい。

「眠つてからも怖くてたまらなかつたからねえ、起きたら吐いてた。いやあ、寝グロつてホント気持ち悪いよねー！ 口の中が酸っぱいわ唇はざらつてゐるわ——あ、そのとき食べてたのが」

「……ストップ。吐瀉物の中身まで言わなくていい」

「あつはっは、悪い悪い。……まあ要するにさ、今のそれは誰だつて起こりえることだから、そんなに心配しなくてもいいってこと。大丈夫、ボクがいる。キミはボクのマスターで、ボクはキミのサーヴァントだ。……ああ、全く堂々どこう言える日が来るなんて。召喚された甲斐があつたなあ！ 元マスターには悪いけど！」

まるで告白のような言葉で、ライダーは喜びを全身で表現させてから、再びごろりと横になった。それを見て、ジョクも笑う。

「——俺もそう思う。俺も、君がサーヴァントになってくれて本当に良かった」

「ふふん、その言葉はまだ早いぜマスター。——何もかもが終わったときに、きっとそう言わせてみせるさ。ボクがサーヴァントで本当に良かったって！」

そう言ってから一転、ライダーは沈んだ表情を浮かべた。

「いやまあ、お前弱いじゃねーかって言われたら……うん、否定できないけどさ。それでも、頑張るから」

悔しがる必要がどこにあるう、とジークは思う。強い、弱い、速い、遅い、硬い、柔い、そんなものは全く必要ではなかった。仮令ただの人間であつたとしても——。

「君は、強い。少なくとも、俺はそう信仰している」

そう。

自分を躊躇いなく助ける強さ。捨て置くべき小石を拾い上げる優しさ。それらは、もしかすると英霊には必要でないものなのかもしれない。真の英霊は小石などに囚われずに大局を臨み、見捨てる強さを持つ者なのだろう。

……それはきつと正しい。少なくとも、あの状況で自分を救うことは全くメリットのない行為だった。

だから——そんなものを、鼻で笑って助けてくれたライダーは、ジークにとって心から尊敬できる存在だ。

ジークがそう言うどライダーは笑い、彼の髪のをくしゃくしゃと掻き乱した。どうやら、照れているらしい。

「にやははは。ありがどう、マスター。さ、もう寝よ？ もうすぐ朝が来てしまう。急いで眠らないと、起きたらまた夜だ」

それもそうか、とジークは思う。瞼を閉じる——周囲が夜明けの光のせいでばんやりと明るいせいかもしれないが、暗闇への怖さはいつのまにか消えていた。

ライダーは霊体化することなく、そのままの状態にいるようだ。幸いにも、ジークのマスターとしての適正はそこらの魔術師以上らしい、ライダー一人を実体化させ続けることくらいは、全く問題なさそうだった。

そう言えば……このシチュエーションは前回と同じだな、とふと思い出した。あの時はベッドが狭くて難儀したが、このベッドは広い。軀がり落ちる心配はあるまい。

——彼女はこうしているだろう。

最後にそんなことを考えて、意識は途絶した。

教会に辿り着くと、ジャンヌは穏やかな声の説教を受けた。

「朝起きたら、城塞があんなコトになっていて。それはそれは心配したんですよ？ 飛び

出したっさり、帰ってきませんでしたから」

アルマ・ベトレシアは言葉通り、憂いを帯びた表情でジャンヌに語りかける。まさかその事故の当事者です、自分はあれに狙われて至近距離に居ましたが聖旗と信仰心のお陰で無事でした、などとはさすがに言えない。

「ともあれ無事だったのは、神の導きによるものです。感謝しましょう」

「はい、ありがとうございます」

「それにしても、剛石が落ちてくるだなんて恐ろしいこともあるんですね」

どうやら、トゥリファスの住人はあれを隕石だと思い込まされているらしい。暗示自体は、街のパニックを誘発させないことに繋がるので、ルーラーとしても有り難い。

「それで、本日はこれから仮眠を取って、帰ることにします」

「あら、調査は終わり？ ……まあ、そうね。ああなってますは、調査どころじゃないものねえ」

「ええと……そうでした。はい、調査は終わります」

そう言えば自分はそんな設定の学生だった、とルーラーは思い出した。アルマは微笑ましそうに笑って、学生だからといってあまり無茶は駄目よ、と最後に付け加えた。

「それじゃあ、おやすみなさい。私はこれから礼拝がありますから」

「はい、おやすみなさい」

屋根裏部屋に戻り、倒れ込むようにベッドに横たわった。眠り、食事を行わなければならないというのは、些か不便であるが——それだけに、単にサーヴアントとして現界したときよりも、生きてゐるという実感が強い。

——天草四郎時貞。

あの少年の、何物にも揺るがぬような瞳を思い出す。子供のように夢を見ているのではなく、大望を抱え込んだ瞳だった。

礼拝堂で出会った瞬間に確信できた。

言葉では止まらず、戦いに敗れた程度では止まらず、赤のサーヴアントを全て殲滅させ、大聖杯を奪い返しても止まらない。

そもそも——アレは、止まるという行為が根底から抜け落ちている。計画を完全に達成するか、生命機能を完全に停止させない限り、ひたすら前に進み続けるだろう。

冬木市における第三次聖杯戦争は、六十年ほど前だ。つまりあの少年は、受肉してから六十年以上、聖杯を求め続けていたことになる。

確かにあの冬木の聖杯は特別だ。あれに匹敵するものといえば、それはもう、真作しか有り得ない。即ち神の御子の聖遺物、誰もが求めて尚得られぬ神秘くらいだ。

シロウもかの御子を信じる者の一人。だからこそあれだけ求めて——いや、そうではない。信仰している対象が同じであるジャンヌには理解できる。聖遺物は無論、大切なものだが、命を懸けて奪い取る対象ではない。

いや、そうであつてはならない。信仰するべきは神であつて聖杯ではない。そんなことを、あの「奇跡の少年」と謳われた天草四郎が理解できぬはずはないだろう。

そもそも、万能の願望機といつてもやはり限度がある。魔術師にとっては、汲めども尽きぬ魔力の淵。そして——魔法に至るための道標であり、万能の願望機と考えても差し支えないのは確かだ。

しかし天草四郎は魔術師ではないし、魔法に興味があるとは思えない。となれば、あの膨大な魔力で何かしらの「奇跡」を起こすのだろうか……。

どれほどの奇跡であろうと、万人は救えない。数多の聖人、数多の超人がこの難題に挑戦し、その身を散らした。英雄たちは割り切り、己の手に留った者を救おうとした。例えばヴラド三世、彼は間違ひなくルーマニアにおける奇跡的な英雄だ。しかし、彼は国民を救つたかもしれないが、その外側——つまり、攻め込んできたオスマントルコにとってはまさしく「悪魔」だったはずだ。

誰かを救えば、誰かが溺れる。

九人を救うために一人を切り捨てる。あるいは、ただ一人を救うために九人を殺害する。

それが、この世界の理だ。どんな英雄であれ、その非情極まる倫理を納得して戦ってきただけだ。

なのに、何故天草四郎はあれほどまでに迷わずに居られるのだろう。それは、どれほどに画期的な、あるいは狂氣的な手段なのだろう。狂氣的であれば、当然の如く止めなければならぬ。

だが――もしも、あるいは。彼の手段が、正しいければ。

「私は、どうする？」

そのとき、己はどう判断して動くのだろうか。それでも止めようとするのか、あるいは。あるいは。

そこまで考えたところで、ルーラーはシートを被った。そこから先を考えると、どうにも不安で仕方なくなってしまう。

聖人であるならば、誰もが夢見た理想。その誘惑に、自分は負けぬと断言できるだろうか。

いや……負けてはならない。祈りの文句を呟きつつ、ルーラーは瞼を閉じる。

――ふと、もう一人の少年について思い出す。

シロウが掲げる「人類の救済」に、果たしてあの少年は入っているのだろうか、と。それを考えた途端、焦燥に駆られていた思考が奇妙なほどに落ち着いた。

漠然どではあるが、シロウの救済には彼のようなホムンクルスは入っていないのではないのか、と思う。

そうである以上、自分が彼の救済に手を貸すことなどあるはずがない。確信した瞬間、少女は安らいだ気分で意識を落とした。

CHAPTER 5

「赤^{アカ}のセイバーは喘息をつくべきか、それとも別のやり方でいくべきかを迷った末に、やはり自分らしいのはこちらだろう、と拳を地面に叩きつけて言った。

「何で戻ってきたんだよ、こんなところ^{ココ}に――」

てつきり、赤^{アカ}のセイバーはマスターである獅子劫界離はあの城塞に逗留^{トウリウ}すると思っていたのだ。ところが、獅子劫はその申し出を固辞^{コジ}してあっさりと地下墓地^{キミ}に戻ってきてしまった。

霊体化すればいいのだろうが、ここはやはり柔らかなベッドで眠りたい、あるいは生温^{ナドク}い水しか出ないシャワーなどと違った、本格的な風呂に浸かりたい――飯^イ令^{レイ}、意味はなく

ともだ、これは当然の欲求だろう。

獅子助は寝袋にくるまりつつ、猛烈な抗議を行う。赤のセイバーに答えた。

「そりゃお前。あそこは敵地だぞ、あんなところで眠るバカがどこにいる」

「それは……そうだけどなあ」

不満たらたらの表情で、赤のセイバーは寝袋に座り込む。

「しょうがねえなあ。いいか、セイバー。俺たちは確かに連中に協力する。それは当然だ、あのままだったら、本当にどうしようもない状況に追い込まれていた。ルーラーと黒のアーチャーを救ったのも正解だった。だが、行動を共にするのは協力するのと少し違う」

「言葉の面で変わりはないだろ」

「あるさ。共にするってことは、隙を見せるってことだ。お前を信頼していると意思表示するってことだ。間違っても、ユグドミレニアの連中にそれを見せちゃ駄目だ」

「……それは、連中を信用できないってことか？」

赤のセイバーの訝しむような表情。確かに、何者をも信用しないのが魔術師。親兄弟でも殺し合う種である以上、当然とも言えるが――。

「いやいや。信用しなくなるのは、向こうの方だ。俺たちが連中を信頼しているところを見せてしまえば、逆にこちらを信用しなくなる」

サーヴァントが首を傾げ、獅子助の言葉の続きを待つ。

「そうだな、こう喻えれば分かりやすいか。ここに、首輪をつけた虎がいる。大人しい、いい子ですよと飼育係の保証つきだ。で、お前はそいつと一晩共にしなきゃならない。お前の手には銃がある。お前は虎と一緒に狩りをしなきゃならないが、生憎と最後の最後には殺し合わなきゃならない——」

「……オレたちが虎ってことか？」

「そういうコトだ。俺たちが相手を信頼すればするほど、相手は俺たちを信頼しなくなる。金で動く奴は金があれば信用するに足る。だが、無償で動く人間はいつかしつべ返しが来るんじゃないかと恐れられるのさ」

人間、まして対立している者同士ならば尚更のことだ。そして現時点で、獅子劫界離はユダドミレニアに対して金銭を請求できる立場にはない。

「だから、あの城塞に泊まるのを止めたど？」

「いやまあ、何よりもだ。実際に出し抜く相談を今からしようってんだから、向こうだと都合が悪い」

にんまりと笑う獅子劫に、赤のセイバーもまた、頬肉を歪ませた。

「最初からそう言え。……で、具体的にはどうするんだ？」

「まず、俺たちは別行動を取るぞ。飛行機で一塊になって行動するのは危険だから、と言え向こうも納得するさ。俺たちは、赤のアーチャーやライダーがルーラーたちを迎撃

「している隙を衝いて――」

「聖杯を蔵く」

二人は声を揃えて、笑い合った。

「ふん。まさかマスターがここまで来てまだ諦めてないとはな！」

セイバーの言葉に、不意に獅子劫が声を潜めた。

「……みつともないと思うか？」

少女は無言で、首を横に振った。

「みつともないはずがない。ただ――疑念はあるな。以前、アンタは子孫繁栄が聖杯に懸ける願望だ、って言ったよな？」

「ああ、言った」

「それは嘘だろう。まさかそんな漠然としたカタチの願いだだけで、ここまで執念深いとは思えない」

セイバーの笑いが不意に止まった。これ以上ないほどに真剣に、どこか訴えかけるように獅子劫の顔を覗き込む。

「――だから、オレに教えてくれ。マスター、アンタの本当の願いは何だ？」

その視線からわずかに顔を逸らした獅子劫は、どこか諦めたように嘆息した。それから、懐を探って煙草を握る。

「火、いいか？」

「煙いから断りたいが、それが要なら仕方ねえな」

セイバーの言葉に彼は微かに笑い、煙草に火を点した。煙を吸い込み、空に吹かす。

「……誤解されているようだが、俺は煙をついた訳じゃない。とは言え、全てを語った訳でもないな。ま、空中庭園に行つてしまえばこんな機会は二度とない。今の内にお前さんには話しておくか」

そうして、獅子劫界離は語り始めた。

獅子劫家は、数代前にヨーロッパから日本へと流れ着いた魔術師だったらしい。無論、獅子劫という名は日本に渡る際につけたものだ。

そのときには魔術刻印は既に消失しかかっており、子供たちの魔術回路も数に乏しく、そこへ来ての日本への移住は、彼らにとって致命的な打撃となるだろうことは明らかだった。魔術師にとって、魔術基盤の存在する土地から離れるというのは、それほどまでに致命的な行為なのだ。

案の定、一代も経たぬ内に魔術師としてはもう成立しないほどの衰退が始まった。

このままでは駄目だ。このままでは、このままでは終わってしまう。何とかしなければ、何とか、今ならまだ間に合う。今なら、魔術という奇跡に頼れるだけの力はある。一から十にするのは簡単でも、零から一を創造するのは難しい。

ではどうする。魔術基盤から離れた彼らには、最早新しい魔術を学ぶこともできない。

一秒経つごとに、彼らは少しずつ衰退していく。次の世代になれば、最早魔術師と呼ぶに値しない存在になるだろう。

どうする。

どうする。

どうする——？

結論として、獅子劫家は魂を売ることにした。

「ほら、お伽壺でよくあるだろ。オウリス・トルン・メル営業悪魔との契約。うちのご先祖様は、あれをやったのさ」

果たして日本でどんなモノと契約したのか、それは契約した獅子劫家当主にしか分から

ぬことだ。時間を巻き戻したのか、単純に復活させたのか、あるいは新たな刻印や肉体を与えたのか。それすらもあやふやだ。

分かっていることは、それは自己強制証文（セルフ・エンフォースメント）のようななどんでもない拘束力を持っていたということ。そして、望みを曲解することなく、正しく叶えてくれたということ。

ともあれ、獅子劫家は奇跡的な復権を果たした。魔術刻印は復活し、全盛期以上の力を発揮した。消失しかかっていた魔術回路は質量共に向上し、獅子劫家は極東における魔術師の大家として蘇ったのだ。

学んでいたかつての魔術はほとんど忘却され、死霊魔術（ネクロマンシー）を取得することになったが、背に腹は代えられなかった。

——そして、当たり前の話だが、そんな奇跡には、当然ながら代償を必要とする。

「その代償が、俺だったって訳だ」

結局、その契約は呪いだったのだろう。先の未来を犠牲にし、現在（現在）の充足を優先した。

……人間としては致命的な愚かさだが、魔術師であれば仕方ない。何故なら、その未来は『人間としての未来』だからだ。

そんなものを、誇り高き魔術師たちが受け入れられようか。未来など我々の知ったこと

か、大事なものは今、獅子劫という一族が魔術師として大成できるかどうか。ただ、それだけなのだ――。

斯くして呪いは、数代後になってきちんと発動した。何が切っ掛けなのかは不明だ、單純にそう定められていたのか、あるいはロシアンルーレットのようにたまたま発現してしまったのか。

いずれにせよ、犠牲となったのは獅子劫界離だった。その呪いは、魔術師にとって全く最悪の代物だった。

獅子劫界離は、子供が作れない。絶対に作れない。それ故に、貴重な魔術刻印を持ちながら獅子劫家はここで途絶えることが約束されているのである。

「何だそりゃ。養子でも何でも引っ張ってくりゃいいじゃねえか」

『赤』のセイバーの声に、獅子劫は衝えていた煙草を指で摘み、地面に擦り付けて消した。その作業の間、彼は奇妙な微笑みを浮かべていた。

「……ま、うちの連中はそんな風に樂觀視してたんだけだな。親父が伝手で引っ張ってきた養子に、俺の刻印を移植したら死んじまったことでどうしようもなくなった」

拒絶反応が出た訳ではない。獅子劫家の血をわずかながら引いた遠縁の少女で、移植前の調査でも、高い適合率を示していた。

解剖して分かったのは、獅子劫界離の魔術刻印が原因だということ。魔術刻印からは、

致死系の毒が滲み出ていた。魔術刻印は獅子劫界離の軀に完全に適応しており、それ以外の肉体に移植されると、たちまち毒が発生するらしい。

それを知った獅子劫界離は、尚も移植を繰り返し返そうとする父燈貴を止めて、諦めることにした。獅子劫家は、獅子劫界離で終わりである。

獅子劫界離は家を出て、魔術を使う賞金稼ぎへと堕ちた。もっとも本人からすれば、生まれてから常に縛り付けられていた責任から解放されたということになるのか。

獅子劫界離は戦場で死ぬだろう、と考えていた。それでいい、できれば骸は細切れにして欲しい、とも思った。ほんの百年かそこらだが、獅子劫家は魔術師の栄華を味わったのだ。それでなお、何を望もう。

だが——獅子劫界離は聖杯大戦に巡り合つてしまった。

聖杯の奇跡があれば、恐らくは魔術刻印の毒を消し去ることも可能だろう。己の血を継ぐ子供を創ることも。

それ故に、獅子劫界離は聖杯を欲する。

「……ふうん」

獅子劫界離の話が終わり、赤のセイバーはそんな曖昧な呟きを漏らした。

「何だセイバー、せっかく人が一族の恥ともいえる過去を語ってやったというのに。何が

不満だ？」

「――別に。お前が聖杯を欲しがるのは、やっぱり子孫繁栄の為だったってことだろ」

「何かこう、想像を絶するようなトリックとかお涙頂戴とか期待されても困るな……」

赤のセイバーは気が抜けたように、さっさと寝袋にくるまった。それを見て、獅子劫も再び寝袋にくるまる。

天井が低いせいか、わずかな愚苦しさをセイバーは抱く。世界が自分を徐々に押し潰そうとしているような錯覚。

その愚苦しさから逃れるためか、ぼんやりと彼女の思考は先の話を反芻していた。何者かとの契約、数代の栄光と約束された没落。それから――。

「なあ、マスター。最後に一つだけ、訊いてもいいか？」

「答えられる範囲でな」

「死んだ獅子のことを、覚えているのか？」

長い沈黙の後、獅子劫界離はボツリと呟いた。

「忘れてはならないものが、世の中にはある」

低く静かな声が、狭い洞窟に響き渡る。今の言葉には、先ほどの過去や最初にセイバーへ告げた聖杯への願いには無いものがあつた。

——聖杯を欲するのは、子孫繁栄のためなどではなく。

——聖杯を欲するのは、ただ獅子劫の名を遺したいが為でなく。

——ただ、忘れてはならないものを。無意味にしてはならないものを、意味有るものにした。

それは誓いの声。己の誇りと、命を懸けてでも守らなければならぬ矜持だった。

「……ふん」

「満足か？」

「ああ、満足だ。マスター——尊ろうぜ、聖杯」

暗闇の中で、セイバーと獅子劫は拳を軽く合わせた。天井を見ても、先ほどの圧迫されるような雰囲気は、もう感じられなかった。

ゴールドは苛立っていた。それは今に始まったことではないが、今回の苛立ちは彼からしても異常なことだった。

「……すまないが、私では、もうどうすることもできない」

肩を落とすホムンクルスに、横たわるもう一方のホムンクルスがそつと腕を叩いた。

「気にするな。お前はよくやってくれた」

死を目前に控えた患者のように、厳肅な態度でホムンクルスは答えた。その光景に、ただひたすらゴールドは苛立っていた。横たわるホムンクルスは、魔力供給槽に閉じ込められていた型である。

生まれつきの欠陥品故に。表に出すことなく、このままここで朽ち果てる――。

「バカめ、バカめ、バカめ！　どいつもこいつもバカばかりだ！」

ぎりぎり歯を軋ませ、とうとうゴールドは我慢ならないとばかりに立ち上がった。

「……っ！」

近付いてくるゴールドに気付いたのか、身構えるホムンクルスを黙殺すると彼は床に屈み込み、腕の脈を取った。

「な、に――？」

少女の腕と肩、それから鎖骨部分を軽く叩いて納得したように頷き、ホムンクルスに口を開くようにと命じた。思わず開けた口から喉を見ると、ゴールドはふんと鼻で笑って告げる。

「馬鹿馬鹿しい。お前は見た目には分かんが、呼吸用の器官が未発達なんだ、呼吸補助用の道具が魔力供給槽の内部に設置してある。すぐに取ってこい」

「え……？」

戸惑うホムンクルスに、二度は言わんぞとゴールドが睨み付ける。「すぐに持ってくる」とホムンクルスは慌てた様子で廊下を走って行った。

「あの――」

「何だ」

「どうして？ 貴方は、我々のことなど単なる電池としか見なしてないはずなのに」

ホムンクルスは知っている。ホムンクルスたちを好んで犠牲にしていたセレンケや、実験台として彼らを使用したロシエほど酷くはないものの、ダーニツクやゴールドは皆、彼らのことをただの道具、ただの電池として扱っていた。

「今だってそうだった。だが、くそ、お前だって、掃除のやり方が下手くそな人間がいれば是正したくなるだろう！ それと同じだ！ 掃除機で風呂の掃除をする莫逆を見たら、誰だってストレスが溜まる！」

人類愛に目覚めるような年齢ではない。これはベテランの職人が、新人のレンチをひつたくり「黙って見てろ」と言い出すのと同じ行爲だ。

「お前たちに習得させたのは、外傷に対する治療術や精神支配への簡単な抵抗だ。間違っても、呼吸器の不全による治療など教えていない。教えていないものが、できるはずがなからう」

「……そうか、それはそうだろうな」

考えてみれば当たり前だ。魔術師からすれば、必要なものを最低限詰め込むので精一杯だったのだ。

「お前の言っていたのは、これで合っているか？」

先ほどのホムンクルスが戻ってきた。両腕に酸素吸入器に似たような道具を抱えている。

「それだ、寄越せ」

ゴルドはそう言いつつ、引ったくるように奪い取ると点滴用の針を血管に差し込み、骨を加工して造った箱に管を接続した。

「それが……？」

「呼吸補助用の酸素循環器だ。そら、これをつける」

口にマスクを装着した途端、少女の顔にわずかながら生気が取り戻された。それを見ても、面白くもないとばかりにゴルドは告げる。

「残念ながらお前の一生はこれを装着したり外したりだ、気の毒にな。おい、その……まあいい、そこのお前。この際だ、他のホムンクルスどものところに案内しろ。どうせ似たように右往左往しているんだろう」

その言葉に、ホムンクルスはきよとした顔で目を瞬かせた。

「……いいのか？」

「嫌ならいいぞ。先ほどみたいなの三文芝居を毎度やるつもりなら止めはせん」

あくまで嫌味を忘れず、ゴルドは尊大な調子で告げる。ホムンクルスはわずかに躊躇ったものの、優先すべきは仲間の命だ。

「よろしく頼む」

「何がよろしく頼む、だ。こんな簡単なこともでんクセに、生きようなどと思うのが間違いなのだ、お前たちは」

——殴りたい、と言われたホムンクルスは思った。呼吸器をつけられ、寝かされているホムンクルスも同じことを思った。

しかし、彼が救世主であることには変わりない。露骨に嘆息しつつ、ホムンクルスは容態が悪化しているホムンクルスたちを次々と彼の下へと運び始めた。

一人目——顔が青く、血の気が引いていた。腹部を押さえているので、腹部を調べ——

ゴルドは理解した。

「内臓が大部分働いておらん。魔術回路で代用するよう調整する。次」

「脳の指示が逆流している。……しばらくの間は全部を逆さにするよう意識的に行え。右は左、下は上、歩きたければ腕を上下に動かせばいい。一ヶ月もすれば脳が慣れて、考えずとも動くようになる。次」

「肉体が痙攣しかかっている。完治は不可能だ。復元術式を常に体内に埋め込んでおくしかない。ダーニックが所持していた魔術礼装でそういうものがあつたはずだ。奴の私室を探してこい。いや待て。血族以外が踏み込むと迎撃用の術式が発動する危険があるな……。仕方ない、私が行こう」

そう言うとき、ゴルドは立ち上がった。既にサーヴァントを除いた全員が疲れ果てて眠っているにも拘わらず、彼は覚醒用の水薬を呷るとしやんとした態度で廊下を歩き出した。

その背後を、やや慌てた様子でホムンクルスがついていく。ジークと最初に話し、現状実質的なリーダーとなつてゐる少女型のホムンクルスである。

「何だ。礼装は軽い、ついてこなくても構わんぞ」

「理由が分からない。何故ここまでする？」

「私にも分からん！ こんな状況が、私に理解できてたまるか！ 混沌、混沌、混沌、混沌！」

魔術の統一された神秘とは程遠い世界だ！ サーヴァント、聖杯大戦、大聖杯！ くそっ、

「たれだ！ そんなものは、まやかしたった！」

ゴルドはそう叫んで、廊下を歩き続ける。業を煮やしたのか、ホムンクルスは手にしていた戦斧（せんぷく）を彼の耳元に突きつけた。

「答えろと言っている」

「……言っただろう。もう私には何も分からない。聖杯を巡って相争うはずだったのに、横からシロウとかいう訳の分からん男がかっさらった。それだけならまだしも、人類の救済とかほざきやがる！ 我々はそんなものを求めた訳ではない！ 我々が望んでいたのは、研鑽された魔術と召喚された英雄たちによる気品ある戦いだ！ なのに、どうしてだ。どうして上手くいかなかったんだ。ランサーが敗北したせいとか？ 赤いのアサシンの宝具のせいとか、それとも……」

「——お前が、黒いセイバーを自決に追い込んだせいだぞ？」

ホムンクルスの静かな声に、良く回っていたゴルドの口がようやく停止した。彼女は溜息をついて、そっと戦斧を下ろした。

「……私のせいじゃない」

「違う。少なくとも、お前は、お前のせいだと思っている」

「うるさい！ たかがホムンクルスが、私について利いた風な口を叩くな！」

横わず、ホムンクルスはゴルドに断言する。

「お前のせいだ。……だが、お前のせいだけじゃない。誰もが自分の判断、自分の信念、自分の願望に従って行動し、結果『黒』が敗北したただけだ。セイバーとお前との間に絆が存在していたとしても、未来が変わったかどうかは分かん」

「……だが、私は間違っていたんだろうな」

冷えた空気に充ちた廊下で、ゴールドはそう呟いた。音を丸め、失望を源わせる彼からは尊大さがすっかりと失われていた。

——結局、ゴールドという男は最初から最後までこの聖杯大戦において傍観者のようなものだった。魔術師だから、マスターだからといって、サーヴァントが存在しなければ聖杯を巡る争いに加わるはずもない。

そうして戸惑う内に戦いは終わってしまった。ゴールドが何度も言っているように、彼は本当に訳が分からなかったのだ。

「そうだ。だからもう、頭を切り換えろ。お前は尊大で、國に乗りやすく、人としてはどうしようもないが、錬金術師としては——そこそこだ」

「……もう少し他に言いようはないのか」

「アインツベルンと比較されたくはあるまい」

さらにとホームクルスがそう告げると、ゴルドは古い顔をして押し黙った。ムジーク家
とて、一時はアインツベルンの背に手が届く距離までに至ったこともあったのだ。だが、

榮光はそこまで。後は転がり落ちるように、衰退していった。

「——フン。だが、どうせあいつらはこれから數百年は新たな大聖杯に掛かりきりだ。その間に、我らムジーク家が今度こそ追いついてみせるさ」

それは夢物語に等しい。冬木の大聖杯を失ったことで、アインツベルンは大きく衰退した。だからといって、未だその技術は飛び抜けている。ムジークが追いつくには、ゴルドの後から奇跡的な才能を持つ人物が三代連続で生まれなければ有り得ない。

「……なるほど。だったらまずは、我々を運命させてみせる。そこから、新しい何かが生まれるはずだ」

だが、それでも、ゴルドはどうやら諦めない道を選んだようだ。生來の捻くれ者故か、屈かめはずの星に手を伸ばす行為も、彼には当然の行為と映るらしい。

「言われんでも分かっている。さあ、下らん無駄話にうつつを抜かしている暇はない。礼装を取りに行くぞ、ホムンクルス。ええい、ややこしいな。お前もジークのように、分かりやすい名前をつけろ」

はっ、とホムンクルスは鼻で笑った。

「莫迦め。名付けるのは親の仕事だ。お前が生き残ったホムンクルス全てに名をつけていくのが道理というものだろう」

心底小馬鹿にした調子で切り返す。

「……」

「ロクでもない名をつけようとしたら、これでお前の腹部の脂肪を削ぎ落とすからそのつもりで」

ゴルドは歯を軋ませつつ、うううと唸ったが——相手はよりにもよって、戦闘型のホムンクルス。寿命を短く設定した分、近接戦闘能力及び魔術による戦闘能力は折り紙付き。要するに、製作者より強い。

「悪夢だ！ 完全服従させるための何かを付け加えるべきだった！」

大仰に嘆くゴルドを見て、ホムンクルスは微かに口元を歪ませた。

「お前の腹ではそれも無理だったろうさ。安心しろ、味方である内は我々もお前を迫害することはない」

そう言って馴れ馴れしく肩を叩いたホムンクルスを、口汚く罵ろうとして——諦め、いつか死ぬときにでも笑ってやろう、とゴルドは心に決めた。

結局。ゴルドは全てのホムンクルスを調整し終わってから眠りについた。

第三章

第三章

——伝えるだけのことは伝えた。結果、三人は完全に納得した訳ではないものの、ひとまずこの現状を維持することだけは約束してくれた。

即ち、黒のサーヴァントたちの襲撃から、空中庭園と聖杯を守護すること。

これさえ守ってくれるならば、自分をマスターと認めて貰わなくとも問題はない。

ある意味で、最大の難所を乗り切ったのだ。英霊たちは誇り高く、気紛れで、高潔で、そして躊躇いがない。己の名を名乗り、マスター権を奪った時点で誅殺されたとしてもおかしくはなかった。

「……よし」

本来はセミラミスが座るべき玉座に座り、遥かな天蓋を仰ぐ。まだ気を抜いていい段階ではないが、それでも胸中の安堵は隠せない。

「——さてマスター。その玉座の気分はどうかかな？」

何時の間に傍にいたのか、赤のアサシンが実体化した。失礼、と言ってシロウはど

こうとするが、彼の肩をアサシンがそつと手で押さえ込んだ。背後に回り、耳元で囁く。

「良い、そのまま座れ。そら、お主が王となった気分はどうだ？ 想像してみろ、ここに詰めかけた英雄たちが、頭を垂れて従う様を。途方もない快感だろう？ 王たる誇りが湧き上がってこないか？ 全てを支配する悦楽に酔いしれたくはないか？」

シロウは無言で、首を横に振った。そうして、肩に乗せられた手を握って立ち上がった。

「ないですよ。残念なことに、私はやはり、人を支配するのに向いていないようです。こちらには、貴女が座って下さい」

そう言くと、女帝は些か不満そうな表情を浮かべつつも、玉座に座った。

「……全くつまらぬ。我のマスターならば、この世界は己が物だ———くらいの発言を許すというに」

「そんなマスターだったら、貴女に破壊させられていたでしょうね。この世界に、王たる者は二人も要らぬ、とか言われて」

涼しい顔でそう指摘するシロウに、悪びれもせずにアサシンは舌打ちする。

「……ち、氣付いたか」

シロウの言う通り、彼の計画で最終的に玉座に座るは、赤のアサシン、セミラミスだ。

シロウは計画を立て、実行し、人々を救う。そこで、終わりだ。救うこと自体が目的である為、そこから先には何もない。



「だから、そこまでに至ったらお主が王になっても良いぞ？」

「……至ったら、決めますよ」

シロウは笑い、大聖杯を見に行くと言つてその場を退出した。女帝の美貌が、にわかに憂いを帯びる。

「やれやれ。やはり欲の無い人間とは扱いにくいものよ。財に興味がなく、権に意味がなく、女にすらも惹かれぬとは」

アッシリアの女帝、セミラミスにとって男は玩具であつた。彼女の言葉に唆され、全てを奪われた人間は数知れない。

そして、彼女にとって女とは自分一人だけの存在だ。無論、子を孕^てませるための雌は必要だが、女として振る舞い、男を自由にして良いのは己だけの特権である。

——元より、そういう風にしか生きられなかった。

思い出すのは、生まれてすぐの出来事だ。ぼんやりとしていたが、自分を捨ててそそくさと川へ逃げる女の姿は覚えてゐる。

母であり、魚神であつたデルゲットはあるシリア人の男と姦通し、娘を孕んだ。その子供こそがセミラミスだ。

お前は恥だ、と彼女は言つた。人の間に生まれた子は、恥だと確かに告げたのだ。愚か

な女だ、と後になってセミラミスは思った。男の誘惑に抗しきれなかったのは、お前たるうに。

母はそうして自分を見捨て、父は呪じた母によって殺された。だが、母は一つだけ贈り物を残してくれた。神の血を引くセミラミスは、生まれついて捨てられた水辺に適応していた。そればかりではなく、赤子の泣き声に応じて哺乳たちが世話をを行ったのだ。

無数の鳩たちが集って、寒さに震える己を包み込んだ。どこからか手に入れた牛乳を嘴に溜めて、彼女に与えた。

如何なる風雨にも負けぬ鳩たちの羽と、与えられる乳によってセミラミスは育てられた。そうして十年、牧人であった男に見出され——セミラミスは、人の世界に組み込まれた。

だが、既にしてその中身は完成していた。その後、親となった者に教えられた舞踊や化粧といったものは単に生きるために必要な武器であり、技術でしかない。

女を憎む——男に弄ばれる、情弱な女は神であらうと容赦はしない。

男を嘔る——女を侮り、突き詰めれば厭欲しかない彼らは玩弄するべき存在だ。

それが彼女の哲学であり、世界の認識である。さて、では己のマスターであるシロウ・コトミネ——天草四郎時貞はどう解釈すべきだろうか。

「女ではなく、男でもない。……ややこしい存在よな、全く」

艶然とした笑みに満かされることもなく、権力への誘惑もあっさりと退ける。人は欲の

生物であるが、あの少年に我欲はない。人類の救済を欲という言葉一つで片付けて良いものではない。

狂っているかいないかで言えば、間違ひなく疑いようもなく狂っている。それ故に、アサシンはあのマスターと共にあるのがただただ嬉しい。

六十年の執念が実ったならば、それはそれで良い。

だが力足りず、堕ちたとしても——それはそれで面白い。夢を摘まれた聖人がどれほどに絶望し、どう成り果てるのか見てみるのも一興だ。

「さてさて、どちらが嬉しいものやら」

赤いアサシンはひとしきり笑うと姿を消した。彼女の宝具『虚栄の空中庭園』は余人の目に触れることもなく、ルーマニアの空を飛び続ける。

大聖杯は、変わらず清廉な輝きを保っている。霊脈から引き千切る際に、魔力が若干漏出したようだが問題のない量だ。

シロウ・コトミネ——天草四郎時貞は、この大聖杯を良く知っている。聖杯を捨て、別のアプローチから根源に至ることを試みるようになった遠坂。そして零落し、聖杯の情報のみが口伝として伝わっているマキリ。この二家に金を出して情報を買った。

さすがに御三家の中ではただ一家、未だ聖杯を諦めぬアインツベルンから情報を引き出すことは不可能だったが、それでも仕組みや機能については有益な情報を得た。

大聖杯は六十年の月日を費やして、魔力を吸い上げる。その上で、魔法に至る道を切り開く。それは、世界の外へと穿たれる孔だ。

この世界には、『外側』がある。外側には、万能の力と全ての真理が有るという。即ち、それこそが『根源の渦』と呼ばれるものだ。全ての魔術師がこれを目指し、ほぼ全ての魔術師が脱落する。

次の世代、また次の世代へと希望を繋いではいても。魔術師はまず最初に「諦めること」を教えられるというほどの絶望的な道のりだ。

そういえば——ものの本によれば、世界には『裏側』もあるという。そこは単なる異世界で、今ではもうこの世界から消えてしまった幻獣たちが移り住んでいるとか。

……ともあれ。聖杯が数多の願望を叶えるというのは、あくまで副次的なもの。その正体は過去の英霊たちを供物に捧げ、世界へ孔を穿つ究極の魔導器だ。

残る行動は、あと一手。

気付けば、両手に汗が滲み出ていた。天草四郎時貞が数多の奇跡を起こした両手は、今や彼の宝具にまで昇華されている。

『右腕・悪逆捕食』

『左腕・天恵基盤』

とはいえ、この宝具はあくまで補助用の対人宝具でしかない。

右腕は未来視など戦術面における補助を担い、左腕は自身に対する補強を担う。それは本来、天草四郎時貞が持つことのなかった力だ。彼の宝具は、それを『奇跡』という形で顕現させる。

あらゆる場面において万能ではあるが、仮にシロウが通常のサーヴァントとして召喚された場合、決め手に欠ける二流サーヴァントとされていただろう。強いて言えば、不老という効果がある宝具は珍しいが、戦術に役立つ力ではない。

だが——この二つの宝具を持っているからこそ、シロウ・コトミネは今からとてつもない無茶に挑戦することができる。

「……やってやる。やってやるども。あ、の、十、七、年、と、こ、の、六、十、年、全神経、全細胞、全筋肉、全魔力を使ってやるさ」

少年は大聖杯から背を向ける。残念なことに、現在全力を尽くすための状況が完全に揃っている訳ではない。残る欠片はただ一つ。後は辛抱強く、それを待つだけだ。

……そうして、聖杯大戦は一旦の終結を迎えた。ユグドミレニアは大聖杯を奪われ、中

心であつた。黒のランサーと、黒のセイバーは討ち死に、黒のパーサーカー及び黒のキャスターも現世から消失した。

黒のアサシンは、完全に両陣営と敵対しており――黒の側で現戦力として数えられるのは実質二騎。黒のアーチャーと黒のライダーだけだ。

だが、黒の側には現聖杯大戦におけるルーラー、ジャンヌ・ダルクがついている。そして、利害共有者として、赤のセイバーがいる。

四騎、そして――危うい切り札として、残り三成、三分の現界を許される、黒のセイバー。彼を含めて未だ五騎の戦力を有している。

一方、赤の側は将の数だけでなく、その質的側面においても、黒の側を圧倒している。加えて、空中庭園という堅牢極まる自律式移動要塞での籠城状態。将の数が少ない側が、籠城する要塞を包囲しなければならないのだ。しかも、その籠城戦は短期決戦でなければならぬ。

有利不利を単純に計測するならば、まず、黒の側が絶望的なまでに不利であることは間違いない。

だが、それを知っても尚、赤の側が油断をすることはあるまい。黒の側だろうと、赤の側だろうと、サーヴァントとはいとも名高き神話伝説の英雄たち。

英雄とは、あらゆる苦難を踏破したからこそ冠せられる称号。黒の側も、間違いな

く再びの決戦を挑んでくるだろう――。

——輝くような夢を、視た。

それは輝ける栄光、全ての祝福が集積されたような式典だった。王太子シャルルがランスに凱旋し、フランス王として戴冠式を執り行うのだ。

全フランス人民の夢であり、希望があった。ジャンヌ・ダルクはオルレアンの包囲を解かせると、その後も英軍と戦い続けた。

そしてバテールの戦いによる劇的な勝利を以て、遂にランスにおける戴冠式を実現させた。

軍の指揮を執ったのは、十七歳の「小娘」。口さがない者には、彼女はただの象徴シンボル、お飾りにしか見えなかっただろう。

しかし、彼女の後に付き従った兵士たちは誰もがその言葉に反論する。

象徴だけならば、後方で旗を振っていればそれで良い。だが、あの少女は後方ではなく最前線で旗を振った。ただの一度もその聖剣を鞘から抜くことはなかったが、それでもやはり、少女は戦っていたのだ——と。

……夢は流れるように過ぎていく。栄光の次は転落、失墜ディカスターだ。

異端審問。誰にも嘲笑われ、痛めつけられ、復讐される日々。

痛ましい出来事ではあるが、結局この拷問は何も変えることはなかった。祖国は解放され、ジャンヌの夢見た光景は実現する。

“あなたは、戦っていた”

時間にしてしまえば、わずか二年の月日を飽きることなく眺め続ける。神の声を聞き、その身を戦いに投じた。戦いを選び、裏切られることを知った。そうして、それでも。最後の最後まで戦うことを決めた。

何故なのだろう、どうしてなのだろう——幾度となく、己に問い掛けた。

“罪滅ぼしだろうか”

敵兵を殺めた——それに加担したことへの贖罪？

“一人でも救いたかったせいだろうか”

旗が折れるまで、誰かを救いたいと願った？

“それともあるいは”

それともあるいは、そうすることが正しいと信じていたからか。神が裏切ったのだ、とジャンヌを知る者たちが言う。

……一人、絶望のあまりに狂った者を知っている。何の罪も無き少女を神が欺いたのだ、と神に見捨てられたのだ——と。

“彼のことは、どう思う？”

悪い。彼が主を見捨ててしまったのが悲しかった。主に咎がないと知って貰えなかったのが悲しかった。

あの炎の結末を知った上で、ジャンヌはコンピエーニュの戦いに挑んだのだから。

どうして知った上で、戦えたのか。

ジャンヌの死が、無意味なものでないと知っていたから。見返りがなくとも、未来があった。ジャンヌの死が、かつての故国を取り戻す力となり、流れ続けていた血はようやく止まる。

それは、歴史においてはただ始まって終わっただけの出来事なのかもしれない。

それは、時の流れにおいてはただ僅かな人命が救われただけなのかもしれない。

それは、全く以て何の意味もない、そんな無意味な行為だったのかもしれない。

そうは、思っていない？

……そう。まるで思わない。だからあの時、磔にされたときも——誰も、何も恨むことはなかった。

主に、この身を委ねられたのだから。

貴女は、強い人。

ありがとう——貴女の協力がなければ、私も今此処に居ることがない。貴女と出会えた幸運に、心から感謝を。

最後の質問。本当に、あの人を連れていくのが正しいのですか？

その言葉に、穏やかだったジャンヌの心に棘が刺さる。鈍い痛み、皆には隠し続けている唯一の躊躇い。

ジーク、と語るように己を名乗った少年。未熟さと練達さを併せ持つ矛盾生命体。誰もが戦いに巻き込まれたいと祈りながら、それでも自ら望んで戦いに挑むマスター。

感傷であることは分かっている。彼が戦力に数え上げるべき存在であることも分かっている。何よりも、誰かが囁いているのだ——彼が必要だ、と。それは、これまで一度も間違ったことのない天からの助言だった。

黒いセイバーの心臓を保有し、落雷を受けたことでサーヴァントとしての力すらも得た。戦場に連れていかなければならなかった理由はつまり、一度死して蘇る必要があったということ。

即ち彼のサーヴァントとしての力が、これから先も必要であり続ける。最後の質問だけは、ジャンヌの答えられるものではない。

「分かりません。これだけは、本当に分からないのです」

質問した少女は、嘆くように沈黙する。彼の身を案じているのが、自分にも痛いほど理解できる。

聖杯戦争、サーヴァント、魔術——あらゆる非現実的なものを、少女は受け入れ、傍観

した。ジャンヌの言葉に信を置き、全てを委ねた。ルーラーの選択が少女の選択であり、少女はあるがままに受け入れるだけだ。

……そんな少女がただ一つだけ、どうしても譲らぬものがある。運命に翻弄されながら、その強固な意志を変えることなく、前に進み続ける少年。

少女はひたすら、少年の身を案じている。少年は自分の内側にいる少女まで知らない。少年が見ているのは、ジャンヌであって、少女ではない。

それが、ジャンヌには申し訳ない。少年の身を案じ、少年を慈しんでいるのは、誰より彼女だというのに。

——そうでしょうか？

少女が不思議そうにジャンヌに問い掛ける。それも無理はない、ジャンヌ・ダルクという少女とレティシアという少女は、ただ漠然と、似ている。だけではない。

類似した肉体があり、類似した性格があり、類似した出自があり、魂の色に至るまでほぼ同質。それはつまり、レティシアにルーラーと同じ知識と力を与えれば、ほぼ全く同じ行動を取るということに他ならない。

……だから、ジャンヌがジークの身を案じている、慈しんでいる、想っているはずだとレティシアは考えている。

——でも、そうではない。そうではないのです。

戦いは望んでない／けれど、見捨てられるはずがない。

戦わないで欲しい／しかし、貴方の力が必要です。

嘘はついていない／だけど、真実も告げていない。

耐えられない矛盾があり、嘘がある。真実を隠し、目を逸らしている。

共に歩いてくれる人がいる、というルーラーには本来有り得ない幸運に、目を眩まされ
ているようだった。

置いていくべきだ、と思う。ついてくるだろうな、と確信する。

聖杯大戦における全ての事象には意味があり、全てのサーヴァントが必要で大切な存在。
百八十秒、三度の「憑依」を残すジークも、間違いなく必要な要素なのだろう。

そして、この思考こそがジャンヌとレティシアの決定的な違いなのだ。

少女の淡い想いを、ルーラーというサーヴァントはこの上なく踏みにつけている。

だから、ジャンヌはジークの身を案ずる権利も、慈しむ権利も、想う権利すらもない。

その想いは箱に入れて、鍵を掛け、袋に仕舞い込み、紐で幾重にも縛り付け、倉庫の片隅
に置き去りにする。

誰にも見られないように、誰にも咎められないように。

——云々しい夢を、視た。

母が幼い自分に囁いている。

『私の愛しい息子よ。貴方は騎士になり、王を倒しなさい。私の息子である貴方には、王位を継承する資格がある。けれど、今そう悟られれば王は必ず貴方を■すでしょう。だから、今は雌伏のとき。ただ、待つのです。』

雌音メノコトが入る。邪念ジャネンが入る。無視モウシしたい。

人造生命ホムンクルス、歪んだ出自の子、それ故に人より早く育ち、早く老い、早く死ぬ。村で無邪気に遊ぶ子供は、剣を握るっている己と同じ歳だ。彼らが成長し、大人になると、オレは老いて死ぬのだろう。

——何て羨ましい。何て妬ましい。何て憎らしい。

だから、人間ヒトより優れた存在になると誓った。だって、人間より速く走らなければならぬのだから。誰よりも優れようと思うのは自明の理だ。

母に連れられ、物陰から王の姿を見た。

勇ましく、冷徹で、穏健で、鋼鉄だった。

『あれが、貴方が目指す相手。倒さなければならぬ敵。■さなければならぬ王。不可能だ、と思った。』

だって王は美しいくらいに完璧だった。その裁定も、その剣技も、その戦術も、何もかもが完璧過ぎるほどに完璧だった。

だから、母には悪いが■すことは諦めた。その代わり、仕えようと思った。彼の剣の切先となり、汚れを祓う者であろうと決めた。

——騎士になる。

成長は瞬く間で。やがてオレには、兜が与えられた。これを人前で外してはならない。自分の顔を知っている者が見てしまえば、全てが破綻する。

そう母に言い含められ、オレは仮面を被った。それでもなお、己の剣技と、騎士道精神は完璧で——だから、王から剣を賜り騎士となった。末席であるが、それでも円卓の席につく資格は与えられたのだ。

幸福な日々は、やはり瞬く間で。騎士として、王に仇なす者たちを斬り伏せる。何故王に逆らうのか、と問い質す——反論される。

「あの王は、完璧に過ぎる。」

莫迦奴、だからこそ王は素晴らしいのだろう。長い歴史の中で、これほどに完璧な王が居たはずがない。

大抵の王は暴虐で、傲慢で、不遜で、その大いなる我欲を以て民の喜びとする。王は夢を与え、夢を奪い、そのくせ一度己の夢を奪われてしまえば、後は知らぬとばかりに立ち

去る災厄だ。

「誰が王になろうと同じこと。民は奪われ、奪うだけ。」

騎士王には、我欲がない。必要な物は必要なだけ、不要な物は存在せぬ。夢など見ないし、夢など抱かない。

ただただ故国ブリテン統一のために、ひた走る——そんな純粹な生命体である。

その在り方は、研ぎ澄まされた刃のように美しかった。オレは憧れ、焦がれ、自身の出生をこの上なく恥じながら、それでも騎士道を全うしようとした。

あれは己が人生でもっとも輝き、楽しんでいた時代だったと断言できる。

……終わりの日は、すぐに訪れた。業を煮やした母により、己の出生が明らかになった。

アーサー王の仇敵モルガンの子、どころではない。如何なる方法を取ったのか、ホムンクルスはアーサー王の嫡子であり、生き写しなのだという。

そのときのオレは掛け値なしに歓喜した。焦がれた騎士王が、これほどまでに身近な存在であったこと。彼の血を継承する唯一の騎士が自分であること。

つまり、自分はその騎士王の「次」に相応しいただ一人の人物である。

オレはアーサー王に全てを語った。己がアーサー王の後継者に相応しい理由を、何もか

も全て。王はいつもと変わらぬ冷淡な態度で告げた。

「——なるほど。姉の奸計とはいえ、確かに貴公は私から生まれたもの。だが、私は貴公を息子とは認めぬし、王位を与えるつもりもない」

王位は早急に過ぎただろう、後継者について考えるのはあまりに早すぎたかもしれない。だが、息子としては認めない、という言葉が、深く深くオレに突き刺さった。

それは全ての前提だった。少なくともそれだけは認めて貰えるはずだ、と。仮令後継者問題が絡むせいで、公的には認められずとも。

二人の対話ならば、必ずや本心を見せてくれる。誇り高き我が息子と褒め称えてくれる。ただそれだけで——。

「——息子と認めぬと、そう仰るか。騎士王よ」

ぼつりと、オレは呟いた。

背を向けた王は、それきり騎士に何の関心も払わず。ただ、未来だけを見据えて立ち去っていく。オレの怨嗟に充ちた声は、生まれてこの方一度たりとも出したことのない憎悪

を露わにしていた。

考えてみれば当然のこと、仇敵であるモルガンによって無理矢理造られた子など、誰が認めるものか。王にしてみれば、呪いも同然だ。

だからこれから先、己はずっと、ずっと、このまま騎士の末席であり続ける。優秀さは認められず、積極性は疎まれ、努力は無視される。

ただ、モルガンから生まれた——ただそれだけの理由で、オレは許されないのだ！

「いいだろう。その言葉、必ず後悔させてやる」

そのとき、オレは決意したのだ。憎悪によって生まれ変わろう、父の全てを貶めよう。功績も、政も、戦いも、この王が十年で成し得たこと全て、一切合切を無価値にしてやる。

王はオレを憎むだろう——仕方のないことだ。

王はオレを罰するだろう——やれるものなら、やってみろ。

王はオレを見るだろう——向かい合うためなら、全てを捨てる。

長い、長いブリテンの戦いは終わりを告げようとしていた。幾多の困難を乗り切り、よ

うやく騎士王の下で、統一された国家が運営される日が近付いていたのだ。

戦は騎士に誇りをもたらし、民に貧窮と苦難をもたらす。そんな日々が終わりが来るかと思われた矢先、不穏な動きが次々と飛び込んできた。

王は表情も変えずに、一連の事態に対処しようとする。だが、心底では狂わんばかりの悲しみがあつたはずだ——そう、オレは想像してほくそ笑んだ。

稀代の傑物、湖の騎士ランスロットとアーサー王の妻であるギネヴィアとの不倫。それを殊更大袈裟に暴き立てたのは、他ならぬオレだった。

アーサー王に王としての器がない、何しろ妻を奪われる始末——と、流言を流した。王に不満があつた他の騎士を唆す一方で、オレはただ忠実に王に仕えた。

王にしてみれば、さぞかし不気味だったろう。息子と名乗った騎士が、未だ自分に忠実に仕えているとは。

ああ——王の苦悶が手に取るように理解する。そうしてアーサー王は、恐らく最初で最後の致命的な過ちを犯した。

裏切りの騎士ランスロットを討つため、フランスへの遠征をアーサー王は決定した。留守居役を命じられたのは、当然の如くオレだった。

当然と言えば当然の流れた。他の騎士や大臣などを通して、自身の優秀さを喧伝し、何より喧伝するまでもなく、自分くらいしか政務をこなせる騎士が存在しなかったのだ。

王は己を摂政に任命し、フランスへと向かった。胸中に、かつて自分がもつとも信頼していた潮の騎士を討つことに、どれほどの煩悶があっただろうか。

フランス——ランスロットとの戦いは長引くだろう、と推測した己は即座にアーサー王が討ち死にしたとの報せを触れ回った。緊急会議を開き、摂政である自分が王に相応しいことを認めさせた。

宝物庫から王の地位を証明する大剣「燄然と輝く王剣」を手に入れたオレはカンタベリにおいて戴冠式を開き、カタチだけとはいえ正式な王となった。

それから、ギネヴィアに求婚した。

「何を言うのですか、馬鹿馬鹿しい」

と冷淡な態度を取るギネヴィアに、オレは笑って告げる。

「馬鹿馬鹿しいのは、お前たちの夫婦ごっこだろう」

そう言つて嘲り、兜を外した。その瞬間の、凍り付いた表情は忘れることができない。求婚など元より本気ではない。だが、これで王は一層オレを憎むだろう。それでいい、憎め、オレを憎め、もっと憎め。

当然の如く、嘘は露呈する。アーサー王はフランスから急遽、故国ブリテンへと舞い戻る。本来ならば、嘘が露呈した時点でオレは殺される。留守居役とはいえ、これほどに暴

れたならば、処罰の対象になって当然だろう。が、オレに脅され、宥められ、唆された連中は皆、こちらについた。

オレの説得が上手かった、それはあるかもしれない。だが、もっと根本的な部分で、王はあちこちの人間から不満を買っていた。何故なら王は合理的で、冷酷で、誰であろうと必要ならば切り捨てたからだ。

彼らは言った、オレは王に比べて随分と人間らしい騎士だど。愚かにも程がある、オレはオレ以外の誰一人として好いたことはない。人間は喋るだけが取り柄の畜生どもに過ぎない。

無邪気な子供であれ、大人であれ、それは決して変わらない。肉を放り込めば、即座に餌の取り合いが始まるだろう。

オレが人間を殺さないのは、憎くないからというだけ。群がる羽虫を鬱陶しいとは思っても、憎悪はしない。

だからオレは、オレがそうしたいと思う方向に動いた。付き従う者たちのことなど考えもせず、ただ動いた。すると不思議なことに、オレは人間らしいと言われた。

——人を一人でも多く救おうとする王は、人の心が分からぬと罵られ。

——人を救うことなど考えもしないオレは、人の心が分かると褒め称えられた。

思々しい。オレが叛逆したのはお前たちのためではなく、オレ自身のためだけだ。

付き従いたいならそうするがいい、オレはお前たちのことなど知らない。あれだけお前たちのために心を砕いた王のことを忘れ、尾を振るお前たちのことなど知ったことが。

そうして、最後の戦争が始まった。ドーバーでの戦いでは敗北し、上陸を許したものの疲弊していたガウェインを討ち取った。

幾度かの小競り合いを経て、遂にカムランの丘でオレと王は対峙した。この時点で、どちらが勝つかはともかく、国としての運命は決まったようなものだった。

それでも、王はあくまで冷静だった。

戦場では父の名を何度も呼んだ。その度に雑兵が群がってきたので、叩き潰し続けた。殺して、殺して、また殺して。ふと、どうしてこうなったのかを考える。他者からすれば、何と馬鹿馬鹿しいことだと思うだろう——知ったことが。

母の予言通り、オレは国を滅ぼす大罪人となるな——知ったことが。

己の憎悪に、国のあらゆる人間を巻き込んだことについて——知ったことが、知ったことが、知ったことが！

「ア————サアアアアアアアアアアツ!!」

その呼び掛けに、遂に騎士王が応じ——ここに、最後の一騎討ちが始まった。

……勝負は決した。王の聖槍はオレの胸板を貫いた。オレの敗北、否、オレの勝利か。

結局、王が手に入れたものは何もかも全て。オレが台無しにしてやったのだから。

だからそう。オレを見て、オレを憎め。オレの名を忌まわしい耳障りなものと思い、顔を憎しみに歪ませ、叫ぶがいい。

けれど。結局最初から最後まで、王はオレの存在すら認めなかった。

翠緑の瞳は冷ややかにオレの死を確認し、それが確定した時点で背を向けた。手向ける言葉はなく、涙もなく、憎しみすらない。

不意に悟る。

——ああ、なるほど。

——確かに人間（ひと）の言うことも間違っているではなかった。

——王は人の心が分からない。

認めよう。最後の最後まで、王は完璧な王だった。だが、だからこそ憎む。完璧な王よ、それでも貴方の執政は上手いかなかった。

オレならやれる。王にできなかったことを、オレがやってやる。父よ。貴方が完璧な王

であると言うならば。オレはそれを上回ろう。

ああ、どうか後一度。後一度だけ、オレに機会を与えよ。かつての王のように運定の剣を抜かせてくれ、どうか、どうか今一度だけ――。



——不思議な夢を、視た。

大地を駆けている。どこまでも広がるエメラルド色の草原は、無垢な美しさに満ちていた。景色が流れていく。夢であることは分かるが、両足の感觸はどこまでも現実だ。

走る。

私は、走っている。

ただただひたすら、真っ直ぐに。はしたなくも声を上げた。自らの足で走ることが、これほどの快感を、刺激をもたらすとは思っても寄らなかった。

風景は瞬く間に切り替わり、やがて私は美しい山の麓にあつた洞窟に辿り着いた。ああ、待って。この山を、私は確かに知っている。

そう、山の名はベリオン。ギリシャの名観光スポットであるこの山の洞窟で、暮らしていた名高きケンタウロスが一人。

その名はケイローン。数多の英雄を教導した、ギリシャが誇る大賢者だ。

ここまで来ると、ケイローンのマスターである私にも理解できた。これはサーヴァントの過去だ。経路によって繋がっているせいで、睡眠時にこうして彼の記憶を読み取ってしまふことがある。

もちろん意識的に不可視にすることだって可能だが、それは勿体ないと私はむしろ、迷

い込むように意識レベルを調整していた。慣れない行為だったせいで、やたらと時間が掛かったが——これで夢を見る度、ケイローンを見ることが出来る。

私の知らない彼を、見ることが出来る。

洞窟に近付くと、一人の少年がこちらに走り寄ってきた。先生、と叫んでいるあたり教え子の一人だろう。

少年は軽快な動作で、傍にあった岩へと跳び移った。そうして、ケイローンを見下ろして、何かに期待するような表情で告げる。

「先生、狩りだ！ 狩りに行こう！」

「駄目です」

ケイローンの答えはあまりに素っ気なく、少年はたちまち膨れ出す。それを見て、私はくすくすと笑う。少年は、美しかった。眉目秀麗とでも言おうか。男とも女ともつかぬ、中性的な雰囲気を出していた。にも拘わらず、その言葉や仕草は間違いないく、「男の子」のそれだ。弟がいる私には、それがよく分かる。

「狩りが好きなのは良いことです。貴方の将来を考えれば、当然下手より上手い方がいい。ですが、貴方が目指すは狩人ではなく、英雄でしょう。ただ暴れ狂うだけの者を、人は英雄と認めません。文字が読めるのは無論のこと、音楽や礼儀作法も学ばなくては恥を掻きますからね」

論すような言葉にもしかし、少年は不満が消えたりはしないようだ。難しい表情のまま、うんうんと唸っている。

理屈では正しいと分かっているので我が儘は言えず、さりとて今から始まるものが愉快なものであるはずもなく。それを見て、ケイローンは苦笑して告げた。

「——とはいえ、一日中洞窟に籠もっているというのも貴方にとっては堪えられぬ責め苦ですか。では、折衷案を。本日中に残りの文字全てを覚え、石版に刻みなさい。夜までに終われば、夜間での戦い方を教えましょう」

「え、本当!?」

「多少危険ですがね。貴方ならば、大丈夫でしょう。もちろん、夕暮れまでに文字を覚えることが最低条件ですが」

当然、少年が否を唱えるはずがない。ケイローンは笑い、喜び跳ねる少年の頭に手を置いた。少年は照れて笑いながら、それを受け入れる。

私はそれを羨ましい、と思いつつも衝撃を受けていた。ケイローンに妻や娘がいた、ということは何に聞いている。だが、それらは全て神に近い存在だったはず。少年はまさしく、人間らしい輝きに満ち溢れていた。

けれど少年の頭に手を置いたケイローンの仕草は、子を愛しむ父親そのものだ。

「それでは授業の時間ですよ、アキレウス」

——アキレウス。

まさか、と愕然とする。だが、ケイローンは彼をアキレウスと呼び——アキレウスと呼ばれた少年は、それを否定しない。ということはつまり、あの少年が「赤」のライダー、アキレウスということか。

恐らく、この聖杯大戦において最高の知名度を誇る大英雄アキレウス。

そう。アキレウスの父、英雄ペレウスは妻である海の女神テティスとアキレウスを巡って対立した。

彼を完全な神にしようとするテティスと、半神として生まれた以上、完全な神にするとすることは人間であるアキレウスを滅ぼすことになる、というペレウス。

結局、テティスはペレウスの意見を呑んだ。だが、テティスはペレウスとアキレウスの下から立ち去り、故郷である海底へと戻ってしまった。

神と人が共に暮らすのは、子であるアキレウスを鑑かたどにしてさえも難しかったのだ。

ペレウスは旧友であるケイローンに、幼いアキレウスを預けることに決めた。何しろアキレウスは英雄と女神の間に生まれた子、ペレウスが知る限りケイローンこそ最高の教師だったのだ。

ケイローンは旧友の頼みを快く引き受け、才溢れる少年にあらゆるものを教え込んだ。文字、音楽、詩吟、道徳、礼儀作法、そして狩猟や戦闘技術、乗馬、果ては医術まで。

幼くして父母と別れざるを得なかったアキレウスにとって、ケイローンはまさしく厳しく、そして優しく少年を見守る父そのものだったのだ。

……夢のせいか、過去は瞬く間に過ぎていく。

アキレウスは見る見る内に逞しく成長していく。覺束なかった槍捌きは、既に神域に達しようとしていた。馬を走らせればまさしく縦横無尽に草原を駆け巡り、あらゆる障害物をその駿足で跳び越えた。

無論、知識の方も完璧だった。野を見れば一目で食用の野草や木の実を探し当て、傷を負えばそれに対処するための手段も理解していた。

英雄らしい振る舞い方、宮廷での礼儀作法も完璧だった。なお驚くことに、アキレウスは当時十になるかならないか、だったという。

この時点で、「教えることは何もない」とケイローンに言わしめたアキレウスは、一体どれほどの人物なのだろう。

ともあれ、別れのときだ。ケイローンは妻であるカリクローと共に、旅立どうとするアキレウスを見送っていた。

「先生、カリクロー様。お見送りありがとうございます」

「アキレウス。元気でね、病氣などせぬようにちゃんと気をつけるのですよ」

カリクローは涙ぐみながら、アキレウスを抱き締めていた。ケイローンがアキレウスに何かを教えるならば、彼女は一心に愛情を注ぐ大切さを教えたのかもしれない。

「大丈夫です。ケイローンの教え子の名に恥じぬよう、力を注ぎます」

言葉が地に着いている。ただ教えられた言葉を鸚鵡のように繰り返すのではなく、己で考えて、それを正しく言葉にし、口に出したのだ。

……十歳にして、この振る舞いだ。幼くして英雄だと謳われた理由がよく分かるというもの。それを見たケイローンは、やはりアキレウスの頭に手を置いた。

「立派ですね、アキレウス。ですが、それは我々やペレウス以外の前で行うべき返礼です。無理をしなくていい、既に君は——立派な英雄だ」

その言葉を聞いたアキレウスはわずかな驚愕と共に、こくりと頷いた。それから慌てて背を向け、ぐいと腕で目を拭う。少年のそんな仕草を、ケイローンとカリクローは微笑ましげに眺めている。

「——それでは、先生。行って参ります」

最後まで涙を見せず、英雄となった少年は旅立った。この後、ケイローンの言葉通り、アキレウスは英雄として八面六臂の活躍を見せる。

しかし母テティスが予言した通り、トロイア戦争の最中その暴虐を太陽神アポロンに咎められたアキレウスは、アポロンの力を借りたパリスによって唯一「人間」のままであった種と、次いで心臓を射貫かれた。致命傷に最早これまでとアキレウスは暴れに暴れた後、戦場に斃れた。

アキレウスを知る者ならば、誰もが知る逸話である。そう、アキレウスはこれ以降二度とケイローンに会う機会はなかった。

アキレウスが悲壮なる最期を遂げたのと同様、ケイローンもまた非業の死を遂げている。だから二人のこれは、まさに今生の別れだったのだ。

気付いた瞬間、私は愕然とした。ケイローンとアキレウスの間には、確かな情愛があった。父と息子、兄と弟、家族としての確かな絆が。

では、今その絆を引き裂こうとしているのは何なのか。

言うまでもなく、聖杯であり——聖杯大戦。つまりは、マスターであるフィオレではないだろうか？

違う。サーヴァントとして召喚されたときは知らなかったとしても、その後で二度、彼らは刃を交えている。

——私のせいじゃない。

けれど、それはサーヴァントだからだ。マスターの命令に従わなければ、令呪による強

制、魔力を断たれることによる死からも免れぬ奴隷^{サヴァント}。

——親と子に殺し合いをさせている。

でも、アーチャーはそれに納得していたはず。戦うのが嫌なら、私にそう伝えてくれていたはず。

——お前は彼のことを何も分かっていない。

分かっているはず、分かっているはず、彼のことなら何だって……！！

私は目を塞ぎ、夢から覚めることをただ望む。浅ましくも、滑稽にも、私は逃げることを選んだのだ。

——自由な夢を、模た。

その騎士は、空を飛ぶことが好きだったらしい。何故かと問われれば、空なら上にも下にも行けるからだ、と答えた。

……行く方向が、多ければ多いほどいいのだろうか。

まあ、とにかく言うまでもなく、その騎士はただひたすらに自由だった。イングランド王の子に生まれたものの、王位どうこうというややこしい話は全て放り捨てた。

ともすれば暴持ちならぬ奴、と思われそんな人間であったが。生来の人の良さのせい、か、誰かが騎士を好いていた。

生まれついて、誰からも恨みを買わぬ。生まれついて、誰かが親しむ。賢しきはなく、無邪気というか愚かというか、無鉄砲というべきか。ともかく、そんな騎士だった。

敵はない。敵から奪い取った貴重な品を、あっさり誰かに贈った。絶望はない。恐るべき魔女アルシナによってミルテの木に変えられてしまった。

……平然と、誰かが戻してくれるまで気楽に待ち続けた。

どこか間が抜けていて失敗する。強敵と相対すれば、たまに敗れる——たまに勝つ。強さ、という点からすれば平凡。けれど冒険の数と質ははそこの騎士など歯牙にも掛けぬほどの非凡さだった。

勇気があるが弱い。幾度も挫折するが、一度だって挫けたりはしない。

彼の死も、実にあつきりとしたものだった。ロンスヴァルの戦い、突然の裏切りにもめげず、シャルルマーニュの勇士たちは奮戦を続けていた。

とはいえ、多勢に無勢。四十万対二万。一人に二十人の兵が襲い掛かるような状況が延々と続くにあつては、どれほどの勇者といえども、そう長くは保たない。

歴戦の勇士が次々と斃れ——件の騎士も、その仲間入りをした。嘆息し、虚空に手を伸ばしかけ——笑つてそれを止める。

全く何の後悔もない、とばかりに満足げな笑顔。流れゆく血に全身を浸らせながら、死に向かうための苦痛に苛まれながら、騎士は心底愉しそふだった。

ただ、もしも。

もしも、死に行く己に最後の願いがあるとすれば——。

。ああ、またあの場所へ行きたかつたなあ。

騎士にとって、最高の思い出だったろう。地上にない物全てが存在すると言われる果てなき世界。誰も目にしたことなかった、異次元の向こう側。

それは死の間際、薄ぼんやりとしたただの言葉でしかなかったのかもしれない。でも、

これは正しき願い、叶えるべき想いだ。

ならば、マスターである俺は、アストルフォの願いを叶えてやりたい。假令他の人間たちが、どれほど高潔な願いを持っていたとしても――。

瞬間、世界がねじ曲げられる。夢や深層意識といった、精神における安全地帯を残らず蹂躪。その恐るべき力に馴まれ、引き摺り出された。

肌は灼けるように熱く、軀は芯から凍り付くようだ。ならば、此処に居るのは当然の如く――あの怪物だろう。

最早目を逸らすことも、武器を握って戦うことも敵わず――その必要もない。俺は、当然のように知っていた。

これとつか向かい合わねばならぬことを、知っていた。最早正体は明白だ。彼の名高き大英雄ジークフリートの冒険譚の中でも、最も有名な「竜殺し」のエピソード。

ジークフリートは幻想剣バルムンクを手にして、邪悪なる竜ファヴニールに立ち向かったとされる。これほどに英雄に相応しい話はないだろう。

唾を呑む。

ただひたすらに広大な洞窟だったが、同時に何とも狭苦しい。理由は二つ、一つは洞窟

の半分以上の面積を占めている財宝。手に握っただけで、一生の富貴を約束されるような宝の山だ。

そしてもう一つ。その財宝を覆い隠すように寝そべった、黒い質量。姿は闇に溶け込んでいるにも拘わらず、異常なまでの重圧を感じ取れる。その重圧は想像を刺激する、黒い鱗、炎の舌、蛇の瞳、毒の息——そして、その全てが強大な完全なる生命体。

心が折れないのが、不思議な程におぞましい。あるいは見事なまでに砕け散ったせいで、最早折れたという認識すらできないのだろうか。

そこは、たった一頭しか存在を許されぬ場所。即ち、邪悪なる竜以外の全ての生命が、死に絶える場所だ。

今ここに存在することが、ただひたすらに恐ろしい。逃げようにも、足は縫い止められたように動かない。動けば死ぬ、どこか見たら死ぬということが常識のように思える。

竜の顎が開く。

更に恐ろしいことに。竜はやはり生命体だった。この次元に到達していれば、最早何も食べずとも生き続けることくらい簡単だろうに。この邪悪な存在は、弄ぶために喰らうのだ。鼠を襲り続ける猫、蛙をじつくりと消化する蛇——そういう類の捕食獣。

じりじりと、恐怖が肌を灼いていく。夢であれば、目が覚める。だが、果たしてこれは——夢なのか。

ここで喰われれば、目が覚めるという保証は果たしてあるのか。

無ければ、戦うしかない。だが、絶対に敵わない。せめて、この手に剣を握っていれば自決くらいは選べるのだが……。

「……何？」

そこで気付く。俺の右手には剣があり、俺の腕には籠手がある。それで悟る——どうやら今の俺は「ジークフリート」らしい。

ならば戦える——などと、わずかであるが希望を抱く。目を逸らすことなく、竜を見据えることもできる。

竜の動きが停止する。膨れ上がっていた殺意は収縮し、用心深く何かを窺うような瞳になる。俺は剣を握り締め、わずかな逡巡を振り切り——走り出す。

瞬時に、ファヴニールが戦闘態勢に移行。こちらの魂を握り潰すような咆吼と共に、人と竜の戦いが始まった。

周囲一帯に叩きつけられた火の渦は、たちまち闇を光に染め上げた。だが、それは決して正しい光ではなく、地獄を露わにするための獄炎である。

どう攻撃すればいいのかも分からぬまま、ただ無我夢中で剣を振るう。渾身の力を籠めたにも拘わらず、まるで「斬った」という感覚が薄かった。

背筋に無数の蟲が這い回るような悪寒に、無我夢中で地面を転がった。そこへ無造作に振り回された尾が頭上を通過する。

蟻と人間……いや、それ以上の差だろう。掠れば、その時点で幸運かどうかなど関係なく死に至る。

恐怖を顕微化するように吼えて、胴体へと一撃、更に尾へと一撃を加えた。竜殺しは遠く、己の死はあまりに身近過ぎた。

——勝てる訳がない。

そんな思いが過ぎる——実際の話、勝てるはずがないと思う。数多の幻想種の頂点に立つ怪物、それが竜種というものだ。炎や氷、あるいは毒の息を吐き出し、その頑丈さときたら城壁以上、そしてその爪は鋼鉄を容易く引き裂き、尾は金剛石であろうと粉々に打ち砕くだろう。

だが、俺の願は確かにこの竜を仕留めたのだ。ならば、俺が倒せぬ道理はない。

……そのはずだが、勝利への道筋が欠片も見当たらない。爪が鎧諸共に胸板を引き裂いた。まるで紙屑のように鎧は砕かれ、胸からは血が噴き出した。ごっそりと、肉が引き千切られている。

痛い、などというものではない。感じたのは決定的な喪失。致命的な大打撃、溢れる苦痛が如何なるものかは、己の声とは思えないほどに甲高い絶叫からも明らかだった。

霞む視界——ファヴニールが、更なる致命傷を加えるべく動き出している。意識が遠のくほどの苦痛の前に、弱々しく剣を振るう。

当然の如く、弾かれる。吹き飛ぶ軀は転げ回り、炎に灼かれた。声は潰れ、最早囁くことも敵わない。

最早生存本能か、あるいはそれ以外の何かによって強引に肉体を動かす。そうせねばならないと、何かが必死に語りかける。

顔を起こし——異形の魂と向かい合う。勝てるはずがない、と勇氣が囁く。敗北する理由ならば山ほど見つけられるくせに、勝利の理由は、今の自分はジークフリートだから、くらいものだ。

いや——それとも。

ジークフリートですら恐らくは苦戦し、絶望し、わずかな光明を探り当て、激戦の末に討ち果たしたであろう竜を。

ただ、外見だけを模倣した自分では——あのとき、赤のセイバーに敗北したように、竜には勝てないのだろうか。

震えながら血を拭い、勝てないことを確信しつつも立ち上がる。竜の眼光は醜薄で、こちらの戦意があろうがなかろうが、数秒後に襲い掛かってくるだろう。

両手で剣を握る、胸板から溢れる血や激痛は黙殺する。手で剣を握り、足で跳躍するの

だから頭や胸がどれほど損壊しようと関係ない。

強い抵抗だ……そんなことは自分でもよく理解している。だが、不思議と「逃げる」という選択肢だけは浮かばなかった。

恐怖のせいで、動悸は激しい。絶望のせいで、膝は震えている。涙がひっきりなしに流れるのは、自分の命が絶たれる悲しさのせいだ。

それなのに。やはり——「逃げる」ことはできない。竜の顎が開き、情けない声を上げて顔を歪ませる。足は前へ、ただ前へ。狙う部分も曖昧で、どこを狙えばいいのかも分からないまま剣を振りかぶる。

だが間に合わない。逃る炎が、濁流のように全身を包み込む方が遥かに速い……！

そこで、またも暗転。

気付けば、憂いを帯びたルーラーの顔が大写しになっていた。

どうやら夢とも現実ともつかぬ世界から、無事に脱出したらしい。安堵の息を零しつつも、心臓を鷲掴みにされるような不安があった。

最後の炎で、間違いない向こう側の俺は死んでいただろう。ではそのとき、こちら側の俺は、どうなっていたのだろうか——。

——「反則だ。」

その魔術師は絶叫した。それもそうだろう、目の前にはサーヴァントがいる。そのマスターと思しき女もいる。聖杯大戦の最中だ、サーヴァントが何処に居ても不思議ではない。だが——自分はマスターではない。

このサーヴァントは堂々と我が邸宅へと侵入し、あらゆる警報を事前に封じ込めた。その上で、一切の抵抗を許さず自分を「■■■」した。

ふざけるな、聖杯戦争の原則を忘れたか。私はマスターではない。ただの魔術師で、サーヴァントと戦える訳がない。

違反だ、規則違反だ。審判はどこにいる。このサーヴァントとこのマスターに罰を与えよ。まして自分は聖杯大戦とは直接関係のない、ただの援護役だ。

おい、聞こえているのか。抗議する、断固抗議するぞ。声が掠れている、意識が遠のいていく。おかしい何故だ——と思ったところで、その魔術師は無意識に自分の胸に触れた。

胸に大きな孔が穿たれていた。心臓を貫かれている。魔術刻印が無理矢理な蘇生を試みているが、すっかり零落した自分たちの刻印では死の瞬間を引き延ばすだけが精一杯だ。

——ああ、つまり。私はどうやら死ぬらしい。

その事実が脳が壊れる。恐怖のあまり、意識が喪失する。電源は切られ、最早二度と起ち上がることはない。

それを確認すると、サーヴァントは言った。

「ねえ、おかあさん。ここなら、住み心地がいいかな」

「とても綺麗なお家よね。でも、駄目よジャック。ここは魔術師さんのお家でしょう？」

……通信網が破壊されたなら、まずはそこを調べに来るわ」

母親は優しくジャックを諭す。素直に少女は頷くと屍体を放り捨てた。立地条件的にはなかなかのもののだが、他を探した方が良さそうだ。

それでは必要な品を収奪次第、別の場所へと移動しよう——と決めたところで、今まで押し入った家にはなかった、ユニークなものを見つけた。

「あら、ピアノね。魔術師さんもピアノを弾くなんて、知らなかったわ」

それは小さな部屋に押し込まれたグランドピアノだった。周囲の壁がやや分厚いところから考えて、防音仕様に改良されているらしい。壁には幾つもの術式や、魔導器が設置さ

れている。そのことから察するに、こここの魔術師は音を媒介とした魔術を研究していたらしい。

もつとも、魔術師でもないマスター——六導玲霞ろくどうれいかには、何の意味もなかった。重要なのは、ピアノがあるということだ。

「おかあさん、弾けるの？」

「昔はよく弾いていたわ」

まだ、彼女の両親が生きていた頃の話だ。懐かしさはあるが、戻りたいとは思わない。あの幸福は分不相応過ぎる、と玲霞は思う。

鍵盤蓋を開いた。使い込まれてはいるようだが、メンテナンスはきちんと行っている。

ジャックは興味深げに鍵盤を覗き込んで、人差し指でちゃんと触れた。

ポーン、と美しく弾むような音が響き渡った。それが気に入ったのか、ジャックは何度も鍵盤をどん、どん、と叩いた。

「ねえ、ジャック。何か弾いてあげましょうか？」

「……いいの？」

ジャックが顔を起こす。その瞳は常ならぬ興奮に輝いていた。玲霞はジャックに扉を開めるように言うと、椅子に座った。

鍵盤に手を置き——しばし、娘に相応しい曲を考える。とはいえ、玲霞のレパートリー——

は貧弱で、今でも弾ける自信があるのは数曲程度だ。

「ねえ、ジャック。何かリクエストはある？ 悲しそうな曲とか、楽しそうな曲とか、何でもいいわ」

「うーん……やさしい曲がいいな。かなしいのも、たのしいのも、やだ」

そう、と母親は呟いて。ジャックに相応しい曲を思い出して、鍵盤に指を置いた。

「じゃあ、この曲がピッタリね」

ピアノが曲を奏で始める。玲霞の言う通り、その旋律はただ優しかった。悲しくはないがどこか切なく、楽しそうではないがどこか安堵を感じさせる。

ジャックはうつとりと聴き惚れながら、曲名を尋ねた。

「トロイメライ、ね。子供の情景、第七曲」

「トロイメライ？」

「確かドイツ語で『夢』だったかしら」

無邪気な子供が眠り夢を見る。あらゆる善悪を知った大人が、かつての己を回想する夢を見る。このどちらか、あるいは両方が解釈として正しいのかもしれないが——ともあれ、この曲はジャックに相応しい、と玲霞は思った。

ジャックはピアノの傍で、夢見るように——玲霞が紡ぐ音に聞き入っていた。曲を終わらせるのが惜しい、とすら玲霞は思う。

結局、三度同じ曲を弾いた。

「また聴きたいな」

「落ち着いたら、幾らでも聴かせてあげるわ」

せがむジャックの頭を、玲霞は優しく撫でた。

これは——あの草原での合戦での最中、トゥリファスの街で起こった出来事だった。

Chapter 8

ルーラーは教会の屋根裏部屋で起床した。睡眠時間は五時間程度。それだけの時間を費やしたお陰か、思考は凝（こ）みがなくなり冴（さ）え渡（わ）っている。

借りた部屋の掃除を念入りに行うと、折良く昼食の時間帯だった。アルマに手伝いを申し出て、共にシチューを作ることにした。

ぐつぐつと良い匂いを漂（も）わせ始めた寸胴鍋（すたがま）を掻き混ぜていると、隣でパンを焼いていたアルマが不意に話しかけてきた。

「ジャンス、一ついい？」

「はい。何でしょう」

「貴女は主を信じている？」

その有り得ない質問に、ルーラーはぎょっとした表情で振り向いた。アルマは困ったように微笑みながら、少女の返答を待っている。

「……もちろん、信じています」

「信じる者が救われる。世間では、よく擲^な擲^なされる言葉ね。信じてない者は救わないのか、救おうともしないのか」

「それは、そもそもその前提が間違っているのです。……患難時代を迎える前に携^も筆^{ふで}されたいと願うのは、傲慢^{ごうまん}というものです」

喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣く。それが信徒としての前提だ。

「——そう。それはやはり、貴女が救われなかったことに関係しているのかしら？」

台所が不意の沈黙に包まれる。

アルマの言葉に、ルーラーは寸胴編のシチューを見ながら無言で首を横に振った。

「いいえ。私自身は関係ありません。それに、火刑は神に救われなかった結果ではない。あれは——私が運命を選択しただけです」

シチューが、ようやく完成した。

……アルマはユグドミレニア一族を見張る命を受けた聖堂教会の監視者らしい。動きがあれば報告し、無ければ教会のシスターとしての務めを果たす。楽ではないが、何しろ任務について二十年間、動きらしい動きはほとんど無かった。

それが急激に動き出したのは、数ヶ月前からだ。世界中から集まる血族たち、夜を徹して行われる儀式、運び込まれる大量の資材、そして明らかに強力な魔術を行使する気配。

だがアルマが連絡したにも拘わらず、教会側は対応に遅れを取ってしまい、結局聖杯大戦の開始直前まで介入することはできなかった。

「いつから私のことを？」

「最初はユグドミレニアの魔術師かと思ったわ。この街の観光客は、本当に少ないですからね。その後、連絡が来てびっくりしたけど」

「む。魔術師だと思ったのなら、何故私を泊めて戴けたのですか？」

「あら。だってそれとこれとは関係無いでしょう？ この教会は救いを求めた者には、門戸を開きますから」

上品な笑みにルーラーも釣られたように笑う。

「私からも聞いていいかしら。どうして、驚かなかったの？」

「そもそも、このトリファスという小さな街で教会がきちんとした形で成立しているとは思いませんでした。他の魔術師ならばいざ知らず、ユグドミレニアは血を広く分けるこ

とで生き延びてきた一族ですから」

とはいえ、つい先ほどまでアルマを疑っていた訳ではない。

「というよりも、仮令聖堂教会の人間であり、私のことを知っていたとしても——それは別に、問題だとは思いませんでしたから」

ルーラーは聖杯戦争の秩序を保つ側であり、いわば監督官だ。今回の聖杯大戦における監督官は「赤」の側に一方的に加担していたが、トゥリファスに到着したときのルーラーはそこまで把握できるはずもなく、完全に把握した今となっては、あれがシロウ・コトミネの独断による暴走ということくらいは分かる。

「それでアルマ。貴女たちはどこまで知っているのですか？」

「こちらが派遣した監督官が暴走した、ということくらいしか把握できていないわ」

おっとりとした表情で、アルマが答える。

「そうですか……。いえ、それならば問題ありません。聖杯大戦は私の管轄ですから、こちらで対処させて戴きます」

一瞬、聖堂教会にも協力を仰ごうかとも考えたが、ここで彼らが介入するのは、更なる混乱を招く恐れがある。天草四郎時貞は決して聖人と認定された訳ではないが、聖堂教会に所属していたことも考慮すると、組織同士の争いに移行しかねない。

「あら、そう？　でも、正直有り難いかもしれないわね。何しろこちらも今、魔術協会と

揉めているみたいだし」

それはそうだろうな、とルーラーは思う。^{オオ}オオのセイバーのマスター、獅子劫という男の話を聞く限り、魔術協会もフリーの魔術師を高額で雇い入れて万全の態勢で戦争に臨んだらしい。

それがまさか監督官が裏切り、しかも最初から計画されていたとなつては、魔術協会も面子が立つまい。獅子劫が言っていた通り、許容しうる犠牲——つまり、フリーの魔術師たちでなければ協会が本格的に乗り出してきたかもしれない。

「では魔術協会と聖堂教会は基本的に様子見のまま、動くことはないぞ？」

「……そうね。そう思って戴いて結構です。我々は偽の聖杯に、そこまで拘る必要がないと考えています。それだけに、数多の願いを叶えるというあの聖杯を手に入れるために、シロウ・コトミネ神父が執心しているのは残念です」

アルマはルーラーの問い掛けを肯定した。ルーラーはほっと息をつく。協力は欲しいが、介入は原介だ。この聖杯大戦は、異常なまでの混乱状態だ。

「そうね。我々としても状況が翻めないし、派遣した監督官が裏切った状態で介入するとうのは——やはり、余計な混乱を招くだけですわね」

「それで構いません。……あの、最後に一ついいですか？」

「ええ、何かしら」

「どうして、わざわざ正体を明かしたのですか？ 別にそれで揉め事が起きるとは思いませんが、明かす必要は無かったはず」

「あら、大事なことを忘れていたわよ。ジャンヌ」

首を傾げるルーラーに、アルマは悪戯いたづらっぽい笑みを向ける。

「ジャンヌ・ダルタ。貴女はこの世に光をもたらした偉大なる聖女です。その方と話したい、と思うのは悪いことですか？」

その言葉に、ルーラーは目を丸くする。

「え、あ、う。……そう言えば、そうなんですかね。ただその……偉大なる聖女とか、この世に光をもたらした、というのはさすがに過言ではないでしょうか……」

ルーラーは照れて俯いた。確かに、自分の真名はそれなりに世間に知られている。でなくば、そもそもがサーヴァントとして召喚されないだろう。

しかしこう面と向かって自身への憧れを口にされると、何やら非常にむず痒い。

「世界中の人間が貴女の奉仕を知って涙し、憤りました。貴女が与えよう、と意図したものでなくとも、貴女の行動が何かを誘発したのです。それは、誇るべきことだと思います。実のところ——私も貴女のことを知って、シスターを志したのですから」

ルーラーはしばしアルマと歓談して、ようやく教会を辞去した。名残惜しいが、いつま

でも教会に逗留している訳にもいかない。

それにしても——と名残惜しんで手を振るアルマを思い出し、ルーラーは考える。後世に名が残っている、というのは何とも奇妙な感覚だ。

それは軍を率いて街々を解放した際に、市民の方々から受けた歓迎とはまた違うものだ。彼らは私に故国の解放、戦いへの勝利という夢を託した。

でも、アルマはそうではない。ジャンヌ・ダルクの最期を知り、彼女という存在に何か——信仰のようなものを抱いたのだとか。炎に消えた悲運の聖女……というのが、世界に伝わっている標準的な「ジャンヌ・ダルク」らしい。

貴女は、貴女が思った以上の影響を世界に与えたのよ。

とアルマは言った。それは誇るべきことかもしれない、だが——何かが、引っ掛かる。

それに気付いたとき、ルーラーは微かに暗澹とした気分を抱いた。

影響、という点では自分の存在がこの世に災厄を撒き散らしたことも確かだった。

頭を振る——忘れてはならないが、悩むことでもないと思考を切り替える。

それはもう、終わってしまったことなのだ。炎に灼かれた後でも、彼に言葉を掛けることができれば良かったかもしれない。彼を慰めることができたかもしれない。

だが、遥か昔に終わってしまったことだ。解決はなく、未来に託す手段もない。

それでも。あの偉大なる元帥がああなってしまったことだけは——ただ、無念だった。

気を取り直して、ルーラーはミレニア城塞を訪れた。時間的には別れてから半日も経過していないが、それでも明け方にあつたどこか陰鬱な雰囲気は薄まっている。

城門の前に立つと、ホムンクルスが門を開いて出迎えてくれた。

「ルーラー殿か。何か状況に急変でも？」

やや険のある目つき、片手に握った戦斧（いくさのきりぎりす）——ホムンクルスたちを指揮していた、リーダー格の少女だろう。

「いえ。そういう訳ではないのですが……」

「ああ、ジークの様子を見に来たのか。案内しよう、ついてきてくれ」

「……そういう訳でも……あるのかな？」

まあ、確かに目を離すと不安ではある。ジークは極めて知的で、温和な性格だと思うのだが——思うのだが。とにかく、一旦「こう」と考えたらとてつもない無茶をやらかす類の人間でもある。

そしてサーヴァントは天下御免の無茶無鉄砲騎士、アストルフォだ。

「彼女はセーブじゃなくてドライブさせる側ですからね……」

ブレーキではなくて、アフターバーナー。ジークの無鉄砲を許容するどころか、それに輪を掛けて無茶をやらかす類のサーヴァントだ。

そんなことをぼんやり考えている内に、先導していたホムンクルスの足が止まった。

「ど、ここだ。そろそろ他のホムンクルスたちが起床する時間だ。交代で私も寝ることにする。では、失礼」

「ありがとうございます」

ホムンクルスを見送り、改めて扉に向かい合う。ノックをしてみたが、返事はない。まだ眠っているのだろうか？ 少し躊躇ってから、ルーラーは恐る恐る扉を開いた。

部屋は率直に言って、雑然としていた。あちこちに服が脱ぎ捨てられており、飲み干されたワインの瓶も数本ほど転がっている。石壁の一部が碎かれているのは、何故なのだろうか……？

部屋の中央には大きめのダブルベッド。シーツにくるまったジークが、枕に顔を埋めて眠っていた。

「まだ眠っていましたか……」

咳きに身じろぐこともなく、彼は眠り続けている。ライダーは居ない、近くに居るとは分かるので、霊体化しているのだろうか。

「ふむ……」

ホムンクルス、という出自のせいだろうか。ジークの顔立ちは城内のホムンクルスたちの多くと同じように中性的——どちらかと言えば女性的で、髪（髪）の一本も生えてはいない。

こう言ふとジークは些か気分を害するかもしれないが、作り物の美しさが彼らにはある。

黒のライダーであるアストルフオが、まさに可憐に咲く花の如き美しさならば——ジークのようなホムンクルスは、丁寧に丁寧に磨き上げられた宝石だ。どちらが下で、どちらが上というものでもない。

……眠りは深い。自然と目が覚めるまでは、このままにしておくべきかもしれない。

前回は互いに疲れ果てていて、狭いベッドで二人して無理矢理眠ったのだ。このダブルベッドで一人で眠るくらいの贅沢は許されるべきだろう。

穏やかだった寝息が、急激に変わったのはその直後だった。

「……ジーク君？」

声もなく、苦悶の表情で顔を歪ませる。大量失血をした人間のように蒼白な顔。一瞬、ルーラーの背筋に冷たいものが走るほど、ジークの生命力が弱まった。

「ジーク君！」

慌てて彼の肩を握さぶり、名を叫ぶ。二度、それを繰り返したところでジークがやっと目を見開いた。

「……ルーラー、か？」

掠れた声でそう呟き、手を彼女へと伸ばす。慌ててその手をルーラーが握んだ。弱々しいながらも握り返され、わずかに安堵する。だが、深刻な状況なのは間違いない。

「大丈夫ですか？ 今、治療を——」

「いや、悪い夢を見ただけだ。ただの夢だ、外傷はないだろう」

ジークはそう言っただけで、今は己のものである心臓に手を当てた。……確かに彼の言う通り、汗は引いていて血の気も戻っている。外傷もない以上、平気だと言われれば平気なようにしか見えない。死神は既に立ち去っていて、彼の魂はここにある。

「本当に大丈夫なのですね？ 何か、呪的な魔術を行使されたという訳では——」

「違うよ、ルーラー。これは魔術なんかじゃない。……魔術じゃ、ないんだ」

ジークは心臓に手を当てたまま、そう呟いた。魔術ではなければ、何なのだろう。そう問いつつ、そうとしたとき、ルーラーは今更ながら違和感に気付いた。

ベッドで眠っていたジークは、既にその半身を起き上がらせている。従って、シートに隠れているのは残りの半身、腰から足だけのはずなのだが——気のせいではなく、その盛り上がりやけに長い。

「ジーク君。ライダーはどうしました？」

「ああ、ライダーなら——ここにいます」

ジークがシートを捲り上げた。彼の足を、黒のライダーが抱き締めていた。あれだけの騒動だったにも拘わらず、すやすやと睡眠を貪る様はマスターを守るサーヴァントとは程遠い。

だが、そんなことよりも。

「……ジーク君。何でしょうかこの有様は」

ルーラーの声は、これまでになく低いものだった。戦闘態勢に入ったときに近い、腕腕に響くような深く低い声だ。味方ならば、その声の勇ましさに奮い立ち――敵ならば、その雄々しさに震え上がるだろう。

何故後者に聞こえてしまうのか、ジークは不思議だった。

「これは……まあ、恐らく寝ぼけて脱いだのだろう」

ベッドの下に脱ぎ捨ててある服をちらりと見る。恐らくセレニケから手に入れたものだろうが、ライダーは寝る際にもやっぱり寝間着へと着替えていた。霊体化すればいいのではと思ったものの、それを言うに「ボクが居ない方がいいって言うの?」とか泣きながら訴えてくるのだ。

ジークは魔術師としての知識こそ乏しいものの、魔術回路を核として鑄造された生命体である以上、魔術回路の質量は一流といいいい。

従って、ライダーを実体化させ続けていてもまるで問題はないはずだが――。

「そういうことではなく」

「はい」

怖かった。

それはともかくとして。ルーラーが問題としているのはライダーが寝間着を半ば脱いでいることではないか、とジークは推測した。上は留めるべきボタンを全て外しているせいで、白い腹部が晒されている。ボトムの方は足下に移動している、無意識に脱いでしまったらしい。

まあ、あまり見られた状態でないことは確かだ。ほぼ半裸と考えてもいい。ともかく、起きて貰った方がいいだろう。

「ライダー。起きろ」

「ん？ んう」

猫のような声を出して、ライダーがむくりと起き上がった。ひゃっ、とルーラーが息を呑む。ライダーは細い目で周囲を睨め付けるように見た後、何かを悟ったかのように頷いて――。

「んう」

そのまま寝た。仕方なく、ジークはライダーの耳を引っ張り上げた。

「起きるがいい、ダメサーヴァント」

「ダメじゃないもん!! 宝具豊富なデキるサーヴァントだもん!!」

劇的な反応だった。むくりと起き上がったライダーは両腕をばたばたと振って猛烈な抗議運動を開始している。

「おはようございます、ライダー」

その言葉に、ライダーはにへらと笑いながら手を振った。

「あ、ルーラーじゃん。おはよー……何？ 何かあったの？」

「あったと言えはあったのですが。それはひとまず置いておきまして。ひとつよろしいでしょうか、ライダー」

「うん、なにー？」

こほん、と咳払い一つ。ルーラーは指を突きつけ、ライダーを弾劾した。

「そのはしたない格好は何ですか、ライダー？」

「え？ おお、いつのまにか脱いでる……これ、はしたない？」

ルーラーは首を縦に強く振った。むう、と唸りつつライダーは寝間着の上下を一度に脱ぎ捨てた——と同時に、着装した。

「ふっかーっ！」

「ブーツのまま、ベッドで立つのは止めなさい。ライダーー！」

「何だようるさいなあ。いいじゃん別に。汚れてないし……たぶん」

「……それで。どうしてですか？」

「どうしてって何が？」

「ど・う・し・てー その……ジーク君と同じベッドで眠っていたのですかー」

今度こそ、ライダーは訳が分からないという表情で首を九十度近く傾げた。

「だってジークはボクのマスターじゃない？ で、ボクはジークのサーヴァントでしょ？」

「で、でもですね。同じベッドで眠る必要はないでしょう！」

「——君だって、眠ったのに？」

静かな声で、ライダーが告げる。ざちり、とルーラーが硬直した。魚のように口をぱくぱくさせた後、ジークへと顔を向ける。

「……喋（しやべ）っちゃったんですか？」

困惑したていで、ジークが頷いた。

「別に隠すこともないだろう、と思ったのだが。……隠すべきだったのか？」

「あ、いえ、その。別に——」

どこか恨めしそうに、ルーラーはジークを見る。

「寂（さび）しいことがあった訳じゃないんだよね？ ねー、マスター」

奇妙なことに、ライダーの笑いがジークには空虚なものに聞こえて仕方がない。というか、ルーラーを睨むライダーの目が全く笑っていないのは何故だろうか。

「……まあ、昨日の今日で寂しいことなどあるはずがないと信じていましたが」

「明日はどうなるか分からないけどね？」

ライダーが挑むように睨みつつ笑い、ルーラーは生真面目な表情でライダーを睨む。

「……公序良俗を乱さぬよう、お願いします」

「英霊なのに？ 世の中には全裸のサーヴァントも結構いるよ？」

「英霊であつてもです！ ましてジーク君はまだ子供なんですから、サーヴァントである貴女がしつかりしないといけないでしょう！」

「マスターは子供じゃない！ 自分で判断し、自分で行動した、立派な大人だ！ 大体、君こそ何だ！ 朝からノックもせずにボクらの部屋に入ってくるなんて威厳恥だぞ！」

「ノックはしました！ 貴女が寝ぼすけなだけです！ それからもうお昼ですよ！」

むむむむむ、とルーラーとライダーが睨み合う。ジークは手を掲げ、二人とも落ち着いて欲しいと告げたが双方に無視された。少し悲しい。

「……ともかく、軽率妄動は慎んで下さい」

「断る！ マスターと一緒に寝る方が、ボクの闘志が溢れ出るんだ！」

「そんな疾しい闘志があつてたまりますかッ!!」

「おや。修羅場ですか？」

——と、不意に声が掛かった。ルーラーとライダーが同時に振り向けば、アーチャーが扉から顔を覗かせていた。口を押さえてくつくつと笑っている……彼にしては珍しい表情かもしれない。

「しゅ、修羅場ではありません。……それよりジーク君、先ほどの件を改めて伺いたいので

ですが。黒のアーチャー、貴方の意見も欲しい」

「……先ほど？ マスター、何かあったの？」

「ああ。実は——」

ジークは先ほどの夢について説明した。胸を挟まれた、とジークが言った瞬間にライダーが慌てた様子で彼の服を引き裂き、何の傷もないことを確認した。ジークは咄嗟に黒い肌の部分を手で隠した。これを舌に見られれば、更にややこしい事態が起きる気がしたからだ。

「良かったあ。これでマスターが致命傷を負ってたらどうしようかと」

「服を引き裂くのは本当にどうかと思う」

「ライダー……貴女はどうしてそう……そうなんですか……」

頭痛を堪えるように、ルーラーは肩間を指で押さえた。アーチャーはそれらを全て受け流しつつ、ジークの語った夢の分析を行った。ギリシャの神々から授けられた知恵を持つ彼にとって、夢の分析など容易なことである——が。

「予め言っておきますが、断言はできません。と言うのもジーク、貴方は間違いなく世界で唯一無二、過去の聖杯戦争の歴史から見ても一度たりとも有り得なかった存在です」

ひたすら、未知数だとアーチャーは告げる。

稀少、などという言葉では語り得ない。文字通り唯一つ、そして他には無い存在なのだ

と。

「貴方は『黒』のセイバーの心臓によって生き延び、『黒』のバーサーカーの放った宝具によって、復活を遂げました。問題は、心臓です。貴方の心臓は、本来『黒』のセイバーがこの世界から離れたときに消えるもの。それが、貴方の魔力や魔術回路と結びついたことで一種、受肉した状態になりました」

アインツベルンのホムンクルスは、まさに一級品。彼らならば、自己管理能力を持った聖杯の器、即ち『小聖杯』としての機能を持つホムンクルスすら製造可能だ。ゴルド・ムジーク・ユグドミレニアもその可能性には気付いたものの、ダーニツクに命じられたホムンクルスにそのような機能は不要だった。

使い捨てるために鍛造されたホムンクルスでも、構造的な部分では『器』を受け入れるように設計されている。ただ、サーヴァントのような膨大な魂を受けきるだけの余剰が無かった。

ユグドミレニアのホムンクルスでは、サーヴァント一騎すら受け入れることはできない。だが臓器のただ一部。それも失った臓器を補充するという役割を与えられ、竜の血という不死の象徴のようなものが体内に組み込まれたとき——有り得なかったことが、有り得てしまった。

「夢は、間違はなく、『黒』のセイバーの影響によるものでしょう。……問題は、それがた

だ、の夢であるかどうか。ジーク、貴方はどう思いますか？ 君が体感したものは、本当に夢でしたか？」

ジークは無言で首を横に振った。

「——いや、違うだろうな。あれは、夢ではない。夢はその直前に見ていた」

ライダーをちらりと見る。さすがにライダーも、過去の話を大っぴらにされるのは好まないだろう。話して役に立つことでもない。

「で、あるならば。やはりそれは悪い予兆と見ていいでしょう。これはあくまで推測に過ぎませんが。貴方は——ジークフリートに、為ろう」としているのかもしれない」

「ジークフリートに、なる？」

「英霊の心臓が、その圧倒的な存在力で貴方を侵食しようとするのはおかしいことです。か？ もっともその場合、軀の方が耐え切れない。侵食は決壊を引き起こし、貴方は文字通り内側から潰れることになる」

「ですが——私の見立てでは、心臓は正常に機能しています」

「ルーラー、お忘れですか？ 彼はジークフリートに、為ったのですよ」

その言葉に、ルーラーが苦い表情で頷いた。

「そう、でしたね……。あの憑依は奇跡でしかない」

「奇跡ですら有り得ません。ジーク、確か貴方は二度ジークフリートを憑依させましたね？」

合計で、どのくらいの時間ですか？」

「一度の変身につき三分、それが限界だ」

「では、その三百六十秒が貴方の肉体を食い潰した。貴方がこれから先、どれほど長く生きるのかは分かりません。ですが、ジークフリートの三百六十秒は貴方の全人生に比肩し得るもの。ジークフリートを憑依させる度、貴方は死に近付くと思った方がいい」

『*命令*』——それは文字通り、死の宣告だ。令呪を補給すれば、なるほど幾度でも憑依させることはできるだろう。

だが、その度に、ジークという存在は崩壊する——戻ることなど、できるはずもない。

「もう、彼を憑依させるなど？」

ジークの問い掛けに、ルーラーが割って入り告げた。

「それが賢明でしょう。ジーク君、やはりマスターである貴方が戦うことは得策ではありません。戦闘はサヴァントに任せ、貴方はマスターとして行動して欲しい」

「しかし、*黒*のセイバーの力は必要だろう」

「……」

沈黙する。ルーラーは目を逸らし、ライダーはジークの服を摘んで離そうとしない。

「それに、まだアーチャーの言う通りだと決まった訳ではない。俺の間違いで、単なる夢という可能性も充分ある」

「でも……」

アーチャーが取りなすように告げる。

「こればかりは、我々が決めたところでどうにもなりません。彼が令呪に告げる意思があるかないか、問題はただそれだけです」

ルーラーは思う。確かにアーチャーの言う通り、この問題に必要なのはジークの意思だけだ。アーチャーの忠告を踏まえた上で、尚それを無視するのか。その先に何が待っているかと、前に進む方を選ぶのか。

——愚問過ぎる。選ぶに決まっている。選ばせなければならない——違う！ 選ばせてはダメだ、絶対に！

「では、私はこれで。それと、我がマスターがルーラーとライダーに相談したいことがあるそうです。後で構わないので、会議室まで来て戴きたい」

アーチャーが退室すると、否応なしに気まずげな雰囲気が増幅される。ルーラーも、ライダーも、痛いほどに分かっている。

仮令どれほど誓おうとも、縛ろうとも、強制しようとも。ジークは来るべきときが来たならば、必ずジークフリートを召喚、憑依させるだろう。

殴って気絶させ、口に嚙くはを噛くはませて縛り上げる。それも無駄だろう、ならばいっそのこと永遠に眠くって貰う——もつと駄目だ。

「過激なことを考えていないか？」

じつとりと溜った視線を送る二人にジークが問い掛ける。

「いいえ」

「別に」

二人は揃って首を横に振る。ジークはベッドから起き上がった。

「……この問題に決着がつくことはないだろう。ルーラー、ライダー。……二人の厚意は本当にありがたく、無視して良いものではないことは分かっている」

だが、それでも。

それでも――。

「済まない。俺はホムンクルスたちの様子を見に行くつもりだ。二人は魔術師のところに
行って欲しい」

ルーラーはライダーと顔を見合わせ、揃って溜息をつく。

「分かりました」

「了解。マスター、ほいほいと外に出ちゃ駄目だからね？ その時は一言言ってからだよ」

「子供か、俺は」

二騎のサーヴァントは揃って部屋から退室した。会議室に向かいながら、互いに牽制するようにちらちらと視線を送る。

「……どうしましょう」

「どうしようかなあ」

結局、変身させないための方法はただ一つ。ジークが変身する必要のない状況を作り出せばいい。圧倒的な力で戦い、敵を押し潰す。……それができれば、苦勞はしないのだが。

「君が持つてる令呪を上手く利用できない？」

ルーラーは首を横に振って、その考えを否定する。

「令呪は各サーヴァントのクラスに応じて、一種の『鍵』のような状態に変質しています。

つまり他の色、他のクラスのものとは適合しません。できたら、とっくにしています」

「何でそんなことするんだよう。普通は令呪なんて、どんなマスターのどんな令呪も他のマスターに適合するものだろうに」

確かにライダーの言葉は正しい。だからこそ、普通の聖杯戦争では監督官が令呪を保管し、ルール変更などの報酬として与えることもあるほどだ。

「私が一騎のサーヴァントに執心して、故意に令呪を与えてしまうようなルーラーになることも限りません。最悪の事態を防ぐ為です」

「こういう状況も想定して欲しかったと思う」

「こんな状況、普通は考えられません」

そもそもの前提である、聖林大戦ですら異常極まる事態なのだ。システムが更なる稀少な確率を恐れたのも無理はない。

不幸中の幸いか。相手方であるシロウも、赤の令呪はほぼ三回ずつ揃えているが、黒には通じず、赤のセイバーの令呪も確保していない。こちらのサーヴァントが令呪で束縛されることだけは無かった。

「ところで、フィオレちゃんの呼び出して何だろ」

「さあ……空中庭園に向かうための、飛行機の算段でもついたので？　あるいは、攻略への足がかりを掴んだとか」

「だといいんだけど——」

「残念ですが、そう上手くいきません」

集合場所は昨日と同じ会議室だ。フィオレはやや疲れた顔で笑みを浮かべている。傍らには執事の如き竹まいの「黒」のアーチャー。弟のカウレスは一步引いた位置に立っている。

「飛行機に関しては、もう少しお待ち下さい。三日以内には到着する予定です」

「むう、残念。それで、他に何か用があるの？」

「はい。実は「黒」のアサシンについてです」

「……そう言えば、どうとう「黒」のアサシンは姿を見せませんでしたね。私はユグドミレニア側が、マスター暗殺のために待機させていたのかと思いましたが」

ルーラーの言葉に、フィオレは首を横に振る。

「情けない話ですが、アサシンのマスターはサーヴァントを奪われたようなのです」

「おおう、本当に情けないや」

憂うフィオレに向かって、ライダーは率直な感想を述べた。ルーラーはシロウが「黒」のアサシンについて言っていたことを思い出す。確か、あのとき彼は――。

「はつきりしているのは一つだけ。アサシンは暴走しています」

カウレスがルーラーとライダーに向けて、新聞を放り投げた。手にしたルーラーが苦い表情を浮かべる。

ルーマニアの切り裂きジャック、未だ正体掴めず

「切り裂きジャック」……」

「下世話な記事名で煽る新聞も、ときに真実をもたらします。皮肉なことに、彼らが切り裂きジャックと呼ぶ殺人鬼は、正真正銘、本物の切り裂きジャックです」

「……貴女たち、アサシンにジャック・ザ・リッパーを召喚したのですか？」

ルーラーの眉が蹙まると、フィオレは肩を落とした。

「はい。一族の魔術師である相良豹馬は本来アサシンとして召喚されるハサン・サッバーハでは限界を感じ、最も新しいアサシンであるジャック・ザ・リッパーに活路を見出しました」

聖種を含めた聖杯戦争が度々執り行われる内に、マスターの間では幾つかの戦術が確立された。マスターが最優先で倒そうと動き、警戒するのはセイバーを始めとする三騎士ではなく、アサシンであるというのが常道である。

『気配遮断』による奇襲はサーヴァントを常に周囲に待機させない限り、打ち破ることはほぼ不可能だ。ところが、安全確保のためにサーヴァントを視認できる位置に置くということは他のサーヴァントと相対したときに、また問題となる——戦闘に巻き込まれる恐れが極めて高くなるのだ。いくら英霊といえども、誰かを庇いながらの戦いは圧倒的不利

だ。

サーヴアントが死なずとも、動きが封じられた状態に陥れば敗北は明らかだ。かと言って、サーヴアントを遠ざけるのもまた愚策。

更に、二騎のサーヴアントが戦いに熱中している間にアサシンに暗殺される、という可能性も常に捨て切れない。

とある亜種聖杯戦争において、アサシンを召喚したマスターがわずか三日で聖杯戦争を終結させたという逸話すら存在する。

その為、マスターたちは死に物狂いでアサシンに対する防護を強化した。何しろ、召喚されるアサシンの真名は既に知れ渡っている。

ハサン・サッバーハ——中東における伝説の暗殺教団の頭目であり、^{「アサシン」}「暗殺者」の語源ともなった人物。ただし、ハサンと名乗る人物は歴史上数えて十九人存在した。

アサシンを召喚した場合、通常はハサンを名乗ったこの十九人の内、誰か一人が召喚される。……彼ら以外の何者かが召喚される可能性もあるが、それは稀な、無視しても良い確率であろう。

ともかく、幾多の聖杯戦争によって、十九人のアサシンはその真名ばかりか、宝具の能力すらも暴かれた。それでも尚、恐るべきはハサン・サッバーハだ。その対策を潜り抜けてマスターを殺したことも数知れない。

しかし、その対策によって返り討ちに遭う確率も飛躍的に高まった。アサシンを召喚するのは聖杯を獲るか、さもなくば死かの限らないギャンブルだ——というのが聖杯戦争に参加するマスターの共通認識でもある。

だが、ハサンがアサシンとして召喚されるのは言うなれば『暗殺者』という言葉そのものが触媒であるためだ。従って追加詠唱の際に工夫を凝らし、ハサン以外の触媒を持ち込むことでハサン以外の暗殺者を召喚することも決して不可能ではなくなった。

例えば、赤のアサシンとして、シロウはセミラミスを召喚し――。

「黒のアサシンとして召喚する英霊を決める際、相良豹馬は情報の少なさを重要視しました。そして、英霊では最新の存在であるジャック・ザ・リッバーに着目したようです」

「そうですね。何しろ彼の殺人鬼は、英国最大の謎ですから。男か女かすら、定かではない」

「へ？ ジャックって男じゃないの？」

ライダーの言葉に、カウレスが首を振って答えた。

「ジャック・ザ・リッバーは当初、切り裂きジルどもと呼ばれていたことがある。娼婦ばかりを狙っている上に、ほとんどが抵抗もせずに殺されていたからな。まあ、女性説はすぐに消えたらしい……普通に考えて男だろうけど」

「恐らく、これまでの聖杯戦争で一度も召喚されたことのないアサシンでしょうね。宝具

など想像もつきません。ですが問題なのは、『黒』のアサシンが——」

「ええ。相良豹馬からの連絡は召喚直前のものを最後に途絶えています。当初は、魔術協会の誰かが相良豹馬を倒し、『黒』のアサシンを強奪したのだと考えていましたが——」

フィオレはルーラーとライダーの手下にある新聞記事に目をやった。

「その記事によって、『黒』のアサシンがルーマニアに到着しており、魔術師とは思えぬ振る舞いを行っていることが分かった私たちは調査に赴きました」

そこで、アーチャーとフィオレが目撃したのは、『黒』のアサシンと、『赤』のセイバーの対決だった。

あわよくば——という思いで二人が交錯した瞬間を狙ったものの、『黒』のアサシンは軽傷を負っただけで、戦域から離脱。一方、『赤』のセイバーは、『黒』のアーチャーと激突して痛み分け、という結果に終わった。

「……はあ、『赤』のセイバーを優先するあまり、『黒』のアサシンをなおざりにしてしまったことが、今となっては悔やまれます」

直前に、『黒』のセイバーを失っていたユグドミレニア側としては、最優先で討ち果たすべきは、『赤』のセイバーだった。

「あの時のマスターの判断は正しかった。仕留められなかった私の落ち度です」
アーチャーがそう言って、嘆息するマスターを宥めた。カウレスもそれに同意する。

「まあ、結果的に『赤』のセイバーを仕留めなかったのは不幸中の幸いだったってコトだし。いいんじゃないか。終わったことを嘆いても仕方ないよ、姉さん」

結果論ではあるが、そこで『赤』のセイバーを仕留めきれなかったからこそ、こうしてルーラーとアーチャーが生きているのだ。

「……そして先ほど、トゥリファスの街にいる血族から一報が入りました。昨夜、我々が『赤』の側と交戦する直前、街に潜伏していた魔術師たちが連絡を絶てしまったようです。数は十人、そのほとんどが一流には及ばずとも練達の魔術師でした」

マスターに選ばれることはなかったものの、十人の内何人かはカウレスよりも腕が立ち、家の歴史も古い魔術師だった。魔術協会の魔術師たちと交戦したならば、連絡手段は幾らでもある。だが、連絡はなかった——恐らく、できなかったのだろう。

「ルーラーとライダー、貴女が二人にお願いしたいのは——」

「『黒』のアサシンの討伐、ですね」

ルーラーが制するように告げる。頷いたフィオレの目は、慎重にルーラーの様子を窺っている。

「なるほど……フィオレ。貴女が気にしているのは、ルーラーとしての役割に抵触するかどうか、ですか？」

「ええ、その通りです。特定のサーヴァントの討伐になりますから」

「ご安心を。『黒』のアサシンは、無関係な人間を多数巻き込んでいます。この時点で、通常の聖杯戦争でも重大なベナルティを科せられる状況です」

正確には、無関係な人間を多数巻き込み——その上で、それが表沙汰になるような状況を作り出したことへのベナルティだ。

しかし、ルーラーに選出されたサーヴァントによつては、表沙汰にならうがなるまいが、無関係の人間を巻き込んだ時点でベナルティを与える者もいる。

ジャンヌ・ダルクもその一人だ。彼女は聖杯戦争の『外側』と『内側』を厳しく定めており、内側から外側へ線を踏み越えようとする者は容赦せず、外側から内側へ踏み込もうとする者は極力穩健な方向で排除する。

「付け加えるに、『黒』のアサシン搜索及び討伐に使用できるのは、飛行機を調達するまでの三日間。それ以降は、全て『庭園』を追うことに使わなければいけません」

「それってさあ。要するに『三日以内に出發したければ、協力しろ』ってコトでしょ？ ずっるいなあ！」

ライダーがニマニマと笑いながら呟いた。フィオレは澄まし顔で呟く。

「我が家の家訓は『立っている者は嵐でも使え』ですのど」

「構いません。ただ、ジーク君は参加させない方向でお願いしたいのですが、構いませんか？」

「……そう、ですね。あのホムンクルスが、『黒』のセイバーに選依できるのは、残り三回と聞いております。貴重な三回を、『黒』のアサシン一騎に使用することはありませんか？」

ルーラーはこつそりと安堵の息をついた。戦いに参加させれば、彼は必ず『黒』のセイバーを選依させるだろう。一つでも令呪を使用する機会を減らさなければ。

「ありがたい。では、私とライダー、そしてアーチャー。……できれば、一度対戦したという『赤』のセイバーにも参加して貰いたいです」

フィオレが淡い表情を浮かべた。

「……『赤』のセイバーと、そのマスターである獅子劫界離にはこの件、あまり頼りたくはありません」

「え、何で？」

ライダーの無邪気な問い掛けにも、フィオレは口ごもる。仕方ない、とカウレスが助け船を出した。

「要するに、だ。『赤』のセイバーのマスターである獅子劫のオッサンは、魔術協会側。『黒』のアサシンを討つてことは、こちらの事情も開示しなきゃいけないってコトだ。……まあ、向こうも感づいているだろうけど、それでも面子ってモンがあるのさ。貸しを作たくはないしな」

「ここに居る三騎でどうにもならないようなサーヴァントでもありません。私も一度――」

珍しいことに、アーチャーが言葉を途中で止めた。何事か、と全員が彼を注視する。

「どうしました、アーチャー？」

「マスター。黒のアサシンのステータスは分かりますか？ マスターはアサシンを撃っているはずですが」

「え、えっと……………」

ステータスを思い出そうとしたのか、フィオレが顔を閉じた。だが、すぐに困惑したていでアーチャーを見る。

「ごめんなさい。分かりません。おかしいですね、ステータスは読み取ったはずなのですが……………あ、れ？」

そこで、愕然とした様子でフィオレが口を押さえた。

「いえ、それどころか。私もマスターもアサシンの姿は目撃したはずなのに、顔すら覚えていません」

「…………アサシンの固有スキル、あるいは宝具でしょうか」

「そうですね。赤のセイバーが真名を秘するための兜を装着していたのと同じように、黒のアサシンも正体を隠すための何かを持っていてもおかしくありません」

赤のセイバーの宝具は、あくまで一時的に真名を隠すためのものだった。宝具を解放してからは、素顔を晒すことにも躊躇いがなかった。

通常の聖杯戦争ならば、相手サーヴァントへ止めを刺すときのみ宝具を使用する。最低限のリスクで、真名を隠し続ける戦術。一対一で、かつ他のマスターから目視されていない状況であれば、さぞかし難敵だったろう。

……『黒』のアサシンはそれとはレベルが違う。正体を隠しているのは戦術というよりも、ジャック・ザ・リッパーとしての生き様そのものだろう。

様々な悪条件が揃っていたとはいえ、最低でも五人の娼婦を殺害して手掛かりは一切なし。更に証拠となったかもしれない落書きを当時の警察署長が人種問題を懸念して消してしまった、という悪運強い逸話もある。

正体を隠しているのではなく、隠れることそのものが殺人鬼の主体性に結実している。

「戦いの最中に不自然さはありませんでした。恐らく、アサシンが姿を消したとこちらが認識すると、我々が手に入れた情報が消し去られるのでしよう」

「じゃ、『黒』のアサシンは真名がジャック・ザ・リッパーと分かっているだけで、後は姿も、能力も、まして宝具もなーんにも分からないワケ？」

ライダーの言葉に、フィオレは憂いを帯びた顔で頷いた。

「その通りです。これは――意外に困難な任務かもしれませんね」

「だけど姉さん。アサシンを放置して訳にもいかないだろ」

「それはそうだけど……アサシンっていうのは、奇襲さえ凌げば倒すのに容易でも、こち

らから探り当てて倒すのは難しいというのが常識でしょう。まして、情報が一切不明ならば尚更よ」

「つまり、まずは捜すことから始めなければならない……ということですか」

「捜索は昼間から始めましょう。目立たぬようこちらで当世風の服を用意させます」

「ああ、私は問題ありません」

ルーラーはレティシアとしての私服を身につけているため、基本的には問題ない。切り替えればいいだけだ。

「あ、服欲しい服！ 最新流行で斬新で、あとコケティッシュならよし！」

ライダーが身を乗り出して食いついた。フィオレがやや冷たい視線で告げる。

「……あの。遊びに行く訳ではないですからからね？」

「分かっている分かってる！ ……むう。マスターを連れて行きたいナー」

「ライダー？」

先のフィオレの視線がせいぜい冷えた程度ならば、今しがたの声は絶対零度。ルーラーの目は、隣のライダーに氷柱のような勢いで突き刺さっていた。

「言うまでもないですが。ジーク君を巻き込むのは駄目です」

「いや、でも今からお昼だし夕方くらいまではほら、ちよっと遊び気分です——」

「遊ぶのは駄目です」

「ちょっとくらい……」

「ミリ単位で駄目です」

提案を即時寸断。いっそ鮮やかであった。ライダーはルーラーの取り付く島もない、という様子にふて腐れて、机に突っ伏した。

「いきなりやる気が急降下してますね。私、ちょっと不安になってきたのは決して気のせいではないと思うのですが」

「頼むぜ、おい……」

姉弟は呆れ、アーチャーは苦笑する。

「では、私とカウレス殿は別の部屋で着替えましょう」

「ボクたちの服は？」

「ホムンクルスに頼んで持ってきてさせます。そうそう、それからアーチャーへの魔力供給ですが、当分の間は私とカウレスで分担することになりました」

ゴルドが編み出したホムンクルスの魔力供給をカウレスに切り替え、不足分はフィオレ自身の魔力供給で補うことにした。マスター同士の対決という可能性が低くなった今、この状態でも支障はない。

ホムンクルスたちはやや済し崩しではあるが、この城塞の居住権を得た代わりに多少の雑務を任せる、ということで合意した。

「良いことです。それでこそ、理想的なマスターとサーヴァントとの関係です」

「ありがとうございます」

フィオレはどこか誇らしげに微笑んだ。アーチャーとカウレスは肩を並べ、座下を歩く。

「ちなみに、カウレス殿の魔力供給は全体のどのくらい？」

カウレスは嫌なことを聞かれた、とばかりにふて腐れながら答えた。

「目一杯俺の魔力を持っていかれても、アーチャーの魔力を二割肩代わりするくらいがせいぜいだな。まあ、予備バッテリーくらいの扱いと思ってくれ」

「なるほど。道理で繋がっている実感が薄い訳です」

納得した、と言わんばかりのアーチャーにますますカウレスはふて腐れる。

「ほっとけ畜生。こういう部分は、姉さんの方が圧倒的なんだよ。魔術回路の質、量。それに伴う魔力の貯蔵量。俺がポリタンクなら、向こうは石油コンビナートだ」

「ふむ。カウレス殿がマスターに勝てる部分はあるのですか？」

「あるよ。……俺の方が、パソコン使いこなせる」

それは魔術師としてはどうなのか、とアーチャーは口を開きかけたが、敢えて沈黙を守ることにした。男には、ときに意地でも負けたくない状況というものがあるのだ。

ルーラーたちがしばらく待つと、ホムンクルスたちがぞろぞろと会議室へと入ってきた。ライダーのサイズに合わせた当世風の服を手に入れている。

「大方持ってきたが、似合うかどうかは分からないぞ」

「オッケーオッケー、問題なし！ やー、これも可愛いあれも可愛い。後でマスターに見せに行こうっと！」

「ゴルドおじ様はどうしてますか？」

「明け方で既に自分の仕事を終えたと称して、酒を飲んでいる。我々の命を救ってくれたことには心から感謝するが、あの体たらくは正直どうかと思う」

ホムンクルスたちがうんうん、と一斉に首を振って同意する。

「……今度注意しておきます」

フィオレが申し訳なさそうに応じた。

「では、お二人とも着替えて下さい」

「あれ？ 君はどうするのさ」

「フィオレは行かないのですか？」

ライダーとルーラーの問い掛けに、彼女は困ったように微笑んで両足に目をやった。

「この通りの足なので、尿間に追跡調査を行うのは少し難しくて。魔術が使用できたなら、その限りではないですけど」

フィオレは両足の不自由さを、降霊術の応用による接続強化型魔術礼装などで補っている。ただ、間違っても昼間に使用していい礼装ではない。

「それに、分析なら自分の部屋で行えますから」

「なるほど。では、私たちが貴女の手足となって調査を行う訳ですね」

「ええ。魔術に詳しいホムンクルスを一人、ついて行かせます」

フィオレの言葉に、居残っていたホムンクルスが二騎のサーヴァントに頭を下げた。少女型のホムンクルスだ。ジークに願立ちはよく似ているが、髪が長い。

「アルツィアと言います。よろしくお願いします」

よろしく、とルーラーとライダーが握手を求めた。

「サーヴァントの気配、残滓、その他の手掛かりはお二人が。魔術方面に関してはアルツィアが担当して下さい。私は念話でそれを聞いて、分析しようと思います」

ここはユグドミレニアの管理地トウリファス。熟達した魔術師が多数配置されている状況ではあるが、彼らとてサーヴァントを追跡、あるいは発見できるほどの腕はない。

アサシンは既にこの街にマスター共々潜んでいてもおかしくない状況だ。昼間の内に、何かしらの手掛かりでも見つけることができれば——理想的には、マスターを押さえることができたなら、最上だ。

彼女が 是れは潜んでいる。

元々、小さな体軀のせいもあるが、どこへでも入り込めるし、母親にブカレストで買って貰った服を着て「気配遮断」さえ行えば、大抵の人混みの中に溶け込むことすらできる。

とはいえトゥリファスは狭く、観光客もまばらだ。魔術師たちの目が光っていることもあり、迂闊に行動できない。それでも、彼女は昨日の時点で、既に十人もの魔術師たちを惨殺している。

今は母親とは別行動を取っている。母親も彼女も、互いに絶好の隠れ家を見つけたのだ。

当分の間、ここを出る気はない。本音を言くと、玲霞にピアノを弾いて貰いたかったが我慢することにした——彼女は待ち伏せが得意なので、我慢することだけは得意だった。

敵サーヴァントは合計三騎——もしくは四。黒のアーチャー、黒のライダー、そして、黒じゃない何者かが一騎、問題は黒のセイバーだ。いたり、いなかった

り、ややあやふやだ。

「彼女」はその容姿や言動に反して、慎重に動く。生まれついて殺人に特化したような怨霊集合体である彼女にとって殺人は仕事でも趣味でもない。強いて言うならば殺人こそが存在理由であり、生存動機であつた。

誰もがそれを証明しなければならないように、彼女は殺人で「私はここにいます」と証明しなければならぬのだ。

彼女は慎重に、ただひたすら慎重にその時を待つ。

勝負するときは常に夜。己の生死を懸けるなど、間違つてもしない。要は殺す機会がどれほど存在し、「彼女」がそれをどれほど選り出せるかが問題なのだ。

戦場は二対一で行うもの。だが殺人は一方通行でなければならない。それを考慮すると、「赤」のセイバーとの戦場は、彼女にとっても意外なものだったろう。

「……負けていたかなあ、やつぱり」

思い出すだけで苛立ちが募るが、互いに向かい合ったあのとき、「彼女」は間違ひなく敗北を確信した。

自分の一撃は彼女の喉を掻き切ることもできず、彼女の一撃は自分の首を両断する。

これはステータスの差、戦闘状況の不利さ、英雄としての格の違い、その他諸々の要素が全て己に不利に働いたせいでもあるが——つけ込めぬ程ではない、と「彼女」は考える。

ステータスの差は、己の能力で覆せる。夜に気配を断てば、己を認識しうる者など誰もない。

そして、彼女^{カミヤ}は知っている。マスターを殺害すれば、どれほどの英雄であろうと取るに足らぬ存在になり、殺人鬼^{キルマ}にとつては魔術師も娼婦も――獲物という点では変わらないと。

ふああああ、と極めて呑気な様子で欠伸をしたのは「赤」のライダーである。

「暇だ」

「暇だな」

応じたのは「赤」のアーチャーだ。何しろ空中を浮遊する庭園である以上、外を出歩く訳にもいかない。わずか半日で、二騎のサーヴァントは退屈を持て余していた。

「退屈ですか？」

二騎のマスターとなったシロウ・コトミネが当初からのサーヴァントである「赤」のアーチャーを連れていた。

「まあな。で、「黒」の連中は三日後に到着するってことでいいんだな？」

「そうですね。恐らく相手はこの空中庭園に追いつけるだけの「馬」を準備しなければなりませんから——状況によっては、もう少し時間が掛かるかもしれません」

「赤」のライダーとアーチャーは一斉に不満の声を漏らした。アサシンが溜息交じりに呟く。

「ただだか三日ばかりというに。堪え性がないのは前線で戦う英雄の性というものかな」

「喧嘩売ってるなら喜んで買うぞ」

睨み合う二人をシロウが宥めた。

「まあまあ、お二人とも。そこで一つ、アーチャーにはお願いしたいことがあるのですが」

「……む？」

指名されたアーチャーが、訝しげに顔を曇めた。

「**黒**の側の斥候へ出て藏きたいのです。本来なら、『**気配遮断**』を持つアサシンが適切なクラスなんですが――」

ちらりとシロウがアサシンを見る。アサシンはやや不満げに、ふんと目を逸らした。

「ああ。アサシンはアサシンでもコレ、ではな」

「**気配**を遮断できるかどうかとも怪しいもんだし、仕方ねえな！」

二騎が笑う様子に、アサシンはますます忌々しげに睨み付ける。まあまあ、とアサシンを宥めつつ、シロウはアーチャーに言った。

「そこで、恐らく斥候としては貴女が一番適役だと思うのです」

「ええと、俺は――」

「残念ながら、このメンバーの中でライダーほど斥候に向いていない英雄はいないと断言できます」

シロウは和やかな表情のまま、**赤**のライダーの意見をあっさりと切り捨てた。

「ふむ。だが、帰りはどうすればいい？」

「私は貴女のマスターである以上、精神的に繋がっています。念話で呼びつけてくれれば令呪で引き戻しますよ。あちらのルーラーに何かを命じられても、こちらの令呪で封殺で

きます」

魔術師による『空間転移』は魔法にほぼ近似した神秘であり、洗礼詠唱以外の魔術を学んだことのないシロウにとっては、当然不可能な領域にあるものだ。

だが、それも令呪があれば事足りる。

「そのような些事で令呪を使用していいのか？」

「構いませんよ。私は他のマスターから令呪を継承したため、ルーラーとして召喚された彼女と違い、一騎のサーヴァントに全ての令呪を集中することもできます。パーサーカーの分がありますから、一面程度では問題ありません」

それはつまり、どれほどの対魔力を持とうとも抵抗できないということだ。

「ふむ、まあいいさ。この退屈を紛らわせることができるなら——斥候程度、何のことはない」

「それでは、よろしく願います」

赤のアーチャーは軽く頷くと、霊体化してたちまち気配を消した。

「なあ、マスターさんよ。俺は何かやること、ないのか？」

「……そう言えば、キャスターがアシスタントを募集していましたが」

「却下だ」

ちなみにアシスタントとは、本の山から指定された資料を選び、資料の本を開いてキャ

スターに見せるために立ち続けるだけの役割である。

「なら、ランサーと軽く打ち合ってみてはどうですか？」

「それも却下だ」

「——ほう。飯にもアキレウスともあろう勇者でも、戦いたくないと言わしめるか」

先ほどの意趣返しに、アサシンが愉しそうに笑う。ふん、とふて腐れつつライダーは答えた。

「あのな。ランサーと軽く打ち合えってのが無理なんだよ。一度打ち合ったが最後、俺たちは勝って殺すまでやり合うぞ」

「五分の力で押し留めることができないのですか？」

「インド屈指の英雄に、五分の力なんてのが失礼千万だ。アイツと打ち合うときは、殺し合うときと決めている」

なるほど、とアサシンは笑うのを止めた。女帝であり、策謀家であるアサシンにとって、二人の気持ちは理解できぬ事柄だ。しかし、彼らが自分の視点からすればつまらぬ些事に拘っているとしても、それを笑っては気分を害するところではない。英雄の誇りに泥を塗るは、愚者の行いである。

「ふむ……万が一のことを考えると、ライダーに此地を離れて貰ってはさすがに困りますね。ですが、退屈は紛らわしいところですか」

「マスターが戦ってくれるなら、五分の力でいけるぜ」

——と、ライダーが挑発する。笑いながら告げたあたり、当人としても本気ではなかった。世界に名だたる大英雄アキレウスと、極東の小さな英雄天草四郎時貞では、功績やそもその出自も含めて格が違いすぎる。

アサシンが睨む中、冗談だとライダーは笑おうとして――。

「いいですよ。大聖杯の挙動が安定するまで、私も暇ですから」

凍り付いた。マスターである彼の返答をライダーもアサシンも一瞬理解ができなかった。

「アサシン。竜牙兵^{リウガヒョウ}の使っている槍や剣がありますね、それを貸して下さい。互いに己の武器を使うよりはいいでしょう」

「……待て、待て。正気か？」

「さて。……正気かどうかは、自分でも自信がありません」

平然とそう言いつつ、シロウは手をアサシンに差し出した。ライダーは面喰らったように押し黙っていたが、やがて声高らかに笑い始めた。

「おいおい、おいおいおい！ 莫題かマスター!? 幾らアンタが英霊つつつても、トロイア相手に戦い抜いたこの俺と戦えるとても!?」

その言葉は嘲りではなく、真実を告げている上に怒りも隠められていた。ライダーは、天草四郎時貞という英雄の詳細は知っているが、戦闘技術までは知らぬ。ただ、彼には誰

よりも過酷な戦いを勝ち続けたという自負がある。

彼が相手をする、というのはその誇りに抵触し兼ねないものだ。

だが、シロウはライダーの激昂を平然とした様子で受け流し、アサシンが用意した剣を手にとると、更に槍をライダーへと放り投げた。

「誇りを傷つけたのなら謝罪しましょう。ですが、退屈の慰め程度ならば……幾らでも、お付き合いを」

シロウが剣を構える。ライダーはふて腐れたような表情でつい、と顔を明後日の方向に向け――。

瞬間。

鋼が軋み合った。

予備動作無き槍の一撃は銃弾に等しく、それを受けたシロウの反応速度は瞬目に値する。ほう、とわずかに感心したような息を漏らし、ライダーは突きつけていた槍をくるりと回転させ、改めて構え直した。

「――今の一撃を測いたか。よし、付き合ってやろう」

「……お手柔らかに」

「さあて、それはどうかな。生まれてこの方、手加減して槍を振るったことなど数えるほどしかなくてな！」

ライダーの踏み込みはまさに刹那の刻すらも必要とせず。シロウの脳が理解するより先に、その一撃が穿たれた。

脳ではなく、臓が反応し、その一撃もどうにか流す。

かくして、遊びの殺し合いが開始まった。

SCENE

トゥリファスという街は、ルーマニア屈指の重要都市であるシギショアラの隣接都市でありながら、これまで目立った発展は見られなかった。恐らく、これからもそうだろう。

プレストーン——ユグドミレニアを名乗る前のダーニツクの一族は、ルーマニア屈指の霊脈を持つここに目を付けて居を構えた。無論、これだけの霊脈が目を付けられぬはずはなく、相当に殺し合ったものの、当時隆盛を迎えようとしていたプレストーン一族の敵ではなかった。

プレスストーンたちは街の支配権を手に入れると積極的に動いた。人間が作り上げる街を見守るのではなく、積極的に関わることで理想の街を作り上げようとしたのだ。

目立たない、歴史に残ることもない、近隣都市のシギショアラと似通っている上に交通が不便なせいで、必然的に観光客は少なくなる。霊脈は一級品だが、外来の魔術師たちが暴れ回ることができぬほど、強固な繋がりと包囲網を敷いている。張り巡らされた結界は過敏で、そもそも魔術とは無関係に「外」からの人間に対しても警戒心が強い。聖堂教会の監視者であるアルマ・ベトレシアは実に二十年の歳月を掛けて、ようやくその警戒を取り払った。

トゥリファスはまさに魔術師が支配する街である。魔術師ではない関係者を含めれば、総人口の二割以上が何らかの形でユグドミレニアに関わっている。

当然、今回の聖杯大戦についてもある程度の指示は受けている。街の治安そのものは良好でも、雰囲気そのものはいかにも刺々しい。

ユグドミレニアの長であるダーニツクは墜ちた。だが、そのことを知る者はまだ少なく――この聖杯大戦が、奇妙な方向にねじ曲がったことも知らない。

フィオレは情報漏れを防ぐため、一切を伏せている。もっとも、早晩魔術協会には知られることになるだろうが……今は、聖杯大戦の解決が最優先だ。

「トゥリファスに潜伏していた十人の魔術師が連絡を絶った」。

フィオレからの情報にルーラーとライダーは魔術に長けたホームンクルスを伴い、まずは彼らの痕跡を辿ることにした。

トゥリファスは城壁に囲まれた旧市街地区と、城壁の外側にある新市街地区とに分割されている。新市街、とはいってもここに建物が始めたのはオスマントルコが排除された以降だから、数百年以上の歴史があるのだが――。

ルーラー、ライダー、そしてアルツィアは新市街地区を。そしてアーチャーとカウレスは旧市街地区を担当する。ひとまず彼らは手分けしてそれぞれの潜伏先へと向かい、連絡を絶った理由を探り、手掛かりを見つけ出すというプランで動くことにした。

「じゃあ、一人目から行こう。ここから一番近い魔術師さんのお家へゴー！」

ライダーが張り切って拳を突き上げる。が、ルーラーはやや恥ずかしそうに距離を取り、アルツィアは冷静な表情でトゥリファスの地図を見ていた。つまり、無視である。ふう、と露骨に膨れつつ、ライダーは振り上げた拳を下ろした。

「カール・レクサムですね。ここから二百メートルほど先の通りを左です」

人通りも車もまばらな道を、三人は……というより、大部分はライダーが騒ぎながら、通り抜けていく。五分もしない内に、最初の捜査場所へと到着した。

レクサムの家は古い石造りで、立方体のように単純な形をしていた。開放された家だ

と、魔力が散逸しやすい。このように閉鎖的なタイプは魔力の散逸を嫌う魔術師にとっては理想的な形だろう。

アルツィアがフィオレから渡されたマスターキーを使い、術式が組み込まれた鍵を解錠した。不法侵入が発覚次第、トゥリファスの血族たちに警告を発する魔術だが——ここに侵入した者が、アサシンであるならば何の障害にもならなかったはずだ。

家の内部は、外側から推測された通りの質素な作りだった。居間、台所、洗面所。恐らく寝室は二階だろう。色がない、どルーラーは思った。大抵の人間は十年二十年と住む内に、部屋に自分の「色」をつけていく。この部屋には、そういうものが一切なかった。

まるでホテルの部屋のような、どこか画一的な雰囲気。引越したてか、そうでなければ——別の部屋に、彼の「色」があるのだろうか。

「……んー、血の臭いがしない？」

踏み込むなり、ライダーが鼻をひくつかせてそう呟いた。ルーラーも同じように匂いを嗅いでみるが血臭を感じ取れない。

「私は感じませんが——」

「気のせいかな？」

「……そうでもないかと」

アルツィアがそう言って、一小節で魔術を組み上げた。単純な「感知」の魔術だ。対象

は血。薄ぼんやりと青い光が点され、残っていた血痕が強調された。部屋のあちこちに、血が飛び散っている。

「ああ、きちんとお掃除したんだ。道理で分かりにくかったはずだ」

「……それで分かるライダーも凄いいと思います」

「それよりルーラー、血痕がさ——天井にあるのは凄いいね」

ライダーが天井を指差し、ルーラーは顔を顰めて頷いた。天井はそれなりに高い、ここまで血が飛び散るということは、恐らく——。

「首を切断したか、頭を潰したかの二択だね」

「噴出した血がこれほど広範囲に渡っていることを考えると、頸動脈を切ったのではないでしょう。こう……仰け反る感じで」

ルーラーが天井を見上げて、喉を押さえてよろめく動作をした。

「……芝居がかってゐるね」

「わざわざ動作しなくとも、口頭で説明すればよろしかったのでは」

ライダーとアルツィアの指摘に、ルーラーが頬を赤らめて咳払いした。

「わ、分かりやすさを優先したまでです。それにしても、これは掃除が大変だったでしょうね……。魔術による清掃が何かででしょうか」

「なら、魔術による痕跡があるはずですが。……ここにはありません」

「魔術師の家なの？」

「家だからこそ、魔術を使う場所は厳密に定めるはず。ここは魔術を使用しない、台所で
す。せいぜい、儀式用の小動物を飼くくらいでしょう」

「地下室があるみたいだから、そっちな？」

それに気付いたのは、またもやライダーだった。どうやら、床を踏み締めた際の微かな
音を聞き分けたらしい。

「鼻だけじゃなくて、耳も良いんですね……」

ルーラーが感心するように呟くと、ライダーはえへんと胸を張った。

「どっちも戦場じゃ重要だからねー」

地下室への入口は居間の片隅、書棚で隠れた場所に設置されていた。車輪付きの本棚を
幾度もスライドさせていたせいだろう、床に擦れた跡が残っている。

「お待ちを。念のために魔術の解錠を――」

扉の把手を掴もうとしたライダーを、アルツィアが制止した。が、このライダーがそんな
忠言を聞くはずもなく。ふんぬ、などと叫んで勢いよく引っ張り上げた。

「聞いたよー」

ライダーはそう言うど、軽快な足取りで地下室へと飛び込んだ。

「……今、何か魔術が発現しませんでしたか」

「しましたが、ライダーは対魔力が剣兵^{ケンペイ}クラスなので無駄でしたわ」

現代の魔術師では、ライダーには傷一つつけられない。潜入した「何者か」は慎重に魔術の解錠を行ったのだろうか。

「やった、屍体発見！」

ライダーの言葉に、ルーラーたちは慌てて地下室へと飛び込んだ。

地下室は地上の簡素な生活空間とはまるで別物だった。魔導書が所狭しと積み重なり、魔法陣の微かな跡が床に広がっている。紐で吊り下げられているのは薬草や木乃伊^{ミイラ}化させた小動物の骸だ。

そして、部屋の中央にあるのは人間の屍体だ。こちらは「新鮮」で、血の臭いも濃い。

「この魔術師は、黒魔術が専門だったようですね」

アルツィアが小物を調べて言う。ルーラーとライダーは、俯^{うつむ}せの屍体を引っ繰り返すと揃って顔を垂ませた。

「心臓が抉られています」

「首から先はルーラーの予想通り、動脈を切断しただけか。それにしてもこんな濃い血の臭いがあるのに、どうして誰も指摘しなかったんだろ」

ライダーの疑問に、アルツィアが答えた。

「恐らく、魔術で臭いを隠蔽していたのでしょう。黒魔術の儀式は悪臭が常ですから、街で行う際はこうして遮断しないと難しい。……屍体をここに隠せば、どれほど腐臭があっても外には漏れません」

「それよりも、問題は心臓です。……フィオレが言っていましたよね。黒のアサシン——ジャック・ザ・リッパーは新聞記事によると、心臓を抉っていた」

ライダーが同意する。

「言ってた言ってた。心臓はボクらにとっても脳と共に霊核がある部分だからねえ。そこに近い部分を喰えば確かに大量の魔力を補充することになる」

「しかし——この苦悶の表情は、ただそれだけという訳でもなさそうです」

「首を切られて死ぬ人間なんて、こんなものじゃないの？」

「我々サーヴァントが魂喰らいなのは確かですが、生前の性癖によって好む感情が異なります。ジャックは殊の外恐怖が好みのようです」

「ま、連続殺人鬼だしねえ……」

屍体の始末はユグドミレニアに任せ、ルーラーたちは更に新市街地区を巡る。次に訪れた魔術師シルヴェルト・コッチェフもまた、自宅で亡くなっていた。ただし、先の一件とは決定的に異なる部分がある。屍体は心臓以外にもあらゆる部分が破壊され、人としての形を保っていなかった。

「こりゃヒドい」

とライダーが呆れる。

「……明らかに拷問の形跡がありますね」

とルーラーが冷静な声で告げる。

「腕の生体反応から推察すると、ほとんどの傷は死ぬ前につけられたものです。死んでからバラバラにされたのではなく、バラバラにされるまで生かされていたみたいですね」
顔がないが、どれほどの苦痛と恐怖を味わったのかは傷ついた肉体を見るだけでも、ありありと浮かんでくる。

絶対に助けは来ず、来たとしても犠牲者が増えるだけ。

「しかし、この拷問には何の意味があるのでしょうか」

ルーラーの呟きに、二人が首を傾げる。

「愉しいから——じゃないの？」

「確かに拷問を愉しむ殺人鬼もいます。ですが、愉しむだけではこの拷問の量は圧倒的過ぎます。加えてもう一つ。先ほどの屍体には、拷問の形跡がほとんどなかった。ただ首を斬って、心臓を抉るというシンプルな殺し方です。一方のこちらは徹底的な陵辱。あまりにも差が激しすぎる。性別、年齢、人種、職業、技量——それらの違いか、あるいはもっと別の、何かが必要因ではないでしょうか」

「何か、とは？」

アルツィアの問い掛けにルーラーは首を振って分らない、と言った。

「……一つだけ確実なのは、黒のアサシンは既にこのトゥリファスに到着しているのはほぼ間違いないということです。猟奇殺人鬼と魔術師を兼ねている人間が居る場合は、また別ですが」

「問題は、今どこに潜伏しているかだよねえ」

小さな街とはいえ、人口二万人近く。誰も彼もが、ここ最近の不穏な騒ぎを感知して家でひっそりと息を潜めている。ローラー作戦で捜すには、魔術師を動員しても難しい上に、下手に追跡が露呈してしまえば、更に深い場所へ身を隠そうとするだろう。

「他の場所にも行ってみましょう。恐らく、同じような屍体が見つかります」

ルーラーの予言は的中した。

屍体は全て心臓が抉り出されていたが、拷問の多寡はあからさまだった。中間地点が存在せず、肉塊となっているものもあれば、心臓の他は軽い傷程度でしかないものもある。

ルーラーたちはそれから数時間かけて、街中で魔術の痕跡などを調査したが芳しいものは見当たらなかった。

アルツィアは早速フィオレに念話で連絡を取ってみたが、拷問の多寡における性別や年齢、人種などの違いは調べた限りではなかったらしい。無論、例えば男女の差違はあるが、

それが拷問の多寡には繋がっていない。

「まだ三人、行方不明になっている魔術師がいるはずですが――」

「そちらにはカウレス様に向かっていているはずです。合流して、情報を突き合わせますか？」

「そうですね、そちらの家にも行ってみましょう」

魔術師の遺骸についてはユグドミレニアに託し、三人はカウレスと合流すべく次の家へと向かった。

「今度は旧市街地区ですね」

アルツィアの先導で、二人は石床の道を歩く。街はひっそりとしていて、ちらほらと見える人影は、見知らぬ三人を警戒するかのようにに距離を空けていた。現状を考えると、むしろ有り難い心遣いだ。

「しかしまあ、随分と見慣れた感じの建物ばかりだ。……アメリカのニューヨークとかで聖杯戦争やれたら、もっと近代的なビルで勝負できたのになあ」

ライダーのぼやきに、ルーラーが引き攣った笑顔を浮かべた。

「あの。あんな大都市での聖杯戦争だなんて、考えただけで胃が引き攣るので止めて下さい」

どうやってあの大都市で、聖杯戦争を全うしようと言うのか。

「でもさ、今や聖杯戦争はあちらこちらで行われているんでしょう？ だったら、その内

にニューヨークが出てくると思うんだよね。それで多分、隠蔽工作とかで色々手に負えなくなつてさ、ルーラーが召喚されちゃうんだろうね」

ルーラーが蒼白な表情で首と手を同時に横へ振る。

「いやいや、いやいやいや。恐ろしい想像は止めて下さい。私絶対嫌ですよ！」

「はっはっは。運命とは恐ろしいものだよ、ルーラー君。確信するね、君はその内間違はなく——ニューヨークだのロンドンだの東京だので開かれる聖杯戦争に、ルーラーとして無茶な裁定を託されることになる」

その言葉に具体的な想像をしてしまったのだろう。ルーラーは恨みがましくライダーに告げる。

「……ライダー、貴女はなかなか意地が悪いですね」

「そっかな？ ボクは的確な推理を披露したまでだけど」

クシクシ、と口元を押さえてライダーは意地悪く笑った。ルーラーがその笑みを見ながら、ふと呟いた。

「もしかして、やっぱりジーク君と一緒に歩きたかったのか」

びたりとライダーの足が止まる。振り返ったライダーの顔は、やや赤みが差していた。

「だ、だったらどうだって言うんだよ」

「——いえ別に。なるほど、そういうコトだったのかと納得する次第です」

「ぐ。納得顔で頷かれると、なんか理不尽に腹立たしいなあ、もう！」

澄まし顔のルーラーに突っかかるライダー、というように形勢は一変した。背後でそれを聞いていたアルツィアはくると振り返って告げる。

「お二人とも。そろそろ次の家に到着しますので、痴話喧嘩はまたの機会にお願いします」

「……痴話喧嘩じゃないのですが」

「どちらかというと、所有権に関する問題だね」

同じことではないか、とアルツィアは言いたげな顔だった。

カウレスは屍体が苦手である。視覚だけならさしたる苦痛はない。問題は——臭いと、音だ。今回の臭いは焼けた肉の匂い、悪臭ではない。悪臭ではないから問題なのだが。

普段の食事のときに漂う匂いが、悪臭と入り交じって漂う様は何とも凄絶だ。

「大丈夫ですか？」

「大丈夫、大丈夫だがちょっと……吐いてくる」

カウレスは台所のシンクに、朝食に食べたベーコンを勢いよく吐き出した。体力をつけるために、肉を中心に食べるという判断が最悪だった。

「くそ。決めた、当分肉は食わないぞ」

コップの水で口内を濯ぎ、胃の中を大方空にしたところでようやく落ち着いたカウレスは再び地下室へと戻った。

「カウレス殿。この魔術師は——」

「アヴィ・ディケイル。専門は俺と同じで召喚術だ。……俺より腕が良いし、多分マスター候補だったんだろう。才能は申し分ないみたいだが、運が悪かったか」

カウレスはダーニツクの書斎から持ってきた魔術師たちのリストを確認して、同情の溜息をついた。とはいえ、彼が理不尽な運命に囚われたとは思わない。残念なことに魔術の道は残酷で、彼が踏み込んだルートは最悪だった。ただそれだけだ。

「焼死体……か」

「魔術の痕跡はありません。使ったのはその——」

黒いアーチャーが、地下室に転がっていたポリタンクを指差した。カウレスが鼻を押さえていたハンカチを外し、吐き気を堪えつつ土の匂いを嗅ぐとガソリンの臭いがした。

「ガソリンをぶっかけて燃やした？」

「ええ。これがもしアサシンの犯行ならば、実にアサシンらしからぬ殺害方法ですね」

「どうか、意味がないよな。アサシンなら魔術師なんて素手でも仕留められるだろ。どうしてわざわざ焼いたんだ？」

「良いところに目をつけましたね、カウレス殿」

「黒」のアーチャーはまるで教師のように、人差し指を一本立てた。

「あー……褒められて悪い気はしないけど、俺の頭じゃそーまでが限界だ。アーチャーの見立ては？」

「まだ見立てる状況ではありません、そもそもこれがアサシンの仕業かどうかも定かではないのですから。情報一、『犯人』は魔術師を焼いた」

そう言いつつ、「黒」のアーチャーは胎児のように丸まっていた屍体を仰向けに起こして、両足をゆっくりと伸ばした。それから、胸に穿たれた孔を指差して告げる。

「情報二、『犯人』は心臓を抉り出している」

「なら『切り裂きジャック』の犯行だな。新聞記事にも、残らず心臓を抉り出したって書いてあった」

「可能性は飛躍的に高まりました。ですが、そうなるど情報一が引つ掛かります。私も記事を読みましたが、『犯人』が屍体を焼いたという記述はなかったはず。確認できますか？」

「……ちよつと待ってくれ」

カウレスは漢帛を取り出すと、地下室を出て何処かへと電話を掛けた。五分も経つと、困惑した表情で戻ってくる。

「シギシヨアラの警察署に潜り込んでいる奴から聞き出した。屍体は全部心臓を抉り出し

ていて、死因はそれか呼吸困難による窒息死——どっちにしろ、屍体からでも心臓は決り出してゐるってことだな。で、焼死体や肉塊にするほどの過剰な拷問の形跡は一度も発見されてないってさ」

「ふむ……」

アーチャーがその情報に屍体を見ながら考え込む。カウレスも考えてみるが稀代の連続殺人鬼、切り裂きジャックの考えることなど分かるはずもない。

アサシンのクラスではあるが、パーサーカーのように狂化的なスキルでも保有しているのではないかと推測するのが精一杯だ。

「アーチャー、いるー？」

「我々です。こちらは新市街地区の魔術師たちを調べてきました」

ルーラーとライダーが合流した。もう一人、魔術に長けたホムンクルス——アルツィアも同行している。

「どうでしたか？」

「屍体は全て工房を兼ねている地下室にありました。……こちらも酷いですね」

ルーラーが口元を押さえて屍体を見た。そのニュアンスに、アーチャーとカウレスが顔を合わせた。

「そちらの屍体も？」

「あー。心臓を抉られて死んでただけだったり、人バラ肉三十グラムおいくらユーロになってたり、色々だね」

ライダーたちが集めた情報に、アーチャーがますます考え込み始めた。

「多量の拷問を受けた者と受けなかった者、ですか――」

「それがどうかしたか？」

カウレスが訝しげに問うと、アーチャーは首を捻って答えた。

「どうにも腑に落ちないので。その必然性が見つかからない」

「気紛れじゃないの？」

「いえ、『黒』のアサシンに関する記憶は消えています、状況そのものは記憶しています。私とマスターは、『赤』のセイバーと『黒』のアサシンの戦いに乗じて、一度に仕留めようと矢を放ちました。ですが、どちらも仕留めることはできなかった。『赤』のセイバーはこちらの迎撃に移行し、『黒』のアサシンは撤退しました」

撤退――即ち、状況を不利だと理解しての転進行為。

「アサシンは狂戦士じゃない？」

「ええ。新聞記事を見するに、アカレストからシギショアラ、シギショアラからトゥリファスへと渡ってくるまでに何十人と殺害していますが、目撃者は一人も出ていない。目撃者を始末したのではなく、最初から存在しないのです」

「……隠蔽に長けているってことか」

「なるほど。この魔術師たちにしても、ユグドミレニア側で把握できているからこそ、これだけ早く発見できただけですからね。もし彼らが魔術協会側だったら、とても見つけることはできなかった」

感心するように、カウレスとルーラーが頷き合う。

「だから、この凄惨な拷問の意味は確実に存在します。問題は、それをどうやって調べるかですが――」

「……残留思念を再生すればよろしいのでは？」

アルツィアの提案に、あ、とカウレスが口を開けた。召喚術の一種に、その場にかつて存在したものの思念を再生する魔術が確かに存在する。

「カウレス殿。可能ですか？」

アーチャー、ルーラー、ライダー、そしてアルツィアから視線が注がれる。

「あー、うん。まあ、何とか……多分、やれる、かもしれない」

「だらしない、もっと自信を持てー！ 君ならやれる！ 絶対にやれる！ かもしれないー！」「わ、分かった！ やる、やるからー！ 顔を近付けるな！」

ライダーの叱咤激励に目を白黒させながらカウレスは頷いた。それから、戸棚を開いて中から魔道具を幾つか取り出す。

「えっと、材料は……揃ってるか。分かった、ちょっとやってみる。全員地下室から出てくれ、集中したい。合図に指を鳴らすから、そうしたら見に来てくれ」

サーヴァントとホムンクルスは顔を見合わせ、ひとまず地下室から出て行つた。カウレスははっと一息ついて、緊張の面持ちで焼死体を見る。

……残留思念の再生は、それほど難しい術ではない。この場所に焼きついた「声」を拾い上げる術であり、悪霊や低級魔獣の召喚術などと比べれば取るに足らないものだ。

取るに足らないもののだが、カウレスは中でもこの思念の再生が苦手だった。術者は残留思念を再生する際、当時の状況にわずかなりとも同調することになる。

腕の良い魔術師は、同調と痛覚遮断のバランスを調整することが可能だが、カウレスはあまり上手いとは言い難かった。つまり、残留思念をできるだけ正確に捉えるなら、被害者の苦痛をそのままと言わずともかなりの部分受け止めなければならなくなる。ショック死の事例も召喚術者の間ではよく知れ渡っている。この道を踏み出したばかりの魔術師がやらかす、初歩的な事故だ。

恐らく、降霊術を専門とするフィオレも似た魔術を使用することはできるだろう。だが、わざわざ城から彼女を呼び寄せるなど、恥にも程がある。

幸いにも時間帯は夕暮れ間近——黄昏刻だ。深夜ほどではなくとも、昼間と違って波長は安定させやすい。

「……よし、やるか」

カウレスは覚悟を決めて、戸紐にあった小瓶の蓋を開いた。刺激臭のする液体を一滴手の甲に垂らし、それを舐める。舌が痺れ、目眩が起きる。

「同調準備」

声には感情が宿り、感情は時に物質に染みつく。だが、もつとも染みやすいのは他でもない屍体そのものだ。屍体に残った思念は繰り返し死の直前を輪廻し続ける。無論、時間が経てばやがて消える。だが強烈な死はそれだけ強烈な思念を残し、時には無生物である家具や建物に染みつくことがある。これが幽霊屋敷の機構だ。

今回は死後一日経過しているかどうかも怪しい。死に方も強烈。間違はなく、この屍体と現場に思念が刻まれている。

「同調進行——時形逆流」

時間を遡る。肉体は溶けて、ただ精神だけが巻き戻っていく。途端、じわりとカウレスの顔に汗が浮かぶ。熱い……これは、燃えている、燃やされている。

「時形逆流、加速——停止、再生」

もう少し巻き戻してから、再生を開始する。肉体に命じて、指を鳴らした。再び地下室へサーヴァントたちが戻ってくる。

彼らが見たものは、木椅子に座って臉を晒るカウレス。ライダーが声を掛けようとする

集中させた。

苦痛は雪崩のように、カウレスに強い掛かった。想像以上の苦痛に、慌てて遮断しようとするが、精神のコントロールが覚束ない。子供の頃、魔術が暴走しかかったことがある。よくある事故で、凄まじい苦痛だったことはよく覚えている。

いや、しかし。これはまさに、想像を絶する苦痛だ。最悪なのは、これほどの苦痛にも拘わらず、思考は鮮明ということ。この苦痛を与えている側は、人体というものを完全に理解している。苦痛に重要なのは箇所、量、手段、そしてそれらがもたらす視覚的效果。以上四つだ。

「……はく……よ……？」

自由するものか、などという信念は一秒も経たずに消し飛んだ。

「……はくじようする？」

言う、何でも言う、何でも言うとも！ だから早くこのナイフを抜いて下さい、この針を指から抜いて下さい、痛いんです、辛いんです、苦しいんです。

「……おし……て……」

いいえ、殺して下さい！ お願いします！ 薬にして下さい！ 耐えられない、苦痛に

今まで熱いと感じていたのは、流れゆく己の血。だが、科学的に精製されたガソリンと工業製品として作られたマツチは、極めて物理的に正しい熱量で以て真の熱さを彼の軀に刻んだ。

「……………カウレス殿！」

「^{ガソリン}のアーチャーの言葉に、ようやくカウレスが目を覚ました。汗は嫌なほどに滴って服を濡らし、両腕には同調から抜け出せばすぐに消えるとはいえ、生々しい火傷の痕がまだ残っている。

「……………ああ、くそ。同調しすぎた」

死に至る苦痛だった。この焼死体は、それ以上の苦痛を味わっていた。何かを吐かせるために散々拷問された。拷問内容は手っ取り早いもので、ガソリンをかけられ、火をつける。それだけでも生半可な苦痛ではなからうに、拷問者は生きたまま彼の心臓を抉り出した。

炎によって何もかもがまっさらになっ、ていくだろうが、それでも臓器の喪失くらいは判断できる。その瞬間は、果たしてどれほどの絶望だったのか。

彼は拷問で死に、炎で焼け死に、最後に心臓を抉り出されて殺された。

「……………で？ 何か分かったのか？」

「残念ながら、アサシンは何かを吐かせるために拷問を加えていたとしか分かりませんでした。ただ、その途中で気になることを拷問された魔術師の方が呟いていた」

「それは？」

「俺なら答えられる」と

「……俺が持ってきたリストは？」

アルツイアがリストを差し出した。受け取ったカウレスはべらべらと捲っていたが、不意に顔色を変えた。

「姉さんに連絡する」

カウレスは携帯を取り出し、地下室を飛び出した。城塞に固定電話は敷かれていない。だがフィオレやカウレスは魔術師とはいえ若い。携帯電話程度の扱いならば、楽なものだ。ワンコールでフィオレが出た。

《どうしたの？》

「姉さん、そちらに魔術師のリストはないか？」

《何言ってるの。もう渡したでしょ》

呆れたような声。焦りを抑えつつ、カウレスは再度尋ねた。

「ああ……だけど、これは自身の専門分野と得意な術式しか書かれてないだろ」

《それ以外に何が必要なの？》

「欲しいのは、城塞の防備にどの魔術師が関わっていたのかって情報だ」

《む。それは難しいわね、でも城塞の結界敷設なら大部分ダーニックおじ様よ。それから、ゴールドおじ様とセレニケね》

「うちの血族で、召喚魔術師のアヴィ・ディケイルは関係ない？」

《ちよっと待ってね。今、ダーニックおじ様の遺品を整理していたの。確か似たようなリストが——ああ、あったわ》

「ディケイルはどんな役割だ？」

《城塞の警備を行う低級悪霊のメンテナンスよ》

その言葉にぞっとする恐怖がカウレスの全身を貫いた。警備、城塞の要となる魔術防壁。廊下と問わず、部屋と問わず。要塞内部には警報結界が敷き詰められている。

昨日侵入したジークはそもそも元はこちらの勢力の人員だ。警報が鳴るはずもない。だがもし、全くユグドミレニアと関係のない存在が侵入しなければならぬ場合——。

「つまり、ディケイルは城塞の警備の警戒解除暗号を知っているんだな？」

《そういうことになるわね。でもそれが……》

「今すぐ城から逃げろ姉ちゃん！ アサシンがそっちに居る可能性が高い！」

《え？ ちよっと何言って——》

カウレスが叫んだ途端、携帯電話の通話が途切れた。慌てて液晶表示を見る——圏外ではない。念話による通信を試みる——こちらも不成功。

「アーチャー——霊体化して、すぐに姉ちゃんのところに行け！」

カウレスの言葉に、アーチャーは頷き一つで即座に姿を消した。アルツィアたちは、啞然とした様子で走り出したカウレスを眺めていたが、すぐに彼女たちも慌てて追いつるように走り出した。

「ねえ、何があったのさ!？」

ライダーの問い掛けに、走りながらカウレスが応じる。

「アサシンが拷問で引き出した情報は、城塞へ潜入する方法だ! 拷問の差が激しいのは、城塞の警備情報を知っているか知らないかの違いだ! 知っている連中は念入りに情報を引き出された!」

此処に至り、アサシンは連続殺人鬼でも最悪のタイプであることをルーラーたちは理解した。どうしようもなく人を殺す性を持つ一方で、証拠を隠滅する術を云得しており、完全勝利を得るための戦略すら立案している。

最悪だ。限りなく最悪だ。無謀にも、あの殺人鬼は本気で全サーヴァントを斃すつもりでいる。マスター殺しという、アサシンののもっとも得意とする戦術で……!!

「なっ……」

「ライダー、アンタもすぐに向かってくれ！ そっちのマスターもヤバイ！」

慌てて頷き、ライダーは霊体化した。ルーラーがあつという間にカウレスを抜いて、更なる勢いで走り出す。

サーヴァントの走力であれば、五分も掛かるまい。だが、その五分の遅れが致命的になる恐れがある。最後の言葉が、自分の姉に届いて正しく理解されたことを祈るしかない。

カウレスは先ほどの拷問で受けた苦痛など忘れ、ただひたすら走る――。

カウレス

乾いて弾けるような音が中庭に響いた。戦斧バトルアックスを横した長さの木槍と、大剣を横した木剣が激突する。

鉄のように散る火花はなくとも、その衝突には互いの戦意があつた。

はっ、と小さく丸めた呼吸を吐き出して、ジークは果敢に彼女の懐へと飛び込もうとする。槍と剣では間合いが違い、繰り出す技の速度も違う。

大剣とはいえ、戦斧の間合いに敵うはずもない。故に、彼はまず攻撃の一手を突貫から

始めようとした。

しかし、それは戦斧を持った戦士に対する常套手段であり、簡単に予測される行為だ。ふん、とつまらなそうに嘆息すると、ホムンクルスは戦斧を回転させて迎え撃つ。背後へと後退して開合いを広げ、詰め寄るジークを見事に捌く。

戦闘用ホムンクルスであり、リーダー格である彼女はゴールドによって、「トゥール」と名付けられた。

木槓がジークの脇腹に直撃する。戦闘用ホムンクルスならではの怪力によって、ジークは吹き飛ばされた。

それを見て取ったトゥールは、木槓を土に突き立て告げる。

「なあ、もうこれで一時間やってる。そろそろ諦めてもいいのではないか？」

「……」

立ち上がったジークは無言で剣を拾い上げる。その表情には、些か覇気がない。

「お前には確かに剣の英霊が宿っているのだろう。その心臓のせいで、魔力供給用のホムンクルスとしては破格の生命力も持っている。だが、戦闘力そのものは並みだ。平凡、凡庸、特筆すべきもの無し」

「改めて言われると、多少落ち込むな……」

顔を落とすジークを、トゥールは笑う。

「私のように戦闘に特化して調整されたホムンクルスにはまず勝てまい。サーヴァント相手には言うまでもない」

「……ふむ。しかし、俺は最前線で戦う必要がある」

「その姿のままでは戦うというのなら、素直に諦めるか身を隠せ。サーヴァントとは、お前が百年経っても敵わぬ領域に到達した魔人たちだ。どれほどか弱く、可憐に見えようとも——その本質は凌まじいまでに闘争や殺害に特化した存在ということに変わりはない」

「黒^{ブラック}のライダーであれ、ルーラーであれ、彼女たちはまさしく一騎当千の強者だ。穏やかな知識人である黒^{ブラック}のアーチャーも一度弓を持てば、精密無比な狙撃手となる。

世界の数多が信仰する英雄の分霊、聖杯戦争を勝ち抜くべく召喚される極小にして最大の奇跡。それが、サーヴァントという存在の正体だ。

「分かっているつもりだが」

「さて、どうかな？ まあ、私が口出しすべきことではないか——」

不意に言葉を切って、二人はほんやりとトレーニング場に運んだ中庭を見やった。つい昨日まで美しく、黒^{ブラック}のバーサーカー^{バーサーカー}がよく花を摘んでいた花畑は無惨にも瓦礫の山で押し潰されていた。

……にも拘わらず、残光が橙色に全てを染め上げる様はどこか惨く、美しいとジークは思った。時刻は夕暮れ時。まもなくサーヴァントたちが帰還する頃合いだろう。アサシン

について、手掛かりでも掴めていいのだが。

「率直に尋ねるが。貴女はいつ頃死ぬ？」

何気なく、ジークはそう問い掛けた。

気兼ねなく、トゥールは応じた。

「率直に答えると。残り二ヶ月から三ヶ月というところだろうか」

そうか、とだけ呟いてジークはまた中庭に視線を移す。彼女は死ぬ寸前まで、その役割を果たし続けようとするだろうな、とふとジークは思った。

「……そう言えば。私はお前に礼を言つてなかった気がする」

ぼつりとトゥールが呟いた。その言葉の唐突さに、ジークは首を傾げた。

「礼？」

「ああ、礼だ。お前のお陰で、我々は救われた。お前がここに来てくれたお陰で、お前が逃げたお陰で、お前が逃げようと思ったんだお陰で。我々は自由を選択することができた。お前のように、逃げることも——戦うこともできるのだと」

トゥールはどこか誇らしげにそう告げた。

「そんな……」

残りの言葉は揺蕩うように定まらず、そのまま消えてしまった。選択したのは彼らであり、自分はただ少しでも背中を押したに過ぎない。

そんなことは分かっている。分かっているのだが――。

「誇りに思っても、いいのだろうか」

「私はいいと思っているぞ」

トゥールはそう言つて笑つた。……ふと、空を見て呟いた。

「冷えたせいか、霧が出てきたな。汗もかいたし、そろそろ戻るか」

トゥールと共に戻りかける途中、突然彼女は顔を蒼白にして倒れた。どうした、と駆け寄ろうとしたジークも次の瞬間、目眩を覚えて膝を突いた。

「なん……だ……?」

ジークはすぐに気付いた。肌浸透する、おぞましい何か。霧だ、この霧は自然現象ではない――

「中に入れ!」

どうにかジークが立ち直り、トゥールの肩を掴んで強引に城内へと引きすり込んだ。扉を叩きつけるように閉め、トゥールの頬を叩く。

「おい、立てるか?」

「……私はい、他の皆を……!」

力なくそう言つて、トゥールは眼を閉じた。一瞬背筋に冷ややかなものが流れたが、どうやら昏倒しただけのようだ。

トゥールの言葉に従い、ジークは城内にいたホムンクルスに「城の外に出るな」と注意を呼び掛けつつ、外に出ていたホムンクルスたちの救出に向かうことにした。

だが、窓から手を突き出したただけで肌に乗立つような痛みが走る——何の対策も取らずに外へと飛び出すのは、間違ひなく自殺行為だ。

「おい、ホムンクルス——こ、この霧は何だ!?」

パニックに陥ったゴルドの叫びに、ジークも焦燥に駆られつつ怒鳴った。

「お前に分からないものが、俺に分かるはずはないだろう!」

「ああ、くそ。サーヴァントか……それとも魔術協会の連中か……!?」

「ゴルド——おい、ゴルド・ムジーク・ユグドミレニア! この城に、毒物を遮断する魔術礼装はないか!?」

両肩を掴み、握さぶるとようやくゴルドが落ち着きを取り戻した。

「ケイローンの触媒を探す際に発見した、アラクネの布がある……! 倉庫に保管しているはずだ、来い!」

倉庫には、現時点で戦争には不要だと判断された品物が所狭しとひしめき合っていた。アラクネが織ったタペストリーの断片とも言われるそれは、神への捧げ物だけあってある程度の穢れを遮断することができる。

ゴルドが取り出したその織布で、ジークは鼻と口を覆って後頭部で縛り付けた。

「いいか？ 呼吸はそれでどうにかなるかもしれないが、視界だけはどうにもならんぞ！」

「ああ、分かっている……！」

洗濯物を干すために、外に出ていたホムンクルスたちが屋上に居ると知ったジークは階段を駆け上って、外へと出た。

既に霧は尋常ではない濃さとなっており、全てが絹に覆われているようだ。両膝を突いて、両手を振り回す。三人の誰かに当たることを祈りながら、必死になって這い回った。

一秒ごとに痛みは激しくなり、一秒ごとに視界は消えていく。全身が溶けるような感覚は、何ともおぞましく――凄まじい恐怖だった。落ち着け、と自分に言い聞かせる。この心臓は「童殺し」のもの。如何なる状況であれ、この心臓が停止することなどない――！しばらくして、ジークの腕がホムンクルスの軀に当たった。幸い、彼女たちも異常を察知して集まっていたらしい。すぐに残りの二人も見つけた。

「しっかりしろ……！」

声に応じる様子はない。倒れ伏したホムンクルスたちは三人。誰を優先すべきかも分からず、とにかく二人を担いだ。ホムンクルスたちの体重は、筋量が少ないせいで人間よりは軽いが、それでも二人が限界だ。

目眩がする。目だけは覆えないので、たちまちの内に視界が濁る。ハンカチで時折目を拭き、どうにか視界を取り戻しつつ二人を城内へと引っ張り込んだ。中にいたホムンクル

スたちが二人を受け取り、救助を開始する。

残り一人。もう一度、霧の中へと飛び込む——そろそろ、視界どころか方向感覚すら危うくなってきた。高々数メートルを往復するだけで、気が狂いそうなほどの痛みが外と内から刻み込まれる。

脳と脊髄に焼いた針が突き刺さり、弄くり回されているよう。

吸う度に肺が焼け、吐く度に喉が軋む。ほとんど手探りで、前へ前へと這い進む。祈りながら、呪詛を零しながらただ前へ。

手が柔らかいものに触れる。もう這いつくばる訳にもいかず、ふらつく軀を強引に立ち上がらせた。渾身の力を籠めて、最後の一人を担いだ。だが、振り返ればそこにあるのはただ霧、霧、霧――。

「……ちくしょうめ」

歯を食い縛り、か細く頼りない記憶を頼りにどうにか道を進んでいく。どろりと皮膚が溶け、全身を刺し貫く痛みは何ともおぞましい。眼球から血が流れ出した。

「……こつち！ こつちだ、早く！」

ホムンクルスたちの微かな声を頼りに、ジークは軀を必死になって引き摺った。伸ばした手を、誰かが掴む——強引に引っ張り込まれる。冷たい水が、ジークと担いで来たホムンクルスに降り注いだ。

痛みはたちまちの内に和らぎ、更にタオルを押し当てられると思考が恢復する程度にまで弱まった。

「これで全員、城内に入ったはずだ」

ホムンクルスたちの淡々とした声に一息つきながら、ジークは尋ねた。

「皆、無事か？」

「お前が担いで来た最後のホムンクルスだが……既に死亡していた」

その言葉に、ジークは担いで来たホムンクルスを見る——ああ、なるほど。確かに彼女の言う通り。必死になって助けたホムンクルスは、既に息絶えていた。

「……くそ！」

顔を覆う。剥がれ掛けていた皮膚がぼろぼろと落ちていった。

「だが、最初の二人は助かった。お前のお陰だ」

慰めるようにホムンクルスたちが言うが、ジークはただただ己の無力さを嫌悪する。悲鳴、ガラスが割れる音——ジークは即座に立ち上がった。

今の声は、ホムンクルスのそれではない。感情が強く入ったこの声は……恐らく、フィオレだろう。

「俺が行く」

「おい、待て……！」

じつとしていらなかった。痛みも何もかも忘れて、ただただ駆けた。憤怒があった。寂いきれなかったという無念があった。

気付けば痛みはなく、視界も明瞭になっている。どうせ霧の中へと飛び込めば、また痛み出すのだろうか――それでも今は、この憤怒だけを想っていたかった。

魔術師であれ、サーヴァントであれ、誰であれ。必ず、倒す。

§§§§

「もしもし？ カウレス……？」

通話が切れている。液晶の表示を見ると圏外になっていた。まだ夕暮れであるにも拘わらず、不意に周囲の闇が色濃くなったように思える。

魔術師にとって直感は無類な力であり、才能だ。フィオレの直感は、既に凄まじい警鐘を鳴らしている。先ほどまでの穏やかな時間はとうに過ぎ去り、今は一瞬の判断が生死を分かつ修羅場である。

周囲には誰もいない。先ほど、ホムンクルスが紅茶を持ってきてくれたがすぐに退出し

た。もつとも、彼女が残っていたところで戦開用でもないものでどうにもならなかっただろうが――。

「ああ、もう。落ち着きなさい、私！」

深呼吸を一つ。それから、額に拳を打ち付ける――冷静さを取り戻す。

「最初にやるべきことは、魔術礼装の装着。ここはおじ様の書斎、私の礼装は部屋に置きっぱなし。だから、まず部屋まで向かうこと。それに私室の工房なら、防護手段は幾らでもある。よし……」

ゆっくりと、車椅子が軋む音にすら用心しつつ彼女は廊下へと出た。ダーニツクの書斎から、自分の私室までは距離にして三十メートル。アサシンが自分を発見しているかが未知数な以上、魔術を使用することはできない。

落ち着いて、ゆっくりと――けれど迅速に。たった三十メートルだ、普段は極々当たり前のように通っている廊下だ。

廊下は、静かだった。いつもならわずかに漏れ聞こえるホムンクルスの会話や、サーヴアントたちの騒がしい声はない。……当然だ、何らおかしいことではない。サーヴアントたちは全員出払っているのだ。ホムンクルスたちも人数は著しく減っている。

おかしいことはない、この廊下が静けさに包まれるのは当然のこと。おかしくはない。だが――。

「車輪の擦れる音が思っている以上に大きい気がする。」

「廊下の掃除が行き届いていない気がする。」

「いつもより廊下が長い気がする。」

「いつもより廊下が昏い気がする。」

「どこからか血の生臭く甘ったるい臭いが漂ってくる気がする。」

「早く、早く、早く。」

ポオン！ 音に、鼓動が跳ね上がった。いや、これは違う。時計の音だ。時刻は十六時。どこかの部屋の柱時計が鳴っただけだ。相手は殺人鬼だ。音も無く忍び寄るのは得意技だろう――。

振り向きたくなるのをどうにか堪えた。もし、既に背後に忍び寄っていたならば、振り返って確認するだけ時間の浪費だ。

「腕を動かさなきゃ……」

腕を動かす。脳から神経を通して伝わる命令が、いつもより遅い気がする。

ポオン！ 時計の音。そうか、十六時だから四度鳴るのか。じゃあこれは二度目だ。二度目？ まだたったの二度目？ 道理で足が進まないはずだ。時間が際限なく引き延ばさ

れている。

冷静に……冷静に……ポオン！ ああ、もう！ 五月蠅くて気が散る！ 柱時計が鳴る間隔は一秒だから、これで三秒。

三十メートルを普段はどれくらいの時間で走っていたっけ？ 全力疾走で……大体、二分くらいだった。部屋はこれから左側の扉、車椅子で開くのは健助なので解錠用の呪文^{マジックワード}を決めている。一言唱えれば、それでいいだけ。

ポオン！ 四回目。その音以降は、特に何も起こらない。暗く、とても静かだった。

「え……？」

フィオレは愕然として周囲を見回す。暗い、暗すぎる！ まだ夕暮れを過ぎたくらいで、これほど暗い訳がない！

廊下に設えた窓の外を見る——白い。

「これは……」

周囲はまるで絵の具で塗り潰されたように白いが、決して明るくはない。窓の外をいくら覗き込んでも、ただ白一色。

雪……ではない。これは、霧だ。

（——ほとんどの人間の肺が爛れていて——）

《硫酸を吸い込んだような》

《ジャック・ザ・リップパーが活躍した時代のロンドンに折しも産業革命による公害が問題視され始めていて――》

《霧の都！》

《霧の都！》

《霧の都！》

時間の観念そのものが、フィオレの頭から吹き飛んだ。音を立てることに構わず、椅子を全力で走らせる。

この時期、トゥリファスに霧が立ち籠めることなど有り得ない。無論、気紛れな自然現象という可能性もないではないが――それでも、城塞を包み込むような霧は魔術的現象と考えた方が妥当だろう。

残り十メートル。

走らせすぎて、車輪の軋む音が響いた。だが、構ってなどいられない。背後に居るかもしれないと思うと正気ではいられない。

残り六メートル。

アサシンの固有スキルは『気配遮断』、マスター殺しに最適なこのスキルのせいで視認

しない限りは、絶対に傍にいないことが見抜けない。だが、それとは別に敷設してある幾重もの警報結界のどれかに引っ掛かるはずだ。

残り二メートル。

だが。

もしも。

アサシンが、それを一顧だにしない相手なのだとしたら――。

扉の前。

フィオレは扉の前に立ち、開封と解錠文を囁いた。扉が開き、車輪を押す――瞬間、何気なく左側に視線を移した。

無意識の行動だった。気配はなかった、音もなかった、人が背後に立ったときの独特の気配など、欠片もなかった。直感ですらなく、安全圏に到達していたことで、今まで怖がらせていた。ものが本当かどうか、確認しておきたいというだけだ。

誰だって、追いかけてきた白いものがただのビニール袋だと安心したい。窓を叩いていたのは強い風だと思いたい。

だから、やはり偶然だった。

違和感も不自然さもなく、少女は背景に溶け込んでいた。走っている――狩獵豹のように躍動感溢れる動きの癖に、その一步一步に音が無い。

幸運に恵まれたとすれば、直線の廊下に少女が身を隠す場所は無かったということ。驚き悲鳴を上げるより先に、フィオレは車椅子から転げ落ちて、部屋の中へと飛び込むことができたということだ。

「閉鎖！」

扉の防鎖など、十秒保つか怪しいものだろう。だがその十秒が肝心だ。目指すものは机の上だ。早く、早く、早く……！！

「——開封！」

半分もいかめ内に、扉が開いた。愕然としてフィオレは振り向き——ようやく、少女の姿をはっきりと認識した。

少女、だった。それもアサシンはおろか、サーヴァントにすら見えない少女だった。薄い色素の髪、あどけない顔、全身を締め付けるようなボンデージスーツ、そして——まるで感情が乗っていない、アイスブルーの瞳。

「……どうして……」

「どうしてって、さっき言ってたじゃない？ 耳がいいの」

奇妙に濁った声。フィオレの耳には二重、三重に同じ台詞を呟いているような印象を受けた。

「貴女が、『黒』のアサシン……なの……？」

「うんっ」

こくり、と可愛らしい仕草で少女は首を二度振った。それから、右手でくるくるとナイフを弄ぶ。刃からは血が滴っている……ここに来るまでに、何かを仕留めてきたらしい。

「あなたは、マスターだよな。そう、たしか……」黒のアーチャーの「
フィオレは怯えた表情で、後ろへと退がっていく。

興味深そうに周囲を見回す、フィオレは退がりながらそこはかどない屈辱を抱いた。敵は、自分よりも自分の部屋に興味を抱いている——それは、フィオレを敵としてではなく、獲物と見なしているということ。囁き魔に自分を暴き立てられているような羞恥。

「魔術師って、おへやのつくりがどこもかしこも一緒だよなえ」

ナイフでそれぞれを指し示す——部屋の魔力を整える護符、結界用の宝石、降霊術用の服、作りかけの義手、そして無数の魔導書。使い魔の獣が、無感動な瞳でアサシンを見据えている。

更にフィオレが後ずさる。部屋の隅に書斎机があり、その上にはトランクケース。

「……黒のアサシン。聖杯はここにはありませんよ。既に持ち去られてしまいました」

「知ってるよ、赤のひとたちでしょ」

「な……知っていて、どうしてここを襲ったのですか?」

「潰しやすいところから潰すのは常道でしょう?」

トランクケースに後一步で手が届く。だが、トランクケースを手を取って開き、背中にそれを装着する——果たして、それまでに何度自分は殺されるだろう。

しかし、このままでもいずれ死ぬことは確実だ。

「ふーん。ねえねえ、それがほしいの？」

医療用メスがトランクケースに突き刺さり、手を伸ばしかけていたフィオレは悲鳴を上げた。机の上のものに手を伸ばそうとしていた彼女を、アサシンはちゃんと見通していたようだ。

「あ……」

愕然とした声は、決して演技ではない。そこに収まっていたのは、確かに現在使用している最新の接続強化型魔術礼装だ。

「あなたの宝具だったのかな？ こめんね、使わせたくないの」
だが——これでいい。

「そう。別にいいですよ。なら、こつちを使わせて貰うから……！」

「……ッ!?」

手を伸ばしたのは、飾られていた義手の方。後退しつつ探っていたのは、トランクを開けなくても済む、剥き出しの旧式礼装だった。

「共に——」

紡がれた言葉は、礼装の起動呪文。自動的に操手の体温を感知、蛇のように動くといった間にフィオレの背中へと収まり、四本へと広がった。

「戦火の鉄腕！」

腕の一つが光弾を放った。アサシンはナイフでそれを斬り弾く。だが、アサシンのスキルは把握している。まして真名がジャック・ザ・リッパーである以上、魔力に対する抵抗は普通の魔術師にも劣るはず――

続け様に光弾を掃射する。廊下へと向かう扉の傍に、アサシンが立っている。彼女が動けば一瞬で殺されるのは、前提条件として変わらない。この部屋にいつまでも居てはならない――霧が出ている外は危うい。

だが、それでも。死地へと踏み込まなければ、間違はなく死ぬ。

「全腕自動行動――目的を、霧からの脱出」と設定」

そう言っ、フィオレは軽い対魔力効果を持つハンカチで口を覆って瞳を閉じた。腕が彼女の命令に従って自動的に動き出し、窓ガラスを割って霧の中へと飛び込む。

「くっ……!!」

皮膚が触れた瞬間、揺れるような感覚があった。閉じたにも拘わらず眼球はひりつくように痛み出し、ハンカチ越しに吸い込む空気は冷たく刺々しい。

産業革命以降、ロンドンでは工業の発達に伴って発生する煤煙と、頻繁に発生する霧が混

ざり合うことにより、汚染空気を産み出した。煤煙に含まれる二酸化ガスは大気中で変化し、硫酸状の霧となった。

これは、ジャック・ザ・リップパーが^ベ生きていた。ロンドンの空気。そして、正体不明の殺人鬼がその身を隠す結界宝具——『^{ダーク}黒霧都^{ミッド}』である。

息を吸う度に、肺がじくじくと痛む。腐食している——軀が内部で溶けている。それでも彼女が背負う義手は全く関係がないとばかりに、滑らかな動きで霧からの脱出を図る。だが、速度的にも距離的にも、既に出口に到着していて良い頃だ。なのに、いつまでも霧から脱出することは敵わず、周囲からはくすくすと笑い声が反響している。

“さーん”

能天気とも言える声に、フィオレは震えた。耳元で囁かれた、そんな気がしてならない。
“にーい”

カウントダウン。終わった後に何をされるのか、嫌な想像だけが膨らんでいく。義手は出口を求めて右往左往、未だ辿り着くことは敵わない。

“いーち”

悲鳴が喉元までせり上がった。背後から聞こえたような気もするし、正面から向かい合っ
って宣言されたような気もする。

義手が敵対行動に反応して、自動的に光弾を放った。体温感知能力を持つこの魔術礼装は、視界が皆無であるこの状況下でも戦力たり得る存在だ。

「ぜろ」

だが、やはりこのサーヴァントには何の意味もない。霧は彼女の宝具であり、彼女だけがこの霧の中で通常通りの行動を取ることができる。他サーヴァントは自動的に敏捷ランクが一段階下がり、魔術師や人間は際限なくダメージを受け続ける。

ざくり、と奇妙な音。

音はなく、ただ事実だけがある。壊れた義手は呆気なく機能を停止させた。その拍子に、フィオレはバランスを崩して無様に倒れた。

「あ……!!」

義手は必死になって動こうとするが、バランスを崩している上に、残った二本も無事であるとは言えない状況だ。

「それじゃあ、ばいばい」

ジャックは未だ臉を閉じるフィオレにナイフを突きつけた。間近にナイフがあることが分かるのだろう、くぐもった悲鳴と共に己がサーヴァントの名を呼び掛ける。

「アーチャー……!!」

喉を切り裂けば、いつもの通り沈黙する——とジャックは滑らかな動作でナイフを喉に

添えて一気に引いた。

手応えがない。フィオレの姿が目の前から掻き消えていた。途端、己に突きつけられる膨大な殺意に気付き、アサシンはわずかに怯んだ。

「サーヴアント……？」

「いかにも」

矢が放たれる――が、アサシンは機敏な動きで宙を舞い、近くの高台に着地した。

「はやかったね。もうちょっとかかるかなって思ってた」

黒のアーチャーの到着はまさに紙一重だった。全力で疾走しても間に合わなかったに違いない。矢を放っても、殺気を察知したアサシンに防がれていただろう。

最後に残された手段は令呪。けれど、フィオレは令呪を使用できなかった。使うという考えすら、頭に思い浮かばなかった。立ち籠める霧は思考すらも奪い去ってしまうらしい。

だが、アーチャーの名を呼ぶことだけはできた。思考ではなく、本能の力で叫んだ。

声はアーチャーの耳に届いて状況を理解し、即断した。アサシンではなく、フィオレの方を矢で射ったのである。鉄はなく、代わりに弾き飛ばせるための術式を先端に仕込んでいた。

「――では、今度こそ勝負をつけましょうか。黒のアサシン」

「いやだよ。ほかにサーヴアントが一騎くるでしょ。こんなじょーきょーで戦うほど、

わたしたちはバカじゃないもん」

あどけない口振りで、鈴を転がすような少女の声で、淡々とアサシンは状況を分析する。そしてそれは、極めて的確なものだった。

「だから、ばいばい」

霧の中に姿を消せば、アーチャーとて追えるものではない。そのままアサシンは、姿を消す——そのはずだった。

アーチャーもフィオレも予測できぬ、憤怒が充填された渾身の一撃。

「え……？」

アサシンが茫然とするのも無理はない。霧によって姿が完全に掻き消える寸前、自身の腕が斬りつけられた。

サーヴァントではない。それなら、アサシンとて察知できていたはずだ。人間ではない。人間では、この霧の中を耐えられない。魔術師ではない。魔術師では、自分に斬りかかったところで傷一つつけられまい。

「——だれ？」

先ほどまでの言葉が、無邪気故に恐怖を誘発するものだったとすれば、今の言葉は、ただただ冷やかな殺意が溢れていた。

「……」

沈黙する少年は、目を手で覆っている。視力があるようには見えず、この霧に抵抗できる力があるとも思えない。

だがしかし、彼は自分を傷つけた。とても痛いことをした。あの女たちのように、あの母たちのように、許されないことをしたのだ。

「ころして、あげる……！」

「……それはこちらの台詞だ、アサシン」

目を細めつつも、少年は気圧されることなく睨み返した。

互いの殺意は沸点に到達しようとしていたが、時間は残館だった。ライダーのサーヴァントが、既に戦闘領域に立ち入る寸前だ。

どれほど怒り狂っていても、アサシンは勝ち目のない戦いに挑むつもりは毛頭ない。

「次は、ぜったいだからね」

そうして、アサシンは霧と共にぶつくりと姿を消した。たちまち霧は晴れ渡り、空は夕暮れの薄ぼんやりとした色へと変わる。

「――助かりました」

黒のアーチャーがそう言っ、マスターを抱え上げた。どうやら、彼女は無事らしい。サーヴァントと単体で相対して、よくも生き残ったものだ。

「あれが、アサシン？」

「ええ。ジャック・ザ・リッパーです。……残念なことに、もう顔も隠かくけですが」

アーチャーの言葉に、ジークも愕然とした。真正面から向かい合い、殺してやるとまで言われたにも拘わらず——その顔すら覚えていない。

戦闘終了後、アサシンに関する全情報を忘却する——それがアサシンのスキル「情報抹消」だ。襲われたこと、戦ったこと、剣を交えたこと、それらは記憶に刻まれていても、具体的な内容は脳から消し飛んでいる。

この城塞を■に包み、■■■■を持った■■■のサーヴァント——アサシン。

「残り二日で、あのアサシンを必ず仕留めなければならない」

ジークもそれに賛同する。アサシンについて覚えていることがたった一つだけ存在する。彼女をこのまま放置するのは、あまりに危険過ぎる……！

第四章

第四章

「おいおい、何だよこりゃ」

赤のライダーの槍は刺す、というよりは撃つという方が正しい。間断なく熾烈な連撃は、最早機関銃の如き勢いだ。

時間は三分を経過している。百八十秒、ライダーは自身のマスターであるシロウを圧倒し続けている。拮抗ではなく、圧倒だ。

最初の数撃こそ反撃を加えてきたが、そこまでだ。ライダーは彼の斬撃を容易く見切ると、必殺の三連撃で仕留めに掛かった。喉、鳩尾、心臓——急所の三点を狙ったその刺突をシロウは紙一重で捌き切った。

本来捌き切れるはずもない連撃だった。奇跡、神が味方した、幸運、そんな使い古された言葉でしか説明できない流れだった。

舌打ちしつつ、赤のライダーは遮二無二突っかかる彼を蹴って間合いを調整すると、もう一度攻撃を組み立て直した。そして同じようにバランスが崩れたところを見定めて、

急所に一撃——それを、シロウは再び躲し切った。

圧倒しているのは間違いない。シロウがライダーに敵わないのは当然の事実だ。

だが、シロウは倒れない。膝を突かず、諦めることもない。

「いやいや、これはお遊びだぜ。何も意地を張ることはねえよ」

内心でそう思いつつも、ライダーの槍が勢いを削がれることはない。

——そう。もし、ここで手加減をすると己の大事な何かが零れ落ちるような気がした。

「赤」のライダーは間違いなく絶対的な強者で。

シロウ・コトミネは間違いなく絶対的な弱者だ。

ライダーにとって、シロウも雑兵もレベル的には然程変わりはない。戦えば、十割の確率で勝てる断言できる相手である。時間が掛かるか掛からないか、違いはその程度でしかない。

しかし——その、確率すらも納得ずくで。シロウはただライダーに立ち向かう。

「……いや、違う。おい、まさか手前エ」

ようやく、シロウの視線にライダーは気付いた。シロウはライダーを見ていない。否、戦っている相手として見ているが、少年の視線は遥か彼方を見据えている。

名高き英雄と戦うという喜びや恐怖はない。自分は障害であり、踏破すべき壁であり、ただそれだけだ。

屈辱や憤怒を通り越して、ただただ啞然とする。

「——待った」

「赤」のライダーは槍を下げて、立ち向かおうとするシロウを押し留めた。

「む。……もう終わりですか？」

「……息切れしている癖に、よく言うぜ。なあ、マスターさんよ。何故俺と戦った？」

その問い掛けに、シロウは不思議そうに首を傾げた。

「何故、って。——退屈だったのでしょうか？」

「それじゃあ、アンタにメリットがない」

「ありますよ。ここで無様に諦めず、本気を見ればライダーが敬服してくれるのではないかと」

薄い笑み。——王が英雄に向ける諂^{うづ}いと蔑^{あざ}みが入り交じった笑みではなく。さりどて、子供たちが向ける無邪気な憧憬でもなく。英雄が英雄に向ける信頼の笑いでもない。

それは、聖人の笑み。穏やかに、ただあるがままを受け入れる——しかして、あらゆる絶望に挫けることのないものだ。

先の言葉は、恐らく冗談ではないだろう。「赤」のライダーを敬服させる、ただそれだけの為にシロウは戦ったらしい。

——そして最悪なことに。

ライダーはどうやら、その余りの愚直さ加減にわずかなりとも感銘を受けてしまった。考えてみれば、賢王や暴君に仕えたことはあっても聖人にこの身を捧げたことは一度もない。

「……敬服はしないが。感心と興味は湧いた」

その言葉に、シロウは胸を撫で下ろす。聖人としての笑みが崩れ、少年特有の快活な笑みが過ぎった。

「ありがとうございます。いや良かった、戦った甲斐があったというものです」

「で、最後に質問だ」

いつのまにか、彼の手には訓練用の槍ではなく本物の槍——トネリコと青銅で作られた、愛用の槍が握られていた。

そして、ライダーは槍を握んだ手を握り直した。その仕草に、*赤*の*アサシン*が警戒心を強める。その所作は間違いない、殺意を籠めた問い掛け。答えに虚偽があれば、答えて英雄として譲れぬ何かがあれば、彼は直ちにその槍でシロウの心臓を抉り出すだろう。

だが、シロウは*赤*の*アサシン*を軽く一瞥して下がらせた。

「——ええ、何でしょうか」

「我がマスター、天草四郎時貞。アンタ……憎くはないのか？」

「誰を憎いと言うのでしょうか」

「——かつて、憎んだことはある」

向かい合い、視線は逸らさない。そこに狂気の片鱗はなく、強者の驕りもない。シロウの瞳は、ぞっとするほど、透明だった。

「神も、人も、全てを憎んだことはある。それは認めようライダー。私はかつて、確かに人間が憎かった。自分を殺されたからでも、仲間を虐殺されたからでもない。それを歴史の構造として受け入れる人類そのものが憎かった。強者と弱者があり、互いに喰らい合い、命を浪費することで成長し続けるという人類がただただ憎かった」

完全なる存在である永劫回帰の竜より更に悪質だ。頭が尾を喰らうことで成長し続ける怪物など、人類くらしいものだろう。人の命は輝くほど大切なものである癖に、塵芥ほどの価値もない。

大切なのは、正しき選択なのだろう。そしてそれは、思っていた以上に容易な判断だ。十の内、九を取って一を捨てる——そんな悲劇的なものではない。一が十になれば良いのだから、要はゼロにさえええならなければいい。

人類は総体として増える。人間は総体として育まれる。砂粒がいくら零れ落ちようとも、最終的に勝利するは人類の宿命だ。

一個体としての切なる祈りなど、嘆きなど、聞こえるはずもなく。

「だから、私は捨てたぞライダー。彼らを憎悪するという心を、人類救済のために切り捨

てた。だから今は憎くなどない。この世界の誰であろうと、必ず救う。必ずだ」

言葉の後は、ただ沈黙が広がった。

やがて、赤のライダーはゆっくりと槍の手を緩めた。槍が霧体化されて横き消え、場の緊張がようやく緩んだ。

「ふむ。ま、及第点だな」

「——何を偉そうに分析しておる、小僧っ子が」

にんまりと笑う。赤のライダーを、赤のアサシンが鋭く睨め付ける。再び緊迫しそうな空気をまあまあとシロウが押し留めた。

「ライダーの退屈は紛れたようですし——私はキャスターの様子を見に行ってきます」

シロウは軽く一礼して立ち去った。それを見送りながら、アサシンはライダーに少しばかりの敵意を含んだ視線を送った。

「何だよ、女帝さんよ」

「何が『何だ』だ、たわけめが。先の問い掛けで、あからさまに殺気を放っておいて——」

「そりゃそうだろ。こちどらマスターのことを何にも知らねえんだからよ。仕えるんなら、知っておきたい事柄はあるわな」

からからと笑いながら、訓練用の槍を拾い上げて回転させる。それを見たアサシンは、はっと鼻で笑って告げる。

「——ほう、お主はあやつをマスターだと認めるのか？」

「いいぜ、別に。ま、やることはあまり変わらないだろうがな。それでも、英霊としての意地を見せてやろう、という気にはなったぜ」

「安い男よの」

「何でも言えよ、女帝。大体なあ、俺とマスターが話している間、ずっと気を張り詰めていたアンタが言えるような筋合いかよ」

「なっ……」

普段の余裕を何処かに置き去りにしたかのように、赤のアサシンは狼狽した。

「あれだろ。マスターとサーヴァントの真剣な問答故に、迂闊な邪魔立てはマスターの誇りを穢すことになる——だが、仮令マスターの不興を買ってでもやるべきときはやつてやるって決意だろ」

「何を——英霊な、ことを」

羞恥のせいか、赤のアサシンはそっぽを向いた。その頬には微かに赤みが差している。それを見て自身の正しさを確信したライダーは、ますます豪快に笑う。

「陰謀策謀お手の物、権力を求める蟻の女王みてえな女帝さんがよ。意外に可愛い態度を取るじゃねえか」

光弾を迷わず放つ。痛めつけるためのものとはいえ、威力は床を抉るほどの極上だ。

が、対するライダーは世界最速を名乗るに相応しい大英雄アキレウス。あっさりと光弾を撃すと、身軽な仕草でアサシンから遠ざかっていく。

「じゃ、せいぜいマスターと仲良くな」

霊体化したらしい。この空中庭園で本気を出せば、霊体化を解除させることも可能だろうが、さすがに無駄が過ぎる。

「まったく愚々しい」

そう吐き捨てたアサシンは、すぐに気付く。この怒りはそもそも不要なのだ。忠実なサーヴァントと認識されているなら、それに越したことはない。

シロウとアサシンはマスターとサーヴァントとしての契約を結んでいる。だが、主従というよりは利害の一致による同盟だ。

シロウは大聖杯を移送するための「足」が欲しく、アサシンは「女帝」としてこの世に君臨したい、という願いがあった。ここまででは、互いに裏切る必然性が無かった。シロウが「赤」のマスターたちを墮落すまでは、裏切る訳にはいかなかった。

問題はここから先。シロウは目的を半ばまで達したとはいえ、彼の人類救済の為にはもう少しだけこの空中庭園が必要だ。裏切る不安はない。

だが——大聖杯はただ存在するだけで、汲めども尽きぬ魔力の渦だ。少し聖杯を弄れば、自分が大聖杯の魔力を活用することも可能だろう。

そうすれば、この空中庭園を含めて自分を倒せる存在はまず居まい。そう、マスターであるシロウにとってアサシンは必要だが。アサシンにとって、マスターであるシロウは決して必要という訳ではない。

「……莫迦か、我は」

浮かんた考えを一蹴する。今、シロウを裏切ることにメリットなど何もない。利害の対立もなく、意見の対立もなく、対立しているといえは——せいぜいが、互いの生き様そのものだ。それにしたところで、女帝は納得している。

奪われたことで裏切りを知り、富貴を欲した少女と。

奪われたことで憤怒を知り、絶望を与えられた少年とでは、それぞれの生き様が異なるのは当たり前であり、どちらが正しいかを問う質す必要もない。

では、利害が対立したとき。互いの利益が互いの害になるものだと理解したとき。果たして我はどうするつもりだ？

答えは今のところ、出ていない。アサシンは溜息をつき、再び王の間へと戻る。玉座は無人だった。名高き英雄も、道化のような文士も、そして己のマスターもいない。

ただ一人の女帝であり、ただ一人の権勢者——今はそれが、ひどく虚しかった。

5555555

ロンドン 時計塔

「全く……どうなっておるんじゃ」

ロッコ・ベルフェバンがこうも慌てているのを見るのは珍しい、とロード・エルメロイⅡ世は微笑かに笑った。

魔術協会の本部であり、野望に燃える若き魔術師たちが集う最高学府——ロンドン、時計塔。そして、ここは幾重にも結界が張られた地下講堂。生徒には内密に行うべき会議や聖堂教会との極秘交渉など、様々な目的に使われている。

聖杯大戦において、魔術協会はユグドミレニアの魔術師たちを殲滅せんと一流と謳われる資金稼ぎたちを募り、わずか数日で掻き集めたにしては高位の英霊を召喚するに足る贖罪を揃えた。

掻き集めた本人である降霊科学部長のブラム・ヌアザレ・ソフィアリによれば、唯一不

満足なのはキャスターの触媒くらいで、他は過去これ以上のサーヴァントが揃ったことはない、と断言する程のものだ。

そこまでは順調だったが、七人目のマスターとして聖堂教会の人間を招いたことが裏目に出た。その男が暴走し、獅子劫界離というマスターを除いた五人を殺害。驚いたことに、マスター権を全て奪い取ったという。

更に、監視用に派遣された魔術師たちの報告によれば、更に驚嘆すべきことに――。

「聖杯を奪った、だど？ 信じられん」

「信じるより他ないでしょうな」

ベルフェバンが絡繰り人形のように何度も首を横に振るのも無理はない。アインツベルン・遠坂・マキリ。「冬木」の聖杯戦争を構築した御三家。恐らくは彼らの全盛期であろう時代に創り上げられた絶世稀代の神域の芸術品――それがユグドミレニアが保有していた聖杯だ。

そんな大聖杯を強奪するなど、あまりにも考えられなかった。しかも、それが見逃されるような混乱の時代でもなく、組織の力すらも借りずにだ。

「そんなことよりも、聖堂教会はどうしているのですかな？」

ブラムが不満も露わに呟く。魔術協会云々からすれば、これはそもそも彼らの越権行為だ。

魔術協会はこれまでの前例に則り、監督官として聖堂教会の人間を招聘したのだ。

あの聖杯が、本来の意味での聖杯とは違うものであることなど既に世には知れている。

魔術協会にとってみれば、これは一種の義理を通すだけの行為。聖堂教会など、無視したところで差し支えないものだ。

それをしなかったのは、聖杯戦争において魔術師たちの利害が激突する際の中立的な調整役が必要だったからだ。

だが、今回聖堂教会は聖杯戦争における権限を大きく逸脱した。惜り、などという生温いものではない。一步誤れば、二大組織の全面戦争に繋がりがわかない。

「彼らにとっても予想外の状況であることは間違いないじやろうな。連中、泡を食ってやるわ。親族にも連絡をつけたようだが、全く知らぬ存ぜぬのようだな——」

「つまり、単独で……その、コトミネという男が画策したものだ？」

鼻息も荒く、ベルフェバンは吐き捨てるように告げる。

「フン。大方、サーヴァントの力に目が眩んだか、あるいは唆されたのだろうよ。奴のサーヴァントは、アッシリアの女帝セミラミス。純朴な神父など、赤子の手を捻るようなものではないか？」

「ご老体。私が集めた触媒が原因だ？」

わずかにブラムが気色ばんだ。ベルフェバンは憤てそれを否定する。取りなすように、エルメロイが呟いた。

「そもそも神父が純朴かどうか決まった訳でもないだろう。俺の知る限り、聖杯戦争に参加するような聖職者は誰も彼も信仰者かどうかすら怪しい、胡散臭い連中だ」

まあ、さすがにここまでやつてのけた人間はそうそう存在しないが。それでもやはり、聖堂教会の暗部にいるような人材は真つ当な聖職者とは程遠い。

「——さて。どもあれ聖杯は奪われ、我々の派遣したマスターたちは殺害された。残ったのは一人だが、奴に全てを負わせるには無理があるじやろう」

幸いにも、責任問題が生じる余地はない。今回に限っては聖堂教会の全面的な失策だ。これに関しては大変な「貸し」となる。あらゆる交渉事で有利に運ぶことができるだろう。

「積極的な介入、消極的な傍観。ソフィアリ講師、エルメロイⅡ世。如何する？」

「傍観だ」「同じく」

二人は即答した。ペルフェバンも同意見のようで、我が意を得たりとばかりに頷く。積極的な介入にメリットは一切無い。まして、向こうには最強の使い魔たるサーヴァントが揃っている。とてもではないが、魔術師の手に負えるものではない。

「聖杯戦争は一定期間が過ぎれば、自動的に終了する。サーヴァントたちは消え去り、必然的に飛行する要塞とやらも消えて無くなる。それまでは、徹底した監視網を敷くのが適切じやろう」

「獅子劫界離についてはどうする？」

「奴はそのまま大戦に参加させれば良い。撤退を求めたところで従うはずもなし。首尾良く全サーヴァントを討って聖杯を奪い取る——などという奇跡はそうそう起こるはずもあるまいがな」

結局、魔術協会としての方策は現状維持だ。火中の物を捨てることなく、代わりにリスクを負うこともない。しかも、状況的にハイリターンを得る可能性すらあるとなつては当然の選択だ。

私室に戻り、エルメロイは会議の結果に自嘲的な笑みを浮かべた。

「——フン、当然と言えば当然だが。全く以て及び腰だ。これで聖杯を獲ろうなどと真剣に考えているのだから性質が悪い。はじめから本気ではないクセに、賞品だけは欲しいワケか。ロツコ老らしからぬ楽観主義。子供の遊びと変わらないな」

ロード・エルメロイⅡ世。そう呼ばれる羽目になった十年前の出来事を思い出す。

戦いがあつた。英霊を召喚し、共に戦つた。その図体の大きさに怯え、嫉み、叱咤され——そして、最後に別れがあつた。

戸棚の奥に目をやる。物理的、魔術的にそれぞれ鍵をかけた戸棚の中には、ある。布が収められている。その朱の布はただの布切れであるが——彼にとっては、この世の全てに勝る価値を持つ。

ふと、手に取りなくなつて鍵を開いた。櫥の木のケースを取り出し、そつと開く。微かな焦げ跡があり、擦り切れたような朱い布。それを見ただけで、十年前の在りし日の大男が脳裏に蘇る。

「まあ、その気持ちも分からんでもないがね。海千山千の老獪であれ童心に返る時ぐらいはあるのだろうし。……まったく。聖杯戦争という儀式には、そついった浪漫がありすぎる」

それを使い出すだけで、□元が思わず綻び――。

「おお、我が兄よ。貴方にただの布切れを見てニヤけながら独り言を呟く趣味があったとはな。もしや呪物崇拝という性癖だろうか？ 何てことだ、失望したぞ」

エルメロイが凝固する。ぎ、ぎ、ぎ、と軋んだ音を立てつつ背後を振り返る。

対面用の椅子に座り、紅茶を淹れたティーカップを手に行っている少女がそこにいた。陶器人形のような白い肌に、純金の糸を思わせる細く真っ直ぐな髪。そしてそこまでの優雅な印象を吹き飛ばすような、強い焰色の瞳は興味深げにエルメロイを覗き込んでいる。

佇むだけで気品があり、座るだけで優雅を纏う少女だった。年の頃は、せいぜいが十五という頃だろう。そして彼女の隣には、女性型のマネキンを模したような水銀状の物体が、



メイドのように傳つたっていた。

「レディ。いつから、そこに、」

「貴方がその戸棚の鍵を机から取り出し、術式を解除する頃からだろうか」

「鍵は」

「彼女が開いてくれた」

隣に居るメイド型魔術礼装、月靈髓液グレイム・ソウル・エッセンスが組指を立てた。彼女の手に掛ければ、指を一本鍵穴に突っ込むだけで万能鍵へと変化する。

「音は」

「靴音など、魔術で幾らでも消せるだろうに。気配に感づくとは全く思わなかった」

ふふふふふ、と含み笑う少女にエルメロイⅡ世は大きく嘆息した。

彼女こそが「姫君」。かつてウェイバー・ペルベットという名だった男に名を与えて縛り付けたアーチボルト家の真の後継者——ライネス・エルメロイ・アーチゾルテである。

ケースを戸棚に仕舞い込み、鍵を掛けた。後で術式の解錠用の文句は変更しておくことを心に刻む。それから改めて椅子に座り、生徒を恐れさせる三白眼で少女を睨んだ。

「人の部屋に勝手に入るのは、感心しないな」

ライネスは澄まし顔で、その睨みに応じる。

「妹が兄の部屋に入ることの、どこがおかしいのか？」

「アーチボルト家の人間が無断侵入で捕まるなんて、悪夢に他ならないだろう！」

「安心したまえ、君。これまでもこれから、兄以外の部屋に無断で侵入しようなどとは思わない」

満面の笑みで断られたところが、堂々と犯罪予告をされた。

「……頭蓋が砕けそうなほどの頭痛がする。君に倫理の何たるかを教えるべき教育係は、一休どこで何をしているんだろうな」

「今頃は地獄の底だよ。我が教育者は地上から地獄をおそろおそろ盗み見ていた最中、全力で君に蹴り飛ばされたんだっけ？」

「――失礼。訂正しよう。独学であれ、君の情操教育は完璧だ。あとは淑女らしい慎みを身につけてくれ。切実に。主に被害に遭う私のために」

少女はしばし考えると、いかにも不思議そうに問い掛けた。

「……どういふことだ？ 貴方が私のためにすることは無限にあっても、私が貴方のためにはすることなど何一つとして無いはずだが」

「最悪だな、お前！」

「そう怒鳴るな、嬉しくなる。――まあ、それよりも。先ほど見ていたその布、恐らくは触媒だろう？ 魔術師としては、晶目に見て四十点な貴方が聖杯戦争に生き残ったからには、相当に強力なサーヴァントのはず。何故それを聖杯大戦に使用しなかったのだ？」

エルメロイは無言でそっぽを向いた。少女はじっと彼を見る。一分経って、根負けしたのか青年は「その通りだ」と頷いて言った。

「確かに君の言う通り、この触媒で召喚できるサーヴァントは間違いなく強いだろうさ」これを触媒として召喚すれば、恐らくあらゆる聖杯戦争全ての中で随一のサーヴァントを召喚できることは確実だ。英雄たちを従える偉大なる征服王――。

だが、悩んだ末にエルメロイⅡ世は自身の触媒を引っ込めた。それには幾つかの理由がある。触媒集めはソフィア家の長子ブラムに一任されており、そこへ余計な手出しをすれば下手をするとか彼への侮辱と受け取られかねなかったから――それが理由の一つ目。

二つ目は、この破天荒極まりない英霊が果たして聖杯大戦などという事態にどう動くか不安だった、という点だ。殺し合いならばともかく、七騎による連合だ。これ以上、彼の趣旨に添う聖杯戦争がかつてあっただろうか。

“ほう、それは実に都合が良い。どれ、相手の七騎も平らげて本格的に世界へと乗り出そうではないか！”

冗談ではなく、征服王が世界を支配するということになりかねない。それを恐れたというのも、理由の一つだ。

「家同士の関係と、サーヴァントの暴走が心配だった。それが理由？」

「……勿論。望んだ訳ではないが、今では私も一学派のトップだ。聖杯大戦の勝ち負けだけに腐心できる立場じゃない。後始末こそが私の仕事だ。聖杯を獲ろうが獲るまいが、その後の状況をよいものにする。それが貴族としての振る舞いではないかね？」

「——貴方は、噓つきだな。妹である私に隠し事は良くないぞ」

少女の言葉は、ストリートに男の胸に突き刺さった。どうして、ともう一度少女は繰り返す。その瞳は、真の答えを聞くまでは帰らないぞという不退転の決意が垣間見える。

降参を示すかのように、エルメロイⅡ世は両手を掲げた。

「……分かった。白状する。理由は極めて私的なものだ。……かつて未熟だった頃の私を、友と呼んでくれた人物がいる。そんな男を裏切れるほど、私は賢い老人ではなかったという話だ」

もしも他の誰かにエルメロイⅡ世が召喚したサーヴァントを知られたならば、聖杯戦争が世界各地で執り行われている現在、魔術師たちはあらゆる手管を使って手に入れようとするだろう。

そして魔術師の手から手へと渡り続けるだろう。あの征服王はその強大な力を利用されるためにだけにひたすら召喚を繰り返される。そこには英霊への尊敬など一切ない。……エルメロイⅡ世は、そんな未来は御免だった。

「要するに甘すぎる若造ということか。何だ、そんな誰でも識っている事を。君にだけ告白する。なんて素振りで言われるのはたまらないぞ。加えて親切心から忠告すると、かつてではなく、今も未熟、なのではないか？」

「一言どころか十言ぐらい多いなお前は！」

「むう、それを上手く使えば、アーチボルト家の負債が圧縮できるだろうに」
少女は愚痴るように呟く。

亜種聖杯戦争が華やかなりし今、この触媒の価値も暴落している。低く見積もっても、負債の半分。状況によっては負債の七割を返済することも可能だろう。

だが。

「覚えておきたまえレディ。友を売り飛ばすほど困窮するようなら、とっとと人生をやり直した方がいい」

「……む。自殺しろ、という事か？」

「短絡的過ぎる。家を放り出してゼロからやり直せ、という話だよ。……まあ、私がそれをしたらこの首が飛ぶワケだが。リセットとリスタートの違いだな。どうあれ己が矜持を賢草に出すようなら、いよいよこの家はおしまいということだ」

エルメロイⅡ世は、ふて腐れるようにそう断言した。まあ、それでも例外はある。例えば自分の弟子が聖杯戦争に参加することになり、サーヴァントが見つからないとなれば、

貸与することもやむを得ないだろうが――。

「――まあ。そういうことなら、無理にとは言わない。君がエルメロイである期間がまた延びるだけだしな」

くすくすと、どこか楽しそうな笑みを零して少女は立ち上がった。

「何しに来たんだお前は……」

「ああ、そうだ。肝心の用事を忘れていた」

立ち去ろうと扉のドアノブに手を掛けたところで、少女は振り返った。彼女の傍に控えているメイドを指差して尋ねる。

「この嬢に、何か変なモノを見せなかったか？」

意味不明な問い掛けに、エルメロイⅡ世は首を傾げた。メイドもまた、真似をするように首を傾げる。

「変なモノだって？ 君の変態性ではなく？」

「うん。情操教育に極めて有害かつ愉快で悪辣な代物を見せたりとか――」

少女は後半をさらっと流した。

「……そんなモノ、コイツに見せてどうするんだ」

「だよね。いや、私は我が兄を信じていたぞ」

少女は安堵した様子で部屋を出て行った。その跡を追おうとした水銀メイドが、つとエ

ルメロイⅡ世の方へと振り返ると先ほどのように親指を立てて、機械的な声で囁いた。

「すぐ戻る」

扉が閉じられた。

……何だったんだ、と首を捻る暇もなく、ノック無しで再び扉が開いた。

「教授！ いやさ絶対領域マジシャン先生！ ちよろつと盗み聞きしたんですけど聖林大戦の様子見するって本当ですか？ 何かスゲー面白そうなことになってるのに！ それとさっきすれ違った水銀メイドさんと映画見る約束してるんで、休みの日教えて下さい！」

飛び込んできた青年の言葉に頭が真っ白になりかけ——青年の顔を認めて即座に状況を理解、納得。そして——深呼吸して穏やかに告げた。

「よしフラット。ご褒美に課題の量を増やしてやろう。二十倍でいいか？ もちろん期限も延ばして、明日の午前十一時までのところを明日の午後一時にする。どうだ、嬉しいか」

「あれ。あのう。教授、怒って、ますか？」

「いいや、全然、全く、これっぽっちも怒っていない。だから——さっさとやれ、このバカモン！」

「うわあん、分かりましたー！」

入ってきたときと同様、嵐のように立ち去っていく青年の姿を目で追いつつ「疲れる」
とエルメロイⅡ世は消息をついた。

「黒」のアサシン——ジャック・ザ・リッパー。殺人鬼に関する情報は、戦闘終了と同時にまでも記憶から消え去っている。恐らく宝具、ないしアサシンの保有するスキルの類だろう、とユグドミレニアの魔術師たちは見当をつけていた。

「駄目元で撮影してみたけど、写ってたな」

そう言ってカウレスが霧に包まれた城塞の画像を全員に見せた。携帯電話とはいえ、それなりに画質が良いカメラを内蔵していたお陰で、くっきりと写っている。どうやら、アサシンの宝具、あるいはスキルは科学の目を誤魔化せる訳ではないらしい。

「霧、ね。ホムンクルスたちの皮膚を溶かし、肺を爛れさせたのもそれかしら」
フィオレの言葉にゴルドが頷いた。

「十九世紀から二十世紀にかけてのロンドンには、産業革命によって深刻な公害が発生していたからな。当時の魔術師たちにとっては、魔術で風を軽く手繰れば解決するものだった
が……」

「これはあくまで概念的なもののだから、魔術師でも無理っぽい。サーヴァントの場合に限り、大したダメージは無いようにだけど」

カウレスがちらりと「黒」のアーチャーに視線を移す。アーチャーは霧の画像を見ると、同意するように頷いた。

「ええ、仰る通り。我々の場合、この霧による弊害は視覚の妨害及び敏捷のランクダウン程度で済むはずです」

アーチャーも、アサシンに関する記憶は失われている。しかし、フィオレを救出したことでだけは記憶として存在する。その際の弊害はそれほど致命的なものではなかった。

「霧と、それに溶け込んだの奇襲……アサシンの能力はこんなところでしょいか」

フィオレの声には隠しきれない不安がある。記憶になくとも、覚えていることが一つある。……「黒」のアサシンは、想像以上の難敵だった。

ただの異常な殺人鬼であれば、そもそも撤退などせぬはずだ。フィオレはアサシンの真名を聞いたとき、バーサーカーのような存在を想定していた。

まるで違う。少なくとも戦術面においては、自身の能力を理解した適切な行動と能力を持っている。アサシンのクラス別スキルである「気配遮断」と、視力を塞いで完全奇襲を行つための霧。

サーヴァントとは決して真っ向から戦わず、マスターのみを狙う。英霊としての誇りは

ない代わりに、どんな卑怯な手でもやってのける。何より、アサシンの根幹となる戦略は長期戦だ。

「アーチャー。あと二日で、アサシンを仕留める策はありますか？」

「困難でしょう。……犠牲を払う、という前提であれば話は別ですが」

アーチャーの表情は苦い。それを聞いたフィオレも同じ表情を浮かべているだろう。それはつまり、アサシンをこの場に残すということ。それがどれほどの犠牲を産み出すかは、想像もできなかった。

「この状況では、ただ一人の犠牲も許されません」

「ええ、分かっています。しかし、アサシンはサーヴァント。厄介なことに『気配遮断』を持っていて、我々は必ず後手に回ります。先手を打てる可能性があるのは、弓兵の私くらいのもですが――」

黒のアーチャーは文字通り千里を見通す眼を持つ。アサシンを先に発見さえすれば、先制攻撃も可能かもしれない。だが、それには一つ問題がある。

「しかし、サーヴァントはサーヴァントを知覚してしまう以上、私の気配に気付けばアサシンは撤退するでしょう。正面切って戦うほど愚かではない」

堂々巡りだ。

先手を打てるのはアーチャーだけ。だがアーチャーは絶対に先手を取れない。

これを打開するには、一つだけ方法がある。

「故に。誰かが囷（くわ）となって攻撃を誘い込む。その上で、サーヴァントたちが悟られない距離を保って包圍し、逃すことなく剪滅（せんめつ）する」

「良い案ではないか？」

ゴルドの言葉に、フィオレが微笑み告げた。

「ではゴルドおじ様、囷になって下さいますか？」

たちまちゴルドは口を濁す。……そう、サーヴァントであるライダーとアーチャー、そしてルーラーは囷としては使えない。となると、囷と成り得るのはマスターである魔術師なのだ。

「私は駄目でしょうね、アーチャーのマスターとして知られているでしょうから」

「あー、私はその、体力的に無理がある気がするな」

ゴルドの視線がカウレスへと移動する。カウレスは溜息をついて、頷いた。

「分かったよ。俺がやる——」

そこで、沈黙を保っていた少年が手を掲げた。

「……待ってくれ。囷というならば、俺がやるのが一番妥当だろう」

ジークの言葉に、周囲がぎよっとする。特にライダーの変化は顕著で、一気に少年へと詰め寄った。

「な、な、な、何言い出してるのさ、マスター！」

両肩を掴み、力任せにジークを前後へ揺さ振る。落ち着け、とライダーの手を掴んで、改めて告げる。

「いや。カウレスが囨を引き受けるよりは、俺の方がまだ安全だと思っただけだ。……この状態の俺は、サーヴァントとしては微弱な存在だ。感づかれることはまずあるまい」

「だ、だけど……！」

「――何より。どうも俺は、アサシンを許せないらしい。多分、あいつのせいでホムンクルスが一人、亡くなっているからだろう」

記憶は失っても、感情は残っている。霧は晴れても、屍体は残っている。ホムンクルスが一人、霧に巻き込まれて亡くなっていた。

「知り合い、だったの？」

「いいや。話したことはおろか、顔を合わせたことすらあるまい。だが、それがどうした。……同種という理由で、憤ってはならないのか」

「……そうは、言わないけど」

ライダーが肩を落とす。説得が不可能、ということとは身に染みて分かっているらしい。ジークは更に続けて、ライダーの不安を払拭させることにした。

「それに。仮に失敗して俺が死んだとしても、ユグドミレニアはマスターとしての権利を未だ有している。すぐにマスター権限を委譲すれば、ライダーが消えることはない。論理的に考えても、やはり俺が囹になる方が妥当だ」

「――」

ライダーの表情が凍り付く。いや、それは他も同様か。誰も彼もが啞然とした様子で、ジークの顔を見つめていた。

「どうした？」

ジークが呼び掛けると同時に、ライダーが彼の頬を叩いた。ばちん、と――サーヴァントにしては、些か軽い音が部屋に響いた。

「え？」

叩かれたジークは訳も分からず、ライダーを見る。ライダーは「バカーッ！」と一声叫ぶと、ベそをかきながら会議室を飛び出していった。

「今のは――俺が悪い、のか？」

「ええと……まあ、そうではないかと……」

「そうですね、些か言葉が過ぎました」

フィオレとアーチャーの言葉に、ジークは自分の何が悪かったのか、深く考え込み始め

る。それを見かねたのか、ルーラーがジークの袖をくいくいと引っ張った。

「ルーラー、やはり……俺が悪いのか？」

「……ジーク君は、他人の気持ちを理解するよう努力すべきですね。後でライダーのところにやって、謝りましょう」

「分かった」

「ルーラー。貴女もライダーと同じく、彼が囹になることには反対ですか？」

「現状では反対です。ジーク君は確かに普通の魔術師よりは戦闘力がありますが、それにしたってサーヴァント相手では不安が残ります」

だが、ジーク以外に適材が居ないこともまた確かだ。多少ではあるが剣術をこなし、尚且つ魔術の腕も持っているとなると、彼以外に人材はいない。

何より。自らが死地に赴くことを望んでいる者は、ジークだけだ。カウレスもやれと言われれば固役でもこなしてみせるだろうが、サーヴァントと相対することが怖くないと言えは嘘になる。

「ルーラー、何か腹案が？」

「ええ。……一つ、案があります。あまりその、良案とは言えないかもしれませんが」
その言葉にジークが身を乗り出す。ルーラーは珍しい表情を浮かべた——悪戯が成功した少女のようにくすりと笑ったのだ。

——そしてルーラーの案は、確かに全員を驚かせるに足るものだった。

SSS

いじけるライダーを捜し出すのは、ルーラーの手を借りれば簡単だった。城塞の半壊した展望台で、ライダーは空を見上げていた。

ジークの気配には気付いていたのだろう。やや膨れっ面でそっぱを向く。

「……何？」

「その、何と言うか——」

しばし迷った末、ジークはライダーの隣に立って告げた。

「悪かった。二度と言わない」

「何を？」

「……君は俺のサーヴァントで、俺は君のマスターだ。それをなおざりにしたつもりはなかった。ただ、安心して欲しかったただけなんだ」

「安心って、何を」

「俺が死んでも、君が跡を追う必要はない。そう言いたかった」

ライダーは眉を吊り上げ、その言葉にあからさまな不満を表明した。

「何言ってるんだ、バカマスター。ボクにとってキミは全てだ。必要はない、じゃなくて跡を追うのが当然なんだ」

マスターとサーヴァントとは、そういう関係だ——「黒」のライダーは、何のてらいもなくそう言ってる。それは絶対的な忠誠であり、同時に少し異なる何かだった。

今更ながらに、ライダーがどれほど「当たり」のサーヴァントだったのかをジークは思いつく。力ではなく、その在り方そのものが尊く……そして、眩しかった。

だからこそ、とジークは思う。自分の無謀な行動によって、ライダーを巻き込みたくはない、と。

「それを嬉しいと言うべきか……いや、そうだな。ライダー、ありがとう。君の言葉は、心に響いた」

そうジークが答えると、ライダーはころりと表情を変えた。ライダーに犬の尾があったならば、千切れるほど強く振っていたに違いない。

「まあ、でも。ボクの命を^{お返し}贈ってくれたことは、正直嬉しいかな。だけど、アサシンの凶役は反対する。アーチャーの作戦だと、ボクたちはアサシンに感づかれない程度まで離

れなきゃいけないだろ？ キミの令呪を消費する訳にはいけないから、令呪による瞬間転移もできない」

「あー……それはだな、」

言いくそうにジークは視線を逸らす。その仕草に嫌な予感がしたのか、ライダーはズいとしに詰め寄った。

「どうしたのかな？」

「ルーラーから、一つ提案があった」

「……ふうん、どんな提案？」

ライダーの目が険しいのは、決して気のせいではあるまい。そう思いつつ、ジークは告げた。

「団役として自分も同行すれば問題ないのでは、と」

「……はい、そういう訳ですライダー」

ジークを案内してから、ずっと待機していたのだろう。ルーラーがひょっこりと展望台に顔を出して、淀みなく会話に参加した。

「ルーラー……どーゆーことカナ？ 君だってサーヴァントだろ？」

「ええ、確かに私はサーヴァントです。けれど私は少々、特異な方法で召喚されました。そのため純粋な霊体ではなく、きちんとした肉体も保持しています」

レティシア、という少女の肉体だ。ルーラーは彼女とほぼ同型である軀を使い、現界を果たしている。代償として、人間としての機構が不完全ながら存在する。

特に食欲と睡眠欲に關してはそれが顕著だ。数十時間眠らず、食事もせずとも耐えられるが、ラインを超えると精神へのダメージとして現れる。

……だが、今回の場合に限ってはそれが功を奏した。

「つまり、霊体であるジャンヌを限りなく抑え込むことでサーヴァントとしての氣配を断とうって訳？」

「はい。そうすれば、危険性は半減します。加えて最初の一撃を防ぐことさえできれば、サーヴァントで挟み撃ちも可能です」

「マスター……？」

「有り難い申し出ではあるが……霊体を抑え込むという部分が不安で、俺は反対している」
確かに問題となるのはそこだ。抑え込む、ということとは、内側にあったレティシアの肉体が、その分表出するということ。

「そうですね。能力的には、普通の人間と変わりありません。奇襲を仕掛けられた際に、どれだけ迅速にサーヴァントに戻るができるかどうか。それが問題です」

「その、レティシアさんが可哀想じゃないかー 反対、反対、はんたーい！」
拳を突き上げるライダーに、ジークも賛同するように頷く。

「ええ。実を言うと、私もあまりよい案だとは思ってません」

ルーラーの困ったような顔に、ライダーとジークは揃って首を傾げた。

「どーゆーコト？」

「前にも言った通り、私にはレティシアとしての意識が滲じっています。……本来、彼女は私を立てて、意識を眠らせていました」

言うなれば、映画を見ている観客のようなものだ。ジャンヌの視点を通して、レティシアはこの世ならざる者たちを観覧していた。

レティシアは鑑賞中に、映画の中身について口を挟むことはない。どう考え、どう思うとそれは胸に秘め続けていた。だがジークが因役になることを告げた途端、不意に内側で口を開いたのだ。

「なら。こういう方法は如何でしょう？」

——と。

「はー……なるほど。で、そのレティシアちゃんは何？」

「いえ、それが提案をした後はもう頑として口を開かず。……まあ、気持ちには分かりますけれど」

「あー……」

納得したように、ライダーがジークに視線を移した。ジークは変わらず、難しい表情で考え込んでいて、二人の視線には気付かない。

「で、結局どうするの？」

「俺は一人でも問題ない」

ジークは素知らぬ顔で、堂々と宣言する。ここまで言うからには、必ず彼は実行する。それは二人にも既に理解できていた。

「ぐぬう、頑固者め。となると、ボクとしては……マスターの意向に賛成するしかないかなあ……」

いかにも不承不承、という感じでライダーは降伏した。

「ならば、やはり私たちもジーク君と行動を共にします。足手まといになるやもしれませんが、よろしくお願いしますね」

ルーラーの言葉は、ジーク以上に有無を言わさぬ雰囲気があった。

出立まで残り二日。今度こそ「黒」のアサシンを仕留めるべく、ユグドミレニアの魔術師とサーヴァントたちは、作戦を開始した。

トゥリファス、旧市街地区の更に奥まった場所。ここは社会的に脱落した者たちが百

人ほど、身を寄せ合って暮らしている。その内の一角、かつて闇医者^{ドクター}が占拠していた場所を、黒のアサシンとそのマスターである六導玲霞は、飯のねぐら^{いぐら}としていた。

ここには魔術師の目も届かない。どれほど零落しようとも、魔術師は魔術師。このよう
な「終わった」場所に関心を向けることはまずない。

古びたベッドは、スプリングが壊れていてぎしぎしとひどく軋む。長年の使用のせいで
劣化も激しく、玲霞は起きる度に体中に痛みがあった。

だが、ホテルを借り受ける訳にもいかない。ルーマニアに到着して以来、魔術師たちは
必死の搜索を続けている。シギシヨアラでも玲霞たちは幾度となく占拠した家を放棄せざ
るを得なかったのだ。

これはサーヴァントのアサシンだけの功績という訳でもない。玲霞は動物的直感に優れ
ているのか、彼女が家から逃げ出すと決まってその直後に魔術師たちの調査があった。

流れ流れて、遂にはこんな場所へと辿り着いてしまった。だが、不満はない。快適さど
いう点ではあらゆる面で劣っているが、ここにはある程度の秩序がある。住み着いている
人間は、誰一人として玲霞のことを密告したりはしない。一部の人間は魔術師の存在を知

っているにも拘わらず——である。

それはこの区画の数少ない法^{ホウ}だった。誰にも言わない、誰にも教えない、誰にも干渉しない。無論、人間である以上間違ひはある。例えば、玲霞たちがやってきてすぐに、チンピラたちが押し入ってきた。

玲霞に何をする気だったかは、語るまでもなく。何をされたかは更に語るまでもない。憐れみを抱いていた住人たちは、一転恐れを抱いた。玲霞は一言彼らに告げた。

「何もしなければ、何もしません」

その言葉を信じるより他ない。玲霞の他にもう一人誰かが存在することを知っても、その誰かが夜出掛けては血の臭いを漂わせて帰ってくることを知っても、彼らは何も言わないことに決めた。

沈黙は敵を作らない。罪悪感を抱くこともない。正義を執行しようなどとは考えもしない。脱落した彼らには、最早何が悪で何が正義かの基準がどつくの前に壊れている。

だから、その一角は今日もまた平穏だった。

六導玲霞はぼんやりと記憶を反芻していた。

自分の半生は、まるであの霧に包まれたように明瞭に思い出せない。多分、どうでもいい人生だったからだろう、と玲霞は思う。

いや、そもそも——自分に「人生」と呼べるものは無かったという気がしてならない。生まれてすぐはそれを認識することもできずに、日々を漫然と過ごしていた。……直線が亡くなり、転がるように己を墮落させていつてからも、まだ認識できなかった。

糧を得るために娼婦となり、挙げ句にどあるホストに殺されかけた。彼は人の命など何とも思っていない魔術師で、自分を誑し込んだのは、ただ生贄として必要な「材料」だったからだ。

自分の生命など、彼は一片たりとも考慮しなかった。ただ儀式における部品としての消耗品。それを自覚して、それを理解して、ようやく——六導玲霞は「生きたい」と願えるようになったのだ。

それからの日々は、ただただ奇跡でしかない。彼女には幾度礼を告げ、抱き締めても足りないほどだ。

心臓が動き、脳が覚醒していればそれで「生きている」と呼ぶべきだろうか？

玲霞は違ふと思っている。心臓を動かしているだけで、足を動かしているだけで、上っ面の言葉を適当に舌から滑り出すだけで生きているはずがない。

生きるということは、情熱を持つということだ。学問に勤しむのも、仕事に勤しむのもいいだろう。誰かを愛することや傷つけることも、そして命を育むことも、生きるという

言葉に相応しい行爲だ。

そこに正義と邪惡の介在する余地はない。善であれ、惡であれ、前提として生きるということは素晴らしい。そうでなければ、人間は生きていけない。

だから、六導玲霞にとって生きていくということは現在だった。人を殺した、罪のある人間が大半だったが、殺さなければならぬほどの罪を犯した者は少なかった。

だが、殺した。聖杯を手に入れるために殺したし、自分の身を守るために殺した。そして、娘であるジャックのために殺した。

人を殺して私は生きている。充実した人生、愉快な毎日、なんて素敵な夢——。

「おかあさん、おかあさん」

揺さぶられて目が覚めた。どうやら、いつの間にか眠っていたらしい。臉を擦ると、少女の姿が明瞭になった。傷ついてはいないが、悄然としているあたり、失敗したようだ。

「あら、ジャック。駄目だったみたいね」

「ん。」めんなさい」

申し訳なさそうに頭を下げる。玲霞はそんな少女をたまらなく愛しく思い、抱き上げる。

「謝らなくていいの。無事で良かった」

そう言っ頭を撫で、背中を優しく叩くとジャックはたちまち元氣を取り戻した。

「うーん、もうちょっだったんだけどなあ」

「……そう。サーヴァントたちが出払っていたのに、粘られた訳ね」

「もう攻められないや。どうしようかなあ。あ、そうだ。念のために、かくにん^{かくにん}してみただけ、やっぱり聖杯は赤い方に取られちゃってた」

「残念ね。……その聖杯はどこにいったの？」

「分かんない、とジャックは首を横に振った。

「やっぱり、あのおっきいのが持って行っちゃったんじゃないかなあ……」

「恐らくそうでしょうね」

ジャックもまた、あの戦場に加わっていた。どちらの味方でもなく、ただその場に居た「犠牲者」を捕食するために。

そして、あの空中に浮かぶ城——『虚榮の空中庭園』^{虚栄の空中庭園}を見た。あれほど馬鹿げた宝具

を扱えるサーヴァントだ。間違いなく、自分を上回る力を持つだろう。

しかし、ここで諦める訳にはいかない。ジャック・ザ・リッパーには夢があったし、マスターである六導玲霞にも望みがある。

叶えるためには、黒も赤も皆殺しにしなければならない。……無論、サーヴァントだけならば、黒の側に組み込まれることも可能だっただろう。魔術師は誇り高き人種だが、同時にひどく計算高くもある。

ただし、その場合彼らにとって絶対に譲れぬ線が一つある。マスターの交換だ。六導玲

霞は素人であり、魔術師ではない。その為に、魔力がほとんど供給されていなかった。従って、相変わらずジャックは「食事」で栄養を補給しなければ生きていけなかった。

魔術師と契約すれば、それは全てクリアとなる。だが、それはつまりおかあさんとの繋がりを断ち切るということ。

ジャックはそもそも、マスターを変更することなど夢にも考えていない。彼女にとって、母親と共に居ることが、全てだ。

それ故に、降伏という選択肢は頭から消えている。これは玲霞の方も同様だ。降伏して、安寧の日々を得ることなど考えもしない。

逆に逃げることもない。二人にとって聖杯を手に入れることが目的であり、人生そのものだから。

「……でも、どうしよっか」

「ねえ、ジャック。こういうときは、相手の気持ちになって考えましょう。そうね、彼らはどうしたいと思っているかしら？」

ジャックはその問い掛けに、腕組みをしてゆらゆらと頭を動かし出す。何かの人形のようで、玲霞はくすりと笑った。

「んー……わたしたちを捕まえる、かな？」

「そうね。でも、聖杯の方が大事だと思わない？」

こくりと、ジャックが頷いた。六導玲霞は魔術師の世界も、聖杯大戦についても碌に知識を持っていない。ジャックが「黒」のアサシンとして与えられた聖杯戦争に関する知識と、魔術師から吐き出させた情報が全てだ。だが、限られた知識であっても論理的に考察するのは難しくない。まして、どれを優先するかは簡単だ。

聖杯は万能の願望機。そして、魔術師は人命を軽視する——で、あるならば。

「持つて行かれた聖杯を奪う方が、大事よね？」

「……でも。だったら、どうしてここにいろの？」

「それは簡単よ。確か……聖杯を奪った『空飛ぶお城』は、空を飛んでいたのよね？」

こくん、とジャックが頷く。あれは、玲霞が寝るときに聞かせてくれた、童話に出てくるお城のようだった。

「空を飛んで、追いつく方法が無いんじゃないかしら。魔術師っていうくらいだから、空を飛べるのかもしれないけど——多分、準備期間が必要なのよ」

玲霞の推測は、多少の誤りはあってもほぼ正鵠を射ていた。ユグドミレニアに与えられた時間は、あと二日だ。それを過ぎればチャーターした飛行機が空港に届く。聖杯を優先させる以上、その時点でアサシンの討伐は失敗だ。

「じゃあ、その間についてだからわたしたちをやつつけちゃおう……みたいな？」

「そうそう、その通り」

ふう、とジャックが膨れっ面になった。ついで、というあたりにさすがの少女もプライドがいたく傷つけられたらしい。玲霞が頭を撫でると、たちまち機嫌を直した。

「まあ、つまりはええと……短期決戦が望みなものよ」

たんきけっせん、とあどけない口調で繰り返す。玲霞は思考する——こういうとき、彼女の視点は俯瞰する。養父母からの虐待や姉妹として暮らしていた毎日がそうさせたのか、彼女は徹底的に客観的な視点が思考に刻まれていた。

短期決戦はつまり、今向こうに居るサーヴァントで一気呵成に攻め落とすことを狙っているということだ。アサシンに逃げる暇も与えないほどに苛烈な勢いで。

では、それを防ぐためにはどうする？

長期戦に持ち込む——これは上手くない。いずれあちら側の態勢は立て直される。あるいは、自分たちを放置したまま聖杯が願いを叶えるかもしれない。ジャックは、玲霞は、聖杯を欲しているのだ。

仮に向こうが短期決戦を望んだとして、さてどう動くだろう。考えられるものとしては例えばローラー作戦、このねぐらを発見するまで街を洗いざらい調べ尽くす……時間が足りないというのに、それはあまりに悠長な策だ。可能性は低い。

サーヴァントの力、あるいは魔術師の力を使って発見する……有り得ない。そんなものがあれば、どうに発見されている。仮にそんな力があつたとしても、何らかのデメリット

があるので使用するのを迷っているのだろう。やはり、こちらの可能性は低い。

となると、残るは――。

「おかあさん？」

黙り込んだ玲霞の胸元に、ジャックが飛び込んだ。彼女は苦笑して、ジャックの頭を撫でる。ジャックは抱きつきながら、囁いた。

「ねえねえ。ピアノ、もういつべん聴いてみたい」

「あら、困ったわねえ」

残念なことに、この家にピアノはない。とはいえ、音を出せない訳ではない。

「うーん……歌で我慢してくれる？」

こくん、とジャックが首を縦に振る。ラ、ラ、ラ、と玲霞がトロイメライを歌い出す。

夜闇にか細く、切々と声が響く。妖女のように妖美で、母親のように温かで。

そうして、玲霞の頭に不意に天啓が疾走った。

「――ねえ、ジャック」

「うん、なあに？」

「この衝を、あなたの霧で包んじやいませうか」

そう、六導玲霞は囁いた。女は決して邪悪という訳ではない。誰かを殺したくて仕方がない訳でもなく、残虐な行為を楽しむなどとは思っていない。

ただ、必要なのだ。必要なのだから、そうするだけ。それは魔術師とて同じことだが、社会からの隠蔽を常に考慮する彼らと違い、六導玲霞は全く躊躇しない。

たまらなく欲しいものがあり、手に入れるためには躊躇しない。強欲にして酷薄、傲岸にも願いを叶えるためなら、どんなこともやってのける。

ある意味で六導玲霞はまさに人間らしく、聖杯大戦に勝利しようとしていた――。

——そうして、一夜が明けた。

昨晚より、ルーラーもミレニア城塞に逗留している。下宿先への挨拶は済ませており、問題ないと告げた。

令呪を消費しなかったせいだろうか、ジークはあの夢を見ることなく普通に目覚めた。暖を聞く——慈愛の笑みを浮かべた聖女が、ベッドのすぐ傍で立っていた。

「おはようございます、ジーク君」

「……いつ部屋に？」

恐る恐る尋ねる。

「三十分ほど前からですね。その顔を見るに、よく眠れたようで何よりです」

まあ、快適な睡眠だったことは間違いない。ただ、起床するなり人が立っているというのは些か心臓に悪いとジークは思う。

「この程度なら、貴方の心臓は全然大丈夫ですよ」

「……そういう問題でもない、とジークは思う。」

「ところで……やはり昨日と同じく、ですか？」

ルーラーは有無を言わさずというように、シートをひっぺがした。案の定、ライダーが足に絡んで眠っていた。すやすやと穏やかな囁息を立てる様は、とてもサーヴァントとは思えない。

「ふふふ。サーヴァントの気配は明瞭だろうにこのだらしなさ。はてさて大人物なのか暢氣者なのか……」

「暢氣者に決まっているだろう」

ジークは断言した。

「ひどいぞう。ボクはちゃんと気配を察知して起きてるもんね。ただ単に面倒だから寝てるだけで」

にゅうつ、とライダーの腕が伸ばされる。喉はばかりと開かれ、こきりと首が鳴った。

「二十四時間、マスターのために働えるのが正しいサーヴァントの在り方ですよ。どうかそもそも、サーヴァントは眠らなくていいんです」

「君だって寝てるクセに……。マスターに聞いたぞー、出会った瞬間寝倒したって」

「あ、あれは身体的に限界だったんですっ！ ギリギリだったんですっ！ それに寝たんじゃなくて、栄養不足で倒れただけですから！」

「うん、尚更タチ悪いよね。ソレ」

「……自分でもその自覚はあります」

赤面して咳払い。

しばしの沈黙の後、くああとジークは呑気に欠伸した。良く晴れ渡った空が、狭い窓からでも覗えた。

今日は一日中良い天気になるだろう——ただ、夕暮れからはそうとは限らない。もしかすると、霧が出るかもしれない。

出て欲しい、とジークは思う。ジークは、黒のアサシンを覚えていない。どんな姿をしていたのか、どんな武器を持っていたのか、何もかも忘れている。

ただ——覚えていることが一つある。

目の前で奪れた命があった。一人のホムンクルスが死んだ。その死には全くもって何の意味もなく、意義もなく、理由もない。ただそこにいただけで、彼女は死んだ。

煮えたぎる、黒々とした熱情——多分、これが「憎悪」と呼ばれるものだ。対象の全存在を拒絶しようとするほどの激情と、対象の不幸と絶望を心より歓喜する昏い愉悅。

「どうしました、ジーク君？」

「いや、……何でもない」

もしも「黒」のアサシンと相対したその時は、この身にセイバーを宿そう。ジークはそう、心に決めた。

ただし、ジークにも分かっていないことがある。「黒」のアサシンもまた、その身にわずかな傷をつけたジークを許さぬと考えている。そして、アサシンのマスターは魔術師ではないにせよ——倫理観というものに欠けていて、常識を知りながらそれを平気で踏みこむ一種の怪物なのだ、と。

朝食は効率を考えて、ホムンクルスたちと共に取ることにした。城塞には広々としたホムンクルス用の食堂があったが、先の大戦で大幅に数を減らした今は何とも閑散としている。かつては賑やかだったろうな、と思ったが考えてみるとホムンクルスがこの場で喋るはずもない。恐らく、ひしめき合っているにも拘わらずさわめき一つとてない異様な光景が広がっていたのだろう。

ジークの隣にライダーが座り、真向かいにはルーラーが座った。

「ライダーも食べるのか？」

「うん。魔力補給、魔力補給♪」

鼻歌交じりに、料理スキルに特化したホムンクルスたちが作った料理を口に運び、幸せそうな表情でポタージュスープに浸されたパンを咀嚼する。そしてああ美味しい、と呟きながら頬を緩ませていた。

……多分、娯楽という意味で食事がしたいだけだろうとジークは思った。

そして真向かいに座ったルーラーも、負けず劣らずという勢いで食事を平らげる。

「今日はしっかりと栄養を取っておかないといけませんから」

……多分、普通にお腹が空いているだけだろうとジークは思った。

「ジーク君もしっかりと食べて下さい」

「分かっている」

もそもそと、味のない、ない、食事を消化する。ジークの味覚は常人と比較すると限りなく薄い。

味の濃い薄いは当然のこと、接着剤とクリームとの区別すら自信がない。

別に事故があった訳ではなく、生まれ付いてのものだ。まあ、魔力を供給するだけのホムンクルスには、本来味覚など不要だったということだろう。

だから、ジークは食事そのものに興味はない。

「おかわり！」

「……言いたくはないのだが、お前サーヴァントだろう」

おかわりをよそいながら、給仕役のホムンクルスが指摘した。

「だって美味しいんだもの。美味しいものはおかわりするでしょ？」

「食事は必要な者が摂取すべきです。という訳で、私もおかわりいただけるでしょうか？」

「……お前もサーヴァントではないのか」

「私は諸事情あって食事が必要不可欠なのです。それにしても、このポトフは美味しい」

「それはアイントプフであって、ポトフではないぞ」

「……え？ いや、あの、これはポトフ……ですよね？」

「アイントプフだ、絶対に」

「ポトフ以外にこれは有り得ません」

「アイントプフだ」

「ポトフです」

これはポトフだ、と言い張るジャンヌとあくまでアイントプフを主張するホムンクルス。ひたすらおかわりを要求し、とうとう二人が言い争っている間にこっそりとおかわりをよそい始めたライダー。

やがて騒ぎを聞きつけたホムンクルスたちによって、アイントプフ派が主流となった。

——実際の話、ポトフもアイントプフも料理法も中身もほぼ変わらぬ、単に同じ料理がどちらの国でも広まって、それぞれの国の言葉に即したのになっただけだ。

「ポトフなのに……」

「アイントプフだ」「アイントプフだぞ」「アイントプフ以外の何だというのか」「そもそも作った人間がアイントプフと言っている」「何だっていいや、美味しいし。あむあむ」「おい、寸胴鍋を空にした奴は誰だ……？」

喧嘩は耳に響き、団欒というにはほど違い。そしてやはり、ジークの食事に味はない。

ああ、だけど——きっと、この食事は美味しい。ジークは不思議とそう確信していた。

SCENE

騒がしかった朝食も終わると、ルーラーがジークに告げた。

「さて。それでは出発の準備を整えましょう」

「……出発？ どこへだ？」

ジークの言葉にルーラーがむっとした表情を浮かべた。

「昨日の提案を忘れたんですか？」

「いや、もちろん覚えていますが。まだ昼前だぞ？」

アサシンが出現するのは、ほぼ間違いなく夕暮れから深夜にかけてだ。いくら何でも昼間から捜し歩いて見つかるような存在ではない。

「夕暮れまでに、ジーク君に街の全体像を見ておいて欲しいのです。いざというとき、道に迷うようでは困りますから。街に出たこと、ないでしょう？」

ルーラーの言葉に極小の過去を振り返る。確かに、街に出たことは一度も無かった。こ

の城塞で生まれ、魔力供給槽で人生のほとんどを過ごし——数日前に、ようやく外に出たくらいだ。

「分かった。案内をお願いする」

「ず——る——い——！　ボ——ク——も——い——く——！」

両足をじたばたさせて、ライダーが抗議する。

「……サーヴファントがついてきたら、台無しになってしまうのですがこの計画」

「うううう……マスター、今度ボクとも一緒に行く？」

黒^{ダーク}のライダーは涙目でマスターであるジークににじり寄る。

「いや、俺なんかと行っても退屈だと思う。もっと楽しいような人材を選ぶべきだ」

「ルーラー、マスターだけどここは殴る一択だよな？」

「……そうですね。今のはナシです」

ライダーがふて腐れきった表情で、ジークの脳天に手刀を叩きつけた。多少の理不尽さを感じないでもなかったが、ルーラーとライダーの意見が一致している場合、ジークに勝利の可能性など無いのだ。

城塞の正門前で待つように指示されたジークは、眼下に広がる街を改めて見る。人口二万程度の小さな街——だが、二万という人数自体がジークの想像を超えていた。

異なる人間が二万人集合し、このトゥリファスという街を形成している。更にこれ以上の人数が集合してルーマニアという一国家を形成し、東欧を形成し、ヨーロッパを形成し、この地球の「人類」を形成している。

その数六十億。善であり、悪であり、あるいは何者でもない誰かの群れ。

——膨大過ぎて、想像もつかない。

恐らくほとんどの人間は生涯、この内の九割にすら出会うことはあるまい。自分もそう。自分が一生で出会う人間など、きつと一千人にも満たない。

「世界」という言葉が、この世には存在する。それを人間たちが紡いだ壮大な織物であるとするならば、人間に見ることができるのは自分と周囲の人間が織った部分だけで、もしかすると誰一人——世界を見たことなど無いのではないか。

「……ふむ」

興味深い疑問だった。自分が知る中で、そういう概念についてもっとも詳しいのは——。

「お待たせしました、ジーク君」

振り返る。ルーラーは街を散策するためにわざわざ私服に着替えていた。

「では行きましょう。何、時間的にはまだまだ余裕がありますから！」

「分かった。では、案内をお願いする」

「はい！」

ぐい、と腕を引っ張られる。ジークは抵抗することなく、ルーラーについていく。張り切って先に行くルーラーに呼び掛けた。

「なあ、ルーラー。歩きながらでいいから、少し疑問を教えて欲しい」

「ええ、何でもしょう」

ルーラーが首を傾げる。ジークは先ほど自分が感じたことを一通り説明した後、尋ねた。

「――世界とは、何なのだろう」

「……根源的な疑問ですね」

どこか楽しそうにルーラーは笑う。それから、繋いだ手の指を絡ませてジークと向かい合った。

「誰もが世界を識ってはいます。知識として習得し、現実として受け入れています。でも、不思議なことに――世界そのものは、誰も見たことがない。ただ、自分と自分の周囲を世界として受け入れているだけ。国を支配する王とて似たようなものです」

「だけど、それはおかしい」

「いいえ、おかしくありません。……人間とは、個々人が内包する世界と外側に広がる世界に日々折り合いをつけながら生きている生物です。人は孤独であると同時に、世界

の誰にも繋がっている。だからこそ他者の悲劇に人は心を痛め、憤ることができるのです。

そしてもちろん、折り合いをつけられない人間たちもいます。内包する世界を絶対と信じて、外側の世界を拒絶する者もいれば——改変を試みる者もいるでしょう」

「それは、邪悪な行為か？」

「どうでしょうね。……異端ではあるかもしれませんが、悪ではない。少なくとも私はそう信じた。世界を変えたいと願うのは万人の欲求であり、それがよりよい方向に結びつくならば、世界はその形を変えてくれる」

「世界とは目に見えず、触れることもできず、決まった形さえない。……そういうコトなのか？」

「ええ。そして、それでも——確かに、在る、ものです」

世界はある。確かに、この世に存在するものだ。個々人が個々人で完結しているならば、争いなど起きはしない。そして代わりに、触れ合うこともないに違いない。

「つまり、例えば恒久的平和は不可能だということか？」

「今のところは。でも……いつか誰かがそれを考えつくかもしれません。それが素晴らしいものであれば、誰もがその理想に追隨するでしょう」

「……悲しい、話だな」

「いいえ。もし、世界というものが存在しないというのであれば、つまり、この惑星は

六十億個々人がた、だ、在、る、だ、け、ということになります。私は、その方が余程悲しい」

何とも複雑な表情を浮かべて、ルーラーはそう呟いた。個々人が個々人で完結していることが、どうして悲劇なのかジークには分からない。

ただ——それをいつか理解する日が来るといい、と少年は思った。

トゥリファスは小さな街である。とはいえ、数時間で回りきれほど小さくもない。必然、要となる場所を慌てて回るといふ……少女が想定していたものとは些が異なる風景の街巡りとなった。

「城壁の出入口は五ヶ所ありますが、内一ヶ所は崩落のために修繕工事中です。ここはその出入口の最北端であり、ここから上に上っても城壁は途切れませんから注意して下さい」

城壁はトゥリファスを二つに分断している。旧市街地区と新市街地区であるが、城壁は半円を描いているため、入口を複数ヶ所設けている。オスマントルコを防ぐためとはいえ、相当に高い城壁は、若者の蛮勇を掻き立てるのか、無謀極まる者が時折屋根伝いに城壁に登っていた——たまに、死者が出たがそれでも彼らは懲りなかった。

ともあれ歴史的にもそれなりに貴重であり、見応えもあるがジークにそんな感慨は無い。

「よし、次に行こう」

「は、はい」

検分を済ませると、ジークはさっさと歩き出した。手にはトッリファスの市街地図。小まめに書かれたメモで、地図は真っ黒になっていた。ルーラーが慌てて追いつくと、袖をくいくいと引いた。

「あ、あろう」

「何だ？」

ルーラーはやや決まり悪そうな笑みを浮かべ、右手にあったコーヒーショップを指差した。古い石造りの建物を無理矢理改造したものらしく、石壁を破壊して強引に大きなガラス窓が嵌め込んである。

喫茶店というよりは酒場、と呼んだ方がしっくり来る外見だ。だが建物の看板にはコーヒー、という名に加えてお酒は出していないという旨の注意書きが記されていた。

窓の外側には、少しばかり狭苦しい感じを受けるオープンテラスの席が幾つかある。

「お世話になっていたシスターから聞いたのですが、あのお店のコーヒー、美味しいみたいです。拘りの味なんですか？」

なるほど、と頷く。ルーラーはニコニコと笑っている。

「……では、次に行こう」

かくり、とルーラーの肩が落ちた。落胆しているらしいが、ジークには理由が不明だ。

「どうした？」

「ジーク——君。よろしければ、あの店でコーヒーを飲みませんか？　その、そろそろお昼も過ぎちゃいますし」

いつの間にかそんな時間帯になっていたらしい。ジークはさして空腹でもなかったが、ルーラーが健康家なのはよく知っている。また以前のようになくても困るし、ここは付き合うべきだろう。

「そ、そういう意味合いじゃないのに……」

だが何故かルーラーは憤^い気^きでいた。どういう意味合いなのか、ジークには分からない。

「お腹は減ってないのか？」

「あ、いや。それは減ってますけど！」

なら、何も問題はないとジークは考えた。夕暮れまでの時間と、これまで巡回した場所を計算しても、トゥリファスを把握するには充分だ。

「なら、食事しましょう」

「はい！」

店でコーヒーとサンドイッチを注文してから、二人はオーブンテラスの席を選んだ。連日の緊張状態で夜は人氣が完全に途絶えるといっても、さすがに昼間の内はまだ行き交う人々は多い。

天気も良く、オープンテラスの席も混み合っている。とはいえ席にはまだ余裕があり、二人はバラソルの下で寛いだ気分です。二人はコーヒーを待った。

「お待ちせしました」

ウェ이터が恭しく頭を下げて「コーヒーとサンドイッチを差し出す。」

ジークは「コーヒーを飲んだことがなく、ルーラーと同じ注文をした。黒曜石のような深い輝きを持つ液体を、ジークは興味深げに見つめている。一方の彼女は手慣れたようにクリームと砂糖をたっぷり入れた。」

「クリームと砂糖は入れないんですか？」

「クリームは味がしないし、砂糖の味は知っている」

些細な好奇心もあり、ジークは純粹なコーヒーの味を確かめようとそのままカップに口をつけた。ルーラーが目を丸くして、それを見つめている。

「ごくり、と嚥下した途端にジークの表情が崩れた。」

「……何だ、この味は」

そのコメントとジークに相応しからぬ表情に、ルーラーは大笑いした。そしてその笑いに、ジークはふて腐れたようにそっぽを向く——たちまち少女が謝り出す。

「ごめんなさい、つい——」

「味からして、この表情と感想は妥当だと思う」

ややムキになって、抗弁するジークに、ルーラーは笑みを堪えつつ少年のカップに砂糖とクリームを多めに注いだ。

艶やかな黒色だったコーヒーが、たちまち茶褐色へと変化する。

「どうぞ」

泥土のようだ、とジークは思ったが口に出さなかった。やや淡い表情を浮かべつつも、ルーラーの視線に根負けして再びカップに口をつける。

途端、表情が変化した。乏しい味覚でも分かる、鮮烈な甘さとそれに入り交じった微かな苦みを感じられた。

「美味しいでしょう？」

驚きの顔のまま、ジークは首を縦に振った。なるほど、とコーヒーという飲料がこうも世界中で愛飲されている、という知識について深く納得する。

「安心しました」

ルーラーの顔が綻んだ。ジークはやはり見慣れない表情にやや戸惑う。ジークが自分の顔を眺めていることに気付いたのか、少女は照れ臭そうに顔を向いた。

「――平和ですよね」

「……まあ、そうだろうな」

子供たちが走っている。特に目的地がある訳ではないらしく、ぐるぐると店の周りを回

り続けている。その集団で一際幼い少女が、前を行く子供たちに追いつこうと必死で走っていたが、つんのめって転んでしまった。

ルーラーが立ち上がりかけるが、すぐに座り直した。慌てふためいた子供たちが少女を救うべく駆け戻ってきた。泣きじゃくる少女を立ち上がらせて傷口を診てやり、擦り傷だと分かるとそれを伝えた。

少女はころりと泣き止んだ、それを見た子供たちは苦笑しつつ少女を肩に担いだ。もう一人が背後からそれを支えて、再び走り出す。

「――変わらないですね、いつの世も」

ルーラーは懐かしさと愛おしさを重ね合わせた表情で、その牧歌的な光景を眺めていた。

「……貴女もああいう時代があったと？」

「ええ。何しろ、上に三人居ましたから。農作業で働きながら遊んでいたのも同然です。泥まみれになりながら、走り続けていました」

聖女ジャンヌ・ダルクとしての過去ではなく、ドンレミ村のありふれた娘だった過去を、ルーラーは懐かしそうに呟いた。

「ホムンクルスに幼年期はないので、貴女の幼い頃は想像しにくいな」

厳密に言うど、幼年期がないというよりは成長しないという方が正しい。……ジークは例外中の例外とはいえ、ここから歳を取るかどうかは怪しいものだ。もっとも、自分たち

を鑄造する技術の大本となった鍊金術の大家アインツベルンであれば、ある程度人間に近いホムンクルスも生み出せるかもしれない。

恐らくは酷く歪な生命体となるだろうが――。

「幼年期はなくても、君は確実に成長していると思います」

不意にルーラーが咳く。穏やかな声は、包み込むような温もりがあった。

「そう、だろうか？」

ジークにその自覚はない。自分はその魔力供給槽から抜け出た頃から何も変わらないように思える。……確かに、強くはなった。だが、それは、黒のセイバーから与えられた心臓が稼働しているためであり、授けられた令呪の力のせいだろう。

「いいえ、成長しています。ジーク君は、確かに強くなっている」

手を握り締められ、真っ直ぐに見つめられる。その瞳は真摯な輝きを帯びていた。

「それは肉体的なことだけではありません。君は精神的にも成長しつつある。……だからこそ、私は君に生き残って欲しいと思います」

「何故だ？」

「ジーク君は、自由だから。この戦いが終われば、魔術師として大成することができないかもしれない。どこにでもいる、ありふれた存在として世界に埋没するかもしれない。世界を救うかもしれない。世界を滅ぼそうとするかもしれない。善を為すかもしれない、悪を

為すかもしれない。あらゆる可能性が考えられて、あらゆる道が拓けている」

「……ああ、俺もそう思う。選択肢は目眩がするほど多い」

「悩んでもいいでしょう、立ち止まったって構わない。振り返ることだってできる。要は戻ろうとしなければ良いのです。私はこの聖杯大戦が終われば『座』へと還る身。それは、『黒』のライダーも同様です。そう、聖杯戦争で最終的に残るのはただ願いのみ。だから、救えた貴方が私たちにはとても愛しい」

——歪な生命、歪な精神、それでも生き足掻こうとする無垢な魂。

——ライダーは純粹な祈りによってそれを救い、ルーラーはその強靱な意志を見て行動を共にしようと思った。

——そして、二騎は夢を見る。この聖杯大戦が終わったとき、己の『世界』を確立させたホームンクルスが旅に出る様を。

「……ありがとう」

曖昧に微笑み、手を握り返す。ルーラーと『黒』のライダーが与えてくれた情には、ただただ感謝の気持しかない。

だが生きていて欲しい、と願われているにも拘わらず、ジークの頭には常に死の幻想が

あった。己の宿命として、死が待っているのではないか。

黒い令呪を見る度に、ジークの脳裏にそんな想いが浮かび上がる。鮮やかで、強烈で、強固なそれを努めて無視をする。自分はいつか死ぬとしても、それまでに成し遂げられることを成し遂げなければ――。

「と、ところで。一つ、お伺いしたいことがあるのですが……」

やや上振った声でそう言うど、ルーラーはコホンと咳払いを一つ。やや気まづげに目を逸らしているところから察するに、何か尋ねにくいことがあるらしい。

「何だろうか……？」

「いえ、まあ。あまりに突拍子もないことをお伺いするようで恐縮なのですが――」

そこまで言うど、彼女は押し黙った。何を尋ねたいかが不明でジークも反応できず、無言で彼女を眺める。

しばらくすると、顕念したように彼女は問うた。

「――あの。ライダーさんのことなのですが」

「……む？」

ライダーさん、とは当然「黒」の側であるアストルフォ。ジークのサーヴァントのことだろう。

「どうかしたのか？」

「いやその。前々から少し気になっていたのです。ジークさん、はライダーさんのことがお好きなんですか？」

「それはそうだろう。ライダーはサーヴァントであり、命の恩人だ。返せないほどの借りがある。命を躊躇いなく預けてもいい、と思える人間は然う然ういない」

ジークがキツバリと口にする、彼女はどこか曖昧な表情を浮かべた。

「あ、む。いえ、そういうことではあるような……ないような、なんですけど。ええと、人間的な面ではどうでしょう？ ライダーさんについて、どう思います？」

「人間的……か」

ジークは「黒」のライダーについて、改めて考える。

「そうだな……まず、快活ではあるな。傍に居るだけで、人を明るくさせるといふのは何より得難い才能だと思う。何よりその在り方が美しい。あの美しさは……そうだな、純粹さ故だと思う」

良くも悪くも、ライダーの在り方は子供のようには純粹だ。好意には好意で返す、悪意はその一切を受け流す。一旦目的が定まればただ真っ直ぐそちらへと向かう。大切なのは、それがライダーにとって「善い」かどうか。

……それは、一步間違えれば酷く危うい生き方だ。ライダーが悪を「善し」とすれば、どれほどの邪悪な行為も躊躇いなくやってのけるだろう。

「けれど。ライダーは決してそうはならない」

「ええと。どうして、そう思うのですか？」

「悪を為すとかそういう発想が、根本から欠けているからだ。ライダーに悪事を為させようというのは、例えは——」

ジークはまだ半分ほど残っている自身のコーヒーカップを指差した。

「このコーヒーカップを食べ物だと認識させようとするのと同じことだ。ライダーにとって悪とは倒すものであり、是止しなければならぬものだ。自分が悪を為すということは、最初から頭に入ってすらいらない」

奇跡的な存在だと、ジークは思う。だからこそ、ライダーは素晴らしいサーヴァントだと思ふし、一人の人間としても尊敬に値する人物だ。

……まあ、無謀と無茶を掛け合わせたような存在であることは否定しないが。

「で、では。女性としては如何でしょうか……？」

おずおずと告げたルーラーの言葉に、ジークもさすがに凍り付いた。

「……じよ、女性としては、か」

ルーラーはもじもじと、何とも決まり悪そうな表情を浮かべている。

「は、はい。あの、ジーク君には難しいかもしれないので無理には申しませんが……」
難しいことを聞いて掛けてきたな、とジークは思いつつ答えた。まあ確かにライダーはそ

の姿形からも、明らかに女性的である。

「女性として、というならば。まあ魅力的……ではない、だろうか？」

よく分らない。人間としては間違ひなく魅力的だと、ジークは確信しているが。

ルーラーは困ったような、悲しむような、何とも言い難い表情を浮かべ……しばらくして、意を決したように前のめりになった。

「そ、それではですね。私は、いえこの場合の私というのはルーラーとしての私ではなく……た、例えばですね。例えばなんですけど。ジャンヌ・ダルクという人間がここに普通に存在したとして。その彼女は、魅力的、だったり、するのでしょうか？」

言葉は切れ切れで、少女の表情は羞恥のせいで真っ赤に染まっている。

「……言うまでもないと思うが。俺はホムンクルスで、人間的な情緒にはかなり疎い方だと自覚している」

「は、はい」

「そんな俺が、貴女を魅力的かどうかを云々するのは失礼かもしれない。それでもいいなら、考えて回答したいと思う」

「……もちろんです」

ジークは真剣に、ルーラーの問い掛けに考え始めた。ルーラーとしての彼女は、勇敢な少女であり、誠実なサーヴァントであることは疑いようもない。

ただ、今回に限ってはそれはひとまず置いておく。ジャンヌ・ダルクの駆け抜けた人生も置いておく。重要なのはルーラーではなく、今ここに居るジャンヌ・ダルクという少女の存在だ。

月下の出会いを思い出す。

「良かった……会えました！」

少女はそう言って喜び、笑ってくれた。悔いは無い、とあの瞬間思った。それほどまでに、彼女の笑顔に心を奪われた。

今の彼女は真剣な表情でジークを見つめている。笑ってはいないけれど、だからといって魅力が損なわれてはいない。真剣な顔も、微笑みも、祈るときの顔も。全て美しかった。

ただ、とジークは更に考える。外見の美しさと、魅力的かどうかというのは実のところ然程因果関係がないのではないかと。

あの笑顔に心を奪われたのは、自分の無事に喜んでくれたからだ。祈るときの顔が魅力的だったのは、宝具であった巨人にすら手向ける情懷からだ。それは彼女にとって、極々自然で当たり前のこと。

……そう。あの祈りを見た瞬間、理解した。私心の一切を捨てた祈りは、どうしようも

なく美しいものなのだ。

そしてそれを何の障害もなく行える人間は、素晴らしい存在なのだ。

「……俺は、貴女の祈りを美しいと思った。貴女の微笑みを美しいと思った。魅力、という言葉が心を奪われる様を意味するならば、間違いないジャンヌは魅力的だと思う」

上手く説明できただろうか、とジークはルーラーを見る。

「……」

ルーラーは無言だった。少し驚いたような表情のまま、凝固している。が、やがて見る見る内に顔を真っ赤にすると、頬に両手を当ててぶるぶると頭を振った。

「ひゃああああああ……」

何かヘンな声が漏れている。多分、照れているのだろう。

ジークは内心で首を傾げた。そ、そ、わ、ない、と。

何とはなしの直感である。ジークはここ数日、ルーラーと共に戦い抜いてきた。その経験のせいだろうか。今の表情は彼女に似つかわしくなかったのだ。

……別に、ルーラーが冷たい氷のような少女という訳でもない。烈しい猛女という訳でもない。笑い、悲しみ、怒り、何事にも生真面目に向かい合う。ありきたり、という程ではないにせよ、聖女というには親しみやすすぎる少女だった。

だから先の表情も決して不思議ではないのだが——。どこか、食い違うような気がして



ならなかった。しかしジークは他者の感情に疎い。少なくとも当の本人はそう思っている。気のせいだろう、と疑念をあつさりと片付けた。

もっとも、そういう違和感を抜きにすると……照れるルーラーもまた違った魅力がある、とジークは思った。それを言えばまず間違いないく更にルーラーが照れるだろうことは、明白だったので彼は沈黙を選択した。

「さ、さあサンドイッチを食べましょう！ えへへ、美味しそうですね」

ルーラーははにかむ口元を隠すように、サンドイッチを手を取った。

「うん、食べよう」

二人はベーコンが挟まったサンドイッチに大きな口を開けてかぶりついた。塩っ気のあるベーコンが、パンによく合っていた。

ルーラーたちの隣に、親娘が座った。地元の人間らしく、娘の方は嬌々としてメニューを開いている。パフェを頼んでいたが生憎とメニューにないらしく、悄然とした表情でコーヒージェリーを頼んでいた。

だが、コーヒージェリーになつぷりとかかったクリームを見た途端に少女の機嫌が直った。猛烈な勢いで食べ始めた少女の頬についたクリームを、母親が優しく拭き取っている。何とも微笑ましい光景に、いつしか二人の顔も緩んでいた。

「子供はいいですね……」

ルーラーがぼつりと呟いた。ふむ、とジークは同意するように頷き、ふと脇裏に湧いた疑問が気になり、尋ねることにした。

「そう言えば、ルーラー」

「はい、何でしょう？」

笑い合う母娘を見ながら、穏やかな声でルーラーが応じる。

「——いや、ふと思ったのだが。君は妊娠したりするのか？」

タイムング良く、ルーラーはサンドイッチを食べ終えて食後のコーヒーを啜っていたところだったため、質問の意図を理解した瞬間に彼女はコーヒーを勢いよく噴き出した。

「な、な、な、な、な、な、な、な、な、な、何を言い出すんですかいきなり？」

「……いや、何となく」

「こ、子供っ！ 子供って！ 子供って！ こ、子供は天からの授かり物ですし聖杯戦争中にそんなことを考えるなんて破廉恥極まりないと申しますかそもそも相手が……………って違う！ ああああもう落ち着け私！」

立ち上がったルーラーはしばし両手をぶんぶんと振り回していたが、やがて頬をパチパチと叩き始めた。

「うん、落ち着け。痛そうだし」

ぜえぜえと荒い呼吸を繰り返すルーラーを宥める。とりあえず、周囲の人間が思いつき

り奇異の視線で見つめているので、それを何とかして欲しいとジークは思う。

「ええと、いや。そうですね、ジーク君は純粋に疑問を抱いただけですよ。うん、そうそう。分かってます、ルーラー分かってます」

コホン、と咳払いして顔を真っ赤にしながらルーラーは椅子に座り直す。

「ええと、多分……に、妊娠は無理ではないか……と、思います。そもそもサーヴァントは霊体ですし、受肉したならばともかくとして、實^{ホウ}たる身では生命を紡ぎ上げる奇跡など起こしようがありません」

それは男であれ女であれ同じことだ。どれほど人間の形に近くとも、サーヴァントと人間では絶望的なまでの隔たりがある。子を為すことなど、不可能だ。

なるほどもっともだ、とジークは頷きつつもたちまち別の疑問が生じた。

「しかし、受肉したならば……話は別になるのか？」

「ええ、肉を持って現世に存在するならば、当然、子を為すことも可能……ではないかな、と……その、これまで前例がありませんが……」

「いや待てよ。ルーラー、君は遺依という形でこの現世に存在するのだから妊娠するのは可能なのではないか？」

「ひゃい？」

ルーラーはジークの言葉に首を傾げかけ——その意味を理解して、硬直した。

「あ、あ、あ、その。それは、あれ？ えっと……あれ？ この場合は……」

少女はしばし思考の海に沈み、あらゆる可能性を検討。然る後に結論した。

頬を真っ赤にして、俯いたままに答えを返す。

「……する、みたいです」

「そうか……」

疑問が解消したジークは満足げにコーヒーを飲んだ。それを見ながら、ルーラーは気配をずかしそうに目を伏せて、ぼつりと呟いた。

「あの……まさか……ジーク君は、私を妊娠させたいんですか……？」

今度はジークが勢い良くコーヒーを噴き出す番だった。

5/5/5/5

昼食を終えると、再びジークたちはトゥリファスの散策に向かうことにした。

「……アサシンは、確かにこの街のどこかにいます」

「どこにいますかまでは、分からない？」

「はい。……私のサーヴァントに対する知覚能力は十キロ四方に及びます。ですが、サーヴァントクラスの中でもアサシンは図抜けて気配の遮断に長けています。そのせいで、存在することは分かってても、具体的にどの座標にいるかまでは掴めないのです」

「大丈夫か？ 狙われる可能性が高いと思うのだが――」

「さすがに狙われる距離まで来れば気付けます」

「そうか、良かった。……お腹も空いてないし、大丈夫だな」

ジークがそう言うと、ルーラーは顔を赤くした。今度は照れではなく、怒りらしい。

「ジ、ジーク君。人の体質をからかうのは感心しませんよ」

「からかったつもりはない。お腹が減るのは自然の摂理だろう。健康家なのは良いことだ。

良く食べて良く育ってくれ」

「それはそうですが……って、やっぱりからかってますよね!?」

気付かれたか、と笑って咳くとルーラーは頬を膨らませてそっぽを向いた。ジークはそれを見て、更に笑った。

空が次第に橙色の光に染まり始めた。夕焼けは美しい、とジークは改めて思う。

太陽が沈み、夜になるまでのわずかな時間にだけ出現する温かな光。目を細めたジークは、いつまでも空を見続けたいという誘惑をどうにか退けた。

夕暮れは足が早い。すぐに夜——サーヴァントの時間がやってくる。中でも、戦うべきアサシンの真名はジャック・ザ・リッパー。夜闇に溶け込む、絶対恐怖の殺人鬼だ。

既にトワリファスの地理は概ね把握した。ルーラーは各サーヴァントと連絡を取り合っている。

「アーチャーもライダーも配置についています。ライダーは例のヒボグリフで空を飛ぶようです」

「……大丈夫か？」

色んな意味合いを込めて、ジークが問い掛けた。

「それは、ライダーを信じるしかありません。夜になってから飛ぶとか、何か魔術的なもので姿を隠して飛ぶとか、そういう対処をしてくれる、と——」

ルーラーの目は泳いでいる。ジークは残酷だが、真実をありのまま告げることにした。

「賭けてもいいが、ライダーはそういう対処を考えつかないと思っ」

というか、城塞の方角から何か黒いものが飛び出したようにも見えたので、多分既に手遅れだろう。ルーラーの胃が痛みそうなので、敢えて指摘はしないことにした。

「……では、行きましょう。ここからは、更にサーヴァントとしての力を抑えます。ジーク君も離れないように」

ジークは頷き、布を巻き付けて隠していたライダーの剣を腰に吊した。夕暮れが深まる

に連れて、トゥリファスの街から人の気配が途絶えていく。

「警察は動かないのか？」

「ええ。ここで殺されたのは全て魔術師、表向きに知られることはありません。シギショアラを捜査している警察が動くことはまずないでしょう」

この街が危険とはいっても、殺されるのは魔術師だ。警察としても、動かない方が賢明という判断なのだろう。何しろ犯人はこの世のものではない。逮捕など夢物語だ。

「いいですか、ジーク君。相手は未だ正体の掴めぬサーヴァント。クラスがアサシンとはいっても、ジャック・ザ・リッパーの情報は全くありません。唯一、確実だと言えるのは奇襲を仕掛けてくるであろうことくらい。どれだけ慎重になっても過ぎるということはありませんから——」

言葉はそこで停止した。ルーラーは突然、警戒するような表情で遙か彼方を睨み据える。

「どうした？」

ジークもまた警戒した様子で周囲を見回す。サーヴァントではなくとも、魔力の気配を捉えることはできる。だが、感じられるようなものは何も無かった。

しばらくするとルーラーは警戒を解いたらしく、肩の力を抜いた。

「サーヴァントの気配がありました。……ただ、ここからやけに遠い。恐らく、黒のアサシンではないでしょう。あちらの方は、これほど精密に捕捉できませんから」

「赤」のサーヴァントか？」

「ええ。ただ、一騎なので攻め込んだという訳でもなさそうです。恐らく、監視か何かだと思います」

とはいえ、サーヴァントは假令一騎といえども脅威ではある。ルーラーが「黒」のアーチャーとライダーに念話を送り、警戒を促した。

「厄介ですね……。アサシンの戦いの最中に乱入されれば、間違ひなく混乱が起きます」
ルーラーの表情が沈む。令呪を使用すれば……とは思うが、当然その対抗策も向こうのシロウは打っているに違ひない。

「……だが、監視ということは様子見という可能性も高い。アサシンの戦場でこちらが隙を見せなければ、迂闊な手出しはしないだろう」

「そう折るしかないでしょうね……」

ルーラーが首筋に手を当て、顔を離めて空を見上げた。既に空は濃い紫色に変わっており、冷えた風が吹き始めた。

「空気が冷えてきました。雨が降りますね」

言われて、ジークは空を見上げる。確かに、分厚い雲が空を覆い隠しつつある。冷たい雨が、ジークの鼻に落ちた。

「傘は持ってきて……いないよな」

「生憎と。……でも、この様子だと小雨で済みそうですね」

確かに雨粒は小さく、羽々しいものだった。だが観界はたちまちの内に悪化した。

「服は変えないのか？」

ルーラーはもちろん鎧姿ではない。雨に濡れて貼りついた服は、レティシアのものだ。

「いえ。アサシンが最接近するまではこの姿でなければ、作戦が成立しませんから。……」

あ、あの。あまりこっち、見ないで下さいね？」

「……さすがに分かっている」

ジークは目を逸らした。小雨とはいえ濡れた服は貼りついて、体の線を殊更強調させている。これを直視する勇氣は、ジークにもない。

「さ、ひとまず歩きましょう。これが円作戦であることは看破できても、私がサーヴァントであることまでは分からないはずです。……今のところは、まだ」

円作戦であることは、夜に雨のトゥリファスを歩く時点で強烈にアピールしてしまっているのは確かだ。だが、そこで踏み留まるような性格であれば城塞に攻め入ったりはしないだろう。

「雨だよ、早く帰ろうよ」

「ええ、急ぎましょうね」

——と、傘を差して歩く母子と二人はすれ違った。

見覚えがある、とジークはちらりと視線を移す。……昼頃にコーヒーショップにいた母子だ。母親の方は昼間のときと違って、買いた袋をぶら下げている。

「お母さん、お化けが出るんだって」

「そうね。怖いから早く帰りましょう」

そんな言葉を交わしながら、二人は立ち去っていく。他愛もなく、微笑ましい風景だ。

——だからこそか。しばらくして響いた悲鳴にジークの思考は混乱した。

有り得ない、と。あんな平和な情景を作り出していた母子が何かに巻き込まれるはずはない、と。そんなことを考えていたのかもしれない。

振り返る——そこには濃々とした霧が立ち籠めていた。

「霧……!?」

「そんな、まさか……!」

「え……何、れ……いた、いたいっ——い、いた……あああああっ!?」

「ママ! いたい! いたい! やだ! やだあああああ!」

母娘の苦痛の絶叫が迸った瞬間、ジークは無我夢中で走り出していた。予め霧の対策用に用意していたハンカチで顔を覆い、霧の中へと飛び込む。

脳で炸裂するような苦痛——前日の自分が、これを耐えきったというのが信じられないほどの痛みだ。霧はまだ薄く、視界はどうか確保されている……だが、先に飛び込んだ

母娘の姿が見えない。

「どこだ！ 声を上げてくれー」

そう叫ぶと、喉にも痛みが走った。助けてー という母親の絶叫をどうにか聞き取って、そちらへと向かって走る。微かに自分を呼ぶルーラーの声が聞こえたが、彼女はサーヴァントだ。すぐに自分に追いつくだろう。

今は一刻も早く、母親を見つければ……

苦痛も恐怖も忘れて、ひたすら走った。時折、声を上げて助けが来たことを知らせる。

「返事をしてくれ、頼むー」

幸運にも、ジークはその言葉と同時に足首を掴まれた。慌てて下に目を向けると、先ほどの母親が石畳に倒れ伏していた。

「しっかりしろー」

「あ、あの……あのこはどこ……？」

抱え上げた母親は目が充血しており、表情は虚ろ、唇からは血が垂れ流されている。相当の苦痛を味わっているにも拘わらず、母親はただ一心に娘を呼び続けた。

「いいか、聞いてくれ。貴女の娘は俺が捜す。だがその前に、貴女を安全な場所まで連れて行く。分かったか？」

「でも……娘が……！」

訴えかけるように、母親がジークの首に絡みついた。だが苦痛のあまりか、咳き込んで顔を手で押さえる。

「貴女の娘は俺が助ける。信じてくれ」

「……ええ……」

母親が顔を起こす——冷たく硬い感触がジークの胸に触れる。

ジークは反射的に自分の胸を見下ろす——黒い棒？ いや違う、これは、銃器だ。

もう一度母親の顔を見る——そこで気付く。髪を染め、化粧をして誤魔化されていたが彼女はルーマニア人ではない。

ジークは混乱する——思考が停止する。状況を理解しても展開が理解できない。

母親がジークの耳元で囁く——甘く、ねっとりとした、蜜のような声。

「信じているわ」

瞬間、衝撃が立て続けに炸裂した。思考どころか意識を刈り取るような一撃。何故、どうして、どうやってこうなったのか。全てが不明瞭で曖昧になって、ジークの脳から流出していく。

音中に石畳の硬い感触が消失し、心臓を挟む銃弾の感触が消失し、全身に叩きつけられ

る冷たい雨の感觸が消失し、觸觸を冒す霧の苦痛も消失し、流れ出す生命いのちの感覺すらも消失した。

上下左右天地あらゆる場所が黒に塗り潰される。視覺聽覺嗅覺味覺が掻き消え、時間の概念すら消え去り、ただ一つだけ感覺が残る。

無限の落ト——ジークは闇に失墜おちこぼしていく。

解説

櫻井光

聖杯戦争とは、闘争である。

実に単純明解な理屈だ。

聖杯が叶え得る願いはただひとつ。

対して、聖杯戦争に参加する魔術師——「マスター」は七名。

六名は排除されねばならない。

闘争は、回避不能の前提であると覚悟せよ。

そして、それと同時に……。

（古びた一冊のノートより抜粋）

聖杯戦争。

それは、物理法則すら打ち殺す空前絶後の英霊と、常ならざる神秘を操る魔術師とが織りなす壮絶な闘争であり、願いと願いの相克であり、殺し合い、であるもの。

それは明確な事実なのでしよう。

亜種聖杯戦争が地に溢れ、空前絶後の規模として、『聖杯大戦』が催されるこの世界にあっても尚、変わることのない法則。

英霊と魔術師マスターは互いの秘奥・絶技を尽くして敵を殺し、聖杯を求める。

七騎七名の命の奪い合い。この『大戦』にあつては、十四騎十四名の命。

けれど同時に、聖杯戦争とは、純粹さの衝突なのではないかと私は想うのです。

純粹——

そう、英霊と魔術師の差なく、皆が純粹。自らの在りように対して、正邪の括りさえ容易く超えて、そこには輝くばかりの純粹な——願いと意思とが混然となったものがあるのではないか。そう、私は感じています。

こうして数多の魂が荒ぶって、繰り広げられる『大戦』を前にしては、特に強く。

不屈の剣闘士がいました。

それは、反骨と反逆を成す純粹な魂です。

黒魔術師の女がいました。

それは、己の欲望に純粹であつた女です。

カバラの導師がいました。

それは、地に榮國の現臨を求めた男です。

魔術師の少年がいました。

それは、純粹な憧憬を胸に秘めた子です。

物言わぬ巨人がいました。

ただ、己の存在意義に対して純粹に、大地を踏みしめた完全なるもの。

幾つかの命が、己の純粹さを世界に焼き付けながら、大戦から去りました。

けれど、大戦から放たれる純粹の輝きは失われるどころか、一層、眩さを増して私たちの前に在り続けています。

ひとつ、奇跡にして唯一、もしくはそれ以上の存在と化しながら剣を手にしたジーク。

ひとつ、無数の死を置きながら、目的のために「大戦」そのものへ挑む黒のアサシン。どちらも未熟さを湛えた、純粹。意思。魂。

触れる者たちに眩しさを感じさせながら成長してゆく少年と、苦痛と死を撒く邪そのものでありながら無邪気なまでに寄り添う母と共に歩む少女。

幼さという共通点を持ちながら、相反して並び立つ両者。

一方は数多くの想いや仲間たちと共に、もう一方はただひとつの母だけを傍らに。生き残るのは、果たしてどちらの純粹か。

それとも、どちらも残ることなく、「大戦」の苛烈な奔流に吞まれて散りゆくのみか。私は目を離すことができません。そして、こう願わずにはおれません。

どうか――

この戦いに臨む命すべてが、せめて、最期まで純粹でありますように、と。

フェイト／アポクリファ

Vol.3 「聖人の凱旋」

2013年12月29日 初版発行

著者 ————— 東出祐一郎
発行者 ————— 竹内友崇
発行所 ————— TYPE-MOON
<http://www.typemoon.com/>
FAX：03-3865-6166 MAIL：info@typemoon.com

イラスト ————— 近衛乙嗣
文章校正 ————— 晴来堂
装丁 ————— WINFANWORKS
印刷 ————— 凸版印刷株式会社

©TYPE-MOON

終了、乱丁本の交換については、FAXまたはE-mailで受け付けております。
E-mail: info@typemoon.com またはE-mailアドレスまでお問い合わせください。

無断転載、複製を禁ず

Printed in Japan.

Tn

THE SQUARE

WWW.THE-SQUARE.COM

© 2004 Tn

最新の魔法使いの物語、装いも新たに再装填

その魔法は月を超えて。

魔法使いの夜

WITCH ON THE HOLY NIGHT

価格：8,400円(税込)・日本語版 Windows® XP / Vista / 7対応・DVD一枚組



PS VITA

PlayStation Vita

その日、少年は運命に出会う。

Fate

stay night
Unlimited Blade Works

NOW ON SALE

PS Vitaカード版 ¥3,500円 PS Vitaダウンロード版 ¥3,200円

Tm
TYPE-MOON



角川書店

KADOKAWA
GAMES

©TYPE-MOON / KADOKAWA SHOTEN

「Fate/stay night」は、TYPE-MOONの「Fate」シリーズの一作です。©TYPE-MOON / KADOKAWA SHOTEN



LUNE MOON BOOKS

未知の惑星で魔法使い？ 誰か？——私か！？

ファイヤ-ガール

F I R E G I R L

各巻絶賛発売中！

白ノ岡はなは高校一年生

「魔法使いやんおー？」と勧誘された少女が入部したのは、未知の惑星を調査する探検部だった。
強大な白岡と予想もつかない事件が、ほろを心を震る冒険へと続く。学園・異世界冒険ストーリー！

著者：星空めてお / イラストレーター：BUNBUN

TMA
TYPE-MOON

www.fate-moon.com

聖杯大戦、ここに開幕

Fate/Dogma

TYPE-MOON presents

各巻絶賛発売中!

「聖」のサーヴァントと「魔」のサーヴァントと。空前絶後の魔性の戦争——聖杯大戦が勃発。
Fate/stay night FATE ZERO
「Fate/stay night」「Fate/Zero」とは異なる新しいFateの世界、外典の聖杯戦争、ここに開幕!

著者：東出 祐一郎 イラストレーター：近衛 乙嗣

